
大守学園・霊能科

日中まさひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大守学園・霊能科

【Nコード】

N8713E

【作者名】

日中まさひろ

【あらすじ】

妖怪たちが主導権を握る世界において、霊能力は必須技能だ。雪村真琴は、今年から霊能科に通う少年だ。だが、彼は普通の霊能力を持つものたちとは大きく違うことがあって……まあ、沙耶と言うカラスの妖怪と生きるためにいろいろとかんばる少年のお話。

プロローグ・いつもの夢

あたり一面に、黄金色が広がっている。

——ああ、何時もの夢だ。これで、何回目だったかな。そもそも、見始めたのは何時だったか。

頭の片隅で、そんなことを思いながらも夢は止まることなく進んでいく。

俺の視界に写っているのは、一人の、赤くて黒い女の背中。

ドス黒い色が、彼女の青みがかかった長髪を黒へと変えていき、鮮血の赤が、緋色の着物をよりいっそう赤へと変えていく。

彼女自身の血でなければ、それは間違いなく他人のもの。

仮に重傷者を救助していたとしても、着物を染め上げるほどの血がつくはずも無い。

だからそれは、誰かの血。彼女の友人か恋人か、肉親か。

あるいは、俺の家族か友人かそれとも全く知らない誰かの血なのか。

「――」

これが夢だからなのか、俺の口は確かに彼女の名を口にしたのに、俺の頭の中にその単語が入ってくることは今まで一度も無い。

「――」

彼女の言った言葉もまた、しかり。

俺は、数えるのも億劫になるほどのこの夢を見続けていながら、ただの一度も彼女の言葉を、俺が言った言葉を理解したことは無い。彼女は、ゆつくりとこちらを振り返り、俺を招くように両手を大きく広げる。

またか。落胆とともに、俺は何度と無く見続けた彼女の顔を見た。

彼女の顔。正確には、顔があるべき場所は、真っ黒に塗りつぶされている。

俺が思い出せないせいなのか、それとも元々そういう顔なのか、今の俺ではわかるはずも無いし、確かめる手段も無い。

「――」

「――」

いくつかの言葉が交わされる。けれど、

やはりと言つべきか、そのどれもが俺の頭の中に入ってくることは無い。

やがて、黄金色に輝いていた麦畑がゆっくりと黒く染め上げられていく。

「――」

それは、俺が発した言葉なのか、彼女の言葉なのかは俺にはわからない。でも、一つだけ理解できていることがある。それだけは、記憶でも夢の記録でもなく、ただ、理解できる。

その言葉で、俺と彼女は二度と分かり合えなくなっただんど。

同時に、俺と彼女は全く同じ構えを取る。

右足を引いて、深く腰を溜め、左手を前に、右手は平手を水平にして胸の前に。

先に動いたのは彼女だ。

五メートルほどあった距離を、

一息の間すら存在しないほど速く、俺の懐へと飛び込んでくる。

わずかに遅れて、俺の体も動いた。正確に言えば左手だけがだ。

俺と彼女の左手は、互いの顔をしっかりと捉え、そして――

俺の右手は、彼女の胸を貫き。

彼女の右手は、俺の心臓を貫いた。
痛みは無い。

だってこれは夢だから。この時の俺は痛かったかもしれないが、覚えてすらいらない記録の中では、痛みを感じるはずも無い。

——そのはずなのに。どうしてこんなにも、胸が痛いのだろう。
俺と彼女は、互いに組み合ったまま動かない。いや、俺は動くことができない。

体温が、急激に下がっていくのを感じる。それにもない、しっかりとつかんでいたはずの左手が、力なく垂れ下がった。

そして、俺の体が麦畑に沈んでいく。

当たり前だ。胸、心臓のすぐ側を貫かれて、

平然としていられる人間なんているはずが無い。なのに彼女は、変わらずそこに立っている。

彼女は、相変わらず黒塗りの顔で、俺のことを見下ろしていた。

その胸元は、一見、空洞と見間違えそうだが、その実はただ黒く塗りつぶされているだけだ。

彼女の胸元から、燃えカスが風にさらわれるようにゆっくりと、黒い粒が舞い上がっていく。

唐突に、彼女が死に向かっているのだと理解した。

「――」

彼女が、何かをポツリとつぶやいて、おもむろに自信の胸に手を深く差し入れる。

血は、出なかった。

「――」

苦しげに呻きながらも取り出したそれ。赤く脈打つ真紅色の臓器、心臓。

「――」

その最後の言葉とともに、その心臓は俺の胸に開いた空洞へと、差し込まれた。

これで夢は終わり。未だに痛む胸を押さえながら、俺の意識はゆっくりと覚醒していく。

「――ない」

最後に、彼女の声が聞こえたような気がした。

ブログ・いつもの夢（後書き）

始めまして。日高正平と言う者です。初めての小説の投稿で、至らない点が多いと思いますが、がんばっていこうと思いますので批評をぜひ、お願いします。

行の間のスペースを変更しました。

一話 始業式の朝

大きな窓から、さんさんと朝日が差し込むダイニングキッチン。十畳には満たないが、それでも家族五人で過ごすには十分な広さの空間。

外から新聞を取ってきた俺は、キッチン側に置かれた木製の机にどっかりと腰掛ける。

取って来たばかりの新聞の一面。断じて、テレビ欄ではない——には『今年の百鬼夜行 例年通り八月が濃厚』と言う見出し。流し読んだ限りでは、昨日のニュースと大して変わりの無い内容だ。他の欄も、これと言って面白そうな記事は無い。まあ、こういう日もあるだろう。

新聞に興味をなくした俺は、手元のリモコンでいまだにブラウン管のままのテレビの電源を入れる。

テレビの画面では、縁結びの神様が星座占いの順位を発表していた。乙女座のラッキーカラーは白、か。白い皿の上におかれているのは、こんがりと狐色に焼けた食パンが二枚。

今日は、マーガリンじゃ無くてマヨネーズにしておこう。そう思い直した俺は、もう直ぐ起きてくるであろう同居人用と、自分でも使ったために冷蔵庫にマヨネーズを取りに席を立った。

今から千年ほど前、突如としてこの世界から主要な——神話に出て来ると言う意味だ——神々が消え去った。

理由はいまだに分かっておらず、論争の的となっている。

今でこそ、こうやって落ち着いた生活ができるようになってきているが、

その当時の荒れ具合はすさまじかったらしい。

信じていた神がいなくなれば、荒れるのはもつともだと思うが。

そして、今から三百年ほど前に爆発的に力をつけたのが妖怪たち。彼らに言わせると、神々がいなくなってからの数百年、人間が逆らいづらい状況が出来上がるまでおとなしく力を蓄えていたとのこと。

その策は見事に的中して、妖怪たちが姿を現して数年。あっさりと世界は妖怪たちが手中に収めた。

それは現代にも通じる話で、各界のトップに君臨するのは、いまだに三百年前と変わらずに同じ妖怪たちだ。

まあ、そんなことがあったのも今は昔。この世界は、たくさんの人間と、たくさんの妖怪と、少しの神様で今日も変わらず回っている。

時刻はそろそろ七時半。ここから学園までは徒歩で二十分弱。入学式は八時半からだから、時間には余裕がある。

「とはいえ、そろそろ起こさないと朝飯を食う時間がなくなるな」

席を立とうとテーブルに手を突いたところで、トントントンと言う規則正しいリズムが聞こえてきた。

「おはよ」

陽気な声が、広めのダイニングに広がる。入ってきたのは、藍色のブレザーにチェックのスカート、襟元には赤いネクタイと言った学園指定の制服に身を包んだ沙耶だ。

「おはよう」

席に着いた沙耶に、牛乳の入ったコップを渡す。ありがとう、と答える沙耶に手で返して、俺の分も用意する。

「さて、ちよつと時間が無いから急ごうか」

「そうね、入学式で遅刻するのも格好がつかないものね」

いただきますと、二人して声をかけ合う。今日の朝食は、トーストとグリーンサラダ、おまけにグレープフルーツと言ったちよつと軽めの洋食だ。

「ん〜ん〜ん〜」

陽気に鼻歌を歌いながら、沙耶はマヨネーズをトーストとサラダにかけていく。

いくら好きだからって、サラダが見えなくなるまでかけるのはやりすぎだと思う。言っても止めないだろうけど。

ニコニコと笑いながらマヨネーズの乗ったトースト……と言つよりも、

トーストがついたマヨネーズと言ったほうがいい気がする、を頼張る姿に俺の口元も自然とほころんだ。

「あつ、沙耶。マヨネーズがついてる」

「ふえ」

もぐもぐと、口を動かす沙耶の頬っぺたに汗拭きよつのウェットティッシュで

マヨネーズを拭う。

「ありはと」

「飲み込んでから喋れよ」

苦笑いしながら、ティッシュをゴミ箱に投げ捨てる。
さて、いい加減に俺も食べるか。

トーストにマヨネーズを塗り、その上にサラダを乗せてもう一枚のトーストではさみ、大口を開けて頬張る。

マヨネーズの味が、口いっぱいに広がった。

「……マヨネーズ多すぎた」

不味くは無いんだけど、なんか違う。そんな味だ。

「え、私はマヨネーズが足りないと思うけどなあ」

くすくすど、沙耶の笑い声。

「いや、そこまで多いともはやマヨネーズ食べてるだけじゃん」

「むっ、マヨネーズを馬鹿にするなよな。私はこれ一本あれば半年は戦える！」

ドンツと、業務用マヨネーズをテーブルに叩き付ける沙耶。
いくらなんでもそれは、とも思っけれど沙耶の実力を考えればありえなくもない。

沙耶は、すでに千年以上を生きてきたカラスの妖怪だ。
普段から妖気を垂れ流しているわけではないが、

おおよそ人間が太刀打ちできる強さではないのは容易に想像ができる。

——それに、一度だけ霊視をさせてもらったことがある。

霊視は単純に分ければ、二種類ある。

千里眼系と透視系の二つだ。沙耶を霊視したときに使ったのは、透視系の霊視だ。

透視系の霊視は、見えているものを透過して、見えていないものを見えるようにする。言ってしまうえばレントゲン写真のようなものだ。

人体に限らず生物を霊視するさいは、対象の魂、保有する霊力ないし妖力の総量を主に見ることができる。

沙耶の場合は、保有する妖力量が馬鹿みたいに多かった。例えるなら、ステータスが百単位の中に一人だけ千単位——それも限りなく上限値に近いキャラクターと思えば分かりやすいと思う。

「どうかしたの？」

いつの間にか食べ終えていた沙耶が、こちらのことをジッと見つめてくる。少し、ぼーっとしすぎたみたいだ。

なんでもないよと、返しながら食べ終えた食器類を流しの水を張った桶に沈めておく。

さて、時間はつと。——はっ？

「あ、真兇。おはよう」

「ん、沙耶さん？ まだいたのか？」

「えっ？ まだって、時間は——あっ」

ダイニングの入り口から、不思議そうな声が聞こえる。

ああ、そういえば兄さんは遅番とか言ってたな。じゃなくて――

「やばいっ！ もう八時過ぎてるっ！ あと、おはよう兄さん。沙耶、走って行くよ！」

「おうともさー！」

テーブルに立てかけておいた、二人分の鞆を担ぐ。去り際に、兄である雪村真児の肩をポンツ、と叩いて朝の挨拶を済ませる。

「気をつけて行って来いよ」

兄さんの、のんきな声を背後に俺たちは一気に学園へと走り去った。間に合うといいなあ。

二話 始業式とHR

生徒総数、千二百三十二人。そのうち、五百七十八人が霊能科で、さらにその中の百九十人が今年から大守学園高等部の一年生になる人数だ。

ちなみに、普通科は二百人ぴったし。

つまり四百人近い人が今日、この学園に入学する。

始業式は、普通科の校舎と霊能科の校舎の間に立てられた多目的ホールで行われている。

多目的ホールの収容人数は、おおそで二千人。ざっと周りを見回した程度では、その全てを見ることができないほどに広くて大きい上に、ふかふかとすわり心地のいい座席がしつかりと完備されている。

それもそのはずで、多目的ホールは平時にはコンサートや討論会、オペラや歌劇など一般にも開放されていて、この学園に在籍する生徒以外でも利用することができるからだ。

その、様々な用途で使われる壇上で喋っているのはこの学園の理事長である、鬼島隼人理事。鬼と人のハーフで、沙耶の知人にあたる人らしい。鬼島理事は、凜とした声で祝辞を読み上げている。ホール内には、鬼島氏の声だけが響き渡る――わけではなかった。俺の周りから、ひそひそとささやき声が聞こえてくる。もっともそれは、祝辞の言葉に紛れていまいち聞き取ることができない。

「むう、あんまりいい気分じゃないね」

俺の隣に腰掛けた沙耶が、不機嫌そうに眉根をしかめる。

「そうだけどさ、朝からあれだけ目立ってれば仕方ないって」

思い出すのは、今朝。家をでて直ぐのこと。

十メートルも走らないうちに、俺がこけそうになった。

あわや地面に激突と言う前に、沙耶に後ろから抱えられて倒れることはなかったが、

その後がまずかった。

『うーん。このままだと始業式に間に合いそうにないわね』

俺を抱えたまま、少し悩むそぶりを見せた沙耶。思えば、この時に止めて置けば今のこの状況はなかったはず。

『なあ、早く降ろしてほしいんだけど』

俺の声に答える前に、沙耶は大きく一人で頷いた。

『決めた、このまま走って行こう』

『はっ？ えっ？ ちょっと！』

結局俺は、沙耶の手荷物のように担がれたまま学園の正門をくぐり、そのまま張り出されていたクラス表を確認し、ホールについてからようやく降ろされた。

その間に、いったい何人の人が俺たちのことを見ていたやら。想像もしたくないね。

結局、ひそひそ声は始業式が終わるまで止む事はなかった。

「俺が今日から一年間、一年F組の担任を勤める相川修二だ。よろ

しくなっ！」

教壇の前で、赤茶色のジャージを着込んだ相川先生は
何がそんなに誇らしいのか分からないが、胸を張りながらよく通る
声でそういった。

「間違いなく、熱血教師ね」

おそらく、このクラスに割り当てられた生徒の大半がそう思っ
て。と言うのは、口に出さないで置こう、なんかこっち見てるし。
相川先生は、何か閃いたと言いたげな顔を見せる。いやな予感し
かないよ。

「おおっ！ 君たちは確か、斬新な登校方法で来た二人組みだな。
よしっ！ 自己紹介は君からにしよう」

皆も気になってるだろうしなっ。

最後に、元気よく付け足された一言にあわせて、
クラス中の視線が教室の左隅——俺と沙耶に集中する。

うつっ、すごくやりづらい。

俺がどうしようか、悩んでいるなか。沙耶が、静かに立ち上がる。

「ふふっ。私の名を知りたいと——神代の時代より生き続ける大妖
たるこの私の名をっ！」

「止めるばかたれ」

無駄に妖気を振りまき始めた沙耶の後頭部を引っ叩く。

「いった〜！ 何するんよっ！」

頭を抑え、器用にも涙目になりながら沙耶が振り返る。全く、大して痛くもないくせに。

「お前が何をする気だ。大妖なんて、一度も呼ばれたことないだろうが」

「ぶつぶーっ！ ありますー、

三百年位前に八幡村でそんな感じの呼ばれ方されことありますー！」

言つて、ふふんと沙耶は胸を張る。うつわ、なんかすごいむかつく。

「あゝ二人とも？ 夫婦漫才はいいから自己紹介を早く頼む」

「夫婦？」

あつ、やばい。

「ふふふっ。夫婦かあゝ、どうする真琴？ 私たち夫婦に見えるらしいよ」

頬を挟むように手を当てて、くねくねと沙耶が踊る。

先生は、からかうつもりでさっきのように言ったのだろうけれど、沙耶にそれは逆効果だ。どういうわけか、沙耶は俺と恋人だとか夫婦だと言われると必要以上に喜ぶ。

いや、まあ、喜ばれて悪い気はしないけど。

「夫婦ゝ夫婦ゝ」

言いながら、くるくると沙耶は回転し始める。もう、こいつはほんとにう。

「広江中学出身の雪村真琴。こっちは使役妖怪——」

「沙耶。カラスの妖怪で真琴の妻になる妖怪よ」

俺の声をさえぎって、沙耶は自分でそう述べる。

余計なことを付け足したのはこの際、時間も押してることだし無視しておこう。

「あつ、ああ。それじゃあ次はそのまま雪村の前に行こうか」

「うつす。矢口秀樹、大守中からの繰り上がりで……」

幸いというべきか、俺たちの後の自己紹介は滞りなく進んだ。

「よし、全員まわったな。それじゃあ、明日の連絡だけど、初日っからそんなに連絡はないんだよな」

言うとおり、黒板に書かれて行く文字の量は少ない。失礼な話だけど、思っていたよりも読みやすい字だ。

「とりあえず、授業は明日から直ぐあるから教科書とか忘れないようにしておけよ。それか

ら、身体測定も明日行っから、体操着を忘れずに持ってくることに。連絡は以上だ、じゃあ号令を級長……はまだ決めてなかったな」

あつ、また眼が合った。

「それじゃあ、初日から目立ちまくってる雪村。号令を頼む」

この先生、案外のりを重視する人だな。まあ、いいけどさ。

「それじゃあ——起立、礼っ！」

「うん、気をつけて帰れよ」

相川先生が立ち去ると同時に、俺はどっかりと席に座りなおす。教室の生徒たちは、遠巻きにこちらをちらちらと伺っているが先ほどの沙耶の妖気が怖いのか、近づこうとする人はいないみたいだ。

「帰らないの」

「ん——そうだな」

黒板の真上に備え付けられた時計の針は、十一時二十五分を少し過ぎたくらいか。

「それじゃあ、柊と合流して昼飯でも」

行こうか。提案する前に、沙耶はいやそくに眉根をしかめる。

「えー、あいつ呼ぶのー」

「それなら君は先に帰ってかまわないよ」

「なぬっ！」

「あ、柊」

沙耶の後ろに、何時の間にやら立っていたのは伊吹柊。
大守学園霊能科の二年生、俺たちの先輩に当たる人、というか妖怪だ。

「やあ、真琴君。遅くなってすまないね」

そういつて柊は優雅に微笑む。
なるほど、大守学園一の美形と言われるだけはあつて同姓から見ても魅力的に写る笑顔だ。

「いや、こっちも終わったばかりだから。
気にしないでいいけど。それよりも、どこに行くんだ？」

「うん。駅前にできた蕎麦屋なんだけど、その天ざるがなかなか
おいしくてね。そこにしようと思ってるのだけど、どうかな」

「おつ、いいね。沙耶も行くだろ？」

ぶつすーと、頬を膨らませている沙耶に問いかける。

「っーん」

あらら、へそ曲げちゃった。

「おやおや。どうやら年増カラスは蕎麦がお気にめさないようだし、
僕たちだけで行くとうしょうか」

俺の手をとろうと、柊が伸ばした手を横から掴む手がある。沙耶
の手だ。

「私が気に入らないのはあんたよ。子鬼」

「それは奇遇だね。僕も君が大嫌いだ」

ギリギリと、何かを締め付けるような音が聞こえてくる。二人とも、互いを呪い殺さんとかかりに睨み付けている。

この二人、どういうわけだかとても仲が悪い。

柊と知り合ったのは去年の夏休みのことだけど、それ以来、会うたびに沙耶と喧嘩している気がする。沙耶も何だって、柊のことが嫌いなんだか。

「とりあえず駅前に移動しようよ。俺もっ、お腹すいてきたし」

一触即発の二人の間に、体を割り込ませ、二人を引き離すように両手を伸ばす。

「ふん、命拾いしたわね子鬼」

「それは僕の台詞——と言いたい所だけど、ここは真琴君の顔を立てるとしようか」

そういつて柊は、俺たちを引率するように前に立って歩き始める。昼食は、平和に食べられることを祈るとしよう。

三話　ちょっとした事件の始まり

柊お勧めの蕎麦屋、天の庵は本格的な手打ち蕎麦の店だった。特に味にこだわりがあるわけではないが、間違いなく美味しかったと言える味だ。

特に、麺つゆと天ぷらとの相性は最高だったと思う。柊はこうやってちよくちよく、高校生向きではない食べ物屋を紹介してくれる。

以前、理由を聞いてみたところ――

『うん。どうやら、僕の舌は肥えすぎているようでね、化学調味料を使っていると化学調味料の味しかなくなるんだよ』

と言う、とても高校生らしからぬ返答をもらった。それでも、付き合いでファーストフードに入ってきたりしてくれるのだから良いやつだと思うけど。

「食べた気がぜんぜんしないわ」

「君は、普段から脂っこい物を取りすぎなんだよ。」

だから、薄味の料理を食べると味を感じないんだろーね」

やれやれと、柊が頭を振るう。

「あんただって、『ファーストフードが辛くて食べられないーって泣いてたじゃない」

「泣いてはいないさ。むしろ、あんな不健康極まりないジャンクフードを好む君の味覚がどうかしているんじゃないかい」

うっ、ちょっと耳が痛い。どっちかと言えば、俺もジャンクとは

言わないでも脂っこいものは好きだからな。

「ふん。あんたに私の好みをとやかく言われる筋合いはないわね」

ツーンと、口で言いながら沙耶はまたそっぽを向いてしまった。
まあ、食事中に口論にならなかったのだからよしとしよう。

「それよりも柊、これからどうするんだ？」

何時ものパターンならこの後、ゲーセンか柊の家あるいは俺の家と言った所だ。

「ん、そうだね」

言いながら柊は、簡素な銀の懐中時計を懐から取り出し、少しだけ眉根をひそめる。

「できることならこのまま遊びに行きたいところだけど、残念ながら今日は予定があつてね」

少しだけ苛立たしげな空気をまとって、済まなそうにそう告げる柊。おそらく、伊吹の家に関する予定なのだろうと思った。

柊の家、伊吹は古くは平安京にその起源を持つ名家の分家筋だ。
伊吹の家の初代となったのが伊吹童子——後世では酒吞童子と呼ばれる最高位の鬼が柊の祖先に当たる。祖先といっても、まだ生きてるらしいけど。

妖怪が権力の中枢に位置するこの国においては、

柊は間違いなくエリート中のエリートな訳だ。

そして、伊吹の分家——柊の生家はこの町では顔役として名を売っているため、いくつかの責務のようなものが柊にも課せられてい

る。おそらく、今日もそれ関連の予定だろう。

「よゝしっ、帰れ、帰れゝっ！ お前なんか呼びじゃないんだゝ
！」

柊の事情を知っているくせに、沙耶はここぞとばかりに帰れコールを発し始めた。柊にはやけに突っかかるよな、沙耶は。

「君に言われなくとも、僕は責務を放棄する気はないよ」

苛立たしげに、柊は駅とは逆方向、柊の生家がある方へと踵を返す。

「それでは、真琴君。申し訳ないが僕はここで失礼するよ。また明日、学園で」

「ああ、また明日な」

そう告げると同時に、柊の姿が見えなくなる。人ごみに紛れた、というわけでは無く、柊の得意な術である穩行の術の一種だそうだがぶん、教室に来たときも同じ術を使っていたから沙耶の後ろに突然、現れたように見えたのだろう。

「ふゝん」

「ん？ どうかしたの」

なぜか沙耶が、ニヤニヤと笑いながら頷いていたのでそうたずねる。大体、沙耶がそうやって笑っているときは、ろくなことを考えていないからだ。

「いやいや、強がっててもしょせんは子供だなと思ってね」

それはまあ、沙耶からしたらほとんどが子供だと思うけど。……
言わないでおこう。

「さてと。邪魔者はいなくなったわけだけど、これからどうしようか？」

柊が邪魔者、と言うのには同意しかねるがこれからの予定に関しては俺も決めかねていた。

「母さんのお見舞い……は良いよな。来週には退院だし」

俺の母親である雪村真美は、先月の頭くらいに階段から足を滑らせて骨折して入院している。現在はリハビリの真っ最中、と言ったところか。

「んつと、とりあえず東口まで戻らない？ この辺はほんつとに何も無いからさ」

ざつと、周囲を見回すように沙耶は視線をめぐらせる。

直ぐに視界に入るのは、二車線の車道と落ち着いた色合いをしたレンガの歩道。それと、歩道と車道を区切るように等間隔でなげられた木々くらいだ。

店も、あることにはあるがほとんどが飲食店か、

用途の分からない調度品を扱った店だけと高級住宅街。

逆に、東口方面はゲーセンや百貨店、ファーストフードやファミレスなどなど、多種多様な店舗とごく普通の集合団地やマンションが立ち並んでいる。

何時のころからか分からないが、広江駅を中心に西口と東口でこのような差が出来上がっていた。そのせいか、西口方面を富豪街、東口方面を庶民街——一部では貧民街、とも呼ぶ人がいるほどだ。東口に来ては見たものの、特にすることが無かった俺たちはぶらぶらというろいゝな雑貨屋を冷やかして回ることになった。

ふらふらすること三十分。少しだけ、めんどくさいことになりそうだ。

「……どうしよう」

こつそりと、沙耶の耳に聞こえる程度の声でつぶやく。

「そうね、このまま無視する……と、家までついてくるでしょうね」
「だよな」

俺と沙耶が頭を悩ませているのは、思い出したようなタイミングで俺たちの視界に入ってくる白くて丸い浮遊物体、霊魂だ。

霊魂と言うのは、いまだに謎だらけの存在だ。一般的には、何らかの器の中に込められた意思が魂。肉体を持たず、周囲を漂う意思が霊魂と呼ばれている。

「長いこと生きてるけど、あんな形の霊魂は始めて見たわ」

普通の霊魂は、何らかの特徴が出てくるものだが、電柱の影からこちらを伺っている霊魂にはその痕跡が見受けられない。

「とりあえず、話を聞いてみるか……あの、俺たちに何か用ですか」

「……うらめしや。あいたっ！いきなり叩くなんてひどいじゃないですか！」

いちおう言っておくと、叩いたのは俺ではなくて沙耶だ。

「ああ、ごめん。なんかむかつく声だったから」

確かに、男か女かは分かりづらいがかなりの美声だった。

「それで、そんなことを言うためにずっと俺たちについてきてたんですか？」

「なに言ってるんですか。私もそこまで暇じゃないですよ」

あつ、ちよつとムカツと来た。

「……っ」

沙耶は、俺以上に頭に来ているのかプルプルと拳を震わせている。

「実はですねえ、私の体が迷子になってるんですよ」

「いや、お前が迷子なんだろう」

靈魂は、肉体を持たない意思だ。

それは、見方を変えれば肉体から離れた意思とも呼べる、と思う。だとすると、この靈魂は肉体を見失った、と言うことだろう。

「それで、私の体を見ませんでした？ 私に似て、かなりかっこいいのですが」

「確かに、見たことはあるけど……結構数があるわよ？」

「えっ？ 沙耶は見たことあるの？」

少なくとも、俺も沙耶もまだ霊視はしていない。それなのに体が分かったと言うことは、この姿から何か連想したと言うことか。

「ええ、体育館の天井にたくさん挟まってるじゃない」

「ああ、バレーボールか」

確かに、大きさも色もそっくりだ。

「いや、あの…バレーボールってかつこよくないですね」

「問題は数ね、あれだけ挟まっているのだからどれがあたりなのか分からないわ」

「その辺は、俺が霊視してみるよ」

少なくとも、このあたりの学校はそんなに無いはずだし、いざとなったら柵に協力してもらえばいいか。

「よしっ、それじゃあ早速霊視を……」

「人の話を聞けやこらーっ！」

突然の絶叫。その音は振動となって、周囲の建物や木々を振るわせる。

「くくっ。まだ耳がキンキン言ってる」

「俺もだ」

それに対して、音を発した本人は白い体を通赤に発行させている。多分、怒りを表現しているんだろう。

「あんたらなあ、人が下手に出てたら調子に乗り腐りやがってっ！
誰がバレーボールやねん！　こんなに美しいフォームを持ったバレーボールがあるかつ？　あるわけ無いだろうが！」

そんな、反語を使ってまで否定しなくてもいいと思う。まあ、これを言うともた怒らせそうだから黙っておこう。

「はいはい。冗談が過ぎたわよ。ごめんなさいね」

「分かればいいねん」

沙耶のおざなりな謝罪でも、靈魂は機嫌を直したのか元の白色に戻っていく。そういえば、激昂しているときは変な言葉遣いだったな……あっちが素か？

「とりあえず、見覚えが無いなら靈視をしてもらいたいですけど」

「ああ、そうだね——じゃあ、ちょっと失礼」

俺は、目線を白い靈魂に合わせる。

透視にしろ、千里眼にしろ目線を対象に合わせるのは同じだ。

「えっ？ こちらの妖怪のお姉さんのほうが、靈視能力は高いんじゃないですか？」

靈魂の疑問はもつともだ。普通は、人間よりもその生物としての質が上位に位置する妖怪のほうが、全ての能力——靈視も含めて勝っている。けれど、こと靈視にかけては俺は並みの妖怪に負ける気はしない。

「大丈夫よ。真琴の靈視能力は私よりも、もしかしたら世界でも有数なぐらいの技量だから」

「はあ、それならお任せしますが」

まだ納得いかないのか、靈魂はしぶしぶと言った形でうなずいた。今回見るべきなのは、この靈魂の過去。体の中にあつた時期があるいは体から離れた時期だ。そういうときに使うのは、千里眼系の靈視である。

通常、離れた物を見るために用いられる千里眼だが、これは過去を見通すためにも使用することができる。

といっても、万物全ての過去を見ることなどではしない。俺が見るのは、靈魂が辿ってきた道筋、あるいは積み重ねた歴史だ。

どのような生命であれ、生まれた瞬間を起点として今までの道は必ず、一本になる。不可視な未来と違い、過去はすでに決定付けられている記録。千里眼系の靈視は、その記録を一本の道に見立てて、辿っていく。だからこそ、千里の道を見通す眼と言う意味を持つ千里眼。

靈魂の背後に、糸が伸びていく。これが、この靈魂が辿ってきた

道筋だ。靈魂に近ければ近いほど、最近の記録で遠ければ遠いほど古い記録になる。当然、古い記憶ほど遠くにあるので靈視もしくらくなる。

少しずつ、ビデオを逆再生するように記録を辿っていく。

一時間前。一日前。一週間前。一ヶ月前。一年前。

とりあえず、二年間はこの姿だということが分かった。それと、一年前からこのあたりに来たようで、元は西口の高級住宅街にいたようだ。それにしても、どこかで見たことのある風景だ。

そして、記録を辿るのが二年目に差しかかると、靈魂が大きな蔵から飛び出してくるのが見えた。そこから先は、よく見えない。つまり、靈魂の記録では無くなったと言う事だ。

「分かった。西口の高級住宅街の^{さつき}月つて家の蔵の中に、体はあったみたいだ」

それが何かまでは分からなかったけど。

「ほんとですかっ！　ありがとうございます！　早速、連れて行ってください」

「ずいぶんと図々しいわね」

「まあまあ。時間はあるんだし、暇つぶしがてら行って見ようよ」

渋る沙耶の背中を押して、やたらとうれしそうな靈魂とともに、俺たちは来た道を引き返すように高級住宅街へと向かった。

四話 ちよつとした事件の下準備

高級住宅街は、昼飯を食べた天の庵から徒歩で五分ほど歩いて、一つとなりの路地に入ったところにある。

「それで、その臯月って奴の家はどのあたりなの」

「んつと、武家屋敷が並んでるエリアだから……ここから十分くらいか」

高級住宅街は、西洋建築と東洋建築の二種類のエリアに分かれている。

駅に近いほうは西洋建築のエリアで、遠いほうは東洋建築のエリアだ。

「えゝ、めんどくさいゝ」

「そんなこと言わないでくださいよ。子供じゃないんだから」

「子供じゃないけど年寄りだもゝん」

詳しい年齢は知らないけど、少なくとも世紀で数えられるくらいは生きてるものな。

そりゃあ、とんでもない年寄りだ。

「まったく。そんなことで私の体が見つけられると思っているのですか」

「別に、私は見つからなくても困らないからね」

「いや、ここまで来たなら見つけて帰ろうよ」

でなければ、数十分間の移動が全くの無駄になる。

それに、今から帰ってもすることもないし、

この靈魂がついてきて延々と愚痴ってくるだろうし。

「ところで、このあたりに見覚えとか無いんですか？」

一応、靈魂が通ってきた道を辿りながら来ているから、
そろそろ見覚えのある場所に来てもいいと思う。

「ん、と……ああ！ あれ」

靈魂が飛んでいったのは、大きな白い壁の上から垂れ下がった柳
の木の枝だ。

目的地からはまだ距離があるけど、知人か何かの家なのかな。

「懐かしいですね。この木の一番上から、この家の長女の部屋が覗
けるんですよっ！」

沙耶が投げつけた小石が靈魂を貫通する。沙耶に親指を突き立て
て見せておこう。

「ひどいですね。私じゃなかったら死んでましたよ」

「殺さないように、何の力も込めなかった私に感謝してほしいくら
いよ」

まあ、沙耶が殺す気でいたならとつくの昔に靈魂は消滅させられ

てるよな。

もつとも、沙耶はたとえ格下相手でも積極的に殺すつもりで攻撃を仕掛けることは滅多にない。

沙耶いわく――

『妖怪はそうでもないけど、人間はどうも同族を殺されることに敏感だからね。たとえ相手が悪くても、下手に殺してしまうと大群を率いて襲ってくるのよ。だったら、殺さないように適当に相手をして、住処を変えたほうが安全なわけ』

それを聞いたときは、なるほどなと思ったものだ。いくら妖怪が強大な力を持っていたとしてもしょせんは単独。数千人を超す大群が相手では、いずれは疲弊していくのが眼に見えている。だからこそ、沙耶は戦わずにすませる方法をとってきたのだらう。

そんなことを考えているうちに、俺たちの前に大きな武家屋敷が見えてきた。表札には、やたらと達筆な字で皐月と書かれている。多分、字が書かれている木片もそうとうに高価なものだと思う。

「おつ、おお！ 何かが私に語りかけてくるような気がしますよ！」

言いながら、靈魂は高い敷居を飛び越えようとふわふわと飛び上がっていく。

「あつ、やめた方が」

「ぴぎゃあああああ」

「遅かったみたいね」

昨今の一般家庭にも、何らかの結界が張られているこの時代。こ

れだけ金と権力がありそうな家なら、小さめの神社に匹敵するくらい強固な結界を張っていてもおかしくない。

結界、と言うのは元々は仏教用語だ。実際はかなり複雑な種類分け等がされているが、

さすがにそこまでの知識は俺にまだはない。とりあえず、家の中と外を分ける壁みたいなものと、認識しておけば良いって沙耶が言ってたな。

ポテンポテンと、所々焦げ付いた靈魂が地面を跳ねる。器用に丸い体を震わせているところからして、消滅することはなさそうだ。

「なっ、何なんですかあれは！」

「んつと、美杉靈能事務所謹製の万能結界、対靈君七号——ふざけた名前だけど、靈能にかかわるものならほぼ確実に阻むって言うのが売りみたいだね」

「だとすると、強行突破？」

シャドーボクシングをしながら、沙耶が提案する。

「そんなもん無理に決まってるだろうがっ！ 見てみいつ、ここの所少し焦げたぞっ！」

現在のメンバーは、カラスの妖怪と靈魂、そして靈能力者の卵——全員、ものの見事に結界に阻まれるメンバーだ。沙耶ならば、力づくでの突破も可能だろうけど、そんな無理はここでする必要はない。

「それじゃあ、一番確実な方法で入りましょうか」

「そうだね」

この手の結界に対する対処方法ぐらいならば、今の俺でもたやすく思いつける。

まあ、市販されている結界用の護符に注意書きとして書かれていることでもあるけど。

「そんな方法があるんですか？」

「ええ、簡単な方法よ」

いったん、沙耶は言葉を切って人差し指を今、俺たちがいる場所よりも少しはなれたところにある門を指差す。

「招いてもらえばいいのよ」

結界を張られている場所が家である以上、来客は必ず訪れる。その種類がどうあれ、それら全てを識別すると言つことは不可能だ。ならば、どうやって見分けるか。

答えは簡単。普通の尋ね人ならば、誰もが通る場所である玄関で見分ければいい。

「まあ、入れてもらえるかどうかは別問題だけどね」

ボソツと、沙耶がつぶやいた言葉は幸いにも靈魂には聞こえなかったみたいだ。

それに安堵しつつ、俺は門の横に備え付けられたインターホンを鳴らした。

「どなたですか？」

中年女性の、警戒するような声がインターホンから聞こえてくる。
あつ、よく見るとこれカメラ付だ。

「はじめまして。大守学園一年の雪村真琴と言つものですが、
家長の方に取り次いでいただけないでしょうか」

「一介の学生が、当家の主にいったい何の御用でしょうか」

「むっ」

とげとげしい物言いに、沙耶が苛立たしげな声を出す。
それを手で制して、空いた手で靈魂を掴む。

「この靈魂がですね、この家に縁があるらしいのですが、ご存じないですかね？」

「うに？」

靈魂が、おそらく精一杯の愛想を振りまく。がつ、残念なことに
ちつとも可愛くない。

「ありません。イタズラならばお引取りを」

取り付くしまもなく、ぴしゃりと言い放たれた。いきなり現れた
高校生が、

そんなこと言つても信用するわけないよな。普通。

そう思い、諦めようとした矢先、俺の前に出る影があつた。

「このまま、この靈魂を連れ帰つてもいいのね？」

静かに、けれどよく通る声で沙耶が問いかけている。

それは、普段のおちゃらけた姿からは想像もできないほど、かつこよかった。

「かまいませんが？」

沙耶の意図が理解できないのか、
インターホンの声はいくらか戸惑っているようにも感じられる。

「そう。良いんだ。——この靈魂が知っていることを確認しないで」

「へっ？ 私は何も知りませんが？」

「しっ！ ここは沙耶に任せましょう」

沙耶の交渉が成功すれば、中に入ることが出来るはずだから。

「……それは、どういった意味でしょうか」

少しだけ、相手の声音が変わる。今まで以上に、こちらを警戒しているようだ。

「さあ。そこそこ頭が回る人なら、どういう意味かは聞かないでも分かると思うけど」

疑心暗鬼。靈魂が、皐月の不利になる情報を持っているかもしれない。確たる証拠も無い、路肩の石ころ程度の些細な不安。
けれども、路肩の石につまづいて、大怪我をすることもある。

「……」

だからこそ、インターホンの女性は悩む。はたしてこの危険を、無視してもいいのかと。実際のところは、危険でもなんでもないただのハッターなのだけど。

「……分かりました。旦那様に許可を取ってまいりますので、少々お待ちください」

「ええ、良いわよ。待つてあげる」

沙耶の答えを全て聞く前に、インターホンからザツと言う音が聞こえる。

「ふふ。相当頭にきたみたいね」

「うつわ、この人あんがい性格悪いですね」

くつくつと笑う沙耶に、靈魂は少し引き気味だ。俺としては、久しぶりに見た妖怪としての沙耶なので少しだけ懐かしい気分に浸っていた。

「真琴も、もう少し脅迫の仕方は覚えたほうがいいかもね」

「いや、そんなこと覚えたくないのだけど」

とうとうに、何を言ってるかね。こいつは。

「いやいや、結構必要よ？ ただの人間じゃあ妖怪には勝ち目が無いのだし、

特に真琴は防御力と攻撃力、どちらも皆無って言うてもいいくらい低いじゃない。口をうまく使っていかないと、長生きできないわよ」

「うっ、痛いところをついてくるね」

詳しいことはよく分らないが、俺には霊力と言う力がほとんど枯渇している。ただ見るだけの霊視はともかくとして、霊力を利用した身体能力の向上や、霊に対する防御膜を張ったりすることが出来ない。

特に、霊に対する防御膜は重要なことだ。防御膜の強固さは、そのまま霊——に限らずほぼ全てのオカルト——に対する抵抗力に比例する。つまり、防御膜が硬ければ硬いほどに、抵抗力も増すと言うことだ。

だが、俺にはその防御膜が、無い。一般人でさえ無意識に張っていると言うのに、俺には一切存在しない。

そして、身体能力の向上や霊力をまとった攻撃も出来ないのだから、俺はオカルトに対しては基本的に無力だ。

だからこそ、俺に言葉による力が必要だと言うのはわかる。分かるけど。

「脅迫って言うのはなあ」

少なくとも、相手の意思を無視するやり方は俺の精神衛生上あまりよろしくない。

「脅迫って思うからだめなの。交渉よ、交渉。

——どっちにしろ、これからはそっちの方の教育に力を入れないと」

ボソツとつぶやかれた言葉は、よく聞き取れなかったけど俺の今後を決めかねない言葉なのは間違いなさそうだ。

なんとかごまかそうとしたところで、目の前の大きな門が威圧的な音を出してゆっくりと開かれた。

「お待たせいたしました。霊魂はこちらで預からせていただきます」

現れた女性は、有無を言わさぬ口調で俺の手から霊魂を奪い取る。声からして、インターホンの女性と同一人物のようだ。

「では、ご苦勞様でした」

きつちりと一礼して、門が閉じられる。

「あらら。すこし怒らせすぎたみたいね」

「みたいだな」

このとき、俺は女性の一方的な態度に氣をとられていて気づくことは無かった。

霊魂が、門の向こうで薄く笑っていたことに。

気の短い沙耶が、今の女性の態度に腹を立てなかったことに。

五話　ちよつとした事件の直前に

夜。時刻は八時ちよつとすぎ。夕食をとり終えた俺と沙耶は、日課の鍛錬のために庭先に出てきていた。

「――ふう」

体を温めるための柔軟運動。霊能力を操るものならば、体内で霊力を循環させて一瞬の内に体を最適な状態にすることが出来るのだが、

俺には霊力そのものがからつきしなので、普通に体を温める。

「そろそろ良いかな」

「うん。お待たせ」

構えながら、沙耶に告げる。それに答えるように、沙耶は無言で右手を振るう。

風を切る音。

それを生み出したのは、沙耶の手に握られた一振りの長剣だ。長剣の刃渡りは、おおよそで一メートル弱。幅は太めに五センチの、反りが一切無い直剣だ。銘は、確か妖剣オボロとか言った気がする。

はじめに動いたのは沙耶だ。

三メートル以上あった距離を一息でつめ、真一文字に一閃。振るわれる刃を、上体を後ろに運ぶことで回避する。少し遅かったせいか、前髪が数本夜風に舞う。

反射的に、右足で大地をけって後ろに軽くバックステップ。その刹那、眼前をかすめるように白刃が走る。

「おっ！ 今のを避けるかあ……これなら、もう少しで習得できるかも、ね！」

「うわっと」

慌ててしゃがみこむと同時に、沙耶の左足が眼に映る。左足だけ？ 疑問に答える声はあった。

「しゃがむのは良いけど、次の行動も考えないとね」

避けるのは無理だ。頭で理解する前に、反射的に体が動く。衝撃。右腕で受けた沙耶の蹴り。かなり手加減されているとはいえ、右腕が痺れる。

すぐさまに繰り出される沙耶の追撃。月を背に、沙耶が長剣を真横に構える。

そこから繰り出されるは刺突。

尻餅をついている俺に、避ける手段は無い。このまま長剣を突きたてられて、俺の負け。

いつもならば、と前置きしておこう。

「ふっ！」

突き出された刃は、平時の俺でもかわすのは難しい高速の突き。だから、俺はかわそうとしない。

「っ！」

舞い散る赤い雫の向こうに、沙耶の驚いた顔が映る。

右手に、痛みを遥かに凌駕する激痛が走る。さすがに無茶だった

か？

——刃を右手にわざと刺すのなんて。

齒を食いしばって、痛みをこらえ、屍餅の体制からでも出来る攻撃——沙耶の腹を蹴り上げようとした。

しかし、そこにすでに沙耶の姿は無く。

空しくも空を切った、と言うのもおこがましい威力の蹴りだけど、に舞い降りる影があった。

「まったく、無茶をして。とっさに私が剣を引かなかったら、右腕ごと持っていったわよ」

呆れたように、俺の脚の上の沙耶が言う。いつの間にか、人の姿を解いたのか両腕が黒く、大きな翼になっている。

力のある妖怪は、人型と妖型あやかしがたつまり本性ともう一つ中間に位置する半妖型と言うのを持っている。沙耶の今の姿は、沙耶の半妖型だ。

「良い手だと思っただけだな」

右手に突き刺さったままの剣を抜こうと、左手で引っ張るがいまいち旨くいかない。そろそろ、痛すぎて眼の端に涙がたまってきた。

「ぜんぜん良い手じゃないわね。」

確かに、強者の戦いでは体の損失を無視して、相手の隙に付け込むということもするわ」

俺の隣に着た沙耶が、翼となった手でオボロの柄を撫でる。ただそれだけで、オボロは一枚の紙切れ、符に戻ってしまった。

「でもそれは、確実に相手を仕留めることが出来るからであって、真琴ではそんなこと出来ないでしょう？」

確かに、さっきの体制からの蹴りだって避けられている。たとえば当たっても、致命傷とは程遠い。でも、俺には一つだけ、ほかにはない利点がある。

「でもさ、この通りこれくらいの怪我なら直ぐに治るんだしさ」

血にぬれていた俺の右手。痛みはすでに無く、傷も塞がっている。妖怪でも、これだけの速度で傷を癒せるものはいないと言うのだから、俺の再生能力は桁が外れていると思う。原因、と言うか理由はいまいち分からないけど。

「だめね。どこまで治療できるのかも分からない力を頼るのは大間違いよ。」

それに、この訓練の趣旨はもっと別物でしょ」

「そうだけど、こんなことで使えるようになるのか？ 未来視って」

千里眼系の霊視能力の最上位である未来視。基本的に霊視は、過去を見るための技術だ。それに対して未来視は、その名の通り未来を見るための技術なのだが

、普通は占い師だって未来を見ることは出来ない。

にもかかわらず、千里眼の霊視で未来を見ることが出来ると言うのには、

一応の根拠が二つある。

一つは、千里眼と言う霊視の特性。対象の歴史を、生きてきた道を辿ることが出来るのだから、これから辿るべき道を知ること出来るのではないか。

ただの思いつきに等しい卓上の空論。けれど、二つ目の根拠がその空論を現実の理論へと変えていた。

それこそが、世界に三人いる未来視能力者。靈視を極めた先に立つ三人だ。

その中の一人。日本にいる未来視能力者が、以前雑誌のインタビューで未来視の方法をこう答えている。

『えっと、その…ググイッて前を向きながらシュパッて後ろを見る感じです』

ぜんぜん分からなかった。

だと言っのに、沙耶はしきりに頷いて、

『真琴。特訓しましょう。きっと、危機的状況とか一時間で一年分の修行とか、

そんな感じのことをすれば真琴も未来視が使えるようになるはず』

結論から言えば、一年経った今でも未来視は使えない。

「えっと……その、そのうちキュピーンって感じで目覚めるのよ。うん。沙耶うそつかない」

そっぽを向かれながらも、説得力はかけらも無い気がするけど。まあ、いいや。体を鍛えると言う目的はある程度は、果たせているし。

「さて、それじゃあもう一本いこうか」

稽古はいつも九時までやっている。時間はまだまだあるし、今日こそは一撃くらい当てたい。

「ふふつ。それじゃあ今度は手と武器を使わないでやってあげる」

そう言って、翼となった両手を広げる沙耶。絶対、一撃入れてやる。

「はあ、結局今日もだめだったか」

自分のベットに仰向けに転がって、ため息をつく。

駄目だったのは両方。未来視も、一撃を入れると言った目標もだ。いまだに俺は、何も出来ない。

「強くなってるのかな、俺は」

不安が、胸の奥で渦巻く。

「ん、そうね……始めたころよりは体の動きがこなれてきた感じがするかな」

ベットの傍らに腰掛けた沙耶が、俺の頭を撫で付ける。むう、子供じゃないんだがな。

「でも、今以上となると霊力が操れなければ無理ね」

やっぱりか。分かってはいたけど、やはり落胆は隠せない。やはり、霊力の有無は霊能力者にとっては欠かせない要素だ。

「なあ、なんで俺には霊力がないんだろうな」

疑問。俺の霊力は、中学に入る前には確かにあった。けれど、中学のある時を境にかすかな量を残してほとんど消え去ってしまった。最後に霊力を使ったのは、黄金色の中。あの夢と同じ光景の中だったと思う。

なぜ、俺はあそこにいたのか。なぜ、俺はあそこで彼女と戦おうとしていたのか。それが、思い出せない。ふと、頭を撫でていた力が強くなる。

「また余計なこと考えてる。無理に思い出そうとしちゃだめよ。そこまで完全に忘れていると言うことは、相当にきつい記憶だったことなんだから」

沙耶も詳しいことは専門ではないらしいが、人間は心が壊れてしまいそうな記憶に対しては何らかの対処が施されるらしい。

それが俺の場合は、記憶の封印だったのだろう。思い出さないほうが良い記憶だから。

「でも、夢に見るんだよ。俺が、麦畑の中で彼女を殺す夢を」

酷い時は、昼寝をしているときでさえその夢を見ることがあるくらいだ。

「大丈夫。今日は、悪夢は見ないから」

沙耶の手が、優しく俺を撫で付ける。なんだか、落ち着くな。

「本当に、夢は見ないのかな」

眠るのが怖かった時期があるくらい、俺はあの夢を何度も見ている。

何度も。何度も。何度も。早く思い出せとせつつく様に、あの夢は繰り返されてきた。

少しだけ、ふがいなさに対する不安と夢に対する恐怖が鎌首を持ち上げてくる。

「心配しないで。今日は、夢なんて見ないくらいに深い眠りにつけるから」

沙耶は、言うてから考えるように上を向く。

「それでも不安だつて言うなら、前みたいに私が添い寝してあげるから」

冗談めかして、沙耶が言った言葉。沙耶が、俺と契約した時からいが一番俺が夢を恐れていた時期。その時は、そういえばいつも沙耶に抱かれて眠っていたっけ。

「ん、そうだね」

何時から、俺は一人で眠れるようになったんだっけ？
思い出せない。けれど。

「今日は、お願いしようかな」

きつと、それだけで怖くなるから。

「ん、お姉さんに任せなさい」

沙耶のその言葉を聴いて、不安も、眠ることへの恐怖もどこかへ吹き飛んでしまったかのように無くなってしまった。

変わりに、ものすごく眠たくなる。安心、したせいかな。

「もう眠くなってきた……俺はこのまま寝るよ」

言っているうちに、まぶたがゆっくりと落ちていく。

「ええ、おやすみなさい。私も、用事を済ませたら直ぐに来るから」

「……お休み」

いつの間にか握られていた右手のぬくもりに、
安堵しながら俺の意識は眠りに落ちていった。

六話 ちよつとした事件の開戦前（前書き）

いつもお読みいただき、ありがとうございます。

基本的に、主人公である真琴の一人称で進むこの小説ですが、

今回は僕の実験もかねて三人称に挑戦しています。

いつも以上に読みづらいかも知れませんが、読了後に批評、またはご指摘の方をぜひよろしくお願いします。

六話 ちょっとした事件の開戦前

「……眠ったみたいね」

そうつぶやいて沙耶は、真琴の頭を撫でていた手

——真琴が深い眠りに落ちるように、術をかけていた手を離れた。
規則正しい寝息を立てる真琴の頭を、沙耶は優しげにもう一度撫で付ける。

「私が、守るから」

やさしげな、けれども決意と想いを込めた声で沙耶はつぶやく。

胸に去来するのは、ほのかに暖かく熱を帯びた想い。

手放したくない。

離れたくない。

側にいたい。

特別やさしいわけでも、強いわけでもない弱い人間。

だって言うのに、沙耶は真琴のことが好きだった。

何時から真琴のことが好きなのか、沙耶には分からない。そもそも、真琴との付き合い自体がそんなに長くないのだ。

沙耶と真琴が会って三年。いつの間にか、沙耶の心をその想いが支配していた。

たった三年。一つの、場を和ませる冗談の一つとして提案した一つの賭け。その賭けに、沙耶が負けてからの三年。

気がつけば、真琴の側を離れる自分が想像できなくなっていた。

「何でかしらね。一箇所にとどまり続けたことなんて、無いに等しいのに」

数多という妖怪たちの中でも、特に臆病だった沙耶。

人々の中に混じり、対魔の技術を磨き上げた。

強い妖怪に取り入り、その力を利用した。

敵意を持つ者の弱みを握り、敵対者にその情報を流した。

敵わぬと分かれば直ぐに逃げ出した。追っ手がかからぬ様に、

敵の敵と争うように仕向けてから。

敵だった者も、味方だった者も、師だった者も、弟子だった者も。

皆、沙耶は踏みつけてきた。

「負告鳥在るところに、勝者なし、か」

沙耶が過去に、大妖怪と呼ばれたときに付けられた呼び名。負告

鳥。不幸を告げる鳥。転じて、敗北を宣告する鳥。

敵にも味方にも、等しく敗北を引き連れてくる最悪の妖鳥。

だからこそ、沙耶は孤独だった。

自分ひとりなら、怖くないから。自分ひとりなら、逃げ切れるから。自分ひとりなら、生き延びることが出来るから。

大妖怪と呼ばれていた時期は、妖怪たちが世界に進出するために表立って動いていた時期の名残だ。沙耶としては、失敗したと言っても良いだろう。

「ん、動き出したみたいね」

窓の外。広江駅の方に沙耶は、目線を向ける。普通の人では、ネオンや外灯の光しか捉えることが出来ない風景。けれど、沙耶の眼にはもう一つ、動く者を捉えていた。

「結果は……この部屋だけでいいか」

家中を覆っていた結界を収束させ、真琴の部屋に集める。今現在、

この家には真琴と沙耶しかいないから行った方法だ。

結界の規模が小さくなったのを確認した沙耶は、懷から一枚の符を取り出す。

結界符。この家に使われている結界は、沙耶が自分で作り出した物だ。

今使われている結界は、悪意を持つ者だけに反応する警報の様な物。もともと、雪村家の住人は家を空けがちなので、あまり意味を成さないことが多い。

そして、今沙耶が懷から取り出した符の名は隔離結界・彼岸花。結界に覆われた対象を、結界の外から知覚出来なくするための結界だ。見えなければ、害なされることも無いと考えた沙耶が作り出した自信作の一つだ。

もともと、この結界は発見されないのが大前提のせいか防御能力は皆無に等しい。

そして沙耶は、もう一枚。今度は何も書かれていない符を取り出して、筆ペンでさらさらと文字を書き込んでいく。

「…できた。えっと、子鬼が作った迷彩用の術か…暗闇のかくれんぼ…
ちょっと違うわね…固形の蛇…あからさま過ぎるか」

結局、いい名前が思いつかないままに沙耶は符を発動させる。

薄い光が、沙耶の体を纏う。

沙耶の見た目に、変化らしい変化は無い。だが、確実に変化は起きていた。

備え付けられた手鏡。そこに、写るはずの沙耶の姿が無かった。

穩行の術。一般的には、このような呼び名で呼ばれている。この術の効果は、単純に気配を希薄にして進入や逃走時に利用するための術だ。

原理としては単純に、カメレオンと同じで辺りの風景に同化する

術と言えば分かりやすい。

気配まで希薄にした沙耶は、窓に足をかけて飛び立とうとする、前に、背後を振り返った。

背後には、すやすやと心地よさそうに寝息を立てる真琴が居る。

「…いつてきます」

フツと、口の端を吊り上げて沙耶は、夜空へと翼を広げ、飛び立った。

ここで、時間は少し巻き戻る。

広江駅西口方面。通称、富豪口。その一角にある高級住宅街。時刻は八時。ちょうど、真琴と沙耶が訓練を開始したのと同じころの皐月家。

目立たぬところに立てられた蔵。その出入口の前に、初老の男性と鎧武者が立っていた。

「ふむ。仕上がりは順調そうだな」

初老の男性、いや、皐月森蔵さつきしんげんは鎧武者の姿に満足そうな笑みを作る。

対して、鎧武者はしきりに体を動かしながら曇った声で答えた。

「…ええ、さし当たって動くことに支障は無いです。ただ…」

「ただ？」

「妖力が、足りません」

先ほどの曇った声と違って、はっきりと、その声は森蔵の後ろから届いた。

「妖力、か」

「ええ」

声の元。そこにあつたのは、一枚の銅鏡。銅鏡が、青白い光を瞬かせている。

「まあ、二年ぶりに力を使ったのだから仕方ないと言えば、仕方ないな」

真琴が霊視したとおり、二年前にこの家から生まれたての靈魂が一体、飛び立っていた。

そもその原因は、二年前に張りなおされた結界にある。この結界、真琴が言っていた通り、名前はふざけているが性能そのものは高い霊避けーるの効果で、結界内に居た未登録の靈魂を結界の外に弾き飛ばしてしまったのだ。

生まれたてにもかかわらず、体から強制的に放り出された靈魂は、二年の放浪の内に真琴と出会い、こうして体まで戻ってくることに成功していた。

その靈魂の体こそ、この銅鏡だ。

日本には古来より、長い年月を経た道具には魂が宿ると信じられている。この銅鏡も、正確な年月はわからないが、少なくとも数百年単位でこの形を保ち続けていた。

付喪神。つくもがみ 正確には、九十九神と書かれる妖怪こそが、この銅鏡の正体だ。

神の名を冠してはいるものの、その本質は妖怪変化。姿かたちが一定せず、どこにでも現れる、ある意味ではありふれた妖怪だ。だが、数がいるせいかその性質もまた統一性が無い。九十九神の性格形成には、道具の使い手あるいは、道具の性質自体が関連するのが一般的だ。

武器であれば、攻撃的に。鎧であれば保守的に、といった具合だ。もっとも、この銅鏡は能力はともかく性格自体は靈魂が浮遊している間に学習した物であり、持ち主に似たというわけではないが。

「できれば、今日中にことを終えておきたいところだが…どれだけ力があれば良い？」

「そう、ですね」

銅鏡の考え込む声に合わせて、鎧武者が腕を組んで上を向く。なかなかシニールな光景だ。

「今の倍、程度は必要かと」

銅鏡の答えに、今度は森蔵が考え込む。

人間や幽霊が使う霊力。悪魔や魔女、あるいは魔法使いが使う魔力。神々の使う神力。そして、妖怪たちが使う妖力。これらは皆、根源を同じくしながら、全く別の力として認識されている。これらを統括して、理力りりょくと呼ぶ。

妖怪たちが振るう力の源である、妖力。これは、消費した分を回復させるには一定以上の時間の休息をとるか、地脈と呼ばれる力の温泉のようなところから汲み上げるのが一般的な方法だ。

だが、増やすとなると勝手が違ってくる。

どの理力でも同じだが、生まれながらにして持つ理力量を修練によって増やすことは出来ない。

けれども、理力量を増やすことは覚悟さえあれば誰にでも出来る。

「しかし、惜しいな」

銅鏡の方を向かず、森蔵はつぶやく。

「この館にいる使用人、二十名。その霊力を全てお前に与えることが出来れば、
倍程度にはなると言うのに、な」

「…それは、惜しいですね」

銅鏡は、森蔵のわかりやす過ぎる言葉に呆れながらも、行動を開始する。

「ん、どこかいくのか」

森蔵の脇を通り過ぎた鎧武者に、森蔵はわざとらしく声をかけた。

「ええ、戦いの前にもう少し体を慣れさせておこうかと思いましたがね」

「そうか、それは良い心がけだ」

遠ざかっていく鎧武者の足音を耳に、森蔵は空を見上げる。

「くく、今日は良き日だ。二つも力をこの手にすることが出来るのだから」

森蔵の声に答える者はいない。代わりに、絹を裂くような悲鳴。

「おっと、念のためもう少し防音性をあげておくか」

結界が、淡い色で彩られる。

「さて、私の準備もしておくか」

そう言って森蔵は蔵の中に入っていく。

理力量。修練によって増やすことは出来ない。

だが、覚悟があれば誰でも増やすことが出来る。

相手の命を奪い、その魂を喰らえばいいのだから。

七話 ちょっとした事件の開戦（上）（前書き）

今回も三人称です。長くなって読みづらいので、上下に分けることにしました。

七話　ちょっとした事件の開戦（上）

三百年前。妖怪たちがこの国の事実上の支配権を握ったとき、妖怪たちの長——姫と呼ばれる妖怪は二つの決まりを妖怪たちを守ることを、厳命した。

襲われない限り、人間は襲うな。妖怪同士で、奪い合え。

この命令を出した当初、姫は相当数の反対があると予想していた。しかし、その予測に反し、多くの妖怪たちはピタリと人間を襲うのをやめたのだ。

いくつか理由があるが、その中の一つに負告鳥——沙耶が関わっているのは間違いない。

と言うのも、この時期に積極的に動いていた沙耶は、力を持った妖怪（野心を持った者が多かった）の間を渡り歩いていたため、必然的にそれらが皆、共倒れする結果を引き起こしていたからだ。

もっとも、沙耶は姫に命じられたわけでもなく、

昔からそんなことを繰り返してきたのだけだ。

妖怪たちの長。通称、姫は当然のように今でも妖怪たちの長の地位に納まっている。彼女については、今は詳しく語る必要は無い。

ただ、姫が厳命した二つの命令。それは、三百年経った今の時代でも有効である。

先に相手を捕らえたのは、姿を隠し、空から見下ろす沙耶だった。

「鎧武者と、人間……符術士って所かしらね」

月を背に、翼へと形を変えた両の腕を羽ばたかせて沙耶はつぶや

く。

沙耶の眼下。数百メートル以上はあるが、妖力で強化された視力によって、両目は難なく鎧武者と皐月森蔵の姿を映し出していた。沙耶に捕捉されているとは知らずに、鎧武者と森蔵は裏通りを真っ直ぐに歩いている。

「この進路だと…交差点でいいか」

二人の進路、前に五十メートルほど進んだところに四車線の交差点がある。深夜にさしかかろうとしているからか、車は十数分おきに一台、通る程度の交通量しかない。

鎧武者と森蔵がたどり着く前に、沙耶は音を立てずに交差点の真ん中に降り立つ。

「ふう」

人の姿をとった沙耶の右手に、一振りの長剣が現れる。

カシャン。

左手に、螺旋を描くように数十枚の符が渦巻く。

カシャン。

妖剣オボロを腰ために構え。

カシャン。

左手の符、全てに妖力を循環させておく。

——カシャン。

「はあっ！」

呼気と共に、間を詰めた沙耶の渾身の一撃が鎧武者を吹き飛ばした。

——バカな。どこから現れた。

森蔵の脳裏に、そんな言葉が浮かぶ。

その理由に行き当たる前に、反射的に森蔵の体が動く。

長年、符術士として鍛え続けてきた身体が真っ先に一枚の符に靈力を流させる。

「爆ぜ」

森蔵が言い終える前に、ピタリと森蔵の首に妖剣がそえられた。

「当日に恩を仇で返すなんて…最近の人間は駄がなっていないわね」

「いや、そんなつもりは無かったのだがな」

「どうでもいいわよ。それで、用件は？」

妖剣の腹で、森蔵の頬を叩く沙耶。余裕のある沙耶に対して、森蔵はどこからともなく現れた沙耶に、必要以上に警戒心を抱いていた。

落ち着け。大丈夫だ、あいつが来れば勝てる。

そう思い直した森蔵は、緊張で強張った体を解す様に軽く深呼吸して、

一息ついてから目的を語りだした。

「私の目的は単純だ。あの小僧との契約を切って、私の使役妖怪になってほしい」

「いやよ」

キツパリと、沙耶は言い切った。

「なぜだ。お前たち妖怪は、強い者に使役されることを望むのだらう。」

私は、小僧よりも金も、権力も、霊力もあるぞ」

森蔵が早口でまくし立てるのに対し、沙耶は呆れたように森蔵へと告げた。

「人間程度が稼げる金銭や権力なんて、私たちからしたら何の価値も無いのだけれどね。」

霊力は、言う必要ないでしょ？」

人間がまだ、この国の実権を握っていたころならば身を守るために時の権力者に取り入る妖怪は多かったが、今は妖怪たちが天下を取っている時代。

わざわざ、短命で、町村規模でした権力を行使できない人間よりも、国規模で権力を持つ妖怪の下に付くほうが利口である。

金に関しては単純で、沙耶が欲しいと思う物は基本的に子供の小遣いでも

買うことが出来るからだ。

妖力と霊力。性質は違えど、保有量だけで言えば妖怪は人間の倍以上は持っている。

今のこの世の中では、人間が妖怪に勝てる要素は殆ど無いと言っても過言ではない。

「だが、今よりも楽な暮らしが出来るぞ。」

それに、私が死んだ後は遺産としてあの家と土地をお前にやっても

いい」

一瞬だけ、森蔵は薄暗い路地の奥を見た。

「ふう、人間と言うのはどうして年を取るとねちっこくなるのかしら」

それに気づいているのかいないのか、沙耶は左手の指を眉根に当てて、

やれやれと首を振る。

「とにかく、今後一切。私たちには近づかないで。私はあなたの物になる気はないもの」

者と物。字にしなければわからないアクセントの違いだが、沙耶は森蔵の言葉にしている野心を見抜いていた。

今よりももっと、金と力が欲しい。

前途の通り、この国の権力中枢は妖怪が支配している。人間以上に力も寿命も長い妖怪たちだ、並みの方法では彼らの上に立つ事などできるわけが無い。

だが、一つだけ。妖怪たちから権力を奪い去る方法がある。妖怪同士で奪い合え。姫が蔵命した一つの命令。現代になってもなお、効力を発揮する妖怪たちの法。

沙耶の背後に、わずかな陽炎が立ち込める。

森蔵の瞳がそれを捉えると同時に、口が動いた。

「仕方ないな…やれっ！」

沙耶の背後に向けて、森蔵は勝利を確信した笑みを浮かべて叫ぶ。弱らせた後なら、逆らえなくする方法などいくらでもある。

沙耶の、豊満な肢体を思い浮かべながら森蔵はほくそ笑む。
そしてそれが、森蔵の最後の思念となった。

「っ！」

一瞬。沙耶は上体を後ろへと大きくそらる。

物干し竿のように、長いものが沙耶の眼前を横切った。

血飛沫が舞う。

森蔵は、断末魔の声を上げることなく、あっさりと、その命を絶たれた。

「帰られては困りますよ。まだ、私の用件がすんでいません」

槍の穂先。痙攣する森蔵から霊力を吸い上げながら、鎧武者が言う。

「お前の、ね」

軽く、後ろに跳ねて沙耶は距離を取る。

「ええ、聞かなくても分かるでしょうけど……っと、なかなか霊力を持ってますね」

吸い上げた霊力を、即座に妖力へと変換させる鎧武者。

「そうね……私にも、そんな時期があったからね……何よりも強くなりたいて」

何よりも速く。

誰よりも力強く。

ただひたすらに、力を求め続ける。

多くの妖怪たちが持つ、あらがう事の出来ない衝動。だからこそ、妖怪の姫による命令。

妖怪同士で奪い合え。

力も、宝も、妖力も、恋人も、家族も、友人も。

略奪こそが、妖怪たちにとっての絶対の法則。

——鎧武者が、薙刀を水平に構える。

それはきつと、妖怪たちの中に根付く狩猟本能。人間たちよりも賢く、力もありながら妖怪たちは自分の本能に忠実だ。

多種族では持ち得ないほどの、圧倒的な本能の本流。特に、自然界の生物から進化した妖怪はその傾向が強い。

——沙耶瞳が、獲物を狙う猛禽類のように鋭くなっていく。
カラスの妖怪である沙耶も、それは例外ではない。

「私の糧となつて頂きますよ、負告鳥。ああ、あの少年についてはご心配なく。直ぐに合わせてあげますよ、私の中でねっ！」

仕掛けるのは鎧武者、鏡の九十九神。名を鏡鎧^{がいきょう}。

「私を糧に？ 負告鳥の名を知っているのに、ずいぶんと思い上がったものね。なら、告げてあげるわ、敗北をっ！」

迎え撃つのは、カラスの大妖怪。負告鳥、沙耶。

人知を超えた闘争は、人知れず開戦のゴングを鳴らした。

八話 ちょっとした事件 開戦（下）（前書き）

今回で、三人称は終了です。
批評、どんどんおまちしております。

八話　ちょっとした事件　開戦（下）

妖怪と妖怪の戦いの場合、一撃で決着がつくと言うことはまずありえない。

一合。

生命力や、妖力による防御力。あるいは再生力といったものが、優れているからだ。

二合。

繰り返される突撃を妖剣で受け流しながら、沙耶は左手で複数枚の符を。

三合。

刹那という間をおかずに発動したのは、隔離結界^{かくりけつかい}。その名のとおり、結界の中と外を切り抜く結界だ。

四、五、六、七、八…。

沙耶が結界を展開している間にも、鏡鎧^{きようがゐ}の槍は的確に沙耶を狙ってくる。

繰り返される突撃。沙耶は、その全てを妖剣で受け流す。

一步。大きく沙耶は後退し、左手を強く握りこむ。細い路地に、薄い緑色の壁が天高く立ちのぼる。

「隔離結界…ご苦勞なことですね」

「当たり前でしょう。民家やら公共物に被害を出して、怒られるのはいやなもの」

結界の範囲は、目測で二十メートルほど。横幅はそれほど広くないが、奥行きはかなりの広さだ。

「さて、下準備も十分。そろそろこちらから——攻めるとしますか」

大地を蹴る音。鏡鎧の眼前に、妖剣の刃先が現れる。
左肩から腰にかけて、切り抜くように走る沙耶の妖剣。早すぎる
それに、鏡鎧が反応することができたのは偶然だった。
反射的に差し出した槍の柄で、鏡鎧は刃を受け止める。いや、受
け止めきれずに後ろへと少し、はじかれる。
追い討ち。振りぬいた妖剣を真一文字に振るう。
槍の柄を避けるように振るわれた刃は、鏡鎧の胴を打ち据える。
鈍い、金属音が結界内に鳴りひびいた。

「ん？」

一瞬。妖剣に帰ってきた手ごたえに沙耶は、不思議そうに顔をし
かめる。

鏡鎧が動いた。

深く、真一文字に裂けた鎧の穴を一瞬で修復し、
近接戦を不利と思ったのか大きく距離を取る。

槍を手に、舞うように槍を動かす鏡鎧。槍の軌跡に描かれるのは、
梵字（^{ほんじ}ブラーフミー文字とも）と呼ばれるインドで使用されている
文字だ。

「…へえ、あんた大陸から渡って来たんだ」

描かれていく梵字を見ながら、沙耶はゆっくりとした動作で一枚
の符を左手の指に挟む。

「落雷よっ！」

振り下ろされた槍。閃光がほとばしる。生み出されたのは、一筋
の雷。インド、ヴェーダ神話においては、破壊神と呼び声高い暴風
の化身が使用したとされる力の一部だ。

雷は、音速を遙かに超えて、大気を切り裂き沙耶へと迫るが、

「――」

雷は沙耶ではなく、沙耶の持つ符へと吸収されていく。

「避雷符。何が来るのかわかってれば、対処も簡単だからね。そして――」

沙耶は紫電がはしる符と、もう一枚。

「落雷って言うのは、こういうのを言うのよ」

頭上高く上げた二枚の符が、燃え落ちる。

同時に、轟音。鏡鎧の雷を遙かに凌ぐ大きさの雷が鏡鎧へと落ちた。

土煙が立ち込める中、沙耶は注意深くあたりの気配を探っていた。
――結界内の気配自分を除いて二つ。一つは鏡鎧として、あとの一つは？

その時、沙耶の耳がわずかな音をとらえた。

反射的に、沙耶の腕が妖剣を振りぬく。

妖剣が切り裂いたのは、陽炎のように立ち上る鏡鎧の影。

もう一つの音。風を切るそれに、沙耶は危機感を覚えて即座にその場を飛び立つ。

両の手を翼に変えて、飛翔。

沙耶の眼下に、鏡鎧の姿が映る。

背後に気配。

さらに高く、飛び立つ。

次々と背後に現れる気配。地上には、すでに十を超える鏡鎧の群れが沙耶を見上げていた。

背後を取られないように、回りながら高く飛び上がる沙耶。

「そう、そういうこと」

次々に現れていく鏡鎧の気配。

ダメージを受けた様子のない姿。

手ごたえのない沙耶の攻撃。

ここにいたって、沙耶は今戦っている鏡鎧が本体ではないと悟る。

——だとすると、本体は。

攻撃をかわしながら、沙耶は妖力の流れを読む。

「ふう、真琴の方が読むのは上手いんだけどね」

攻撃を加え、落ちていく鏡鎧。

地面で、沙耶に向かって槍を投擲しようとする鏡鎧。

沙耶よりも高く、上空から速度をつけて突撃してくる鏡鎧。

前後左右。様々な方角から繰り出される時間差の一撃を、沙耶は危なげなくかわしながら全ての鏡鎧を視る。

鏡鎧から立ち上る、赤黒い糸。十センチほどの太さのそれは、鏡鎧が作り出した鎧武者へと妖力を送っているパイプだ。

全ての鏡鎧が持つパイプを、沙耶は空を舞いながら追いつける。

「しぶといですね」

余裕そうなおぶりだが、鏡鎧はあせっていた。

すでに、百を超える数の鎧武者を生み出している鏡鎧だが、鎧武者を作り出す妖力とて、無限ではない。

「こうなると、こちらの妖力とあちらの妖力。どちらが尽きるのが早いかな、
持久戦ですかね——ん？」

鎧武者の攻撃の切れ目。常人には見分けることが出来ないであろう、妖力を補給する一瞬の合間について、沙耶はさらに高く飛び上がる。

その速度たるや、今までのそれを遙かに凌駕して瞬く間に鏡鎧が鎧武者を生み出すことが出来る範囲を超えてしまう。

「時間稼ぎ、と言うわけではなさそうですね」

何をする気にせよ、攻撃手段のない鏡鎧は鎧武者の数を減らして、適当な高度のところで何時でも作り出せるようにしておく。

「さて、何時ごろ降りてくるんでしょうね」

森敵の懷の中、鏡鎧はそうつぶやいた。

沙耶は未だに、鏡鎧の本体を見つけることができていなかった。
遙か上空。雲よりも高い位置で、沙耶は眼下の鎧武者をにらむ様に見つめる。

「ああっもうっ、いらいらするっ！ ぜんっ、ぜん見つからないじゃないっ！」

上から見下ろせば分かりやすいかと思い、空高く上った沙耶だが、いい結果がでずにストレスを高めていた。

「っと、だめだめ。落ち着くのよ沙耶。ここで冷静さを欠いたら相手の思う壺」

びーくーる、びーくーる。とつぶやいて、もう一度、妖力のパイプを見る。

「…」

視る。

「……」

視る。

「……………」

しつこく視る。

「ふう」

空を仰ぎ見ながら、沙耶は小さくため息をつく。そして、

「やっぱり全部焼き払おう」

結局、力技だった。

沙耶を中心に、梵字が踊る。

符による術ではなく、言葉や文字による術、呪言^{じゅごん}。

「不浄を払う業火」

呪言の威力を左右するのは、文字と言葉の多さだ。

「果て無き空に住まう者」

古来より、この国に伝わる一つの言葉。ことだま言霊。

「我が剣となりて——」

一つ一つの言葉に力を宿し、様々な奇跡を起こす言霊。
その中で、攻撃のための力を呪言という。

「降りしょ——もとい、降り注げ！」

舌をかんだのはこのさい無視するとして、いくつもの炎が空から
地上へと降り注ぐ。

沙耶が作り出した妖力の炎によって、結界内が瞬く間に火の海と
なる。

「はははっ！ 燃えろ燃えろー」

どこことなく悪役っぽく笑いながら、次々と炎を地上へと向けて放
つ。

沙耶の放った炎は、その後数十分にわたって燃え続けた。さいわ
いな事に、結界のおかげで民家や道路には被害はでなかったのが救
いか。

「さて、真琴が待っているし帰ろつと」

黒い翼をはためかせ、沙耶は真琴の部屋へと飛び立った。

沙耶が立ち去った後の路地に、うつすらと陽炎が立ち上る。鏡鎧の本体を抱えた鎧武者だ。

鎧武者を作り出す妖力のほとんどを半分を防御に使い、さらに鎧武者に森敵の体を覆わせることで何とか燃え尽きずにすんでいた。

「…無茶苦茶な妖力でしたね」

鎧武者に抱かれたまま、鏡鎧はつぶやく。

「ここはいったん引いて、妖力を高めてから出直すとしま——？」

這いずるような、あるいはにじり寄るような音が鏡鎧に聞こえた。沙耶と対峙していたときには感じなかった、恐怖が鏡鎧の心の内で鎌首を持ち上げる。

「なっ、にが」

大きな影が、街灯の光をさえぎる。

とつさの判断で、鎧武者を横に飛ばす。と同時に、妖力を使って新たに鎧武者を作り出す。

鉄製の鎧が、たやすく押しつぶされる。

飛び散るコンクリートの破片の先、鏡鎧はそれを見た。

赤く、紅く魅惑色を発する光。それは、眼だ。

のっそりと、怠慢な動作でそれは体——というよりは頭を持ち上

げる。

「うつ、あつ…ああつ」

太く、長い胴体。チロチロと、せわしく出し入れを繰り返す先端で割れた赤い舌。金属よりも強固そうな鱗に覆われた外皮。

西洋の神話においては、神々の天敵と歌われ者。

東洋の神話においては、神の末席に名を連ねる者。

おうち
大蛇。

東西全ての神話に登場するこの存在を前に、鏡鎧は動くことも出
来ずにただただ恐怖で身をすくませる。

それはまさしく、蛇ににらまれたカエルのよう。

鏡鎧の本体である銅鏡に、大きく開かれた大蛇の口がうつりこむ。

「あああああつ！」

一息に、鎧武者ごと大蛇は鏡鎧を飲み込んだ。

ぼこぼこ、胴体部分で鎧武者が暴れているので外皮が盛り上がるが、やがてそれもなくあたりには静寂が戻った。

これ以上の獲物がいないのを理解した大蛇は、ゆっくりとその身をくねらせながら夜の街へと気へていく。

こうして、一つの事件が幕を閉じ、新たな事件の幕が開く。

けれど、主役《真琴》はいまだに舞台に上るにいたらない。

九話 一時間目・ロングホームルーム（前書き）

今回から、真琴の一人称に戻します。

九話 一時間目・ロングホームルーム

学校のチャイムと言うのは、同じ音なのに違和感を覚えるのかね。始業開始を告げるチャイムを聞きながら、俺はふとそんなことを思った。

大守学園に入学して二日目。一時間目のロングホームルームと、五時間目の身体測定以外は通常授業だ。

いくら大守学園が霊能力を教える所とはいえ、霊能力だけを教えておけばいいと言うわけではないらしく、普通科と合同の委員会や生徒会も当然ある。

一時間目は、役員を決めるために使うそうだ。セオリー道理なら、一番最初に決めるのはクラス委員長ってところか。これを決めるのが一番の曲者だよな。

「よし、それじゃあ号令…を言う役員を決めないと。それで、立候補はいるか？」

相川先生が、拳手をうながすように上げた手に答える生徒は、もちろん俺もふくめていない。

「むう、仕方ないな」

しばらく待つて、立候補がいないと分かると相川先生は俺のほうをちらりと見た。

「どうだ、雪村。やってくれないか？」

良くも悪くも、覚えのいい生徒に委員長を任せると言うのは常套手段だと思う。

ああ、また変に注目されてるよ。

「いやですよ。第一、何で俺なんですか」

出来ることなら俺だって、必要も無いのに責任のある立場につきたいとは思わない。

「ん、なんとなく雪村は面倒見が良さそうだから、かな」

「いやいや、そんなことないですよ。

俺の面倒見の悪さと言ったら、ナマケモノにも負けず劣らずと言ったところですよ?」

「ねえ、真琴」

熱心な顔つきで、大学ノートになにやら書き込んでいた沙耶にシヤーペンの芯を渡す。

「いや、絶対にそんなことはない」

どういうわけか、相川先生はそう断言した上に、クラスメートの大半も同じようにうなずいていた。

「真琴」

とりあえず、この流れを打開するのは難しそうだ。沙耶には、驚きの白さを実現! と言っのが売りの消しゴムを渡しておく。

「それじゃあ、クラス委員の男子は雪村でいいな?」

「異議有りっ！」

「異議なーし」

どんな状況からでも逆転できるという魔法の言葉も、さすがに多勢に無勢。クラス中の男子の声にかき消されては、全く意味を成さなかった。

「よしっ！ それじゃあ、雪村が男子のクラス委員長な。前に出てきて、ここからの役員決めを引き継いでくれ」

うつ、さすがにこの空気で断ったら俺が悪者みたいだ…仕方ないやるか。

「さて、女子のクラス委員を最初に決めておきたいんだけど…立候補っているか？」

さっきの反応で大体分かってたけど、やはり自分からやろうつて言う人はいないみたいだ。

「それじゃあ、推薦…は難しいか…どうしようかな」

普通なら推薦って形なんだろうけど、このクラスにいるのは大半が外部からの生徒みたいだから、まだ名前を覚えていない人もいるだろうしな。

「あのさあ、あんたの奥さんじゃ駄目なの？」

教壇の近くに座った女生徒、名前はたしか河野さん、だっ た っ け？ が茶化すように言った。変に否定すると、余計にからかわれそうなので黙っておこう。
いや、それよりもだ。

「沙耶は、この学園の生徒ってわけじゃないからクラス委員長は無理だよ」

学園長と交渉して、生徒でなくても学園に自由に入出入りできるような身分になったとか。

「？ じゃあ、何で学校にきてるのよ」

「…ノーコメントで」

沙耶いわく『真琴の側にいないと、なんか落ち着かないのよね』とのこと。さすがに、これを言うのは惚気てるみたいで恥ずかしい。それ以外に言うことはなかったのか、河野さん（暫定）はそれっきり沈黙した。

そしてまた振り出しに戻る。いい加減に決めないと、ほかの委員を決める時間がなくなるな。

「別に雪村が選んでもいいぞ？」

相川先生も時間を気にしてか、そんな提案をしてきた。俺が、ねえ。

「んー、それじゃあ…」

そうつぶやくと同時に、女子がいつせいに眼をそらす。その反応は結構傷つくぞ。まあ、自分で決めようにも全員の名前も把握していないし、くじで決めるかな。

相川先生から適当に裏紙をもらい、それを二十分割して一から二十までの数字を書き込む。

「先生、この中から一枚。適当に引いちゃってください」

「ん、ああ。結局くじ引きか…つと、三番だな」

「ええ〜っ、あたしっー!」

セミロングの、活発そうな女子生徒が声を上げる。名前は確か…臼井さんだったけ。

「だな。じゃあ、臼井。お前が女子のクラス委員長な」

「むっ〜」

不服そうに頬を膨らませながらも、臼井さんは特に文句を言うこともなく教壇の前へとやってきた。

「よろしく」

軽く手を上げて、一言だけ言うておく。

臼井さんは俺の顔を見上げるようにまじまじと見つめた後に、諦めたようにため息をついた。

「はあ、もいいわ。とりあえず、あたしが進行するから、黒板の記入お願いね」

「はいよ。そういえば先生、委員会って何に入れるんですか？」

「おっと、言っただけだったな」

うつかりしてたど苦笑いしながら、先生は黒板に委員会を書き出していく。

美化委員・男女一名ずつ。

図書委員・男女一名ずつ。

浄霊委員・男女二名ずつ。

保険委員・男女二名ずつ。

霊符作成委員・男女二名ずつ。

黒板に書き出された委員会は、以上の五つ。美化、図書、保険委員会はどの学校でもある委員会だろう。

でも、浄霊、保険、霊符作成委員会は間違いなく霊能に携わる学校にしかない物だ。

「一応、説明を入れておくな。美化委員はそのままだ。大守学園の美化を担当する。図書委員は図書館の整理や、本の貸し出し管理だ。ただ、図書館には貴重な古文書や文献なども収められているから責任はそこそこに重大だぞ」

古文書類か、沙耶ならいくつか持つてくるかな。と思ったが、俺の部屋に置かれている沙耶の蔵書は全て漫画だったのを思い出して、期待するだけ無駄だなっと思いついた。

「それで、ここから各二名ずつの委員会になつてただけだ。これは、単純に人手が必要になる事態が多いからだな」

んむ？ 浄霊や霊符作成に人手がいるのは分かるけど、保険委員

にも？

「詳しい話は委員会の集まりで聞けるから、取り合えず概要だけな。浄霊委員は主に普通科の浄霊、あるいは相談を受け持つ」

まあ、仮にも霊能力を扱う霊能科ならば対処できる人は、そこそ幾らでもいるけれど普通科はそうもいかないもんな。

「霊符作成は、まあその名前のまんまの委員会だな。単純に人手が大量にいるから男女二名…あえて条件をつけるなら、根気と器用さが要求される」

単純に、一番しんどい委員会だろうな。

「後、人手が足りなくなったら、ほかの委員会からも応援を出すことになるからその辺は覚悟しておいてくれ」

「うへえ」

臼井さんから、げんなりとした声が聞こえる。俺も、声には出していないが顔が歪んでいるのは分かった。

「こんなところだな。じゃあ、二人とも続けてくれ」

今の話を聞いて、素直に立候補してくれる人がいるとも思えないけどな。

「はあ」

はからずとも、臼井さんとため息のタイミングが合ってしまい、互いに顔を見合わせて苦笑いする。

「さって、さくさくと決めていこうか！　まずは立候補」

今のうちに、くじでも作っておこうかな。

結局、のこっていた委員をくじ引きで決め終えるころには、残り時間三分を切っていた。

「ようやく決め終わったか。全く、もつと積極性を持っていかないところの先苦労するぞ？

…まあいいか。放課後、委員会があるから各自、きちんと指定された場所に行くように。以上！　ちよつと早いがこれで終わりにする。号令はいらないけど、チャイムになるまでは教室から出るなよ」

そういつて、相川先生は足早に教室から出て行った。

「聞いてたと思うけど、今日の放課後委員会になったから。遅くなると思うから、先に帰っててくれ」

「ん」

何を悩んでいるのか、沙耶は眉根にシャーペンの頭を当ててうなります。

ちゃんと聞いてたのか不安だ。

「ねえ、真琴。遅くなるって大体どれくらい？」

ちゃんと聞いてたみたいだ。

「さてねえ、初めてだからなんとも…多分…」

終業が三時で、委員会が三時半からとして、一時間くらいか。

「五時には終わると思う」

すこし大目に見ておこう。俺としては、沙耶を無意味に待たせるのは心が痛む。

「そつか…ん」取り合えず後で返事するわ。それと、私はちよつと相川に聞くことがあるから、次の時間は抜けるね」

「ん？ 分かった」

言ってから、取り合えず机に出しておいたノート類を片付ける。沙耶もいつの間にか、ノートをしまっていた。

そして、タイミングを見計らったかのようにチャイムが鳴り響く。ほかのクラスも早めに終わっていたのか、廊下の方がすこし騒がしくなった。

「さて、行って来るけど。私がないからって、泣かないでね」

「ははっ、努力するよ」

ひらひらと手を振って、沙耶は教室の後ろのドアから出て行った。

「なあ、雪村とあの美人って付き合ってるのか？」

そんな声が、俺の前の席から聞こえた。たしか、矢口君、だったな。

「別に付き合ってないけど…結構、長い間一緒にいるね」

「ふん。あ、俺は矢口、矢口秀樹^{やぐちひでき}。よろしくな」

そういつて、矢口君は机越しに右手を差し出してきた。俺は、それを取りながら答える。

「雪村真琴だ。呼び方は適当でいいよ。こちらこそ、よろしく矢口君」

「おう」

短く答えて、矢口君はにっかりと人懐っこい笑みを浮かべる。

うん、好感がもてそうな奴だ。

大守学園での初めての休み時間は、矢口君との他愛のない雑談で過ぎていった。

十話 二時間目・科目・浄霊

二時間目の授業を担当する教師は、チャームがなると同時に教室に入ってきた。

赤い袴と白い千早。一目で、巫女と分かる服装の教師だ。二人目の教師だが、ジャージに巫女服とずいぶんと統一性のない服飾だな。

「係、号令を」

それほど大きくない、けれどもよく通る声でそれだけ告げてくる。

「起立…礼。着席」

生徒が着席するのを待つて、巫女服の教師は黒板に文字を大きく書いていく。

神谷一姫。

「神谷一姫だ、浄霊を教えることになる。かみたにいつき取り合えず一年のうちは浄霊と除霊の基礎講習が中心になるが、きちんと聞いておけよ」

喋り方がいくらか男っぽい気もするが、どこことなく親しみを覚えやすい。たぶん、この人もいい先生なんだろうな。

「さて、早速だが授業を始めるとしよう。まずは確認したいのだが、君たちは悪霊と幽霊の違いが分かるか？」

悪霊と幽霊？ パツと思いつくのは、生きている者に害をなすかただいるだけかの違いだと思うけど、ほかにあるのか。

「ふうむ、では上月^{うづき}。ためしに答えてみる」

「あつ、はい。えっと…悪霊は人に敵意を持っているってことですか」

「やっぱりみんなもそう思ってるんだ。まあ、悪霊って言うぐらいだしな。」

「だいたい正解だが、悪霊だけが敵意を持つと言うのは少々語弊があるな。教科書の九ページを開いてくれ」

幽霊の性質と題されたページを開く。

神谷先生も、黒板に表題として同じ言葉を書いていた。

「まずは幽霊と言うのがどういうものなのか、そこから説明しよう」

黒板に大きく、標識に書かれているような人型を書き、その中心に魂と円で囲ってある言葉を書き足す。

「知つてのとおり、この魂と言う物は未だに説明がすんでいない。諸説はいろいろとあるが、最も有力視されているのは本能説と、理力の入れ物説だ。詳しくは、理力の授業のときに習うだろうから、今はこの二つの説だけを把握しておいてくれ」

「そういえば沙耶は、本能が強ければ魂の総量も大きい奴が多いって言ってたな。だとすると、結構この説も的を得ているのかも。」

「次に、霊体の説明をしておこうか。教科書だと太字で書いてあるから、赤線を引いて置けよ。霊体というのは幽霊の身体、と言う印象が強いが、霊体は我々でも持っている」

先生の身体を黄色い膜が覆う。

「今見えているこれが、私の霊体だ。おそらく、黄色い陽炎が私を覆っているのが見えているんじゃないか？」

陽炎？　むしろ俺には、膜というか球体が先生の身体を覆っているようにしか見えない。

どうしよう、この辺のこと聞いておいたほうがいいかな。

「このように、魂があれば誰でも持つてるのが霊体だ。各々が持つ霊体を可視化すること、これが霊能力者の初歩と言ってもいいな。幽霊は、霊体と魂のみになった霊能力者と捉えればいいだろう」

あつ、駄目だ。もう幽霊の話に移ってる。仕方ない、授業後に聞くとしよう。

「では、ここでちょっとした問題だ。人間の体の部位で、思考をつかさどっている部分は何だ？　関口、答えてみる」

「えっと…脳、でしょうか」

「うん、正解だな。心とか感情とか、そういう不確定の物をのぞいて考えれば、腕を動かしたり夕飯の献立を考えるのは脳だ」

先生は黒板に書いた人の絵に、脳という文字を書き加える。

「まあ、君たちも知つてのとおり脳とは体の一部だ。だが…」

黒板に赤いチョークで、もう一つの人型を書き出す。胸のところ

には魂と、隣の人型と同じように書く。

「肉体を持たない霊体には、脳が存在しない。けれども、事実として幽霊や悪霊たちは思考し、対話している…まあ、中には言語として成り立っていない者もいるがな。まあ、そういった例外はさておき、どうしてだか分かるか？」

「本能、ですか」

ぼつりと、特に意識しないで口から言葉が漏れた。

「ほう、よく分かったな。えっと、雪村か。誰かに聞いたことでもあったか？」

「ええ、まあ」

別段、沙耶のことを詳しく話すこともないので適当に答えておく。

「雪村の言つとおり、霊体を体とする幽霊たちの意思を司るのは魂が持つ本能だ」

本能と黒板に書き加える先生。どうやら、沙耶のことよりも授業の進行が優先みたいだ。

「本能と言うと、獣じみた衝動を思い浮かべる者が多いが、こと幽霊に限ってはその限りではない」

教科書を見てくれの言葉に従って、手元の教科書に視線を移す。
大きな円グラフで、幽霊となる生き物の比率が書かれている。

「その表を見てもらうと分かりやすいが、幽霊の中でもっとも数が多いのが人間だ。これは、個体数の多さも勿論あるが、一番の要因は残念——未練、さんねんと言ったほうが分かりやすいな」

なしえる事の出来なかった目的。届かなかった夢。残された家族への思い。

虐げられた者の憤怒。裏切られたことへの憎悪。殺した者への呪詛。

陰陽、正邪。問わず、すべては残念——未練となる。

「教科書に書かれているとおり、未練は多用だが、根幹自体はどれでも大差ない。単純に、もっと生きたいと言う意思だ。…今のところは霊能に生きる以上、必ず覚えておかねければならないことだ、忘れないようにしておけ」

先生が読み上げた内容に、全員が教科書にラインを引いていく。確かに、霊能力者がもっとも相対することが多いのは幽霊だ。なぜ、どんな未練を残しているのかを知ることが出来れば浄霊への負担も減るだろう。

「以上を踏まえた上で、魂が持つ本能の話に戻る。便宜上、本能と言う呼び方をしているがこれは、生きたいと言う意思と置き換えてもいいな」

本能と意思。二つの言葉が、黒板に書き込まれた。

「本能、意思是生きたいと言う願いを、あるいは未練を晴らすため

に動く。その時に重要なのが、霊体を維持するために使われる理力……人間なら霊力だな」

霊力と黒板に書き込む。乱雑にいろいろと書いてるけど、正直どれをノートに取ればいいのか分かりづらいな。

「一般の人が保有する霊力は、数値化するとおおよそ二十。たいして、霊体を維持するのに必要とする霊力は、霊体の規模にもよるが、十ちよつと……これでは直ぐに足りなくなってしまう。霊力が足りないと存在することが出来ない。だが、霊力を回復させるためには霊体を休ませなければいけないが、肉体のない魂は霊体という殻を失えば自分を保つことが出来なくなる。さて、どうすればいい？」

幽霊と悪霊の分類の仕方が、敵意の有無と言う答えでは半分正解だっけと言ったのが、ようやく理解できた。

つまり、

「生まれたての幽霊と言うのは、多かれ少なかれ何かを襲っている。自我が芽生えるのは、一定以上の霊力を確保し、半ば妖怪化してからだ」

幽霊も妖怪の一種であり、人を襲わない霊はいないと言うことだ。

「以上のことから、幽霊として存在している以上は敵意の有無に係なく全てが浄霊の対象となる。かといって、力づくでの浄霊を推奨するわけではないからな」

言ってから、先生はちらりと黒板の上にある時計を見る。授業開始から三十分。気づかないうちに、結構な時間がたっていたみたいだ。

「残り三十分か。それじゃあ、ここからは教科書を中心に進めていくが、質問等があれば幾らでも進行を止めてかまわないからな」

質問か…個人的に聞きたいことは授業後にしておくべきだよな。

「では、次のページを浅井に読んでもらおうか」

授業の終了を告げるチャイムが鳴る。

「ん、ちょうどいいな。号令を頼む」

「起立…礼。着席」

臼井さんの声にあわせて、生徒たちが一斉に動く。

授業開始の号令が俺で、終了の号令は臼井さんが担当だ。

先生の礼にあわせて、クラス中が騒がしくなる。やはり、初めての霊能に關した授業と言うこともあって皆が思うところがあるようだ。

おっと、先生に確認することがあったな。

俺は、話したそうな矢口君に謝ってから先生の後を追った。

「神谷先生」

「ん、雪村か…なにか質問か？」

俺の声に気がついて、先生が黒いポニーテールを揺らして振り返

った。

むっ、距離があつて気づかなかつたけど、近くで見るとかなりの美人だと言つのがわかる。

その上、背丈が俺と同じくらいだ。はたして、先生が高いのか俺が低いのか…多分、先生が高いんだよな。

「はい。実は、先生が授業中に霊体を可視化したときなんですけど」

関係の無い思考は脇において、取り合えず聞きたいことを聞くとしよう。

「ああ、あの時か。何だ、よく見えなかったのか？」

苦笑い気味に、形のよい唇の端を持ち上げて、先生は霊体を可視化してくれた。

今度は授業中のときとは違い、膜というよりも甲殻という表現が似合いそうなほどに硬そうな殻が作り出されている。

「どうだ。先ほどよりも強めに霊力を込めてみたが…」

「あっ、すいません。見えなかったわけじゃないんですよ。ただ、先生が言つてたのと俺が見えたのが違ったもので」

「なに」

先生の目が、ピクリと釣りあがつた。うわ、なんか知らんが微妙に威圧感を感じる。

「どのように見たいや、今はどのように見えている」

「えっ、えと…さっきはシャボン玉が先生の身体をそのような感じで覆ってました。今は、甲殻って言うか鎧、ですかね？　が覆っているように見えます」

一応、授業中に見えたものも答えておいた。

俺の答えを聞いた先生は、驚いたように眼を見開いて、まじまじと俺の顔を見てくる。

「驚いたな。入学したてで、もうそこまで見えるのか。誰かに霊視の師事を仰いでいたのか？」

「一応、妖怪の知人に少しは教えてもらってます。ただ、霊視はほとんど完成してるって言うんで、あまり深くは教わってないですね」

「そうだな、その人の言うとおりだろう。雪村の眼は、すでに完成系に近いだろうな」

それって、これ以上の発展は望めないってことか。だとしたら、特訓のメニューを変えないとな。

「もう少し詳しく教えたいところだが、あいにくと私も次の授業があつてな…放課後は空いているか？」

「すみません。クラス委員になつたんで、委員会があります」

俺も出来ることなら、聞いておきたかったけど。仕方ない、次の機会にしておこうか。

「そうか…ならば仕方ないな。機会があつたら、何時でも職員室に来てくれ。私も、可能な限り時間を作ろう」

「ありがとうございます」

素直に、頭が下がる思いだ。ここまで生徒に親身になってくれる先生は、少なくとも中学までの間で出会ったことは無かったしな。

「気にするな。これが仕事だからな……さて、そろそろチャイムがなるから教室に戻ると言い」

「はい。それでは、失礼します」

もう一度頭を下げ、俺は真っ直ぐに教室に戻った。

「へえ、私が忙しく校舎内を歩き回っている間に真琴は新しい女を引っ掛けてたんだあ。へえ、そうなんだ」

そんな沙耶の睨むかのような眼光が、俺を出迎えるとも知らずに

……

十一話 二時間目の沙耶

授業開始を告げる鐘がなる中、私はふらりと屋上へと上がってきた。

春の穏やかな陽気が、簡素な屋上を照らし出す。風も少ないし、こういう日は全力で大空を飛ぶっていうのも、気持ちいいかも。

ああ、その時は真琴を連れて行こう。二人っきりで大空を舞い上がり、音の壁を突破するついでに二人の距離感もググイッと急・接近！

ふふふっ、今夜は素敵な夜になりそうね。ニヤニヤとにやけながら、
適当なベンチに腰をかける。

「…ふう、もう帰ろう」

チャイムが鳴って早一分、もう十分に待った。そもそも、私を呼び出しておいて待たせるという精神が気に食わない。

これが真琴だったら、私よりも先に来ている飲み物の一つでも用意していることだろう。

「まったく、君はいつもそうやって自己中心的に振舞っているのかい？ 真琴君の苦勞が目に浮かぶよ」

重苦しい音のなる扉を開放して顔を出したのは、いけ好かない子鬼。伊吹柊いぶきこうだった。

「ふん。あんたにそんなこと言われる筋合いはないわよそもそも、何だって通信術なんていう回りくどい手段とってるのよ」

通信術は、簡単に言えばテーブルニング。こっくりさんのことだ。

相手の持つペンや十円玉と、自分の思念を同調させて、こちらの意思を相手に文字として見えるように伝える方法。

私は子鬼のシャーペンに、子鬼は私が持つボールペンに思念を同調させていた。まあ、私は暇つぶしが主な理由だったので落書きしながらだったけど。

「単純に、真琴君に知られなくなかったからさ。…まさかとは思うけど、僕と会うことを言っていないだろうね」

「それは大丈夫。相川に会うって行って抜けてきたから」

実際、屋上の鍵をもらう為に一度会っているのだから、嘘はついてない。

「…たしかに、問題ないみたいだね」

懐から取り出した符が、黄緑色に輝く。多分、真琴の居場所を探ったのかしら。

子鬼は、使い終わった符が燃える火で煙草に火をつけて一息、大きく吸い込んで吐き出す。

「禁煙したんじゃないの？ てか煙いから離れてくれない。むしろ離れろ」

「別にしていないよ。本数は減らしたけどね」

携帯灰皿に吸殻を入れて、子鬼は真っ直ぐに私へと向き直る。

「厄介なことが起きている」

「へえ」

脚を組みなおし、腕を組んで胸を張る。

生粋の妖怪である鬼、伊吹柊。その力は、少なくとも昨晚戦ったあの鎧武者…名前は、何だっけ？——ともかく、あいつよりあると思う。

まあ、私には到底及ばないのだけど。…あ、話がずれてる。

「具体的には？　まさか去年みたいに姉と喧嘩したって言うんじゃないでしょうね」

あの喧嘩がきっかけで、子鬼と真琴は仲良くなったんだっけ。まったく、余計なことしかしらない兄弟だ。

「あれを喧嘩といえるのは、君だけだと思うけどね。大丈夫。姉さんとは、あれから問題なくやっているよ」

「そう。なら、いいけど」

そういえば、あの小娘の真琴を見る眼が微妙に怪しかったわね。うん。機会を見て様子を見に行くとか言ってたけど、あれこれ理由をつけて阻止しよう。

「そろそろ本題に入るよ？　実は、何者かに襲撃を受けている」

苦虫をつぶした様な表情で、子鬼は四つに折りたたんだ紙切れを私に投げてよこした。

「何これ？ 見たところ、誰かの名前のようだけど」

見覚えのある名前はない。大体は妖怪でしょうけどね。

「昨晚の警邏^{けいろう}担当の妖怪達だ」

一息、子鬼は息を吐き出す。

「リストの全員から、連絡が途絶えた」

「そう」

再度、苦虫をつぶしたような表情を作る子鬼。子鬼も予測しているだろうけれど、このリストに載っている妖怪達はもう生きてはいないだろう。

「昨夜、大通りから君が飛び立つのを最後に連絡の途絶えた者がいるのだが、何か知っているかい」

子鬼の眼光が、鋭く釣りあがる。嘘や誤魔化しは全て見抜く。そう言いたげに、真っ直ぐに私を睨みつける。

怖くはないのだけれど。疑われたままと言うのは私としても、気分が悪い。

「知らないわね」

「…嘘は言っていない様だね」

当たり前だ、失礼な奴め。

私を疑ったささやかな復讐に、子鬼の悪口でも吹聴^{ふいちやう}しておこう。
主に真琴へ。

「話はそれだけ？」

「ああ、伊吹の鬼としては以上だ」

どこことなく、含みを持たせた言い方をして子鬼はリストと手帳を
懐にしまった。

「此度の敵の規模、狙い、能力。その全てが不明だ。現状、こちら
は後手に回るしかない」

不本意だが。そうつぶやいて、子鬼は煙草を口にくわえた。

「万が一の事態が起きないように動くつもりだが、
それでも僕の手が届く範囲は短い。しばらくの間、夜間は真琴君の
護衛に勤めてくれ」

「何を今更」

私が真琴を守るのは当然だ。それは、真琴に使役された瞬間より
——いや、二年前から変わることのない私の、私だけの誓約だ。

「なら、安心だね」

子鬼の場合、真琴に対する負い目か友情か判断はつかないが、少
なくとも真琴を優先して守ろうとしているのは確かだ。

うん。その心意気に免じて、悪口を吹聴するのは真琴の周囲だけ
にしておいてやろう。

「それじゃあ、僕はやるがあるので先に戻るよ」

「はいはい。またね」

踵を返した子鬼に、適応に手を振って見送った私は、ゆっくりと空を仰ぎ見る。

授業が終わるまで、あと三十分はあるか。

「とりあえず、今晚の予定でも立ててようかな」

都心の町明かりを、地上の星とか言うのが真琴的にはヒットかな？
それとも、雲よりも高く飛び上がって星空へ近づく方がいいかな？
私だけが知っていた綺麗な景色、美味しい食べ物、心地のいい歌。
それら全てを、真琴と共有する楽しみ。

「さあて、どうしようかな」

本当に、今晚が楽しみだ。

わくわくしながら戻ったら、真琴が甲殻類っぽい巫女と話してて
イラッと来たのは私だけの秘密だが。

十二話 三時間目・科目・理力

三時間目と四時間目の二時間を使って行われるのは、理力の授業だ。

「理力は実践あるのみっ！　と言うわけで、れんぶじょう練武場^{れんぶじょう}に移動するぞ」

教室に入ってくるなり、そう告げたのは我らが担任相川修二先生。あいかわしゅうじ

「熱血教師の本領発揮ね」

ホームルームでは、ここまで熱血してなかった気がするけど、やはり、授業になると気合の入りが違うのか。

練武場は、大守学園の地下に作られた巨大な空間の名称だ。

大守学園が所有する敷地は、確かに広い。けど、中等科と普通科、霊能科と三つも同じ敷地内に学校があればさすがに手狭になる。

くわえて、霊能科でのみ行われている実技——つまり、対霊・妖怪の戦闘訓練は霊能力を持たない者が巻き込まれたら命を落としかねないほどに、危険な物だと言われている。

普通科と中等科の生徒を巻き込まず、かつ広い場所を確保すること。その解決策として作られたのが、地下にある練武場とのことだ。練武場の正確な広さはわからないが、少なくとも甲子園球場よりは広いらしい。

「すこし長くなるから、俺の声が聞こえる範囲で適当に座ってくれ」

ホワイトボードを横に携えた浅井先生を取り囲むように、

俺たちは思い思いの場所に腰を下ろす。

「いくら実践が重要と言っても、基本がわからないと何も出来ないからな。取り合えず、この表を見てくれ」

ホワイトボードに張り出されたのは、使い古された画用紙に書き込まれた、色違いの三つの円だ。

それぞれ、赤、青、緑で構成され、色が重なり合うところはそれぞれが混色——赤と青なら紫——で三色の中心に行くほど白くなっている。

「見たことがある奴もいると思うが、これは理力を図に表したものだ。見た目が、そのまんま光の三原色と同じ事から、理力の三原色と言われてるな」

青に神力、赤に妖力、緑に霊力と書かれた画用紙を貼り付けていく先生。というか、魔力も含めて四原色じゃなかったかな。

「半妖、怪人、魔人に半神など混血と言われる種族は各色の中間色になる。——浄霊じようれいの神谷先生かみたには、人と妖怪のハーフつまり、半妖に当たるな。それで、この中間色が魔力と呼ばれている。詳しいことは二年のときに習うから、今は色による名称の違いと、特性を把握しておいてくれ」

クルリと、手馴れた手つきで先生はホワイトボードを裏返して、色分けされた画用紙を貼り付けていく。

「霊力は出力、量ともに低いが扱いやすく汎用性が高い。妖力は出力と量が高いが、汎用性が低い。神力は万能と言っても差し支えない力を持っているが、神々のみの力だ。最後に魔力だが——これは、混血特有の力なのでこれと言った決まりがない。しいて言えば、両方の利点を持っていることが多いな」

最後に、こんなところかとつぶやいて先生はホワイトボードを壁際へと移動させる。

「さてと、長つたらしい話はここまでっ！ 実践編に移るとするか」

先生は俺たちを立ち上がらせて、軽く柔軟をするように促す。

俺が屈伸を始めた横で、沙耶は退屈そうに欠伸をしながらホワイトボードの横へと移動する。まあ、沙耶にとっては知っていることばかり出しな。

理力の扱い方を俺は、沙耶には習っていない。と言つか、沙耶いわく『呼吸の仕方なんて教えられない』との事だ。

さて、一度で習得できればいいけど。

「よしっ。そろそろ始めるか…といっても、特別なことをするわけじゃない。まずは、体の一部…腹筋が良いな。そこに、意識を集中させてくれ」

意識を集中…腹筋に力を入れるような感じでいいのかな。

「次に、そのまま眼をつぶって脳裏に今の自分を思い浮かべてくれ」

言われたとおりに眼をつぶり、今の自分だから…手を後ろで組んで直立しているところか。

ふと、閉じている筈の視界に、遠くと近くに一つずつ人影が見えた。

近くの影でまず眼を引くのは、心臓から腹部にある緑色の小さな塊を経由して、再び心臓へと戻る線と、心臓から外へと伸びていく緑色の線だ。たぶん、これが俺の身体を流れる理力なのだろうとあたりをつけておく。

だが、もう一つの人影は何だ。

まず眼を引いたのは、どこかで見たことがある、青みがかかった黒い長髪と緋色の着物。

ドクンと、心臓が高鳴る。

カラカラになった喉をごまかすように、生唾を飲み込む。

手のひらには、拭っても拭っても脂汗がにじみこんでいく。

理由はわからない。けれど、俺は今、間違いなく緊張していた。なっ、んだ、これ。

声がでない。いや、出たのかもしれないが、少なくとも空気を振るわせることはなかったと思う。

不意に、彼女——なぜだか、そのフレーズが頭に浮かんた——は少しだけ身体をゆすり始める。

始めてみるはずなのに、笑っていると言うのが何故だが理解できた。

『婦女子の部屋を覗くなど、無粋ぶすいきわるものう』

くつくつと、身体を揺すりながら笑う彼女の声が脳裏に浮かんた。今まで以上の大きさで、心臓が高鳴った。

だ、れ、だ。

搾り出すように、辛うじてそれだけを口にしたが、やはり音にならない。

『我を忘れたか？ いやはや、あれほど激しい一日を過ごしたというに、ずいぶんと薄情なものだの』

声にならなかった声を拾い、彼女は返答する。けれど、俺の記憶には彼女の存在はない。…はずなのに、この声を俺は知っている気がした。

『まあよい。我を忘れたと言つのであれば、思い出させてやろう。
——死の恐怖と共になっ！』

彼女が髪をひるがえし、振り返る——

「——っは」

それよりも早く、眼を見開く。

今なお高く脈打つ心臓を押さえて、慌てて霊視を行う。

千里眼。透視。そのどちらでも、青い線は見えなかった。

深く、溜め込んでた息をゆっくりと吐き出して、心臓と気持ちを
落착させる。

後で沙耶に相談しよう。

「さて、みんな理力の流れはつかめたか？」

あれから十分ほど時間が流れた。

恐る恐る再挑戦した二度目。その時に見えたのは、先ほども近距離に見えていた人影だけで、彼女の姿はどこにも見当たらなかった。

「よし、次は理力の放出を行う。取り合えず、利き腕に力を集めると良いな。……っと、こんな風に」

先生の右手が、淡い緑色の膜を纏わせる。

「ようは、理力を一点に集中させるだけだ。そうすれば、許容量を超えた理力が勝手にその部位からあふれてくる。取り合えず、この

時間は好きに挑戦してみろ」

と言われてもな。正直、今の説明ではどうすれば良いのかよくわからない。

周りの皆は、思い思いの方法や格好で、利き腕に理力を集中させようとしている。

仕方ない、やってみるか。

まず利き腕（俺の場合は右手だ）に、理力を集めるようにイメージしてみる。

…特に、変化は見られない。

多分、力を集めるイメージだけでは足りないんだ。意識するだけで出来れば、クラスの皆はすでに成功してる。

そもそも、理力って何だ。

今更ながらに、俺はその問題が頭に浮上した。

理力とは、その名の如く理の力。

教科書の一文を抜粋すれば、そういうことらしいが意味が全くわからない。

取り合えず俺は、普段は眼に見えないけど意識して見ようとすれば見ることが出来る物。だと、思っている。

ああ、だめだ。思考がずれて始めた。理力の本質は、脇にどけて置いて。今は、使うことを考えよう。

もう一度、右手に意識を集中させる。だが、やはり変化はない。

「理力がないってわけじゃないよな」

確かに、さっきは理力の流れを見ることが出来た。だから、ないという事はあるえない。

「——待てよ。流れを、見た？」

までまで。よく思い出せ。理力の流れを見た時。理力はどこから、どこへと流れていた。

俺は、すぐさま腹筋に意識を集中させて眼を閉ざす。三度目の挑戦。さすがに、最初よりもすばやく出来る。

やはり、理力の流れは心臓から体外へと伸びているものと、腹部への小さな塊に向かっていく二本の線しかない。

この状態を維持したまま、俺は右手に意識を集中させる。だが、理力は変わらずに同じところを巡回していくだけだ。

「やられた、これじゃあ右手に理力を集めることなんて出来るわけがない」

蛇口につながっていないホースが、水を流すわけではないのだ。

「はははっ。雪村は気がついたか。その通り、意識を集中しただけじゃあ、理力は放出できないのさ」

笑って言う先生に、俺たちはブーイングを飛ばす。だが、先生は聞きなれているのか、笑いながら俺たちをたしなめて、言葉が続けた。

「すまんすまん。だがな、霊能力者を目指す以上、このことは知っておいて欲しいんだ。どんな些細な情報でも、逃さずに記憶するって言うことを」

少しの間を空けて、先生は普段のように無駄に明るい笑みとは違った笑み、皮肉げとも言うような笑みを作る。

「霊能力者はな、死者の声を聞くことが出来る数少ない職業だ。神谷先生の授業を聞いたならわかるだろうけど、死者にはいくつもの

未練がある。けれど、そのほとんどが曖昧になつてゐるやつが多いんだ。ひどい奴になると、自分が人間だったのかどうかすら忘れてる奴もいる」

この間あつた靈魂も、自分を忘れてたな。元気にしているといいけど。

「それでも、そいつらは何かを伝えようとしてくるんだ。恨みなのか、家族への思いなのか、それともただ単に愚痴を言いたいただけなのか。定かじゃないけど、ただ一つ言えるのは、あいつらの意思を汲み取れるのは俺たちだけだつてことだ。だから俺たちは、どんなに聞き取りづらい言葉でも、見えづらい意思でも見逃しちゃいけない。伝えられた意思を、誰かに伝えなきゃいけないからな」

ブーイングは止み、練武場に静寂が訪れる。

参った、こういう空気は苦手だ。

そう思っていた俺の思いを汲んだかのように、チャイムが鳴り響いた。

十三話 四時間目・科目・理力（前書き）

今回、試験的に行間を広げてみました。

読みづらい、またはこちらの方が読みやすい等ございましたら、ご一報ください。

十三話 四時間目・科目・理力

四時間目の開始早々、先生は台車に乗せて大きなタルを運んできた。

「理力の流れを全身に作る方法だが、実は二種類ある。今日中に使えるようになる方法と、一年かけて調整する方法の二つだ」

ポント、心地の良い音を立てて先生は持つてきたタルを叩く。

「取り合えず、今すぐに理力を使えるようになりたいって奴以外は時間をかけることをお勧めするよ。時間をかけない場合は当然、相應の苦痛を味わうことになるからな」

少しだけ、あたりがざわつく。

当然と言えば、当然か。苦痛——好んで痛い思いをしたがる人なんていないもんな。

「でだ、ゆっくりと時間をかけたい人はこのまま練武場の奥に移動する。」

そこで講義をしながら、理力の扱い方を教えるから。今日中に使いたい人は、

この中にある物を柄杓で一杯分、飲み干してくれ」

先生は、柄杓をタルの上においてから練武場の奥へと移動を始めようとして、もう一度こちらを振り返った。

「ああ、そうそう。その中にある物、簡単にいわば御神酒なんだが、それを飲んでしばらくの間は理力の量がすごい事になってるはずだ。

そのへんの道具類は好きに使っていいから、理力の扱い方を把握しておくといい」

その辺と言われ、ざっと辺りを見回してみると練武場の隅にいくつもの刀剣や符が置いてある一角があった。

まあ、刀剣類の扱いがへたくそな俺には意味のない代物ばかりだな。

そんなことを考えていると、先生の後について十数人（だいたい、クラスの半分くらいだ）の生徒たちが移動していく。

この場に残ったなかで、見知った顔なのは矢口君と、同じクラス委員長である臼井さんくらいか。

残ったは良いが、飲む決心がつかないのかタルに近づいていく生徒はいない。

俺は一度だけ、目線を壁際の沙耶へと送る。

沙耶は特に何をするでもなく、腕を組んでこちらをジッと見つめていた。

——よし、大丈夫。

沙耶が見ているのならば、怖気づく理由なんてない。

動かない周りをすり抜けて、俺はタルの前に立つ。

二本ある柄杓のうち、一本を手にとってタルの蓋を開ける。

開放された酒気が、鼻をつく。やば、ちよっと美味しそうだと思っってしまった。

柄杓の中を御神酒でいっぱいにし、ゆらゆらと揺らめく自分の顔と目線を合わせる。

俺の背中に、ヒシヒシと突き刺さる視線に苦笑いして、俺は柄杓の中身を一気に飲み干した。

だれかの、生唾を飲み込む音が背後から聞こえる。

喉の奥に、酒類固有の苦味とも評すべき味が広がっていく。

けど、それ以外にこれと言って変化は…

痛みであれば、耐えられる自信はあったけど、これは無理。絶対に無理だ。

「は は は は は は は は は は は」

練武場に、俺の笑い声が木霊した。

「はあー、はあー。やばかった」

床に膝と両手をつき、荒く呼吸を繰り返す。

「あー、雪村、大丈夫か？」

「なんとか、ね」

気まづげな矢口君の手を取り、立ち上がる。笑いすぎて喉と腹筋がものすごく痛い。

「どうしたんだ？突然笑い出して。正直、ものすごく変だったぞ」

「ああ、うん。まあ、飲めばわかると思うけど、全身がくすぐったかったんだよ」

正直、もうごめんだ。

「うっ、それじゃあ御神酒を飲むと、全員がああなるのか」

「多分ね」

それはいやだなあ、と矢口君は視線を回りに動かす。
つられてそちらを見れば、他の人たちもさらに及び脚になっていた。
でもまあ、やるやらないは俺が決めることじゃないからな。
別段、それ自体は俺に文句はない。

「と、そうだ。雪村、理力はどうだ？」

「うん、そういえば」

意識を集中すると、体内から体外へとどんどんとあふれ出す緑色の線が見えた。

「成功はしてるみたい。今なら、身体能力も相当上がってるかも」

トントント、その場で跳躍を繰り返す。

「うん。何時もよりも、ぜんぜん体が軽い。これなら、沙耶にも一撃入れられるかも」

倒せるなんて、自惚れることが出来ないのが痛いところでもあるけど。

「へえ、それなら試してみる？」

いつの間にか近づいてきていた沙耶が、不適に微笑みながら練武場のあいているスペース――

――庭先の数十倍はある――を指差した。

「俺としては、是非と言いたいところだけど、組み手なんてして良いのかな」

他の人たちはどうだが知らないが、沙耶は真剣を持ち出して来るからな。

「別にいいんじゃないか？ さっきその辺の刀剣は好きに使っていいって言ってたしさ」

矢口君の言うことももつともだが…うん。

「一応、先生には話しておくよ。後で、何か言われるのも面倒だし」

「心配性ねえ」

言って沙耶は、先ほどとは質の違う笑みを浮かべた。

「じゃあ、俺は御神酒でも飲んでおくかな」

後ろ手に手を振りながら、未だに誰も手をつけていない御神酒へと矢口君は気楽そうに近づいていく。

「じゃあ俺は許可をもらってくるよ」

「りょかい」

「別に構わないぞ」

思いのほか、たやすく許可を得ることが出来た。

「ただし」

あつ、やっぱり条件がつくんだ。

「武器は、ここに置かれている刃引きのされている物を使うこと。それと、範囲符術を使わないこと」

「二つとも、沙耶への条件ですね。伝えておきます」

俺は武器は使わないし、符術も使えないしね。
了解の意を伝え、立ち去ろうとした俺に先生は待ったをかける。
まだ何かあるかな。

「なあ、雪村。ずいぶんと理力が安定したまま巡回してるようだけど、

理力を使った経験ってあるのか？」

どこかいぶかしげに、先生は聞いてきた。

「少なくとも、覚えている範囲ではないですね」

——いや、忘れてるだけだ。

頭のどこかで、そんな声が聞こえた。

「相川先生、ちょっと良いですか」

「ああ、構わないぞ」

会話の合間を縫って、クラスの女子生徒が先生へと質問を投げかける。

これ以上残って話すことでもないか。

そう思った俺は、沙耶が待つ練武場の一角へと脚を向けた。

十四話 四時間目・真琴と沙耶の訓練

矢口君の笑い声を背景に、俺と沙耶は数メートルの距離を置いて向かい合っていた。

目測で八メートル。普段の俺なら、六歩は必要となる距離だ。沙耶なら一歩なんだけどなあ。

そんな埒もないことを考えて、何時もよりも軽快にステップを踏む。

やっぱり、体がぜんぜん軽い。

「これならっ——」

力強く、一步を踏み込む。

「いけぶばっ！」

沙耶を、真っ直ぐに捕らえていたはずの視界が真っ暗に染まる。ツンツとした痛みが、鼻を中心に広がった。

「あのねえ、その程度の速度で馬鹿正直に真正面から突っ込まれても、

簡単に打ち落とせるのよ」

「イタツ！ ちょっ、突くなっ、痛いっ！ 地味に痛いっ！」

刃引きされているとはいえ、それなりに尖った両刃剣で背中を突かれる俺。

「ほれほれ。突かれるのがいやならとっと起き上がって、

かかってきなさい。今のままじゃあ、私に一撃を入れるなんて奇跡、起こせないわよ？」

バカした言い方に、さすがの俺も力チンと来たね。

「上等。絶対に一撃入れてやる」

跳ね起きて、再び構えをとる。

一撃を入れるのに必要な絶対条件は、理力を使いこなすこと。そのためには――

霊視。

眼前で不適に笑いながら立っていた沙耶が、真っ赤にそまる。

沙耶との距離は近づかず、離れず。沙耶の攻撃がギリギリ届く範囲で、

弧を描くように動く。

振るわれる刃。右手の赤が少しだけ濃くなる。

刃を潜り抜け、懐に飛び込む。脚の赤が濃くなると同時に、

沙耶は後ろへと一歩飛びのく。

俺の狙いは単純だ。沙耶の、理力の使い方を霊視で見ても、

その方法を真似る。ただそれだけだ。

両刃剣を打ち払う。

その勢いに任せて、さらに沙耶との距離をつめる。

肘技、手技、脚技。フェイントを織り交ぜた連撃。

「よっ、とと」

それなりの自信を持って放たれた攻撃は、そんな掛け声とともに軽くないなされてしまう。

「甘い、甘いっ！ 格上相手に攻撃をするなら、次の防御も考えて

おかないとね」

沙耶は、力強く練武場の床を踏みしめる。と、同時に肩からぶち当たって来た。

「くっ！」

避けるのは無理かつ！

左右の手を交差させ、両足に力を込める。

——これを耐えて、重めの一撃を……ん？

沙耶の肩に集まった妖力が、何かの形に変わっていつている？

衝撃と浮遊感。

沙耶の肩をよく見ようと防御が疎かになった俺は、
なすすべもなくあっさりとかかなりの距離を飛ばされてしまった。

「……っ！」

痛みに叫びそうになるが、それを何とか口の中で押し殺して、もう一度立ち上がる。

理力が溢れているせいか、体の回復は早くなってるな。

「とっさの防御としては及第点、って所かしらね」

「何のこと？」

今の防御のことと言っつのはわかるが、
まともに受けきれずに数メートルも吹っ飛ばされた俺に対する嫌味か？

とも思っただが、沙耶は俺の返答に沙耶はキョトンと眼を瞬かせて小首をかしげた。あっ、その表情なんか可愛い。

「何って、今靈力で防御したでしょ？」

「へ？」

靈力で？ そんな実感は全くない俺は、防御しようとしていた両手をまじまじと見つめる。

「うゝん。自分で意識して行っただけじゃないのか

…反射的に防御が発動するなら、防御せざる終えない状況を何度も繰り返せば

使えるようになるかも」

よく聞こえないが、なんとなく不吉なことを言っている気がした。

「よし、こっちの攻撃回数を増やそう」

「えっ？」

いきなりの宣言に、俺の背筋を冷や汗が伝う。

「取り合えず…今まで倍くらいでGO！」

「ちよっ、まてえええええっ！」

「はあ、はあ、はあ」

全身から水分と言う水分が噴き出し、衣服が湿った肌に纏わりつく。気持ち悪い。

カラカラと乾いた喉で、あえぐ様に呼吸を繰り返す。いくら傷が治るとはいえ、俺の体力自体は平均——霊能力者としては低いほうだ。

その俺が沙耶の攻撃に対応することができていたのは、単に沙耶が積極的に攻めてこなかったというだけのこと。今までは沙耶が俺のレベルに合わせていたと言うことはつまり、俺のレベルがそれほどまでに低かったことを示唆していた。

「くっ」

何度目になるかわからない沙耶の剣戟を、霊力をかき集めることで防ぐ。

霊力によって作り出した盾。物質に干渉できるほどに密度を上げることで作り出す、お手軽な結果みたいなものだ。

攻撃には、体内で循環させた霊力で霊体を強化。身体能力を上昇させて、攻撃が当たると同時に爆発させる。

沙耶が繰り出した両刃剣を、強化した拳で弾き返し、逆の手で追撃。

「へえ、攻撃と防御の基礎は出来るようになったみたいね」

俺の追撃を一步引くことでかわした沙耶は、両刃剣を肩に担ぐように持ち上げた。

「はあ、はあ、はあ……ん、おかげさまで、ね」

霊力が潤沢に溢れている今だからこそ、このような芸当が可能な

のであって、

普段であればせいぜい、聞き手に霊力を集めて爆発させるくらいか。

「とはいえ、まだ私に一撃を入れてないよね」

「ああ、それは…まあな」

正直、沙耶の実力を侮ってた。今の俺じゃあ、千年経っても沙耶に一撃を入れるなんて無理な気がする。

「真琴も限界みたいだし、次で終わりにしようか」

言って沙耶は、両刃剣を構える。

「わかった…なら、これで一撃入れてみせる」

「随分こだわるわね——まあいいわ。かかってきなさい」

沙耶の目つきが鋭くなる。

呼吸を整え、霊力の残量を確認。

俺が保有する霊力量の二倍程度、か。もう、ほとんどないな。

「はあ——ふう」

浅く、呼吸を繰り返し、霊力を右手と左手の二点にかき集める。

霊力——おそらく、理力全般を扱う上で重要なのは想像すること
形がなく、未だにその存在の全てを解明しきっていない理力。だが、使用者の意思に応じて形を変えるのは間違いない。

「だったら——」

一步、疲労で震える足に力を込めて――真っ直ぐに駆けろっ！

沙耶との距離は目測で五メートル。沙耶が攻撃を仕掛けてくるのは、おそらく二メートル地点。

霊視によって得た情報は、理力の扱い方だけではない。

沙耶の、両刃剣を持つ右手に妖力が集まっっていく。

透視系の霊視は、理力を見ることが出来る。それは、相手の理力の流れでも同じだ。

振り下ろされる刃。狙いは俺の額。

沙耶の右手と左手に集まっている妖力。おそらく、この剣戟を回避したら左手で殴られる。

今までであれば、何の考えもなしに両刃剣を回避していた。

だが、今は違う。

沙耶の本命は、左手に込められた妖力。そちらを当てるために、左側に回避しやすいように振るわれる両刃剣。

右斜め上から額へと向かう両刃剣。今から右に避けると、どうしても体制が崩れる。

だから俺は、右にも左にも避けない。

「っ！」

左手に痛みが走る。だけど、上手くいった。

「ばっ、またっ！」

昨晚言われたとおり、チャンスを掴むために左手を捨てる。

両刃剣を握りこんだ左手に、うっすらと血がにじむ。

痛むのは後。今は…

「あたれええええええ！」

雄叫びとともに、狙いも何もなく真っ直ぐに沙耶へと拳を放つ。

外すわけがない。そう思っていた一撃は、沙耶の眼前数センチ前で停止させられていた。

「驚いた、本当に一撃を入れるなんてね」

妖力によって作られた赤い盾に阻まれた俺の拳を、沙耶は面白そうにつつく。

「でも、その方法はちよつと気に入らないかな」

今まで戦っていたのが嘘のような、穏やかな口調。

だけど、眼付きは驚くほどにつりあがって——やべ、本気で怒ってる。

「だから——お仕置きね」

気がつけば、数歩はなれたところに両刃剣を斜めに構える沙耶の姿。

「私の必殺技——動かないでね、死ぬから」

言うが早いか、沙耶の姿が陽炎のようになって消える。どこに。その答えは、直ぐに出た。

始めに見えたのは一筋の剣線。気がつけば俺の鼻先を通過していた。

その一閃を境に、その技は放たれる。

俺の耳に刻まれていく風を切る音。

竜巻の如く、次々と繰り出される剣戟。

かすめるように切り裂かれ、血しぶきが舞うと同時に治癒していく肌。

動けるわけがない。

怖い。

ただひたすらに、俺へと害をなす刃が振るわれる。

「最後っ！」

大上段から、真っ直ぐに振り下ろされた両刃剣が練武場の床をえぐる。

「うっあ」

どさりと、まともに立つことができなくなった俺は練武場の床に尻餅をつく。

眼前では、沙耶が俺に向かって両刃剣を向けている。

それに合わせるかのように、授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

十五話 昼休みの一幕

昼休み。俺の着替えやら何やらで出遅れたが、幸いにもそれほど混雑していなかったおかげで、昼食自体はあっさりと取り終わっていた。

「むう」

「さてさて、どっちがババかなあ？」

俺の前で、ちらちらと二枚のカードを揺らす臼井さん。軽い口調のわりには、その顔は真剣そのもの。

対する俺も、自分の顔が強張っているのがわかる。

たかがばば抜きと侮るなかれ。沙耶発案のこのゲームは、ルールこそ通常ばば抜きだが罰ゲームが恐ろしく厳しいのだ。

さし当たって、一回戦目の敗者である矢口君は油性ペンで額に凸の字を書かれていた。

意味はわからないが、沙耶の考えることなので深くは考えないようにする。

そして今、二回戦目の敗者を決めるべく俺と臼井さんは骨肉の争いを繰り広げているのだ。

「——これだあ！」

ひそかに霊視を使い、ジョーカーを見極める。

俺から見て右側。ならば、左側のハートの三を取れば俺の勝ちだ。

「ふっ、くふふふ」

俺が引いたカードを見る前に、臼井さんがうれしそうに笑う。

「あらら、してやられたわね」

「って言うか臼井も大人気ないというか」

周りの様子に不吉な予感を覚えた俺は、ゆっくりと引いたカードを裏返す。

三日月に揺られて笑うジョーカーと眼が合った。

「んなつ！」

ありえない。俺は間違いなく、ハートの三を引いたはず。

「おんやあ。どうしたのかな？ 二分の一の確立なんだから、ジョーカーを引くこともあるでしょうよ」

啞然としている俺に、そんな声が届く。

うつわっちゃあ、これは霊視したのばれてるな。

「いやいや、なんでもないですよ？」

いいながら、背後でカードをシャッフルさせる。

これで臼井さんにジョーカーを引かせても、

俺があの手すり替えを見破れなければ、勝ち目はないな。

「さあ、引くがいいさ」

勢いよく、左右の手に一枚ずつカードを持って見せる。俺から見
て、右がジョーカーだ。

「……ねえ、雪村君。気づいてた？」

臼井さんは、右手を左右のカードの間で彷徨わせながら口を開いた。

「……」

心理戦かと思い、俺は口を閉ざす。

「雪村君は、ジョーカーを置くとき――」

臼井さんの手が、右のカードに触れる。よし、そのまま引け。

「右側に配置するんだよね」

すつと、反対の手で左手のカードが抜かれた。

臼井さんの左手には、俺が渴望したハートの三と俺の手元にあったスペードの三。

それが、二枚重ねられた状態ではらりと、机の上に落ちた。

「はい、真琴が罰ゲームっ！」

「よしよし。何が出るかなあ」

罰ゲームは、ゲーム前に書かれた罰ゲームの紙を引くことで決定される。

内容は皆で書きあったので、何があるかは全くの未知だ。俺の出れば良いのだけれど。

「えっと、一枚脱げ」

「沙耶、エロ系はなしだって言っただろう」

「んなつ！ 私じゃないわよ」

と言いつつも、沙耶の視線は期待に満ち溢れている。
間違いなく、沙耶が書いたな。

「…はあ、これで良いな」

ジャージの上を脱ぎ、背もたれにかける。
別段、これくらいなら恥ずかしくも何ともないしな。
何より、沙耶の期待に満ちた目を裏切るのは結構辛い。

「後十五分か、もう一戦くらいは出来そうね」

臼井さんは、集めたカードを切りなおしながら言った。

「そうだな。確か、身体測定が始まるまでは教室待機だったし」

「そうね。まだ私が書いた罰ゲームは一枚残ってるし」

場のムード的にはもう一戦おこなうみたいだけど、なんか嫌な予感がするんだよな。

その予感は、やはりと言っかなんと言っか見事に的中した。

「さて、どっちがババかなあ」

こいつ絶対に、どっちがジョーカーだかわかってる。

「ん、やっぱり今回も雪村が罰ゲームかな」

確かに、今のままでは勝ち目はない。

そもそも、俺が引くことが出来ない今の状況で勝つことを考えるのは無意味だ。

けれど、このターンをしのげば勝てる見込みはある。

ダイヤの九と重ねられ、沙耶からは見えない位置。そこに、ほんの少しだけ付けられた傷。

このカードを、沙耶が俺に見えるように持ってくれば勝ち目はある。

そのためにも――

「よし、こつち！」

沙耶の手が、カードに伸びる。

俺は右のカードを沙耶が取りやすくなるように、ほんの少しだけ動かす。

沙耶ならば、今のかすかな動きでも見切ることが出来たはず。

それを察知したのか、そもそも手を伸ばしたのがフェイクなのか、沙耶の手は左に伸びる。

そっちが、ジョーカーだ。

「ふふ」

左のカードに手をかけて、沙耶は薄く笑う。

「ねえ、真琴。一つ賭けをしない？」

「賭け？」

「そつ、賭け。罰ゲームは受けてもらうけど、それとは別に私との個人的な勝負」

むう、どうしようかな。このまま沙耶が引けば、俺が勝てる確立は結構高くなる。

けど、このタイミングで沙耶が切り出す以上、沙耶もまた勝つ算段がついてるんだろうし。

「いいんじゃない？」

賛同の声の主は、場に捨てられたカードをまとめていた臼井さんからあがった。

「勝つ自信があるんでしよう」

それは確かに。でも、これだけは聞いておかないと。

「内容は？」

「私が勝ったら、今日から一週間。真琴は私に絶対服従ね。私が負けたら、その逆でどう」

「ちよっ！ 何だその男心をくすぐる魅惑の賭けはっ！
勝っても負けても美味しいじゃないか」

「ん」

俺が勝ったら、一週間は沙耶が服従か…母さんが帰ってくるまでの家事をやってもらうか。

——駄目だな。絶対に、なんだかんだと理由をつけてサボる。逆に、俺が負けた場合はどうだろう。

「考えるまでもないか」

正直なところ俺にメリットがあるようには思えないけど、勝てばいいか。

「わかった、乗るよ」

「言ってたわね——」

沙耶の眼が細められる。あれ、なんか地雷踏んだ？

ジョーカーに触れていた指が離れ、反対側にあったダイヤの九を抜き去った。

「あっ」

と言う間に手元から消えたダイヤの九。

「あらら」

「ふふふっ、はは、はあーはははははははっ！」

沙耶の高笑いをバックに、俺はがっくりと膝を突いたのだった。

十六話 真琴は身体測定中

「柊様」

「ん、なんだい」

昨日、連絡の途絶えた鼠一族が最後に見回った場所。その現場を視察していた僕に、雲雀の一族が声をかけてきた。

「一度、ご休憩を挟まれてはいかがでしょうか」

もうお昼過ぎです。そう言っただけで差し出された時計は、確かに一時を回っている。

僕個人としては、一食を抜いたくらいでは倒れたりはない。だが、一応は上司である僕が食事を取らないと遠慮して食事や休憩を取らない者が多くなるのも事実。

「わかった。情報の整理がてら、休憩を挟もうか」

「かしこまりました。再開は、何時ごろにいたしましょう」

「そうだな…三時からで頼むよ」

今からだと二時間近くの休憩になるけれど、

昨晩から働きづめの者もいるのだから短いくらいだ。

マナーモードにしていた携帯が振動する。

取り出してみると、液晶には真琴君の名が記されていた。

「やあ真琴君。授業中に電話だ何て、緊急の用事かな？」

『…気持ち悪い声を出さないでくれる？』

「なんだ、年増カラスか」

家と関係のない、唯一の交友関係でもあり自惚れでなければ親友といってもいい雪村真琴君の、使役妖怪である沙耶からの電話だった。

「それで、君がわざわざ僕に電話してくるなんて真琴君に何かあったのかい？」

真琴君に常時貼り付けている符には、何の変化もない。

『ええ、ちよつとね』

どこか、嘲りを含んだ声質は、僕の神経を逆なでした。

『取り合えず一週間。真琴は私の言うことを聞かせるようにしたら、ら、

あんたには合わせないわね』

「ちよつと待ちたまえ。それは、どういう意味だい」

真琴君が言うことを聞く？ 子犬チックで、基本的に誰にでも従うところのある真琴君が言うことを…何時もと変わらない気がするが、とても心躍る単語だね。

『どうもこうも、今日の昼休みに私が真琴と賭けをして得た正当な報酬よ』

携帯の向こう側で嗤っているのが安易に想像できるほどに、声が震えている。

『さし当たって、今日は…ああ、違った。今日も、ね。一緒に寝る予——』

最後まで聞く前に、破碎音が耳に届いた。見てみれば、手の平にあった携帯電話はものの見事に粉碎されている。

「どうもいかんね。真琴君のこととなると、我を忘れる」

ばらばらになった携帯電話をポケットに突っ込み、代わりに煙草を一本取り出す。

「…一週間か」

ふざけた内容の電話だったが、目的は真琴君を一週間のあいだ僕に——事件に関わらせないと言う連絡だったのだろっ。

僕個人としても、真琴君が事件に関わるのは反対だ。だが、伊吹の家は真琴君を遊ばせておくことはしない、と断言できる。

真琴君が持つ、異常なまでの霊視能力。

霊視とは本来、不可視の者を見るための力だ。

だが、真琴君はそれに留まらない。

見えないものを見るのに加えて、そのものが保有する情報まで読み取ってしまう透視系。

遠く離れたものや、そのものが辿ってきた歴史を道にたとえて見極める千里眼。

そのどちらも、見ることに特化した妖怪達が保有する力だ。

確かに、真琴君の協力があれば事件の解決は早くなるだろう。だ

が、同時にそれは真琴君の名が伊吹の本家、あるいは上位の妖怪達に知られる可能性もありえる。

そうなってしまうえば、妖怪達は人間との抗争に真琴君を利用するはずだ。

人間たちの一部は、数百年前から変わらずに妖怪達の支配を受け入れていない。

彼らとの抗争は、当然のように死者がでる。無論、人間の。

抗争に巻き込まれれば、いやおう無しに真琴君は同族を殺すことに加担してしまう。

「それだけは、避けないと」

言葉にして、決意を新たにする。

この一点に関しては、沙耶も同じらしく僕に対しても協力的だ。

「柊様、お食事のご用意が整いました」

だからこそ、この事件を解決しないと。

「ふう、せっかちな男ね」

まあ、用件は伝えたから問題はないけどね。

「真琴が知るのは三日後、つて所かしらね」

事件の性質上、伊吹の家が隠しておけるのはそのあたりが限界だ。警察が介入を始めれば、克己——真琴の父親——も知ることになる。

そうすれば必然的に、克己は真琴に霊視を依頼に来るでしょうし

ね。

真琴が事件を知れば、終か警察のどちらかに協力して事件を解決しようとする。

これは、絶対と言っても良い。

「まったく、気苦労が耐えないわ」

今日の特訓も、まさか自傷行為の走ってまで私に一撃を入れようとするなんて思いもしなかった。

『だが、お前が望んだことだろう』

頭の中に、聞きなれた声が響いた。

「朧？ 起きてるなんて珍しいわね」

朧は、私が持つ両手剣に封印された妖怪だ。だから、妖剣オボロ。本当は力だけを剣に宿したかったのだけど、何を間違ったのか意思も一緒に封印してしまったせいで、こうしてたまに話しかけてくるのだ。

『ああ、どうも知っている気配がしてな。久方ぶりに眼を覚ました』

知っている気配…ああ、あいつか。

「多分、隼人坊やのことね」

あの坊やの出身地は、たしか朧が支配していた里だったと思う。

『隼人…ふむ、たしかに気配はするが……』 反応が乏しいわね。

「坊やでないなら、誰の気配よ」

この町に来てからはや三年。その間に、朧が起きていたことは結構な回数があるけど、こんなことを言い始めたのは初めてだ。

『いや…そんなわけではないか。すまん、俺の勘違いだ』

それっきり、朧は再び黙ってしまった。

「妙な胸騒ぎがするわね」

情報がもう少し欲しいところだけど、今の私に従う従者はいない。必要ならば、自分の足で集めるしかないのだが、あいにくと今日から一週間は私にそんな暇はない。

「取り合えず、子鬼から定期的に情報を仕入れよう」

出来ることからこつこつと、ね。

十七話 白蛇との交戦（1）（前書き）

今回も三人称です。

十七話 白蛇との交戦（1）

夕暮れ時。日が落ち始め、町の灯がポツポツと灯り始める時間。伊吹柊は、一人、人気のない路地を歩いていた。

「…まだか」

柊たちが調べてわかったこと。それは、襲撃者が揚力の高い者から順番に、一人でいるところを狙って行動していると言ったことだった。

『こちら上空、周辺に以上はない』

上空。頭部に見事な冠羽を持つ、茶色い鳥が上空を舞う。雲雀の一族の妖怪だ。

彼のほかにも数名、物陰などに隠れて柊の護衛、周辺の探索を務めている。

「…ふむ」

妙だね。歩みは止めず、柊はそんなことを思う。

犯人の狙いは不明だが、これだけ街中を探しても異常は見受けられない。

「片鱗くらいは見えてもよさそうなものだけど——ん？」

ささいな違和感。

柊は、足を止めて周囲を見渡す。

ひっそりと静まり返った町。

人払いを済ませたのだから、静かなのは当たり前だ。だが、柊は何かの音を感じ取っていた。

ザッと、すこし強めの風が吹く。

「！」

風の音に紛れて、柊の耳は確かに一つの音を感じ取った。

とっさの判断で、柊はその場を飛びのく。同時、複数の場所から響き渡る破碎音。コンクリートが砕ける音に混じり、柊の耳に聞いたことのある悲鳴が届く。

「くっ」

柊の心情としては、直ぐにでも周りの救助に動きたいところだが、襲撃者がそれを許さない。

再び砕けたコンクリートの中から、のっそりと襲撃者は姿を現す。大きさは、百八十センチの柊よりも少し大きい程度。

特徴的なのは二つ。

白い。夕日ですら反射するほどに磨きぬかれた、純白の鱗。

そして、本来であれば蛇が持つべきではない鋭い一角。

色以外の共通点は見受けられないが、この蛇は先日、鏡鎧を襲った蛇と同じ存在だ。

無論、柊が知る良しもないが。ただ、柊が理解すればいいのは唯一つ。

「お前が、家の者を襲った奴か」

白蛇は答えない。いや、答える代わりに柊へと飛び掛る。

「っと。全く、せっかちな奴だね」

身をひねりながら、柊は懷から数枚の符を取り出し、白蛇へと貼り付ける。

「まあいいさ。君が町に害をなす存在だと言うのは、間違いなさそうだしね」

発。一言、柊はそうつぶやく。

白蛇に貼り付けた符に紫電が走り、轟音と発光を周囲へとばら撒いた。

紫電符。柊が使用する、雷を操る符だ。

光が収まり、鱗が逆さにむけた白蛇が音もなく地面へと倒れ付す。あたりに、肉の焼け焦げた臭いが漂う。

『柊様、ご無事ですか』

「僕は大丈夫だ。それよりも被害は」

上空からの声に、柊は即座に返す。だが、その視線は焼け焦げた白蛇に向けられたままだ。

『私と柊様をのぞき、全員です』

少しだけためらった後に、雲雀は告げた。

「そうか」

渋い顔を作り、柊は白蛇をよく見ようと一歩、足を進める。

『柊様っ！』

叫ぶ声。

再び隆起した地面。

そこから姿を現したのは、先の数倍はあろうかという白蛇。

上空。一直線に、柊へと向かう雲雀の妖怪。

柊。懐に手を入れ、一枚の符を取り出す。

間に合わないか？

柊の脳裏に、そんな言葉が浮かんだ。

眼前。一メートルを切った位置には、大口を開いた白蛇の顔。

水のはねる、音がした。

暗くなった路地。柊は、ぐったりと動かない雲雀の妖怪を抱えて、
必死に走っていた。

「柊、さま。どうぞ、私は捨て置いてください」

「だめだ」

短く答え、柊は背後へと数枚の符をばら撒くように投げつける。

炎が燃え上がり、巨大な壁を作り出す。

その壁を、白い鱗がたやすく蹂躪する。

白蛇は止まらない。

這いずり、時に飛び掛り、柊との距離を少しずつつめていく。

「思った以上に速いか——とは言え、引き離しすぎるのも上策じゃないし」

走ろうと思えば、柊は今よりも速く走ることが出来る。だが、距離を取りすぎれば白蛇の標的が別に移ってしまう可能性が高く、実行することが出来ないでいた。

「おっと」

「っ！」

飛び掛ってきた白蛇の頭を足場に、柊はさらに高く跳躍。

治癒符と呼ばれる、痛みを和らげる効果のある符を雲雀の妖怪に貼り付ける。

白蛇が起き上がる前に、柊は近くの電信柱を足場に、蹴るようにして前へ飛ぶ。

そうして、また走り出す。

「ふむ。あいつの攻撃手段は、突進くらいしかないようだね」

「っ、ですが…身体を、複数にわけける力も、はあ、あるようです」

「無理に喋らなくていいよ」

柊は、もう一枚の治癒符を雲雀の妖怪に貼り付ける。

今ので最後か。

柊が用意した治癒符は全部で五十枚。その全てを、たった今使い切った。

攻撃用の符は後十七枚。さすがに、まずいかな。

焦りを微塵も表に出さず、柊は少しだけ速度を上げる。

柊の正面。地面が隆起し、小柄な白蛇が姿を現す。

踏み込んだ足で、柊は一気に駆け抜ける。

「さて、残り数キロ。いい加減に誰かしらの応援があってもいいと——っ！」

柊の前方。目測で、十以上の地面が隆起し、白蛇が姿を現す。

「ちっ！」

舌打ちを一つ。白蛇の頭を踏みつけて、高く上に飛ぶ。背後、背中から全身にかけての衝撃。踏ん張る足場のない空中において、その痛みは余すことなく柊の全身を駆け巡る。

「ぐがつ」

それでも柊は、無理やりに体制を立て直し、飛ばされた勢いをそのままに地面へと足を突く。

ぐらりと、柊の体が揺れる。

ひととき大きい、今まで柊を追いかけていた白蛇がゆっくりと近づく。

「——ここまでか」

わずかでも情報を伝えるために、抱えた雲雀の妖怪だけでもした柊に、聞きなれた声が届いた。

「勝手に、諦めてんなっ！」

白蛇に向かい、とび蹴りを入れる二人の男女。

「ああもつつ！ 何だって、子鬼なんか助けに入るのっ！」

口では文句を言いながらも、沙耶はしっかりと手持ちの符を使用して白蛇への牽制をおこなう。

「いや、友人がピンチだったら助けるのは当たり前だろ」

治癒符をペタペタと、柊と雲雀の妖怪に張りながら真琴が答えた。

「なっ、真琴君？　なんでここに」

「いや、何でって学園の直ぐそこだし」

言われ、真琴が指差したほうを見る柊。

そこには確かに、大守学園の校舎が建っていた。

「はいはい。お喋りはそこまで。とりあえず、学園内まで逃げるわよっ！」

両手を翼に変えた沙耶は、ついではかりに変化させた両足で、真琴と雲雀の妖怪を抱える柊を掴んだ。

「とりゃああ」

妙な掛け声と共に、沙耶は中空へと飛び立つ。

さすがは鳥の妖怪と言うべきか、一息で二階建ての民家を跳び越して、大守学園の屋上へと向かう。

「…真琴君。いつもこんな屈辱的な運ばれ方してるのかい？」

「いや、俺だけのときは背中だな」

四人の眼下では、白蛇が沙耶の後ろを追うように移動を開始して
いた。

反撃の狼煙はまだ上がらない。

十八話 白蛇との交戦（2）（前書き）

今回は少し短いです。

十八話 白蛇との交戦（2）

学園の保健室。沙耶謹製の結界に守られて、雪村真琴は雲雀の妖怪に手当てを施していた。

「むう、骨折が八箇所、内臓器の損傷が二箇所…治療符では応急処置にしかないな」

霊視を行っていた眼を閉じて、真琴はさらに治療符を張り直していく。

効果が発揮されているのか、苦しげに歪んでいた顔は幾分和らいだものになった。

地面——いや、建物が振動で揺れる。

薬品や治療器具が納められた棚が、物音を立てて振動した。

「うっ…ここは？」

「ん、気がつきましたか。ここは大守学園の保健室です」

反芻するように、雲雀の妖怪はつぶやく。そして、

「柊様はっ！」

「大丈夫、無事ですよ、今は家に向かっている最中です」

雲雀の妖怪が目を覚ます数分前。応急処置を終えた柊は、白蛇への牽制を沙耶に、雲雀の妖怪への応急処置を真琴に任せて一路、実家への家路を急いでいた。

「そうか…」

再び、建物が揺れる。

「この揺れは？」

振動が響くのか、苦しげに顔を歪めながら雲雀の妖怪は問いかけた。

「あー、俺の連れがあのお蛇と戦ってます」

倒す気はないだろうけど。その一言は付け足さず、真琴は治癒符を新たに張りなおす。

柊の安否を確認できたおかげか、それとも傷の回復のためか、雲雀の妖怪はそれから直ぐに寝入ってしまった。
断続的に繰り返される振動。

「歯がゆい、な」

何時の間にやら握り締めていた拳を解き、真琴は視線を窓の外――校庭へとうつす。

「本当に…歯がゆい」

大守学園校庭。平時であれば、生徒たちが部活動や遊戯に活用するその場。

だが今は、戦場と化していた。

一メートルのにも満たない数十匹の白蛇が、幾たびも軌跡を描いた白刃によって両断される。

「——業火よ」

ささやくほどに小さな、けれどもはつきりと告げられた言葉。

沙耶の前方。無数に程近い数の白蛇が、数千度超過の炎にまかれ、たやすく炭化していく。

「ふう、これも効果なし…全く、面倒な相手ね」

炎の中心。一角を持つ蛇は未だに健在。その場で動かず、さらに白蛇を増やし続けていた。

生み出された白蛇。大きさはまちまちだが、視界を覆い尽くすほどに生み出されたそれは、いっせいに沙耶へ飛びかかる。

対する沙耶は、妖剣を斜めに構え、一息。

「しつこいつ！」

叫ぶと同時。沙耶を中心に突風が巻き起こった。

正確には、突風などではない。

その証拠に、風にまかれた白蛇の体が次々に細切れにされていく。

「っ——はあ」

剣速結界。

沙耶が、妖剣へと封じた鬼、臆が得意としていた剣技の一つだ。結界と銘打っているが、やっていることは単純に自分を中心に剣を振り回す。ただそれだけだ。

放つ前の溜めと、放った後の隙が大きいために多様は出来ないのが、一度に広範囲を攻撃できるので沙耶は重宝していた。

『沙耶、俺と視覚を共有しろ』

「えっ？ まあ、いいけど」

脳裏に響いてきた朧の声に従い、沙耶は視覚を剣に封じた朧と共有させる。

『やはり…夜刀神か』

「知ってるの？ ってか、神って言った今？」

『ああ。神格を得た元蛇の妖怪、だったか。神としては最下級だが、それでも一族総出で封印するのがやっとだった』

「最悪、ね」

神。

千年も前に、地上から姿を消した古の存在。その力は強大で絶対。いつその封印が解けたのかは定かではないが、たやすく倒すことの出来る相手ではないのは確かだ。

白蛇——夜刀神は、数を出すことに意味がないと思ったのか、その巨体をゆっくりと揺さぶりながら沙耶へと近づいていく。

「…」

一瞬。沙耶は、目線を背後にある保健室の窓へと向ける。

「逃げるわけには、行かないか」

妖剣を構え、符を前面に複数展開。

——倒しきるのは無理。逃げるのも無理。だとすると——

「子鬼が援軍を連れてくるまで、時間を稼ぐ」

符が中空を舞い、夜刀神を包囲し、

「奈落の炎っ！」

巨大な火柱が、天高く燃え上がった。

十九話 白蛇との交戦（3）

符が爆ぜる。

妖剣が空を裂く。

「っ、はぁ、はぁ、はぁ」

荒く、肩で呼吸を繰り返しながらも沙耶は身体を動かし続ける。
横なぎに振るわれた尻尾。

妖剣を軸に、側転するように飛び越える。

沙耶を飲み込まんと、大口を開く。

その口の中で、複数枚の符を爆発させる。

「なんて、生命力よ」

息を整えるため、沙耶は距離を大きく取る。

夜刀神の間合い、ぎりぎり一步外。沙耶の間合いからは大きく離れているが、攻める気のない沙耶としては気にならなかった。

前面に、符——攻撃ではなく、簡易結界を張るための符だ。

「はぁ、はぁ——ふう」

呼吸を整え、沙耶は間合いを計りながら夜刀神が校舎を背にするように移動する。

——まさか、ここまで差があるなんてね。沙耶自身、倒せないまでも手傷を負わせる程度には戦えると思っていた。

だが、現実には夜刀神は傷一つ負っていない。

「血が出ているところを見るに、ダメージは与えられているはず。」

にもかかわらず、傷として残っていない。…まるで、真琴みたいね」

自嘲するように笑って、そして自分の言った言葉に疑問を覚える。

——真琴みたいに？

真琴と夜刀神。

まずは見た目からして違う。

かたや、成人にも満たない年の上、平均身長よりも少し劣る男の子。

かたや、胴回りだけでも巨木を上回る大蛇。

見た目、種族、大きさ、どれをとっても真琴と夜刀神に同じところなんてない。

あるはずがない。なのに、沙耶には真琴と夜刀神が同じ存在のように思えてしまった。それは、唯一の共通点。

異常なまでに高い再生能力。

たった一つの共通点。ただそれだけだ。

「つと」

突進してきた夜刀神の頭に、簡易結界を張った左手をそえて片手で側転。

ちょうど真上に来たところで、左手をまげて身体を弾くように宙返りさせ、回転中に逆手に構えた妖剣を夜刀神の後頭部に突き立てて、

「せりゃあああつ！」

叫ぶとともに、沙耶は夜刀神の背を一気に駆け抜ける。

無論、その手には、つきたてたままの妖剣があった。

校庭に降り立ち、降りしきる血しぶきの中でも沙耶は止まらない。逆手に構えていた妖剣と、背中を向けている自分の体を反転させ

る。

正面。開きになった夜刀神の背中に、沙耶は手持ちの符を全て突っ込んだ。

「外からのダメージが駄目なら——中からふつとべっ！」

開かれた傷が塞がるのと同時に、夜刀神の白い鱗をオレンジ色に染め上げる。

「——」

苦悶の声か、断末魔の叫びか、聞くに堪えない音が校庭に、校舎に、町中に響きわたった。

「——っ」

白蛇の叫びが聞こえた瞬間、俺は言い知れぬ不安に捕らわれていた。

心臓が、割れんばかりに脈動する。
嫌な予感。

漠然とした意識のままに、俺は保健室の窓を蹴破って校庭へと駆け出していた。

神に、下手な攻撃は無意味だ。

脳裏に、そんな言葉が浮かんできた。何を言っている、神なんて、こんなところにいるわけがない。

いや、そもそも俺は何で白蛇が神だって思ったんだ。

疑問の答えが出る前に、白蛇が動いた。

大きく、振り上げた尻尾。あの位置からならば、沙耶は避けるのは出来ない。

声をかけて…だめだ、沙耶の注意をそらしたらそれこそ沙耶が危険になるだけだ。

ならばと、俺は覚えたての霊力を足先にこめて、疾駆する。

自分が矢になったかのような錯覚を覚えるほどに、俺は真っ直ぐに沙耶へと向かう。

沙耶。振り上げられた尻尾を受け流そうと、妖剣を構えた。

「くっ！」

さらに足へと力を込めて、校庭を踏みしめる。

後十メートル。

俺が狙えるのは二点。

後七メートル。

白蛇の頭か、沙耶の背中。

後五メートル。

「沙耶——っ！」

後三メートル。

俺は、おもいつきり地面を踏み切って——そこで、意識が途絶えた。

聞きなれた声。たった三年間とはいえ、今まで聞き続けてきた声。

「真琴？」

そう思う前に、背中に衝撃。

一瞬後に送れて、白い影が私の視界を横切った。

鈍く、嫌な音。

嗅ぎなれた鉄錆びのにおい。

視界を覆う夜刀神の尻尾。白かったそれは、所々が鮮血へと染まっている。

背中に来た衝撃、そして直前に聞こえた真琴の声。
認めたくない。

いや、認められない。

「...を」

硬く、強く、妖剣を握り締める。

「そこ、を...」

歯を噛み砕かんばかりに食いしぱり、

「そこを、どけえーっ！」

叫ぶと共に、沙耶は全力を持って夜刀神を弾き飛ばす。

「っ、はあ、はあ——真琴っ！」

妖力を根こそぎ振るい、夜刀神の下にいるはずの真琴を助け起こそうと腕を、やけに軽い腕を引く。

ずるりと、地の下から抜け出たのは、真琴の右腕。

「あつ、い……やつ……」

手の甲から、肘の辺りまでしかない腕だった。

二十話 白蛇との交戦・閑話（前書き）

あけましておめでとうございます。

新年、一回目の更新ですが・・・すいません、とても短いです。

楽しみにしてくれていらっしゃる方に、

もっと楽しんでいただけるように今後とも努力をしていきますので
よろしく願います。

二十話 白蛇との交戦・閑話

「また来たのか？」

くすくすと、暗闇の中から嘲る声が聞こえる。
誰だ？

「会ったばかりだというのに、もう忘れたのかの？」

どこか古臭い喋り方。

絶えず発せられている威圧感。
授業中に見えた、あの女？

「それ以外でも会っておるのだがな…ふむ、本当に覚えておらんのか」

頬を撫でる感触と、耳元から聞こえてくる声。

すぐ側に、あの女がいると言う事実には、俺の身体は強張っていく。
心臓が、高く脈打つ。

「くくっ…随分なおびえようだの？ 我への恐れだけは忘れておらんかったか」

頬に当てられていた指が、唇に触れてから離される。

「さて、ここにその様な醜態をされていると言つことは、何者かに敗れたのか？」

何者か……っ！ 白蛇っ、いや、それよりも沙耶は無事か？

「ほう、心当たりはあるのか。まあよい、退屈しのぎに話してみよ」
それどころじゃない、早く沙耶の無事を確認に行かないと…、
踵を返そうとして俺は、ようやく今の自分の状況を把握できた。
足が、ない。

「正確に言えば、体がだの」

けれど、お前は確かに俺に触れていた。

「当たり前だの。我ほどの神格があれば、実態を持とうがそうでな
かろうが関係がないからの」

神格？ まさか、神だとしても言つつもりか。

「…本当に忘れておるようだの。まさかも何も、我は神だ」

でも、まさか…自意識をもてるような強さの神が何だつて俺なん
かに会ってるんだよ。

たしか、自意識を確立している神は国によって保護されているは
ず。

「あれは、保護と言うよりも監禁といったほうがよい気がするがの
…まあ、それはどうでも良い。今は、お前のことだ」

そうだな。で、俺を助けてくれるのか？

今の状況はよくわからないが、一刻でも早く沙耶の元に戻りたい
からな。

「お前しだいだの。さあ、とつとと話せ」

「なるほどの…しかし、一角を持った白蛇」

とりあえず俺は、ここで目を覚ますまでの大まかな状況を説明し終えた。

「ああ、夜刀神か。ふむ、あやつは何時の間に封印から抜け出したのかの」

知ってるのか。

「無論。何時だったか、鬼の軍勢に敗れて封印されたと聞いておつたが、地域開発だかなにかで封印が解かれたのであろうよ」

だったら、倒し方も…

「ないな。夜刀神は、神としては下級だが固有の弱点をもっておらん。倒したくば、それ以上の力をぶつけるのが一番だの」

神以上の力って——そんなのあるのか？

「あると思うか」

いや、多分ないと思う。

現存する妖怪達の中でも、最強と名高い鬼ですら軍勢を用いて封印するのがやっとだったんだ。今の戦力では、満足に戦うことすらできそうにない。

「よもやと思つたが…案の定か」

ん、何か言つたか。

「…ふむ、時にお前。三年前のことは覚えているのかの?」

三年前? いや、ぜんぜん覚えてないけど。

推測でしかないけど、俺が覚えていないだけで三年前に会つて
のかも。

たとえば、麦畑で。

「くくつ、さての。それよりもだ…思い出せる、一番古い思い出は
何かの?」

—つ。

息が、出来ない。

「どうした? 何も正確な日時まで答えろと言っているのではない
ぞ、幼き時の思い出など、幾らでもあるであろつよ」

当たり前だ。俺とて木の股から生まれてきたわけではないのだから、
赤ん坊——のころは無理でも物心ついたころの記憶ならある。

けれど、それを言葉にすることが出来ない。いや、正確に言えば
実感がわかないと言つたほうがいいかもしれない。

「だろつよ。まあ、記憶のことについてはまたいずれ話してやる。
今は、夜刀神を打倒する方法だの」

何か手があるのかつ!

「あるぞ」

なら、その方法を教えてくれ。俺が出来ることならば、なんでもする。

「——くくっ、良いだろう。ならばひとまず、体にもどれ。詳しくは、そこで話してやろう」

どうやっ、おっ？　おおおおおっ！

引っ張られるように、俺の意識が遠ざかっていく。

「次は忘れるなよ？」

そんな言葉が、最後に聞こえた。

二十一話 白蛇との交戦（4）

校庭に差し込んだ月明かりをさえぎる一つの人影。

沙耶だ。

沙耶は、広げていた翼を両手に変えてゆつくりと真琴を学園の屋上に降ろす。

「……………」

なにかを言おうとして開かれた唇は、音を発することなく固く結ばれる。

そして、沙耶を取り巻く空気が変質した

縦長に伸びていた影が、ゆつくりとその幅を広げていく。

そこにいたのは、巨大なカラス。負告鳥。

人の皮を破り捨て、漆黒の羽を羽ばたかせる巨大な怪鳥。

咆哮か、あるいは慟哭か。

負告鳥——沙耶の叫びに呼応して、夜刀神もまた吼える。

カラスと蛇。

自然界において、接点は皆無と言ってもよい二種族がにらみ合う。

先に動いたのは、高所を押さえていた沙耶だ。

大きな翼を羽ばたかせ、一息で空高く舞い上がる。

黒い翼が、沙耶の通った軌跡にいくつもばら撒かれた。

「」

叫ぶ。いや、それは正確には叫びではなく——

中空を舞っていた黒い翼が、茜色に燃えあがる。

暗く、月明かりだけが頼りだった校庭を、昼間の如く照らし出す。
炎呪。

大気を焼き、地面を穿ち、敵を滅ぼす炎。
人の頭ほどはあるつかという炎弾が、夜刀神へと殺到していく。
純白の鱗を貫き、肉の焼け焦げるにおいがあたりに広がる。
悪臭と煙にまかれた校庭。けれど、夜刀神は未だに健在。
炎呪の効果が低いと見て取った沙耶は、さらに高く舞い上がる。
一息の間に雲を超え、ある程度の距離を飛んだところで反転。

「――」

茜色の炎をまとい、沙耶は一直線に夜刀神へと落ちていく。
単純に言ってしまうえば、これはただの体当たりだ。
だが、沙耶の羽ばたきと落下による加速を加えた速度は時に、音速に匹敵する。

瞬く間に流れていく景色の中、沙耶は真っ直ぐに白い蛇だけを睨みつけ――

衝突。そして、轟音。

沙耶と、夜刀神の衝突によって生み出された衝撃が、遅れてあたりを揺さぶる。

粉碎された窓ガラスが舞い散る。

挟り取られた地面は、土砂となって小山を作った。

速度そのものは、音速を超えていた。少なくとも、沙耶にはその実感があつた。

「――」

人の姿をしていたなら、悔しげに顔を歪めていたのが見て取れただろう。

元いた位置よりも後退しているが、夜刀神は沙耶の突撃をその身体で受け止めた。

効果がないとわかった以上、沙耶は次の攻撃に移るべく羽を動か

す。

だが、それよりも夜刀神は早い。
鈍い音を響かせて、沙耶の体が地面へとめり込む。

「――」

夜刀神が追撃をかけようともう一度、尻尾を振り上げた隙に沙耶は無理やりに翼を動かして空へと飛び上がる。

逃げながらも、沙耶は羽を炎の槍に変えて夜刀神めがけて放つ。
炎弾よりも範囲は狭いが、貫通力に優れた炎槍えんそうは夜刀神の尻尾によつてなぎ払われてしまう。

流れる動作で、夜刀神は力を溜め込むように大きな体躯を縮めた。
とつさの判断。沙耶は、身をよじる様に夜空を舞い上がる。

同時、沙耶がいた位置を夜刀神の頭が通過した。

さらに反転し、沙耶は羽を数十枚重ね合わせる。

現れたのは、電柱ほどの太さを持った炎槍。

それが、夜刀神の眼球に吸い込まれるように飛ぶ。

悲鳴。苦痛の声をあげ、夜刀神は校庭へと落下していく。

追い討ちをかけるように、沙耶が高く、高く鳴いた。

瞬間。茜色の太陽が、夜の校舎を照らしだす。

禁呪きんじゆと呼ばれる術がある。

使用者にかかる負担が大きかったり、威力が高すぎるがゆえに暗黙の了解として抹消された術だ。

禁呪、偽りの太陽。

擬似的に太陽を作り出すこの術は、その範囲の広さゆえに術者に限らず周辺を破壊しつくしてしまう。

単純に、熱量と言う意味で言えば原爆などの方が高温だ。

だが、術として使用する場合、熱量はさほど重要ではない。必要なのは、火の象徴ともいえる太陽の加護。

世界各国に存在する太陽に対する信仰。その信仰が、この術に力

を与えるのだ。

校庭の中心に落ちた夜刀神を包み込むように、茜色の炎が半円を描く。

だが、その輝きは沙耶が知るそれとは似ても似つかないほどに弱弱い。

祝詞や符による補助もなしに、己の妖力のみで使用したのだから当たり前と言えは当たり前だ。

灼熱の業火に焼かれ、夜刀神がのた打ち回る。
死ね。

肥大化した太陽が校舎の一部をえぐる。

——死ねっ！

断末魔とも取れる、悲痛な叫びが木霊する。

「トットト——クタバレッツ！」

憤怒の、いや——悲痛な沙耶の叫び。

沙耶は喉が張り裂けそうなほどに、強く、高く、吼えた。

時間にすれば数十秒。

校庭には、夜の静寂が訪れていた。

「——真琴」

ぽつかりと、夜刀神がいた場所に作られたクレータには目もくれず、沙耶は真琴の下へと降り立つ。

人の姿へと変わった沙耶は、片膝をついて真琴の頭を抱きしめる。

ゆつくりと、校庭の砂が隆起した。

「……ごめんね……」

頬についた泥を拭いながら、沙耶はそつと真琴の口に自分の口を重ね合わせる。

砂利と、血の味がした。

破損した校舎を、火傷を負った白い蛇が這い上がる。

「せめて、血肉だけでも——っ！」

些細な物音に気づき、背後を見る沙耶。だが、遅い。
純白の鱗を黒く焦がし、裂傷をいくつも負いながらも夜刀神はその鎌首を持ち上げていた。

間に合わない、か。

迫り来る大口を前に、沙耶はより強く真琴の頭を抱きしめる。
学園の屋上に、夜刀神の頭が突き刺さった。

「——あっ」

ふと、私は自分が誰かに抱えられているのに気がついた。
嗅ぎなれた匂いと、何度も親しんだ脈動。

「ふう、ギリギリ間に合ったか」

もう聞くことはないと思っていた、声。

「ごめん、遅くなった」

ニコリと、はにかむような笑顔を見せる顔。

「真琴ッ！」

自信を持っていえる。私は今、最高に嬉しい。
少しだけ上体を起こして、真琴に力強く抱きつく。

「おっとと…ごめん。心配かけたね」

幼子を慰めるように、真琴は私の髪の毛を撫で付ける。

「本当に…よかった」

私を撫でながらも、真琴の足は止まらない。自由落下に身を任せながら、真琴は蛇から距離を取る。

「うん。おれも、沙耶が無事でよかったと思う」

真琴の両腕に、少しだけ力がこもった。

より近くなつた心臓の脈動に、私は真琴が間違いなく生きてこの場にいることを確信する。

ある程度の距離が取れたのか、真琴は足を止めて白蛇を見た。
ダメージがあるのか、白蛇の動きはさほど早くない。

「今なら、飛んで逃げられそうね」

正直に言えば、私の妖力もほとんどつきかけている。それでも、

真琴を連れて隣町に逃げるくらいは出来るはず。

「んゝ悪いけど、それじゃあ俺の気がすまないんだ」

言って、真琴はそつと私を降ろしてかばつように前に出る。

「俺が余計なことをしたせいでもあるけどさ——それでも、沙耶を傷つけたのはあいつだ」

背中越しに、真琴の言葉を聴く。もしかしくなくても、怒ってる？

「その分を、返してやらないと俺の気がすまないんだ」

言つと同時に、真琴の雰囲気が変わつた。

いや、見た目や気配は真琴のものだ。ただ、纏っていた理力の質が違う。

「神力——なんで、それを」

渦巻くように、真琴を取り巻く青い色の理力。単純量で言えば、それほど多くないがそれでも今の私では太刀打ちできないほどの力強さがあつた。

「ん、後で詳しく話すよ。だから、今はここで応援しててくれ」

ゆっくりとはいえ、白蛇との距離はあと十メートルもない。戦つて欲しくない。私と、逃げて欲しい。その思いはある。

けれど、あれを放置するのも危険だ。後一分もすれば、全力で飛べそうね。

多少の無茶はあるだろうが、それでも死にはしない。それに、今

のまま飛ぶよりも距離は稼げそうだ。

「はあ、わかった。思いっきりやっちゃえっ！」

いざとなれば、真琴を連れて逃げ出せるように準備だけはしておこう。それに、そろそろ子鬼たちも来るはずだ。残りは、あいつらに任せてしまえ。

「もちろん。殺す気でいくさ」

はつきりと、真琴は言葉に怒気を乗せて答えた。

二十一話 白蛇との交戦（4）（後書き）

うう、最初の予定以上に長くなってますね。まだまだ、精進が足りないようです。

さすがに、次でこの戦いに決着をつける予定です。ので、よければ、感想をお願いします。

二十二話 白蛇との交戦・決着（前書き）

最後に、ちょっとエロイ表現が出てきます。

直接の描写はしていませんが、問題があるようならばご指摘をお願いします。

二十二話 白蛇との交戦・決着

沙耶を背後にかばいながら、真琴は目線を真っ直ぐに夜刀神へと向ける。

『ふむ…思った以上に弱っておるの』

「沙耶が、がんばってくれたみたいだからね」

どこか苛立ちを含んだ声音で答え、真琴は唇をかみ締めた。
何も出来なかった自分が、むかつく。
沙耶を傷つけた、夜刀神を許せない。

『怒りを覚えるのは構わぬが…飲まれるなよ?』

念を押すような声。それに真琴は、言葉ではなく動きで返した。
一步。飛ぶように、地面を駆け抜ける。
二歩。力強く地面を踏み込む。

「ふっ！」

走りこんだ勢いをそのままに、真琴は夜刀神の胴体の思いっきり、殴りつける。

絶叫。耳障りな声を上げて、夜刀神の体が大きく後退する。
走りこんだ速度もそうだが、真琴にはこんな力——数倍もの巨体を殴り倒す腕力はない。

それを可能にしているのは、真琴へと語りかけている女だ。
仰け反った体制を立て直し、夜刀神は威嚇するように真琴へと牙をむく。

それを無視し、下あごを蹴り上げて追撃とばかりにさらに胴体を拳で穿つ。

——体が、軽い。いや、考えるよりも早く、身体が動く。どう動けば、的確にダメージを通せるのか。どこを狙えば、致命傷になるのか。自分が動ける限界はどれか。次々と脳裏から情報によみがえる。

『やっと、らしくなってきたの』

「そうか？ ——多分、前の俺はもつと早く動けただろ」

夜刀神を殴りながら、真琴は女にといかける。

『……否定はせぬよ。だが、今のお主ではそんなものだろう』

「だな」

言つて、真琴はその場で小さく円を描くように回った。独楽のように、片足を軸にしての回し蹴り。

風を切り裂くように、鋭く放たれたそれは夜刀神の胴体へと食い込み、はじける。

雄叫びを上げながら、夜刀神の身体が校舎へと沈んでいく。夜刀神の叫び以上に、大きな音を立てて校舎が崩れていく。

「ふう……」

ため息をつく真琴の眼前では、のっそりと夜刀神が瓦礫を押しつけて起き上がろうとしていた。

「さすがにしぶといな」

四肢に込めた神力を弄びながら、真琴はリズムを取っていた足を止める。

『あれがしぶといのではなく、お主の攻撃が軽いだけだと思うがの』
失笑を伴った声。

「いや、あの巨体を動かせるだけの威力があるのに軽いって……」
『軽いさ。その程度ならば、後ろで熱い視線を送っているカラスでも出来るであろうよ』

確かに。真琴は、胸中で納得した。
だが、それは同時に今の真琴では夜刀神に勝つことは出来ないと、言葉にしないで語っていた。

「とすると、沙耶以上の威力を持つ術を持って殲滅するか、本体を直接叩くか」

夜刀神に牽制を入れながら、真琴は思考をめぐらせる。
まず、前者は却下だ。と言うか、出来ない。
少し目線を横に向けると、月明かりに照らされたクレーターが目につく。煌々と、赤い光をともしそれは、未だに熱を放ち続けている。

そんな術を、俺は知らないし使えない。何より、祝詞を上げる時間をくれはしないだろう。

ならば、本体を直接叩く。これしか手はない。

「本体がどこにあるか、だな」

物質が支配する現世において、精神体——幽霊とは比べるのがおこがましいほどに洗練された存在——であるせいか、現世との相性が極端に悪い。

それゆえに、神が現世に姿を現すときは神子の身体を使うか、肉体を準備する必要がある。夜刀神の場合は、後者だ。

現世で神が使っている肉体は、言ってしまうえば操り人形のような物だ。だからこそ、真琴は肉体に宿った夜刀神の本体——意思を持った魂を探す。

操り人形は、操る者がいなければただの人形なのだから。意識を、見ることに傾ける。

視界が黒く染まり、いくつもの光の筋が浮かび上がった。様々な色を持つそれは、一つ一つが理力の流れだ。

『これは……驚いたの。よもや、ここまで見ることが出来る眼を持っているとは……案外、拾い物かもだったかもしれぬの』

つぶやきは、小声ながらもはっきりと真琴の頭に届いている。だが、真琴はそれには反応を返さずに、慎重に理力の流れを探っている。

半径一キロ以内に、大きい理力の塊は四つ。こっちに近づいてきているのと、背後の沙耶が持つ妖力。

残りは神力。俺が借りてる力と、夜刀神の持つ力。

青く、渦を巻く力の奔流。

過去。沙耶の力を見せてもらってとき、真琴は絶対に勝てない。そう思った。

普段の真琴を一とすれば、沙耶は十。夜刀神に言っただけは五十に達するだろう。それほどまでに、真琴と夜刀神との差は歴然としている。

「けど……」

記憶を手繰る。必殺の一撃を。
狙うは渦の中心。脈打つ器官。
深く、腰を落とす。

左手を前に、右手を胸の前へ。
真っ直ぐ。ただ、真っ直ぐに夜刀神の力だけを見つめる。

「ちっ」

舌打ちを一つ。

夜刀神が、真琴の視界から消えた。捕捉することは直ぐにできた。
が、

「逃げる気かつ！」

背中を向けて、夜刀神は校庭の外へと向かう。
傷ついたその身体のどこにそんな力があるのか。そう思いたくなくなるほど早く、真っ直ぐに動く。

「展開」

叫ぶ声。現れたのは、白く輝く檻。

「一体これは、どういう状況なんだい」

柵の、戸惑った声。理力の流れは、柵の周囲からすることから、
夜刀神を捕らえている檻は、柵たちが作ったものかと、真琴は予測して足を進める。

夜刀神までの距離——後十七メートル。

持てる神力の全てを両手に回しているせいで、脚力自体に影響が
でている。

後十五メートル。

夜刀神が身をよじり、吼える。

後十二メートル。

『――逃げられるの』

声には答えない。ただ一心に、真琴は足を動かす。
後九メートル。

『ふむ。ここで逃げられるのも癪だな……仕方ない、力をもう少し
貸してやろうぞ』

足に力がこもる。後五メートル。

夜刀神の咆哮。身をよじり、檻を破壊した夜刀神が行動を再開す
る。

後、二メートル。

「そのまま飛んでっ！」

真琴が、もつとも信頼する声にしたがって動く。

「子鬼ばかりに、おいしいところは持ってかせないわよっ！」

一閃。振りぬいた妖剣は、変わらずに夜刀神の角を切り落とす。
仰け反り、歩みを止めた夜刀神を掴む手があった。

夜刀神の体軀からすれば、何のことはない大きさのそれ。先の檻
よりもたやすく振り払えそうなその手。だが、夜刀神が身体をゆす
つても、動かない。

右手。握っていた拳を開き、水平に構えて、弓のように引き絞る。

「はぁぁぁぁあつ！」

貫手と呼ばれるその技は、違うことなく夜刀神の本体へと吸い込まれていった。

「ふう——さすがに、疲れた」

長い一日だった。今日一日だけで、数週間分の労力を使った気がするよ。

事情の説明を柊に求められたけど、柊自身の事後処理の都合と疲労を理由に、今日のところは家に戻ってきた。

「今日の真琴は、すごい活躍してたものね」

濡れた髪をバスタオルで拭きながら、沙耶は俺の隣に腰掛ける。ふわりと、沙耶が使っているリンスの香りが鼻をくすぐった。

「ははっ。援助があつてこそ、だけどね」

今回ののは、あいつが俺に必要な以上の力を供給したおかげだ。今は声が聞こえないが、最後に変なこと言ってたな。確か、『近いうちに、我の御前に招待してやろう』だったか。あいつが何を考えているのか、俺にはわからない。ただ、敵ではない。と思う。

「まあ、どっちでも良いか」

「ん、なんか言った？」

「いや……」

俺は、沙耶が守ればそれで良い。

沙耶の髪——まだ少し湿っている——を撫で付けながら思う。

「でも、さ」

くすぐったそうにしながら、沙耶がつぶやく。

「無事で、真琴が……生きてて」

沙耶の手が、俺の頬に添えられる。

「本当に——よかった」

そして、どちらともなく口を重ねあった。

陳腐な表現だが、永遠とも思える一瞬と言うのは本当にあると言
うのを思い知った。

「何でだろ——今日は、いつも以上に沙耶が愛おしい」

初めてつてわけでもないのに、痛いほどに高鳴る心臓。顔が赤く
なっているのがわかるほどに、熱を持っていく。

「ふふんっ。私の魅力は、いつ何時だって鰻上りの天井知らずだか
らね」

沙耶は、不適に笑って俺をベットに押し倒す。――あれ？

「私は、真琴が相手なら受けでも攻めでもいいけど…今日は」

ベットのスプリングが、きしんだ。

「私が真琴を抱きたい。真琴の温もりを、鼓動を、私の手で実感したい」

沙耶と、俺の視線が交差する。吸い込まれそうなほどに、すんだ黒目に顔が映りこむ。

「わかつ——んっ」

許可を出し切る前に、沙耶は動いた。後はまあ、なすがまま、されるがままに流されるとしよう。

二十二話 白蛇との交戦・決着（後書き）

ユニークアクセスがついに1万を突破しましたっ！

これもひとえに、皆さんが読んでくださるおかげです。

本当に、ありがとうございます。これから、日々精進を心がけて皆さんに楽しんでいただけるものをご提供できるように努力を惜しみませんので、今後ともよろしくお願いします。

記念、と言うのも変ですが、区切りが良いので何かリクエストをいただければそれにそった内容の番外編を書いてみたいと思っています。要望等、ございましたらご連絡をお願いします。

二十三話 事件後の後始末（１）

早朝の雪村家に、着信を知らせるベルが鳴り響く。昔懐かしい、黒電話のあの音だ。

「はいはい。雪村ですが」

朝早くから誰だつと、不機嫌そうに雪村真児が受話器を取った。

「ああ、学園の…家の弟が何か。え、臨時休校？」

ちらりと、真児はカレンダーに眼を向ける。始業式が始まったからまだ三日しかたっていない。

「いきなり何があったんですか？——答えられない、と……わかりました。野暮なことは聞きませんよ」

相手が通話を終了させるのを確認してから、真児は受話器を置いた。

電話のディスプレイに表示されている時刻は、七時一分。

「……昨夜は楽しみだったようだし、起こさなくていいか」

実は、日付が変わる前に家に戻っていた真児は、二階で行われている房事に気がついて自室に戻りたくとも戻れなくなっていた。

と言うのも、真児の部屋は真琴の隣だからだ。二人がそういう関係だと言うことを知ってはいるが、それを隣で聞かされるのは流石に気まずい。

「ふう、何時の間にやらプレイボーイになって……お兄さん悲しいっ！」

などと悶えてみるが、誰もいないリビングには真児の行動をとがめる者はいない。

寂しくなった真児は、とりあえずテレビをつけて気を紛らわせるのだった。

大守学園。昨夜の破壊の爪あとが残るこの場所には、数多くの警察官が集まっていた。

その中に、雪村克己はいた。克己は、市内の警察署で唯一の才力ルトがらみの事件を担当する刑事だ。

「……ふう」

煙草の煙を吐き出しながら、校門に寄りかかった克己はそのまま校庭を見回す。

半壊した校舎や爆弾でも爆発したのかと、言いたくなるような校庭。ありとあらゆる場所に及んだ被害は、この場で行われたことを安易に想像させた。

「妖怪同士の抗争——それもかなりの強力な」

強力な妖怪。克己が直ぐに思い至るのは一人と一つ。息子の使役妖怪——とは名ばかりの恋人、沙耶。そして、

「お待たせしました」

この少年。伊吹柊が生家、伊吹だ。

「おう。終わったのか」

適当に手で返しながら、克己は煙草を携帯灰皿に押し付ける。

「ええ。——すみませんでした。本来であれば警察の捜査が優先なのですが……僕も家の意向には逆らえませんので」

「総当主様か」

伊吹の総当主、酒吞童子。正確に言えば、酒吞童子は総当主に与えられる称号のような物で、本名は伊吹童子だ。

酒吞童子を筆頭とする伊吹の家系。それは、現代の日本においては数少ない鬼の純血種にして、最上位の暴力と権力を有する組織でもある。

そして、今回の事件に関わっていると自己申告してきたのも伊吹の家だ。

「まっ、妖怪同士の抗争ってんなら警察おれたちがすることなんて、周辺の被害状況の確認くらいだけだな」

自嘲気味に言う克己に、柊はなんとも言えないと少しだけ表情を動かすにとどまった。

妖怪同士に抗争において、人間たちには彼らを罰する権限は基本的にない。これは、自分たちよりも劣る人間と共存することを嫌った妖怪達に対する、配慮と言う名の妥協案だ。もちろん、全てが全て罪に問われないと言うわけではないが。

「それで、周辺の被害はどうでしたか？」

「ん？ そっちで把握してる通りだと思うけど」

「確認のためです」答えた柊に、克己は懐からくたびれた手帳を取り出してページをめくった。

「聞き込みによれば、事件のあった時間帯、学園に人はいなかったらしい。一応、臨時休校の旨を伝えながら生徒の所在も一緒に確認してもらってるから、そのうち連絡が入るだろ」

それ以外だと、前置きして克己はぐるりと周囲を見回す。その動きに合わせて、柊も首を動かした。

「見ての通りだ」

肩をすくめる克己に、柊は苦笑いで答えた。

「わかりました。では、こちらからは後日、正式に書類として報告させてもらいますね」

一礼して去っていく柊を見送って、克己は内ポケットから煙草を取り出す。純国産ブランドの、日景だ。

「——ふう。……書類、ね」

大きく肺に吸い込んだ煙を、ゆっくりと吐き出す。

「今回の事件は、お蔵入りだな」胸中で、克己はそっとつぶやいた。

武家屋敷の一角。柊は、着物姿で二十畳はあろうかという和室の中心に座っていた。

対面に座っているのは、どこか柊と似た面立ちを持った青年だ。

「以上が、今回の顛末です。——父上？」

柊は、先ほどから一言も発しない青年——柊の実父である伊吹惣一に声をかける。

「ん、何だ」

手元の書類。今回の詳細な内容が書かれたそれから目線を柊に戻し、惣一は小首をかしげた。はたから見れば、兄弟と見間違えそうなほどに若々しい容姿を持つ惣一がそういった仕草を見ると、いつもの事若く見える。

「何だ、ではなくてキチンと僕の話聞いてましたか？」

「……勿論だとも」

そつぽを向いて、そんなことをたまった父の頭を、柊は軽く——鬼の力での軽くなので人間的には思いつきり——叩いた。

「はあ、もう一度説明しますよ。ほら、何時までも大げさに痛がってないで姿勢を正してください」

「大げさじゃなくって本当に痛いんだけどなあ！」

無視して柊は、傍らに用意しておいた筆箱からボールペンを取り出す。

「何も言わないでここにサインすればいいんです」

「説明するって言ったじゃんっ！」

しぶしぶと、痛む頭を撫でながら惣一は書類に書かれている内容を読み、顔色を青くしながら柊の顔と書類を見比べた。

「ちよっ、こんなに払わないと駄目なのっ」

「まあ、必要経費ですからね」

「必要経費って……学園の修繕費ってこんなにするの？ 伊吹の者は壊してないんだろ」

壊した奴に払わせると、惣一は暗に言っているのだが、柊は痛ましそうな表情を作って首を振る。

「悪いんだけど、これは譲る気はないよ」

「……むっ」

惣一も、払う気がないわけではない。ただ、組織の長として不要な出費は抑えておきたいと言う思いもある。

「やはり、今回は破壊した相手に……」

「タンスの上から三番目」

嫌な沈黙が、和室に流れた。

「うん、今回は特別に僕が払っちゃおうかなあー」

冷や汗を流しながら、惣一は書類にサインしたのだった。

二十三話 事件後の後始末（1）（後書き）

一万アクセスの記念話は、事件後の後始末と言うサブタイトル後に、公開したいと思います。

楽しみにしてくださいっている方は、申し訳ございませんが、もう少しだけお待ちください。

二十四話 事件後の後始末(2)

「えっと……どこだ、ここ？」

「さあ？」

気がつけば、俺と沙耶は見知らぬ部屋の中にいた。ただ、俺はどことなく見たことがあるような気がするけど。

えっと、昨日……というか今日はあのまま寝たんだよな。けど、今の俺たちは服を着てる。

「小僧だけを呼んだつもりだったあの。よもや、乳繰り合ってる真っ最中だったとはな」

不意に、俺たちの頭上から声が降ってきた。あいつの声だ。

「あんたはっ！」

沙耶の、あせった声。沙耶は、とっさに俺を背後にかばい、声のした方を睨みつける。

「安心せい。今日の我は、お主らと争う気はないからの」

声が、今度は俺たちの背後から聞こえた。

慌てて振り返ると、そこには着物を着た美女がクスクスと可笑しそうに嗤いながらこちらを見下ろしていた。

「マガミ」

沙耶の齒軋り。そうか、こいつはマガミって名前だったわけ。いや、違う。俺が知っているあの人の名前は――

「全く。小僧だけを呼んだつもりだったのだがの……十世紀以上も歳の離れた小僧と乳繰り合うなど――随分と好色なの？」

「うっさい。私と真琴はラブラブだから良いんだよっだっ！」

べえ〜と、沙耶は両頬を引っ張って舌をだす。子供っぽいな。対して、マガミは呆れたように一笑して俺へと向き直る。どうやら、沙耶がここにいることは偶然みたいだな。

「さて、小僧。正式に契約を結ぼうと思うのだが、お主にその意思はあるかの？」

「契約？」

ちなみに、答えたのは俺じゃなくて沙耶だ。

「ああ、小娘。お前はだまっとれ」

ついつと、マガミが手を動かす。

「んむっ！ んんっ〜っ！」

一瞬だった。沙耶の口に猿轡がかまされたと思ったら、後ろでロープで縛り上げられてその辺に転がされていく。

「これで静かになったの」

改めてと、咳払いしてから口を開いた。沙耶のことは気になるけど、こいつに背中を見せるのは危険だしな。

「カラスの嬢ちゃんが言うとおり、我が名はマガミ。古に名を連ねる神の一柱ぞ」

マガミ——聞いたことないな。おそらく、自称しているだけで、本来の名前は別にあるんだろ。

「さて、どうだろうの」

しかも考えてることまでわかるとか、チートキャラも良いところだな。

「それで、具体的にはどんな契約を結ぶんだ」

出来れば会話の主導権をとりたいたいところだけど、それは難しそうだし。とりあえず、無難に話を進めていこう。

「そつだの……その前に我の現状を説明しておこうかの」

マガミは、再び手を動かす。不意に、俺の頭に軽い痛みが走った。

「我とお主の思考を繋げたのだが、どうかの？」

「っ、ああ……頭が痛い以外は問題ない」

痛む頭を抑えて、無理やり埋め込まれた情報を整理する。

マガミ——本当の名前は情報になかった——は、数百人程度の信者を誇る宗教の崇り神として祭られているそうだ。

「そうだ。そして、今ここで我が使っておるのこの身体も、我が信者のものだの」

「で、神子が不足してるから俺にやらせよつてのか？」

キチンと記憶しているわけではないが、俺もマガミの神子に会ったことがあるらしい。ただ、そのことを思い出そうとしても思い出せるのは……黄金色の……なんだろう。

——神子のことは、一人のときがあつたら考えておこう。

「まあ、それでも良いのだが。お主には別のことをやって貰おうと思っておるのでは」

「別のことねえ」

少なくとも、あまり良い予感はしない。ただ、理由もなく断ることが出来ないのも確かだ。

「お主の命を二度も助けておるからの。そろそろ、返済してくれても良いのではないかの」

一度目は、先の夜刀神との戦いときだよな……二度目は、夢のあれか？

俺は自分の胸に手を添える。この位置で脈打つ心臓。これはきつと、俺の物じゃない。

確信に近い予測だが、これはマガミに与えられたものだ。だとしたら俺は、マガミに生かされているからここまで来れたことになる。

背後。後ろでうめいている沙耶へと視線を向ける。ああ、そんな

に暴れるな。縄が食い込んで、ただでさえエロいのもっとすごい事になるから。

それはともかく。今の俺には、沙耶を守りながらマガミを打倒する手段はない。というか、そんなことが出来る人類はいないだろう。「勘違いしておるようだが、我はお主を力づくで従わせる気はないの」

指を弾く。心地よい音が鳴り、沙耶の拘束が解かれた。

「それで、真琴はどうするの？」

抵抗する気がないのか、沙耶は身体を動かしながら俺に問いかける。

沙耶とマガミ。二人の視線が、真っ直ぐに俺を捕らえる。

覚悟を決めよう。ここでの解答はきつと、俺の一生を左右する。

根拠も、何もないただの直感。だけど、間違っていないと、そう思った。

その考えに同調するかのように、心臓が高鳴った。

「わかった。協力するよ」

「ほう」

意外そうに、マガミが声をもらした。自分から誘っておいて、失礼な奴だな。

「真琴は、それでいいの？」

俺を気遣うように、沙耶の手が肩に添えられる。その手を握り返

し、俺は沙耶にうなづいて返した。
大丈夫。

「……わかった」

しぶしぶ、といった風に沙耶は一步だけ後ろに下がった。

「いちゃついているところ悪いが、本題に入っても良いかの？」

マガミの呆れた声に、俺は気まずそうにしながら振り返る。

「それで、俺は何をすればいいんだ？」

「お主等には、我の手駒となるような者を探してきてもらうつもりだの」

要するに、スカウトってことか。

「でも、俺はマガミたちの思想とかそういうのぜんぜん知らないぞ？」

「わかっておる。言ったであろう、探してもらうつと」

「つまり、真琴の眼が目当てってことね」

「うむ。詳しいことは、嬢ちゃんに聞いておくといい。お主自身にとっても、悪い話ではないと思うので」

俺の疑問を察知してか、マガミは俺が口を開く前に告げてきた。
むう、帰ったら沙耶に詳しく聞くとしよう。

「用件は以上だの。お主等に一任する作業は、追って使いのものを
出そう」

マガミが手を上げると同時に、俺たちの姿が薄くなっていく。よ
うやく、家に帰れるみたいだ。

「ああ、そういえば」

マガミが立ち上がり、薄れていく俺たちのそばによって来る。

「契約を交わすのを忘れておったの」

「んむっ！」

「なっ、ちよっ！　んなあああああっ！」

沙耶の絶叫が、耳元で響く。ああ、叫びたいのは俺も同じだ。
突然、顔を掴まれたと思ったらいきなり口を奪われたんだから。

「——我が名を刻む。我との契約は我が身が果てようとも有効であ
り、

未来永劫過去永劫、果たされぬことはない。我との盟約を守れ。さ
すれば——」

迷いなく紡がれていた言葉の最中に、マガミは少しでも躊躇を見
せた。

その間も、俺と沙耶の身体はどんどん薄くなっていく。死ぬわ
けではないけれど、どこことなく嫌な気分だな。

「さすれば汝は……………」

消えていく中で、最後にそんな言葉が聞こえた。

真琴たちが消えた部屋。マガミは、自嘲する。

「まったく。我は、何を期待しておるのだろうか」

最後に告げた言葉。あれが、真琴に聞こえていたかどうかはマガミにはわからない。わかるのは、自分と真琴の間に作られた理力の流れ。ただそれのみ。

ふと、マガミは真琴と出会ったときのことを思い出していた。

あの時。真琴が、マガミが利用していた神子と対峙し、そして打倒されたその瞬間を。マガミが神子の心臓を真琴に与えたのは、ただの気まぐれだ。矮小な、それも未成熟な人間が成し遂げた奇跡に対する報酬。それだけだった。

「縁と言つのは、わからぬものなの」

だからこそ、面白いが。胸中でつぶやいて、マガミは鈴を鳴らす。

「お呼びですか？」

どこからともなく現れたのは、巫女装束を身にまとった若い女。長い髪が床につくこともいとわずに、土下座かと思間違うほどに低姿勢でマガミの前に膝をついた。

「先の会話、聞いておったろう。お主に任せていた人材探し、あの者に引き継いでおけ」

「――」

巫女服の女性は答えない。

「下がれ」

だが、マガミはそれ以上は言葉をつむがずに女性を下がらせる。女性もまた、一度だけうなづいて無言で去っていく。

再び誰もいなくなった部屋。マガミは、自分用に作り出した椅子に腰掛けて眼を閉じる。近いうちに、真琴を強化するために呼び寄せることを考えながら。

「ごめんなさい」

はたから見れば、今の俺の格好は浮気がばれた男って所なんだろうな。

だって、トランクス一枚で沙耶に向かって土下座してるんだから。

「ねえ真琴」

不機嫌そうな声が、頭上から聞こえた。

「何で、マガミと契約したの？」

答えようと、頭を上げた俺の目に入っただのは、不安そうに揺らぐ沙耶の瞳。たくつ、俺は馬鹿か？ いや、馬鹿だ。

「一言で言えば、沙耶のため、かな」

「ウン」

「嘘じゃないよ」沙耶の身体を少し強引に抱き寄せる。少しだけ抵抗したが、沙耶は直ぐに俺に体重を預けてくる。

「俺さ、すごい弱い上に人間だろ」

沙耶の、艶やかな髪をいじりながら言葉をつなげる。悪いが、沙耶の返事は待たない。

「長くても後、八十年も生きれば俺は死ぬ」

死ぬ。という言葉に、沙耶の身体が少しだけ震えた。

「夜刀神との戦いだって、運よく生き返れたけど、次もマガミが力を貸してくれる保証はない。もしかしたら、再生できないくらいに殺される事だってある」

俺の存在を感じようとするかのように、力強く抱きしめてくる沙耶を俺も強く、抱きしめる。

「でもさ、神——それも俺を生き返らせることが出来るくらい強力な神であるマガミに報酬をせびれる位に結果を出せば、もしかした

「俺を神子かあるいは妖怪化する方法を教えてくださいませんかもしない」

「でも、それは――」

沙耶が、不安そうに見上げてくる。だったら俺は、それを吹き飛ばすほどに笑顔を作ろう。

「人間でなくなれば、俺は簡単に死ななくなる。肉体の弱さも克服できる。寿命だって、延びる」

沙耶と共にある。そのためならば――

「俺は、どんな時だって沙耶というよ」

人間である事だって捨てられるし、神だって利用してやる。潤んだ瞳を伏せた沙耶を撫でながら、俺はそう決意した。

二十五話 心霊写真の鑑定

あの日。夜刀神との戦いがあった日から、ちょうど一週間。ようやく学園が再開した。夏休みが一週間削られたけど。

そして今日は、班ごとに分かれての霊能力を実際に扱う授業だ。まあ、一年の一学期だからやるのは心霊写真の鑑定とかそれくらいだけ。

ちなみに、沙耶が授業に参加すると生徒たちの練習にならないと言うことで、今は教室の隅っこでゲームをしている。

俺の班員は矢口君と臼井さんの三人だ。矢口君と俺の机をつなげて、三人で配られた写真の選別を行っている。

「候補は絞り込めたかな」

矢口君の前に広がっているのは、七枚の写真。あらかじめ配られていた写真は三十枚で、その中から一枚だけ心霊写真を見つけ出すのが今回の授業の趣旨だ。

「……………ん」

確かに、選ばれた七枚はどれもが加工した写真には見えないほどにリアルだ。だが、俺には何かが引つかかる。

「どうしたの？」

「ん、と。俺はこの写真が心霊写真だと思う」

臼井さんと矢口君に見えるように、手に持っていた写真を見せる。俺が選んだのは、一枚の、普通と表現しても良い写真だ。

写真に映し出されているのは、一組の家族。二十代前半と見られる夫婦と、肩車されている三歳ほどの男の子が公園と思われるところを歩いている写真だ。

「これは、違うんじゃないか？ 何も写っていないじゃないか」

「そうね。これだけが何も写っていないなら怪しいけど、他にも普通の写真はあったしね」

二人は反対のようだ。確かに、一見するとこの写真に妙な物は写っていない。だが、俺には何かが引っかかる。

「まあいいや。とりあえず、それも含めて八枚を見比べなおしてみようぜ」

候補から外した写真をまとめて端におき、八枚の写真を机の上に並べる。

八枚の写真は左から順に、身体の一部が書けた写真が二枚。人の顔と思われる物が写った写真が三枚。手などが不自然な位置に写っている物が二枚。そして、俺が選んだ写真だ。

「さてと、この中から選ぶわけだけど……どうやって霊視すればいいんだ？」

それは俺も思った。確かに、霊視では対象の過去を見ることが出来る。だが、今回対象となるのは写真だ。写真を撮った人の思いは辿れても、写真に撮られた人の思いはわからない。

仮に、写真を撮った人が被写体となった人達を恨んでいたりすれば話は別なのだけど、そんな写真はここにはない。

「別に、靈氣がこもってたりするわけじゃないし……とりあえず靈視してみる？」

「そうだねっと……」

三人が同時に、写真に対して靈視を行う。が、そこにあるのはやはりただの写真だ。

いや、いくつか違う写真がある。これは、写真になった経緯が違うのか。

「となると……」

つぶやいて、千里眼による過去視を行う。考えが正しければ、これはパソコンで加工した写真だ。

千里眼による過去視は、刑事ドラマとかで監視カメラの映像をチエックするのと同じ要領で、何度も何度も映像を繰り返し再生する。そして、気になったところで一時停止を押すのだ。

結果見えたのは、浅井先生がパソコンの前で画像を編集しているシーン。残念ながら、それ以上は辿れなかったがこれだけでもこの画像が作り物だと判断するには十分だ。

「これは、合成写真みたいだね」

「こっちもね」

俺と臼井さんが選んだ写真をまとめて、机の端、先ほどの写真の山の隣に重ねておく。

残りは二枚。俺が選んだ写真と、憤怒の形相をした顔が映っているカップルの写真だ。

「こっちのほう、在り来たりな心霊写真だよな」

「たしかにね」

仲むつまじく肩を組む若いカップル。そのうち、男のほうを鬼のような形相で睨みつける顔——あまりに歪んでいて、性別まではわからない。

その表情から伝わってくる感情に、ゾクリと背中が震えた。

この写真に写っている顔の主が、悪霊であれ生霊であれ、男に対して明確な害意を持っているのは間違いない。

「それで、雪村はこっちが気になるんだよな」

念を押すように問いかける矢口君に、首を縦に振って答える。

「そうね……加工した感じはないけれど、心霊写真って感じもしないわね」

「それは、俺もそう思うんだよ」

俺の答えに、二人はキョトンとした顔を作る。そんなに変なこと言っただけかな。

「お前なあ、それじゃあ何でこの写真が気になるなんて言っただよ」

「何処がつて、言われるとわからないのだけど、この写真に違和感を感じるんだ」

写真に写っているのは、普通の家族だ。並んで歩く夫婦が笑いあ

い、小さな男の子が父親と母親に挟まれて笑っている。
幸せそうな、家族の写真だ。

「……あつ、わかった」

写真をながめていた臼井さんが、声を出す。

「どれが本物かわかったのか？」

少し興奮した様子で、矢口君は臼井さんに問いかける。

「ちよつ、そんなに顔を近づけないでよ。そうじゃなくて、この写真の違和感がわかったって言ってるの」

「よく見て」と、前置きしてから臼井さんは写真を俺たちに見えるように置いた。

「普通、写真を撮る時ってカメラのほうを向くでしょ」

「あつ」

確かにそうだ。人物を写真に撮る場合、被写体となる人はカメラへと視線を向ける。だが、この写真に写っている人達は思い思いの人物に向けている。

「案外、この写真は盗撮した物なのかもね」

なるほど。言われてみれば、確かにそうだ。

「でもさ、これが心靈写真だって根拠にはならないか？」

「それは、そうね」

確かに。違和感の正体は説明できたが、それがそのまま心靈写真だと証明するものにはならない。

これが、普通の家族写真だったら引っかけりすら覚えずに除外していたはずだ。現に、配られた中には普通の写真だつてあつた。

何かの意図があつて配られたのではないか。写真を眺めながら、そんなことを考えていた俺は、あることに気がついた。

可能性はゼロではない。だが、高くもないと思う。

「はあ、どうやって証拠を得ればいいんだか」

矢口君は、背もたれに体重を預けてそんなことを言った。

心靈写真だという証拠。真贋の鑑定において、それがもつとも重要なポイントだ。それを得られれば、この写真が——俺の考えが正しいと言つことを証明できるのだけだ。

「いつそ、目の前に行ければわかるんだけどね」

目の前に、被写体たちの前つてことか。そこに行く……

「それだっ！」

眼を丸くする二人を無視して、俺は靈視を行う。

勿論、その場に——過去に戻ることは出来ない。だが、過去を見ることは出来る。

靈視の制度をあげる。

遠くを、過去を見る千里眼形の靈視。

物体の透過、感情を読み取る透視系の靈視。

その二つを同時に発動させる。

写真の原点はフィルム。そこを起点に、フィルムに映像が映る前に、周辺の情報を探る。

頭痛がする。眼が痛い。あふれ出る情報を、一つずつ丁寧に選別する。

クラクラと、頭が揺れる。

感情が、あふれ出してくる。気持ち悪い。目線を動かす。視るのは、ピントの先ではなく、フィルムに焼きつくその一瞬。そこに写る感情こそが、答えだ。

「っ、はあ、はあ………見えた」

「何がだって言うか、大丈夫なのか？」

「うん……大丈夫。それよりも、これが本物の写真だ」

言って、俺は机に置かれた写真を指差す。

「根拠は何？ 適当に選んだ写真だと、先生は受け付けてくれないわよ」

呼吸を整えるのを待って貰い、白井さんの疑問に答える。

「見たんだ。この写真の顔が、フィルムに焼きつくその瞬間に、思っていたことを」

作られた画像なら、感情なんてものは存在しない。そして、この顔の主は異常と言えるほどの敵意を持っていた。

「方法は単純に、二種類の霊視を同時に行ったんだ。それで、フィ

ルムに焼きついた感情を読み取った」

「ちよっ！ そんなことできるのっ！」

「情報が多すぎて、きついけどね」

「ああ、だからあんなに辛そうにしてたのか」

納得がいったと、うなづく矢口君とは対照的に臼井さんは少しだけ無然とした表情を作る。

「…まあ、いいわ。それじゃあ、この写真を提出しましょうか」

結局、怨念じみた顔が映っていた写真が本物だった。もう一枚の俺が選んだ写真はただの家族写真だ。

たとえ、真ん中に写っている子供が幽霊であったとしても。

「なあ、雪村。ゴールデンウィークの予定って空いてるか？」

「ん、まあ…今のところ予定はないよ。沙耶は？」

「ん、私もないよ」

充電器につないだ携帯ゲームをプレイしながら、沙耶は答えた。

「ならさ、ちよっと付き合っで欲しいところがあるんだ」

急にまじめな顔つきになり、矢口君はあたりを伺う。

「とりあえず、詳しいことは放課後にでも話す。最悪、話を聞いてくれるだけでもいいから」

「ん、わかった」

俺の返事を聞いて、矢口君は教室から出て行く。トイレとは逆方向に曲がったみたいなので、別の用事だろう。

「何もないと良いけどね」

「無理ね」

だよなあ……まあ、マガミに頼まれていることもあるし、なるべく協力して恩を売っておこう。

二十五話 心霊写真の鑑定（後書き）

いつも読んでくれてありがとうございます。

作者の日高正平です。前回予告した、記念の番外編ですが、書いているうちに内容が濃くなりすぎましたので、もう少し膨らませて前後編くらいの短編で投稿したいと思います。

楽しみにしていただいた方には、申し訳ございませんが、今しばらくお待ちください。

ちなみに、内容のほうは真琴と沙耶が学園に通う前に起きたことです。

二十六話 休み中のこと

時間は少したどり、学園が再開されるまでの臨時休暇——その最終日。

表通りを外れた薄暗い路地でひっそりと経営している喫茶店。店舗名は、立地条件がそのままに隠れ家。

店内は狭い。椅子の数は十ちようど。カウンター席に六脚とテーブル席に四脚だ。テーブル席のほうは、狭い店内の奥のほうにひとつ設けられている。

その席に三人。巫女服姿の女性が壁際に、ノースリーブの白いセーターを着た女性がその正面に座り、青いジーンズとチェックの力ッターシャツを着た少年が座っている。

雪村真琴と沙耶。そして、

「まさか、神谷先生がマガミの使いだなんてね」

人の縁はわからないものだ。真琴は胸中でつぶやいた。真琴の斜め向かいに腰かけた神谷一姫に、苦笑いを向けた。

「私としては、雪村がマガミ様にお会いしていたことがあると言うほうが驚きだな」

対する一姫も苦笑いで返して一口、甘めのカフェオレを口に含む。巫女服でコーヒーをすすめるその姿はなかなかシユールだ。

「どうでもいいけど、いい加減に本題に入ってくれない？ これからデートなんだから」

デートと言う単語に少しだけ一姫は眉根を寄せる。が、それ以上

の表情の変化はなく、また一口、カフェオレを飲んだ。

「わかった。だがその前に、我々の組織形態について説明しておこうか」

「組織形態？」

そつだ。とうなずいて、一姫は続ける。

「基本として、マガミ様がトップなのは当然だが、その下だ。我々は――縦の繋がりはあっても横のつながりは存在しない」

一姫の説明が分かりづらいのか、真琴と沙耶はそろって小首を傾げる。

揃いも揃って、まったく同じタイミングで同じように動いた二人に一姫はまた、眉根を寄せた。

「そうだな……直属の上司は誰だかわっているが、同僚は不明と言った感じが。具体的にいえば、雪村の上司に当たるのは私の予定だから、お前は私に仕事の結果や問題を報告する。だが、私はお前に他の人員については一切教えない」

「つまり――あんた以外の誰がマガミの下っ端だか教えてくれない、と」

一姫の言葉をさらに沙耶が簡潔――と言うにはいささか乱暴だが、まとめた。

「そういうことだ。雪村には、基本的に一人で活動してもらうことになる」

少しだけ一人の部分を強調して一姫は言った。

「俺が、自分で人員を確保する分には良いんですね？」

「必要ならな。その場合は、事後でもかまわんから私に報告しろ」

返答を聞いてから、真琴は目線を沙耶に向ける。また、一姫の眉根が動いた。それも二回。

「わかりました。それで、僕は具体的に何をすればいいんですか」

「端的に言えば、人探しだ。マガミ様が仰っていたように、我々は戦力を求めている。雪村は、使えそうな人材を探しだし、私に報告しろ」

だから人探しか。と、真琴はつぶやいてうなづく。

「探してくる人材に条件はないの？」

「強いこと、くらいだな」

「酷く曖昧な条件ですね」

苦笑する真琴に、一姫は困ったように微笑んで足もとの巾着から一枚のデータディスクを取り出した。

「とりあえず、私が探した人材の詳細なデータをここに入れておいた。これを参考にしてくれ」

「わかりました。……話は以上ですか？」

時計に視線をやりながら、真琴は問いかける。一姫の対面に座る沙耶などは、目に見えてそわそわとし始めた。

「まあ、確かに必要事項は伝えたが……」

一姫が言った瞬間、沙耶の眼があやしく輝く。擬音にするならば、キュピーンって感じのあれだ。

「なら、私たちはデートに行くから。デートに」

大事なことなので二回言いました。と、沙耶は言って勢いよく喫茶店のガラス戸を開く。

「失礼しますっ！」

遠ざかっていくせいか、徐々に小さくなる真琴の声だけを残して二人はあっという間に遠ざかってしまった。

「……………」

ぼつねんと喫茶店の片隅に残された一姫は、ほかに客もいないのに体裁を取り繕うように一つ咳をして、すっかり温くなったカフェオレを一気に飲み干す。

一息。穏やかな時間が、一姫の周囲に流れる。

「——教え子に抜かれるとは、いよいよお局様の仲間入りですかね」

一姫に聞こえるかどうかというギリギリの音量で放たれた一言の

代償は、備え付けのテーブルと床が離れ離れになるだけで済んだ。

二十七話 昼休み・屋上と校舎裏

昼休み。真琴と沙耶は、春真つ盛りと言いたげに、穏やかな日差しが降り注いでいる屋上に來ていた。

出先に真琴の母が用意した弁当の中身はすでに箱から胃へとその居場所を移し終えており、真琴の手には箸の代わりに一冊のノートがあつた。

「希少能力、か」

手元で開かれたノート。そのうちのページに記された、学園に入ってから友人のプロフィールを見ながら真琴はつぶやいた。

「へえ、また珍しい能力ね」

「沙耶でも珍しいのか？」

「それは、言外に私が年を食つてると言いたいのかな？」

につこりと、とても朗らかに笑って沙耶は問いかける。が、眼は笑っていない。

「経験が豊富、と受け取っておいてくれ」

だからそんな目で見ないでほしい。

沙耶は、しばらくじと眼で真琴を睨んでいたが、無意味と思つたのか軽いため息をついて口を開く。

「先見の能力は、表だって変化の出る能力じゃないからね」

「そうだね……」

沙耶の答えを聞きながら、真琴は友人である矢口秀樹の名前が書かれた部分、そのすぐ下にある能力の名前をなぞる。

先見の眼。名の通り、先を見る眼だ。どうやって調べたのか、効果が及ぶ時間や範囲まで事細かに記されている。

「五秒先の未来を見る、か」

真琴は少しだけ、その能力に嫉妬を覚えた。

——だって、この力は俺が目指していた能力そのもの。

ふっと湧いてきたどす黒い感情に、真琴はあわてて蓋をする。でも、もしかしたら。

そんな思いに取りつかれた真琴は、隣でパックジュースのストロ―を加えている沙耶を見て、少しだけ苦笑いする。

——大丈夫。その力がなくなっただって、俺は沙耶の隣にいられる。

「んに？ ……あげないわよ」

その視線を勘違いしたのか、沙耶はジュースを真琴から隠すように遠ざける。

「いらないって」

そもそも、練乳がたっぷり入ったコーヒ―牛乳なんて沙耶ぐらいしか飲まない。と、真琴は思う。

「次は、だれだっけ」

ページを勝手にめくった沙耶が言う。

「臼井さんだね。後は、俺のいるクラスから適当に何人か」

パラパラとページが勢いよくめくられて、背表紙が表になる。記されていた名前は、そのすべてが真琴のクラスにいる面々の物だ。

「希少能力者だけ、よくもまあこれだけ集めたものね」

「確かに」

閉じられた手帳を再度開いてめくる沙耶は、記されている人数に軽くめまいを覚えた。

そもそも、希少能力というのはその名の通り絶対数が少ない。だと言うのに、この学園には真琴が教えられただけでも五十近くも在籍している。

「で、こっちが基礎能力の高いメンバーね。ああ、真琴もこっち側なんだ」

「俺の場合、個人の能力じゃなくて沙耶の評価が高いからなんだけどね」

苦笑いして、真琴は沙耶が開くもう一冊の手帳をのぞき見る。そこには、然りと雪村真琴と記されていた。

「むう、ちょっと納得いかないわね」

眉根を寄せる沙耶。それに対して真琴は、曖昧に笑って答えただけだ。

「とにかく、この資料に乗ってない実力者を先生に紹介すればいいわけだけど、沙耶はそんな知り合いいる？」

「ん……いないわね」

少し考え込むようになってから、沙耶はあっさりと答えた。

「私が脅しをかければそれなりには釣れるだろうけど、その程度のやつらは使えないだろうしね」

「それは、確かに」

恐怖による支配は、絶えず裏切りの危険性をはらんでいる。特に、組織であればなおさらだ。少数であれば、それでいいかもしれない。おとぎ話の狐のように虎の威を借る狐もいるのだから。

けれど、マガミは己の兵力——本人の言い方を借りれば手駒には忠誠を求める。唯一の例外は、気まぐれか別の思想で引き入れた真琴くらいなものだ。

「だとすると、能力の上に性格も考慮しなくちゃダメってことか」

少なくとも、虚栄心の高いやつはだめだな。と、真琴は思っている。

「まっ、今はその辺まで考えなくてもいいんじゃない？ とりあえず、実力が高いやつ優先で片っぱしから報告を上げてればいいよ」

「そうだね。っと、そろそろ昼休みも終わるか。戻ろうか？」

腕時計の針は、あと数分で予鈴が鳴ると示している。

「あいさつと、ちょっと待って」

立ち上がり、先に出入り口へと向かった真琴は沙耶が引き留める。

「どうしたのさ」

「ふふん。ここから下を見てみ？」

言われて、真琴は手すりに近づいて下を覗きこもうとして、それを見つけた。

校舎裏。裏門のあたりに二人、人が立っていた。

一人は真琴もよく知る、矢口秀樹。もう一人は、背格好から同年代だと思われる少女が一人。学園指定の服装でない以上、おそらくは部外者だ。

「放課後の要件はあれかな？」

「だね」

真琴たちが少女を見つけ数分前に、少女は校門へとたどり着いていた。

赤いチェックのスカートに黒いカッターシャツ。胸元には、赤い色の細いネクタイ。黒くたなびく頭髪を、やはり赤色のリボンで束ねている。

基本的に、赤と黒の装飾をまとった少女は、何をするでもなく裏門に立ち尽くす。

「わりい、遅くなった」

「別にかまわない」

やや息が上がった秀樹に対し、少女は全く感情のこもらない声音で返す。抑揚のないその声音は、聞き様によつては相手を拒絶しているようにも取れるが、秀樹は気にした様子もなく言葉をつづけた。

「でも、どうしたんだ？ 突然呼び出すなんて」

「気配がした」

ジッと、秀樹の眼を見つめ——身長差ゆえに多少見上げて、少女は口を開いた。

「気配？ 探してる奴のか？」

秀樹の言葉に、少しだけ考えるように小首を傾げてから少女は首を横に振った。

「違う。別の……でも」

少し口ごもって、少女は辺りをぐるりと見回す。そして、視線をまっすぐに校舎へと向ける。

「たぶん、同族」

つぶやきと同時に、何かに気がついたように視線を上へとやった。

「ん、どうした？」

つられて、秀樹も同じ方向に視線を向ける。だが、そこには何もない。秀樹の視界に移ったのは、屋上の手すりと青空だけだ。

「……………だれか見てた」

「まじかつ！ あちゃゝちょっと迂闊だったか」

大げさに空を仰いで、秀樹は嘆息する。その動作に合わせるように、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「やべっ、もうこんな時間か。悪いけど、俺はいったん戻るわ」

少女は、首を縦に一度振った。

「とっ、それとだ。協力をお願いできそうな奴に話をつけたいから、今日の放課後にもう一度ここに来てくれるか？」

「わかった」

小走りで立ち去る秀樹を視線で見送ってから、少女は再び校舎の方へと眼を向ける。

「……………」

穴が開くのではないかと言っほど見つめても、無機物である校舎の壁は変化しない。

少女がしばらくそうしていると、授業開始を告げるチャイムが鳴り響いた。

それを聞いてか、少女は何か考えるように——と言っには無表情すぎるのでおそらく何となく、空を見上げてから踵を返して帰路についた。

少女が見ていた校舎の壁。そこを飛び越えた先には、真新しい土で埋め立てられた校庭がある。

そこは、ほんの一週間前に蛇の神が息絶えた場所だった。

二十八話 放課後。喫茶店にて（前書き）

ごめんなさい。

更新するのをすっかり忘れていましたっ！

二十八話 放課後。喫茶店にて

「……カナミ。よろしく」

シュタツと手を挙げて、簡潔に自分の名を名乗った黒い服を着た少女は、それだけ言ってショートケーキを頬張り始めた。

「自分で話す気は………ないのか。ないんだなっ！」

ショートケーキを口いっぱいに詰め込んで、小首を傾げるカナミに秀樹は深くため息をついた。

「わりい、雪村——って、お前らもかつ！」

「ん、ああすまん」

あーもうこいつらはーと頭を掻き耑る秀樹を横目に、沙耶は黙々と自分の口に運ばれていくケーキを消化していく。
ちなみに、七個目だ。

「たくっ——まあ、いいや。とりあえず、簡単に説明するな。雪村は、この間学園が臨時休校になった理由は知ってるか？」

秀樹の言葉に、ピクリと真琴が反応を示す。注意深く見ていないと気が付けないほどに小さい反応だったために秀樹はそれを見落としていた。

「……ああ、詳しくは知らないけど、校舎が一部倒壊したからだろ？」

柊に聞いたと、真琴は付け足す。

「あつ、このケーキ持ってきてくれる？ ん、あんたも欲しいの？」

「んっ」

「じゃ、これも追加で」

「実はな、校舎が倒壊したのは神があ場所で暴れたからなんだよ」

声をひそめ、秀樹は聞こえるかどうかという声量で真琴につげた。当事者である真琴がその情報を知っているのは当たり前だ。

そして、表向きは学園に侵入した妖怪と伊吹の妖怪が武力衝突を起こした結果、校舎に被害が出たと言っているということも。

「神？」

だから真琴は、眉根を寄せてなにをバカなことを言いたげに問い返す。

その答えを予測していたのか、秀樹は特に気分を害した様子もなく淡々と続ける。

「言いたいことはわかる。今は、ほとんどの神様が封印されるなり監視されるなりしてるからな。ただ、まれに例外がいるんだ」

「——封印が解けた神と、新しく生まれた神のことか」

一息。ちよつと大人の見栄を張って頼んだアメリカンの味に、真

琴は少しだけ眉根を寄せる。

「そうそう。それで、校舎で暴れていたのが封印されていた神。その神を追って、新しく生まれた神がこの町に来てるらしいんだ」

「そんな情報をどこで手に入れたんだ？　少なくとも、柊は知らないようだったけど」

「くはあーっ！　やっぱり甘いものは格別よねえ。あんたもそう思うでしょ？」

「んっ、んっ」

沙耶に向けて、フォークを加えたままカナミは何度もうなづく。

「ってわけで、おかわりいーっ！」

「りー」

狭い店内に、二人の声が木霊する。

「…………いや、まあ。信じられないと思うけどさ、封印された神を追ってきた神を追ってきた神がカナミなんだよ」

「ややこしいな」

互いにひきつった笑みをしながらも、真面目に話を続ける二人。少しだけ、哀愁が漂っていた。

「それでだ、雪村にはこの町にいるはずの神を探して欲しいんだっ

！ 頼むっ！」

大きな音を立てて、秀樹はテーブルに両手をついて頭を下げる。振動で揺れたカップから、コーヒーが少しこぼれた。

「ふむ」

秀樹に請われた真琴は、即答することなく腕を組んで上を向く。今現在、真琴の頭の中ではいくつものメリットとデメリットの潰しあいが行われていた。

真琴が思いついたメリットは、秀樹の勧誘がしやすくなるか？と言うものと、場合によっては追ってとってくる神をこちらに引き入れられないかと言うあまり高くない可能性。

対してデメリットは、神とかかわると言うことは最悪、また沙耶が傷つくのではないかと言う不安。そして、追手が何を目的として夜刀神を追っていたかわからないという現状。

——最悪、夜刀神クラスともう一戦やらないといけないのか。それは避けたいなあ。と、真琴は思う。

「あと食べてないのはどれだっけ？」

「これとこれ」

「おおっ！どれも美味しそうね。よしっ、追加でこれ二つずつー」

「お願い」

図らずも、真琴と秀樹のため息のタイミングが重なった。

「なあ、雪村。沙耶さんって、いつもあれくらい食うのか？」

「そうだね、あんなものかな」

「……よく太らないな」

「変化だからね。体は自由自在に変えられるらしいよ」

諦めにも似た心境で、秀樹と真琴はちょうど十を数えるケーキにかぶり付く二人に苦笑いを向けて同じことを思った。

曰く、足りるかなあ。

「さて、頼みを引き受ける前にいくつか確認したいんだけど」

「おう。何でも聞いてくれ」

「では、まず一つ目。秀樹たちが探してる神の目的は？」

三本に立てた指のうち、薬指を折りながら真琴は秀樹に問いかける。

真っ直ぐに秀樹を見るその眼は、嘘は許さないと語っているように見えた。

——確か、目は口ほどに物を吐くだっけ。

と、間違えて覚えていることわざ胸中で反芻して、秀樹は一つ一つ思い出すように口を開いた。

「水神……探して欲しい神の名前なんだけだな。こいつは、先にこの町にきた神を自分の配下にしたらしい」

確認するように隣に座るカナミに秀樹は視線を送るが、それに気づかないで黙々とケーキを口に運んでいた。その態度に、秀樹はが

つくりと肩を落とす。

対して真琴は、見た目には平静を装ってミルクと砂糖を入れた元アメリカンコーヒー、現在はカフェオレを口に含む。

ただし、見た目に反して内心は荒れに荒れて秀樹からの頼みを引き受ける可能性が、元々少なかったそれがバブルが弾けたかのごとく急降下していた。

断ろうかとも思った真琴だが、とにかく聞きたい事を全て聞いてからにしようとカップをソーサーの上に置き、中指を折った。

「次は、相手の戦力だな。どの程度の力があるのかわかるか？」

「いや、悪いけど比較できるものがないからどの程度ってのは言えない。たぶん、学園に来たっていう神よりも強いんじゃないか？」

たぶんだけど。と、秀樹はもう一度念を押す。もともと、真琴のやる気はそれにかかわらずにどんどん下がっていく。やる気は暴落寸前だった。

「それで、最後の質問は？」

その気配を悟ったのか、秀樹は真琴に先を促してくる。真琴は、仕方なしに最後の問いを問いただした。

「俺たちに危険は？」

半ば答えを予測しながらも、真琴はその問いを言葉にしながら最後の指を折った。

「安全の保証はできない」

間を置かずに答えた秀樹に、真琴は呆れたと言わんばかりに息をつく。

「それでよく頼む気になったね」

完全に温くなったカフェオレを、真琴は一気に飲み干す。

「じゃあ、引き受けてくれないのか？」

「ふむ」

——だろう。

聞いた限りでは、デメリットの方が強すぎると真琴は考えている。だが、メリットもある。

「ハイリスク・ハイリターンか」

メリット部分の神を手中に入れられる可能性と、デメリット部分の沙耶を傷つけないという部分が揺れ動く。

真琴個人としては、沙耶が簡単にやられないと言うのは理解してはいるのだが、やはりそこは惚れた弱み。不用意に危険にかかわらせたいとは真琴も思っていない。

「あつ、そうだ」

不意に、真琴には閃いたことがあった。ただ、それを行うにはマガミの協力が必要だった。

「とりあえず、夜にまた連絡するよ。ちょっと、確認したい事が出来た」

「わかった。わりいな、無理言って」

秀樹は安堵の息をついて、グラスに注がれた水を飲み干す。のどが渴いていたのか、溶けて小さくなった氷まで口にいれて噛み砕いた。

「ん、まあ気にするなよ。それに、まだ了承したわけじゃないからさ」

実際、真琴はマガミの協力が得られなければ話は断ろうと思っている。

「いや、こうして話がでただけでもよかったよ」

照れくさいのか、そっぽを向いて話す秀樹に真琴は苦笑した。それで、話がひと段落したのか束の間の沈黙が流れる。それを打ち破ったのは、沙耶だった。

「もう一周いつとく？」

「んっ」

カナミも嬉しそうに何度も首を縦に振る。

「いい加減にしろーっ！」

総額、一万四千二百円なり。

二十九話 真琴と一姫の夜

「無理だの」

開口一番に、マガミは否定の言葉を口にした。

「ん、でも神を傘下に入れられるなら多少のリスクは仕方がないだろう?」

「確かに、下手な妖怪を数十集めるよりも働きは期待できるがの」

「だろ。だったら、やってみる価値はあるんじゃないか」

何処とも知れぬ暗闇の中、声だけが互いの間に行きかっている。

「そう急くな。なにもリスクのことを考えて反対しておるわけではないのよ」

少しの間が空いて、空間に一人の女が現れる。

白いサマーセーターに、青色のフレアスカート。ふわふわとカールのかった髪を持つ、おしとやかそうな女性だ。

「この人が、水神?^{みずがみ}」

「そうなの」

真琴は、内心で抱いていたイメージと違うことに驚いていた。見た目だけで言えば、水神は保母や主婦といった印象が良く似合う。

「我も、生まれたての神には話を持ちかけておる。だが、連中は目的意識が強すぎ色よい返事は貰えずじまいよ」

その時のことを思い出しているのか、苛立ちを含んだ声が真琴に届いた。

「特に、こやつは面倒な性質での。弱者を救うことに意義を見出しておつての。以前、誘いをかけたときもどこぞかの孤児院で保母だかをやつてたの」

「あー、うん。マガミとは相性悪いな」

強いということを好むマガミに対して、弱気を守ろうとする水神の考えは理解できないのだろう。それを理解した真琴は、胸中でため息をこぼした。

「つまり、個人的に誘いたくないって所か？」

「……………否定はせぬよ」

ふてくされたような声に、真琴は知らず知らずのうちに苦笑する。もつとも、その姿は誰にも見ることは出来ないが。

「まあ、個人の問題だろうから俺はどうでもいいけどさ。水神の性質がそれだとすると、夜刀神なんか配下にしようとするのかな？」

真琴は、夜刀神の気性の荒さを思い出しながら疑問を口にした。マガミもそれは気になるのか「ふむ」と口にしてから考え込むように押し黙った。

「そうなの、何か戦力が必要な状況が出来たのか、あるいはカナミと言ったか？ そやつが嘘についている可能性のどちらかかの」

二つの可能性のうち、真琴はまずは前者に興味を持った。

「なあ、水神がいたって言う孤児院の位置はわかるか？」

「いや、そこは我が調べさせておく。お主はカナミとやらを探れ」

「わかった。細かい判断は、こっちでやっていいか？」

「構わぬよ」

それっきり、声は聞こえなくなった。

深夜。大守学園の校舎前に人影がふらりと一つ、校門前にたつ。

人影は、無言で校門へと手を伸ばす。

激しい音と共に、電光が人影の手を弾き返した。

結果。それも、かなり強固なものだ。

「……………」

人影は、弾かれたときに火傷を負った指先を口に含み――

「っ！」

噛み千切る。
零れ落ちる鮮血。

「――」

不可思議な言葉が吐き出されると同時に、滴り落ちていた血が何もない空間に踊る。

人影が手を振るうと同時に、踊っていた血が結界へと突き刺さった。

紫電を撒き散らす結界。人影は、両の手を開いて胸の前でぶつ合う。

結界へと刺さっていた血の数は十。その全ての点が、線で結ばれていく。

数秒と待たずに全ての点は線で結ばれ、結界に穴――丁度、人影が潜り抜けられる大きさを作り出す。

人影はその穴を潜り抜け、真っ直ぐにある場所に向かう。

真新しい土の上。夜刀神が没した地の上に探るようにしゃがみ込む。

「だめ、か」

つぶやき、頭を振って立ち上がろうとした瞬間――

「っ！」

跳躍。地面へと、矢が刺さる。

人影は、一息で屋上へと飛び上がり、校庭を見回す。

動くものはない。だが、人影は襲撃者の位置を性格に読み取った。再び跳躍。人影は、真っ直ぐに対面の校舎へと向かった。

「まずいな」

番えていた矢を外し、神谷一姫は無人の廊下を真っ直ぐに駆ける。廊下の端。数歩でその場にたどり着いた一姫は、矢を番えて敵を待つ。

破砕音。コンクリートの壁と窓ガラスを切り裂いて人影が廊下へと躍り出る。

人影は片手と両脚でブレーキをかけて、真っ直ぐに一姫へと視線を向けた。

一秒にも満たない刹那の時間。一姫と人影の瞳が交差する。

「っ！」

その一瞬で、一姫は自分が人影に敵わないと理解した。だが、それでも一姫は鏃を構える。

風を切る音は一つ。しかし、放たれた矢は三つ。撃ち、番えてまた撃つ。一姫が同時にこなせるのは、三度までだった。

狙いは三点。頭部、心臓、右足。

人影は、迫り来る矢を見据えながら両脚に力を込めて、弾ける。

初動。身体を捻り、矢を避けて廊下の壁へと足を突く。

その勢いのままに天井へと跳ぶ。

一姫は矢を番えて放つ。狙うは人影の動く先——だが、人影はさらに速い。

「おのれっ！」

恨み言を吐いて、一姫は弓を手放して無理やりに体制を崩す。

左斜め下から一姫の身体をかすめる様に、線が走った。

一姫は左手に力を込めて身体を支え、空いた右手で懷に手をお突っ込む。

取り出したのは、刃渡り十センチほどの短刀。

鞘を口に咥えて短刀を抜き、一姫は人影の首へと振るう。

一姫は一つ、間違いを犯した。だが、そのことを予め知っておけると言つのも酷な話だ。

一体誰が予想できようか。生身の肌に、刃が通らぬなどという現象を。

「なっ、に」

驚愕に歪む一姫の顔。対して、人影は顔色一つ変えずに手にした得物——一姫の持つ短刀の数十倍は長さがあるのかという刀を構えなおす。

刃は一姫へと振り下ろされた。

三十話 深夜のフライト（前書き）

すみません、更新するのを忘れてました！

三十話 深夜のフライト

夜空を舞う一羽の怪鳥。地上で光り輝く光をさえぎり、漆黒の翼を羽ばたかせる。

「もっとスピードは出ないかつ！」

「だせるけど——一姫が持たないわよ！」

風の音に紛れて交わされる真琴と沙耶の声。切羽詰った声だ。沙耶の広い背中の上に仰向けの一姫がいた。多量の血で、沙耶の背中を赤く染めながら。

今から数分前のこと。

『今すぐ学園に行き、私の元まで一姫を連れて来い！』

風呂上り、いきなり頭の中に響いた声に真琴は怪訝そうな顔をした。

「無視すれば？」

「いや………学園に行ってみよう」

マガミの話し方に余裕がないなど、不思議に思った真琴は渋る沙

耶を伴って学園へと急ぐ。

沙耶に担いでもらい、数分で学園にたどり着いた二人は啞然とすることとなった。

「あら、もう壊れてやんの。手抜き工事かな？」

「そんなわけないだろ。とにかく、様子を見に行こう」

欠損した校舎の壁から中に入り、真琴と沙耶は周囲をうかがう。すると、沙耶はぴくぴくと鼻を動かし始めた。

「ん？　なんか、血の匂いがする」

沙耶は、妖剣を取り出しながら言う。直前までのちゃらい様子はなく、狩猟者の如く気配を隠し、神経を細く研ぎ澄ませている。

「——やばっ！」

霊視で、理力の流れと建物周辺にいる人影を探っていた真琴が走り出す。

向かうは廊下の端。そこに、血にまみれた神谷一姫が倒れていた。

「せんせっ——」

傷は深い。いや、致死とわかる傷だ。

女性らしい豊かなふくらみの中心から、左腹部に向けて走る一本の赤い線。

リノリウムの床は、バケツをひっくり返したかのように赤く染まっている。

無理だ。諦めようとしたとき、一姫の髪飾りが碎け散った。

完全に寸断されていたと思われた傷口が輝き、逆再生するかのよう
うにこぼれた血が一姫に戻っていく。

それはまるで、真琴の再生能力のように。

「……うあ」

かすかにうめき声。辛うじて聞き取れたそれに、真琴は安堵のため息をもらす。

だが、危険な状態なのには変わらない。すぐさま、真琴は周囲を警戒していた沙耶に指示を飛ばす。

「沙耶っ！ 保健室からありったけの治癒札を！」

「わかった！」

走り去る音を聞きながら、何もしないよりはと真琴はジージャンを包帯代わりに止血を行う。

『合流できたかの』

少しだけ余裕を取り戻したマガミの声が真琴に届いた。

「ああ、止血と治癒符の準備をしてる。かなり危険な状態だ。と言
うか、視覚共有できるだろ？ それで現状を把握してくれ」

言い終えると同時に、真琴は左目に違和感を感じた。

『閉じるでない。よく見えぬであろう——思っていた以上にまずい
ようだの』

マガミの言葉に、真琴は齒痒いと言いたげに唇をかみ締める。
現状、真琴にできることは止血程度だ。何かしたいのに力が及ばない。真琴は、そのことがとても悔しかった。

「おまたせっ！ とりあえずあるだけ持ってきた！」

真琴がマガミとコンタクトを取って、数秒後。沙耶が一抱えはあろうかという治癒符を持って現れた。

「助かる——マガミ、指示は？」

治癒符を使いながら、真琴はマガミに声をかける。

『沙耶。我の下まで来れるかの？』

「行くのは余裕で——怪我人を気遣ってだと三十分ってとこね」

マガミの言わんとしていることを先読みし、沙耶は答えた。

『それでいい。真琴、お主は治癒符を使い続ける』

「わかってる」

治癒符を複数、同時に使用しながら真琴は答える。止血を行いながら、空いている手で治癒符を使う。

「なあ、姿を変えるならここじゃあ狭くないか？」

「大丈夫——」

言って、沙耶は窓際に近づく。

「これだけ壊れてるなら、もう少し増えても問題なし！」

壁が質量に負けて碎かれる。土煙の舞う中、巨大な黒色の怪鳥が夜空に舞い上がった。

「血の匂いに寄せられてきたか」

沙耶のつぶやきは、風に紛れて真琴には届かなかった。

目的地までは後二分少々。多少の前後はあるが、沙耶の目測だとそれくらいだ。

「よりによってこのタイミングで」

眼だけで背後を見る。

後方——距離にして百メートルほどの所に一つの群れがあった。

数は二十。一固体の大きさは、沙耶の半分にも満たない二メートル弱。黒い翼と黒いくちばし。真っ黒な瞳は、一心不乱に沙耶を射抜く。

カラスの妖怪だ。

「しかも後輩連中とか——はあ」

沙耶もまた、カラスの妖怪なのだから後輩という表現は言い得て妙だった。

『いらん連中までついて来ておるようだが、土産かの？』

『煮ても焼いても美味しくないけどね』

聞こえてきた声に、沙耶もマガミと同じ方法で返す。念話というのは本来、今の二人の使い方が正しいのだ。真琴のように不慣れな者が扱う場合は、口に出したほうが伝わりやすいが。

残り一分強。距離は、八十メートルにつめられている。

『止む終えぬの』

マガミの声が止む。同時に、目的地が一瞬だけ輝く。

「真琴、つかまってて！」

水平に飛んでいた沙耶は、翼をたたみ目的地へと滑空を始める。

「つつく！」

速度が急に上がり、身体にかかる衝撃が強くなった真琴は辛そうに顔を歪める。だが、治癒符は意地でも離さない。

地上。

マガミが主に寝泊りしている神社——だった場所。その境内に、マガミは立っていた。

「力を使うのは久方ぶりの——」

自分のほうへと滑空してくる沙耶たちに対して、マガミは半身を向けて両手を握りこぶし上のままあわせて突き出す。

半月を描くような青白い弧が、マガミの眼前に作り出される。

「二十といったところかの」

あわせた手のうち、右手を真つ直ぐに伸びるまで引き絞る。

右手の軌跡に合わせて引かれる線は、青白く輝く。

神力により作り出された弓矢。輝きを増し、薄暗かった境内を照らし出す。

「貸しにしておくで——必ず返せよ！」

沙耶に聞こえるように声を張り、握った右手を勢いよく開く。

矢が放たれる。

夜空へと上って行く矢は途中で幾重にも分かれ、不可思議な軌道を取って飛ぶ。

青白い線は、沙耶たちを避けて背後に迫るカラスの妖怪達の中へと踊りこんだ。

赤い飛沫が方々であがった。青白い軌跡が通るたび、金切り声の悲鳴が上がる。

「えげつな」

流し目でそれを見た沙耶は、そうつぶやいて境内へと舞い降りた。速度はマガミが矢を放つのを確認した瞬間に落としていた。

「あの程度の連中は、どうでも良かるう。それよりも、一姫を中心に運べ」

「わかった」

ずっと治癒符を張るのに専念していた真琴は、先の青白い線がな

んなのかを理解していないようだが、緊急時にそれを尋ねるほど空気が読めない人間ではない。

慎重に抱きかかえて、真琴は一姫を古びた神社へと運び入れる。沙耶は、それを見送ってから人型へと姿を変えた。

「あれじゃあ、生きてるのはいいのかな」

見上げた先には、すでにカラスの群れはない。沙耶自身、マガミが打ちもちることがあるとは思っていなかったが。

「ん」

開け放たれたドアから中をのぞく沙耶。中では、真琴が忙しなく動いている。おそらく、マガミの手伝いだろう。

沙耶は神社の反対側。石段へと視線を向ける。

「久しぶりに、里帰りでもしていようかな」

何気なくつぶやいて、沙耶は石段へと歩いていった。

三十話 深夜のフライト（後書き）

今回の更新後、この小説に手直しを入れて生きたいと思っています。
なるべく週一更新を守れるようにしますが、遅くなることもあるか
と思いますのでご容赦願います。

三十一話 夜の会合（前書き）

今回は、やたら説明文が多い気がします。

一応、本作におけるラスボスの名前が明らかになる回なのですが……
とうとうすぎましたかね？

三十一話 夜の会合

「——やっぱり、誰もいないんだ」

廢墟。使うものがいなくなり、朽ちるに任せていた家屋から出てきた沙耶は寂しそうにつぶやいた。

「当たり前であろう。我が人の出入りを制限しておるからの」

そんな沙耶に声をかけたのは、マガミだ。数刻前までの忙しさが嘘のように余裕に満ち溢れている。

「もう治ったの？」

「うむ。治療術に長けた者が到着したので、そやつに任せてきた」

「むっ、女じゃないでしょうね」

「くつくつくつ——安心せい、男じゃよ」

忍び笑いをもらして、マガミは沙耶に答える。

しばしの静寂。

春の夜風が、二人を撫で付ける。

「——まだ、後悔しておるのかの？」

不意に、マガミが口を開いた。主語のない問いかけ。けれど、沙耶にはその意味することが理解できた。

「当たり前ね……数少ない、友達だったから」

空を、あるいは遠くを見て沙耶は答える。昔…三年ほど前の話だ。

この地で真琴と沙耶と、マガミはある神と戦った。新しく生まれた、人間を、人間だけを憎む悪神。

その名を、過神^{かしん}と言った。

過神が生まれたきっかけ——全ての始まりはこの村に、温泉が見つかったことだった。

温泉が見つかることは、この国では珍しいことではない。それこそ地面を掘り続ければ、掘り当てることが出来るほどだ。

それゆえに、井戸を掘ろうとして温泉がでたこと自体はそれほど騒がれることはなかった。

問題は、その温泉の泉質が誇れるほどには優れていたこと。そして、この村の財政が破綻寸前だったこと。

二つの偶然が重なって、村の役員たちは一つの決断を下した。それが、リゾート計画。

温泉旅館をヒットに、娯楽施設を増やしてこの村の再生事業にしようという案だ。

村の今後に不安を抱いていた大人たちはこぞって賛同し、逆に長くこの村に住んできた老人たちは反対の声を上げる。

それだけならば、何処にでもある問題だった。ただ、反対するものの中にとある少女がいて、老人たちにはある手段が残されているのを除いて。

強硬手段にでた村の役員たちに対抗して、老人たちが取った最悪の一手。

神子としての素養が高かった少女に神の断片を埋め込み、新たな村の守り神となす儀式。

儀式の結果、この村には人がいなくなった。

失敗したわけではない。ただ、老人たちが望むものとかけ離れた

モノを作り出したただけだ。

愚かしくも、老人たちの望むとおりに動くように少女の心を壊そうとしたせいで。

「もしも、って言うのはあまり好きじゃないけどさ」

八つ当たり気味に、腕が振るわれる。

相応の力を込めて振るわれた腕は、目前に立っていた廃屋をなぎ倒す。

「あの時、儀式を止めていれば——私が儀式の前に行われたことを知っていればあの子は死ななかった！」

沙耶と真琴が、リゾート計画反対のビラを配りに町まで行っている間に行われた儀式。

二人が、過神と化した少女とであった時、沙耶だけが気がつけた。少女に行われた儀式の全貌を。

老人たちが求めた守り神は、自分たちにとって都合よく動いてくれる存在だ。だから、少女の心は邪魔だった。

正義感が強く、少々潔癖症なところがある少女の心が。

だから、壊した。

少女を陵辱し、辱め、犯した。

でも、少女は壊れなかった。ただ一つ、心のうちに人間たちへの憎悪を抱いたままに儀式へと望んだ。

「まあ、祟り神である私の断片を使うのだ。まともな精神状態でも、成功したかどうかは怪しいがの」

マガミとて、封印されていなければ断片を使わせるようなまねはしなかった。無論、少女の身を氣遣ってではない。ただたんに、自

分の身体の一部を好き勝手に使われるのが気に入らないだけだ。

兎角。生み出された過神はその怨嗟に身を委ね、手当たり次第に人を殺して回った。

生まれたてとはいえ、神の一部を使って生み出された神。生半かな力では太刀打ちできず、たやすくこの村は終焉を迎えた。

結果だけを語るならば、以上がこの村で起きた惨劇だ。

その後、マガミの力を借りて神の力を使った真琴が過神を倒した。ただそれだけの話。

「それでも、過神にならない可能性が高かった。むしろ、あんたの属性を受け継いで祟り神になったのならどれだけ良かったか」

祟り神は、その名前から悪意を振りまく存在だと思われがちだが、実際は少し違う。

崇め奉り、信仰しているうちは祟り神は様々な利益をもたらす。反面、その信仰を失ってしまうえば祟り神はすぐさま敵となる。

わかりやすい例をとれば、商売繁盛だろうか。信仰しているうちは順調な商売も、その心を忘れた途端に廃れてしまう。

それゆえに、少女が祟り神になったのなら対処も可能だったのだ。

信じ続けることが出来れば、少女は間違いなく村の守り神となっていたのだから。

「——はあ、それで」

沙耶は、大きく深呼吸してからマガミに向き直る。意識を切り替えたのか、そこに先ほどまでの雰囲気はない。

「何のよう？ あんたが、私を慰めに来るとは思えないんだけど」

「その認識は、我でも傷つくの」

愉快そうに顔を歪め、嘆息してからマガミは真剣な顔つきになる。

「過神は生きておる」

絶句した。そう表現するのが、もっとも正しいだろう。

沙耶は、何かを言おうと口を開きかけて閉じるといふ動作を繰り返す。

「それ、本当なの」

何とか搾り出した言葉は、確認を取るための問い返し。沙耶は、嘘であつて欲しいと願いながらその言葉を発した。

「残念ながら、事実だの」

「ありえない。だって、あの時真琴が」

真琴が忘れたつて、過神との戦いを沙耶は鮮明に思い出せる。

あの時の真琴の覚悟も、自分の思いも、何もかも。

「確かに、あの時坊主は過神を殺した。だがの、元となった嬢ちゃんまでは殺しきれなかったようでの——いや、少し違うかの」

言葉を選ぶように考えて、マガミは続きを話し始める。

「あの嬢ちゃんが、真琴を生かすためにやった結果だの」

「生かすために………まさか」

不意に、沙耶の脳裏によぎったのは先日肯定での出来事。
完全に破壊された肉体から復活を果たした真琴の姿。

「我也後押しをしたがの、あの異常な再生力。お主にも、心当たりはあろうぞ」

沙耶の心を読んだかのように、マガミが問いかける。いいや、確信を持って告げる。

「真琴の身体の一部——どこかはわからぬが、あの嬢ちゃんの物で間違いないであろうよ」

最悪だ。沙耶は、素直にそう思った。

過神は危険だ。力の強さもあるが、それ以上に厄介なのがあの憎悪。

何もかも憎み、嫉み、恨み続ける心。

強すぎる思いはただそれだけで、周囲に影響を与える。

過神はそれが特に際立っていた。過神がただそこにいるだけで、人間への憎悪が伝染する。

あの時、三人が過神と戦ったときは周辺の動物と妖怪は全て、人間の敵だった。そして、その憎悪は過神が倒れても消えることはない。

憎悪は伝染し、広がっていく。そうなってしまえば、最終的には全ての人間とそれ以外での戦争となっていただろう。

「それがある以上、過神は死なぬ」

「真琴に手は出させないわよ」

毅然と、沙耶は断言する。

予想していたのか、マガミは苦笑して言葉を続けた。

「だがの、お主とてわかっておろう。妖怪であろうと神であろうと、人と事を構えれば敗北は必至だということくらいのこと」

神も妖怪も、固体としての質の高さは人間よりも上だ。だが、全面戦争となれば意味は違ってくる。

個体数の差——具体的に言えば、数の差から生まれる進化の可能性だ。

何らかの外的要因に対する備えが必要な場合、群れの中から適応した固体が生き残り子孫へとその情報を伝えていく。これが、通常の進化だ。

人間の場合、これを個性あるいは才能と呼ぶ。

そして、個体数が妖怪と神の総量を上回る人間は三種族の間にある質の差をひっくり返してしまう才能を持つものを生み出す可能性がもつとも高い。

だからこそ、妖怪の姫は時間をかけて国の支配権を握った。やけくそになって全面戦争を仕掛けてこないように。

ゆえに、マガミは沙耶へと言外に問いかけたのだ。

一人のために、全てを切り捨てるのかと。

「だから？」

沙耶は失笑をもらす。

「私にとってね——真琴といることが生きている理由なの」

目を閉じて、沙耶はある言葉を胸中で反芻させる。
かつて交わした、一つの約束を。

『沙耶が誰を裏切っても——それがたとえ俺でも、俺は沙耶と一緒に居続けるよ』

記憶を、思いを忘れても真琴はその約束を守ってくれている。

「真琴が私を守り続ける限り——私は真琴と共にある」

真っ直ぐにマガミを見据え、沙耶は静かに断言した。

「——ならば、別の手だの」

「へっ？」

沙耶が拍子抜けするほどにあっさりと、マガミは手を引いた。

「私の野望のためにも、真琴の眼は必要だからの。それに、研究の禁呪を覚えさせるのに適任なのでの」

「禁呪？」

問い返す沙耶に、マガミは肯定の意味を持ってうなずいた。

「それについては、真琴がおる時に説明してやるだの」

話すことは終わったと、マガミは踵をかえし立ち去る。

残された沙耶は、マガミが立ち去ったのとは逆の方角へと視線を向けた。

かつて、友人であった少女が散った場所——神との戦いの場を睨みつける。

その眼に宿る感情は、哀愁なのか怒りなのか傍目には判別がつかない。

ただ、並々ならぬ決意を感じさせた。

「——あまねねえ、天音」

沙耶は、友人だった少女に問いかける。

「あなたは真琴のこと——」

問おうとした言葉を飲み込んで、沙耶は頭を振るう。まるで、今思ったことを追い出すかのように。

沙耶の中途半端な問いに、答える声はなかった。

三十二話 封印術を刻む

深夜三時過ぎ。一姫の治癒を専門の者に任せて、真琴はマガミの元に沙耶と一緒に来ていた。

三人がいるのは、十畳ほどの和室だ。中央には庵があるが、さほど寒くもない今の時期は火は灯っていない。

「一姫の件は、ご苦労だったの」

まず最初にマガミが言ったのは、労いの言葉だった。容態はすでに確認済みなのか、そこに気負った様子はない。

「それは別に、というか一番きつかったのは沙耶だしね」

実際、沙耶がいなければここまで来ることは出来なかったと真琴は付け足した。

「ふふん」

勝ち誇ったように沙耶は笑う。先の様子を覚えているマガミとしては、真琴へのポーズだと言うのが理解できる分やや滑稽に見えた。

「くくくつ、なかなかその立ち位置は大変なようだの」

「うつ、うるさいわね」

頬を染めて、沙耶はそつぽを向く。その行為がますますマガミのつぼに入ったのか、ニマニマと笑みを崩さない。

状況のわからない真琴は、ただただ首を傾げるばかりだ。

「——おっと、今はこやつをからかっている場合ではなかったの」

わざとらしく言って、マガミは真琴へと向き直る。沙耶はその仕草が気に入らなかったが、わざわざ蛇を出すこともないと静観を決め込む。

「そうなの——真琴、お主は力が欲しいかの？　それがどんな類のものであっても」

「当たり前だ。沙耶を守るためなら、悪魔とだって契約するさ」

間髪いれずに真琴は答えた。そこに迷いはなく、真っ直ぐにマガミを見据えている。

「愚問だったようなの」

マガミはおもわず苦笑をもらす。あまりに予想通りだったからか、それとも真横で真っ赤になる沙耶が面白かったからかの判断はつかないが。

「ならば、お主に一つの術を教える。これは我も研究中での、何処まで効果があるのかは未知数なの」

「どんな術だ？」

平静を装いながらも、興味津々なのか真琴は目を輝かせながら問いかける。

「端的に言えば封印術なの。太古の妖怪連中を封じたのとは違い、

靈的存在に特化したものだがの」

「封印術？　その禁呪なんてあるのか？」

真琴が持つ禁呪のイメージというのは、昨日に沙耶が使ったような大規模な破壊力を持ったものというのが主だ。

だから、補助要素の強い封印術の禁術といわれてもいまいちピンと来ていないようだった。

「無論だの。それも、我が知る限りの禁術の中でもっとも凶悪な代物だの」

誇らしげに語るマガミ。

「この術はの、自身の体内に封じた靈的存在の力を自分のものに出来るの術なのだの」

その意味を理解できた沙耶は、思わず噴き出した。

「ちよつ、そんな術があるわけないでしょうが！」

激昂する沙耶。だが、マガミは意にも介さずに涼しげな顔をして未だに理解していない真琴へと言葉を続ける。

「つまりだの——封印対象は理力で構成されたもの、それが術であれ神の本体であれなんでも封じることができる。加えて、その力を自身の理力にすることが出来る………こう言えば、わかりやすいかの？」

「ああ、なんとなく………なんだ、その反則」

率直な真琴の感想だった。

真琴の感想ももつともなものだ。何せ、際限なく術や神などの霊的存在を封じていけば自身は無制限に強くなれると言っているようなものなのだから。

「未だ研究段階で、色々と問題があるがの。一先ずは件の水神を封じるくらいは出来るかもしれんの」

「ん——封印しちゃって良いのか？ 仲間に引き込んだほうが確実だと思うけど」

先の会話の流れでは、水神の弱みを握ってこちら側に協力させようとしていたはず。真琴も、そのつもりで動く気でいた。

「それは状況しだいの。封印術は、あくまで保険だの」

「なら、何で今になって教えるんだ？」

真琴の疑問。保険というのであれば、もっと早くに教えておけば良いのではないかと問うようにマガミを見つめる。

「——先も言ったように、この術は神である我にも効果があるので。お主が我に反旗を翻さないという確証が欲しかったので」

一瞬だけ、マガミは沙耶に視線を向けてから答える。

沙耶も、その視線の意味を理解して内心で歯がゆい思いをしながらうなずいた。

——だからあっさりと引いたのね。私を、真琴に対する抑止力にするために。

「じゃあ、確証は得られたわけだ」

沙耶の内心を知らぬ真琴は、マガミと会話を続ける。

「ああ、問題ないの」

沙耶が自分を見返す目に問題はないと判断したマガミは、短くそう答えた。

「では、術式をお主の身体に刻み込なので——ああ、かなりの苦痛を伴うと思うので、痛かったら手を上げるといい。別に止めぬが」

マガミの言葉に不安そうな顔を作る真琴。だが、一度だけ沙耶のほうを見てから覚悟を決めて、赤く染まったパジャマを脱ぎ捨てた。

「お主は、見ておくかの？」

「当たり前ね」

服を脱ぎ、うつ伏せに寝ている真琴の手を取って沙耶は答えた。

「では、齒を食いしばっておけよ」

マガミの周囲に、いくつもの光球が生まれる。

それは、マガミが封印術を記した呪術。じかに真琴の身体へと刻み込むべく多様に形態を変化させたもの。

二十を超えるそれは、いつせいに真琴の背中へと降り注いだ。

「——っ！」

真琴が始めに感じたのは、焼け付くような痛み。そして、自分の中から書き換えられる不快感。

歯を食いしばって、脂汗をいくつも浮かべる真琴。

いつそ、意識を手放すことが出来ればどれほど楽か。それほどの苦痛だ。それでも、強く握られた手に感じる温もりがあるかぎり、真琴は意識を失わない。

強く握られる真琴の手を、それ以上の力で持つて握り返す沙耶。術式を刻み込むのは、明け方近くまで行われた。

三十三話 それぞれのインターバル

時刻は八時を過ぎたあたり。

雪村家の階段を登る、妙齡の女性がいた。年のころは、四十前後。色素の薄い髪を後ろで束ねて、ゴムで縛っている。

真琴の母、雪村真美だ。

真美は、何時まで経っても降りてこない息子たちを起こすために二階へとあがってきていた。

「おはよ、母さん」

「おはよう、真児。今日は随分とゆっくりね」

大きな欠伸をする長兄に、真美は挨拶を返して真琴の部屋の戸を叩く。

「ああ、二人ならいないよ」

「えっ？」

何気なく伝えられた真児の言葉に、真美は目を丸くする。

「昨日の夜は、確かにいたわよね？」

「日付が変わる前後くらいに出たみたいだよ」

窓からと真児は付け加えた。

真美は、眉間に皺を寄せてうなづいた。

「この時間にも連絡がないなら、まだ起きてないんじゃないかな？」

真児も、真美も二人のスキンシップが過剰なのは承知している。

この時間に連絡がないのなら、そういうことなのだろうとも。ただ…

「まだ、お祖母ちゃんにはなりたくないのよね」

「俺も叔父さんはなあ」

二人のため息は、図らずも同じタイミングで吐き出されたのだった。

一姫が目を覚ましたのは、正午を過ぎてからだった。

「たいした生命力です」

第一声がそれか、と一姫は胸中で思った。同時に、何故ここにも。

一姫の側にいるのは、白衣を着た長身痩躯の男。年齢は彼女と同じ位か、少し上だろう。

アイロンをかけていないのか、皺だらけのワイシャツと適当に結んだネクタイは何処となくだらしない印象を受ける。

男の名は麻生。それ以上の名を名乗ろうとしないので、偽名の可能性が高い。

「食事はしばらくは無理ですね、食道が欠損してますので。栄養剤

を点滴しておきますのでそれで我慢してください。水は、一気に飲まずに少しずつ口に含むように飲めば大丈夫ですが冷たいのはご法度です」

麻生は、ゆつくりと子供に言い聞かせるようにして一姫に伝える。彼は、医療用の治療術の研究費用を捻出するのを条件にマガミに協力している人間だ。

実のところ、医療用の治療術——医療術は前世紀から進歩らしい進歩を見せていない。

医療術は対象の回復力を高めるなど基本的に体内に存在する細胞や、免疫力を強化することで快方へと向かわせる技術だ。

だが、ウイルスや内臓器の欠損はそうは行かない。

ウイルスの場合、下手に免疫力を強化すると死にいたるものもある。代表的なものと、アナフィラシキショックだろうか。

内臓器の場合、外的要因ならば治療は出来る。だが、ガン細胞などの切除を持って治療とする場合は回復力を高めることは逆効果になる。

これらはほんの一例に過ぎない。それこそ、遺伝子レベルの病だつて存在するのだ。そして、医療術が発展しないのには他にも理由がある。

まず、術者の霊力が持たない。加えて、術式を描ききれるものがないのだ。

複雑な現象を霊力で再現しようとすれば、それだけ大量の術式というものが必要になる。

一刻を争う場で、数十時間もかかる術式を使うよりも絶えず状況を確認できる手術のほうが遥かに精度が高い。

だからこそ、医療術の研究はあまり盛んには行われていないのだ。そして、それを専門に行う麻生は相当の変わり者ということでもあるが。

「色々と聞きたいこともあるだろうけれど、今は身体を休めることです」

それだけ言っつて、麻生は一姫の元を立ち去る。目を覚ましたことや、経過をマガミに報告に行くためだ。

一姫は、麻生を見送ってから再び目を閉じる。
やはり身体が休養を求めているのか、数秒もしないうちに室内に寝息が聞こえ出した。

麻生の報告を聞いたマガミは、人知れずに安堵した。それは、子の無事を喜ぶ母のように見えた。

マガミの配下は多いが、彼女に絶対の忠誠を誓っているのは一姫だけと言う事実があるからかもしれない。そのあたりは、マガミが語らない以上は表に出ることはないのだが。

「聞いた通りだの」

「ん、それは良かった」

明朝、術式を身体に刻み終えた真琴は痛む背中を上にしてうつ伏せのまま答えた。

沙耶は隣で真琴の手を握ったまま眠りこけている。疲れているのか、かなり深く寝入っているようだ。

「して、術式の定着は終わったかの？」

「とりあえず痛みは引いてきた。たぶん、夕方ごろには慣れてると思う」

「ふむ」

その答えに、マガミはいくらかの驚きを覚えた。

——やはり過神の影響は強いようだの。

マガミの最初の計算では、一日以上は身体に馴染むまでかかると思っていた。だが、真琴は半日足らずでなれると答えた。

それは、過神が真琴の身体を強化しているからだとマガミは推測する。

——これならば、多少の無茶は聞くかもしれんの。

「では、夕食後に使い方を教えるとするかの」

真琴の急成長は、マガミにとっても脅威となりえるが首輪せうりんが機能しているうちは大丈夫だろうと彼女は判断した。

それに、一姫を傷つけた報復を行う必要がある。

「今は、休んでいるとよからう」

それだけ言って、マガミは室内を後にした。まずは、情報を増やさねばと考えながら。

夕刻。茜色に染まった街中を、矢口秀樹とカナミは連れ添って歩いていた。

年齢の近い男女が並んで歩いているのに、初々しい雰囲気はなくどちらかと言えば剣呑なそれだ。

「……くそっ！」

悪態をついて、秀樹はどっかりと備え付けのベンチに腰掛ける。

秀樹は焦っていた。今日、学園の授業が始まる前に聞かされた一姫が行方不明だという情報と真琴の欠席。

一姫はわからないが、真琴には自分が協力を頼んで直後の欠席だ。沙耶がいるのだから大事には至っていないと思うが、それでも何かあったのではと勘繰っていた。

その勘繰りを拍車にさせているのは、校舎の一部が倒壊していたことだ。

修理してすぐなのだから、自然に壊れたとは子供だっと思わないだろう。

「秀樹、とりあえず落ち着く」

隣に座り、カナミが秀樹の手を取って声をかける。すぐに効果が出るということはなかったが、少しずつ彼は落ち着きを取り戻した。

「——ありがとう、ちょっと落ち着いた」

最後に大きく深呼吸して、秀樹はカナミに答える。そして今更ながらにその手の柔らかさを感じて、少しだけどぎまぎしていた。

「別にいい」

大きく首を振って、カナミは手を離す。

そうして、二人の間になんとも言えない沈黙が訪れた。

元々、あまり話すほうでもないカナミは積極的に話題を提供するタイプではない。

しばらくの間、お互いに押し黙ったまま時は流れる。それを打ち破ったのは、カナミが有る一点を見つめたまま動かないことに秀樹が気づいた瞬間だった。

「クレープか……………食べる？」

「ん」

うれしそうにうなずいて、カナミは真っ先にクレープやの屋台に向かっていく。秀樹も後に続くうとして、不意にカナミの首筋に視線が言った。

右の首筋。そこに、うつすらと見えた赤い線。

まるで、刃物で切ったみたいだなと秀樹はなんとなく思った。

三十三話 それぞれのインターバル（後書き）

前回、タイトルを付け忘れてた大ばか者です。
修正はしました。

しかし、本当に学園に行かない主人公ですね。

三十四話 水の上（前書き）

更新が遅くなった上に、今回は短いです。
楽しみにしていた方には、大変申し訳ありません。

三十四話 水の上

彼女——水神にとって行けない場所、あるいは知りえない情報があると言うのは実はほとんど存在しない。

日が傾きかけた山間のダム。それこそ、天然の湖に匹敵する量の水を蓄えた施設に、一人の女性がいた。

水神あるいは、瀧野静香の名で呼ばれている人だ。

彼女は、両手を水平に広げ両足で爪先立ち、瞑想するように瞳を閉じている。

空色をした光の粒が舞い上がり、夜空と薄暗いダムを照らし出す。不可思議な光景。奇怪な風景。

けれど、幻想的な印象のその姿。

それは正しい神のあり方。

人に近い姿でありながら、超越する力と幻想の集大成。

見るものに畏怖と、畏敬と、信仰を抱かせる偶像。

ただそこにあるだけで、神は法則を作り出す。

「——接続」

水が舞う。足先からゆっくりと、彼女の身体をダムの水が包んでいく。

瞬く間に彼女の身体を覆った水は、ゆっくりと流動する。

彼女は、水から情報を得ているのだ。

水神ゆえの特性か、彼女——瀧野静香が神の力を扱えるゆえに出来ることなのかは定かではないが。

そう。彼女、瀧野静香は水神の力を使いこなしている。正確には、水神と完全に同調していると言うのが正しい。

本来、神の神子はその力と意識を身体に入れるが、その間に神子の意識や記憶、自我と言ったものは介在しない。

それゆえに、神々が地上で神子の身体に入り込む場合はある程度の制限がかかってしまうのだ。

多くの場合の制限は、神力の使用量であつたり物理法則を捻じ曲げる限界で合つたりする。

だがまれに、自我と言つものが希薄だつたり、精神のあり方が近い場合にのみ発生する現象がある。

それが、完全な同調。

人の意識と、神の意識が混ざり合つて生まれてくる完成された神子。

ゆえに、彼女は瀧野静香であり——水神であつた。

「そう、やはり夜刀神は討伐されたの」

静かな声で、かの蛇神の最後を労わるような音色で彼女はつぶやく。

矢継ぎ早に、水が見ていた情報を解析して彼女は現状の確認と理解を早めていく。

繰り返すが、彼女にとって水のある場所であれば知りえない情報はないのだ。

それゆえに、街中に限定してしまえばその全てを把握しえる。

「…………ふう」

一息を突くと、彼女の身体を覆っていた水が瞬く間にダム水面へと戻っていく。

残されたのは平穏。何もかもが収まり、ただただ静香が水面へと立つ姿だけが残された。

「真琴と沙耶、ね」

わずかに残っていた情報から引き出された、夜刀神を退治た二人の名前。互いに呼び合っていたそれだけを得て、彼女は今日の収穫とした。

「悪い人達ではないと思うけど……協力、してくれるかしら」

彼女は、自身の力が強大だと言う自覚はある。それこそ、数千万単位での人を危機に陥らせることはたやすいのだ。

彼女が立つこの場所——ダムの水の性質を、人体に有害なものに変える。それだけで、この水を生活水として使う人々を死に至らせる事が出来てしまうのだ。

だからこそ、彼女は力を使うことに躊躇する。

彼女にとっては最後の一線。そこを超えてしまえば、人である理由をなくしてしまいそうだから。

しばらくその場に留まっていた静香は、やがて考えがまとまったのか水の中に溶けるようにして姿を消す。

後に残ったのは、緩やかに波紋を揺らす水面だけだった。

三十五話 封印術の練習（前書き）

遅くなりました。霊能科、ようやくの更新です。
うん。なんだか、迷走しているような気がします
よろしければ感想等お願いします、

三十五話 封印術の練習

焼け付く痛み。

網膜を通して送られてくる情報は無数。

霊力で編みこまれた風の術式。暴風の如きそれは、薄い緑色の光が渦巻く。

朱色に輝くのは妖力の炎。煌々と輝きを発するそれは、夜半過ぎの表を昼の如く照らし出す。

真琴のしている世界は、多色の光が支配していた。

それら全ては理力の輝き。単独で自然現象を形成する奇跡の具現だ。

「見えるかの？　これが、理力の流れだの」

後ろからマガミがしな垂れかかるようにしながら、真琴の耳元でつぶやく。

不意に、朱色の炎がその威力を増大させた。

「なんとか…でも、流石に頭が痛くなってきたよ」

「それは仕方あるまい。人が一度に処理できる情報量を上回っておるからの。いずれは、術式の核となる構成のみを読み取れるようにするのだの」

痛むであろう頭をマガミは、その白い手で撫で付ける。労いを込めて動かされる動きが気恥ずかしいのか、真琴は少しだけ顔を赤く染めた。

朱色の輝きはさらに明るく、強くなっていく。その輝きは瞬く間に緑色の光を飲み込んでいくほどだ。

「——ククッ」

忍び笑いをもらすマガミ。

「ヌググググググッ！」

砕けそうなほどに強く、沙耶は齒をかみ締める。それでも片手での術式の操作を忘れないのは流石だ——威力がどんどん肥大化しているが。

「俺、いらぬ気がするんだがな」

そこにいたからと言う理由で選ばれた麻生は若干不満そうにしながらも風を起こしている。

今回、二人がその場で火や風を起こしているのは単純に真琴が封印術を使うための訓練だ。

「次は、何をすればいいんだ？」

「麻生の使っておる風の術ならば、今の状態でも封印は出来るであらう。核となる部分に、封印術をぶつけるのだの」

真琴の手を取り、マガミは緑色の光がもつとも強いほうへとその手を導く。

本来、マガミがやっているような補助は不要だ。なぜ彼女がこのように一々沙耶へと見せびらかすように真琴と身体を接触させているかと言うと……特に理由はない。

ただ単に、嫌がらせをしているだけだ。

「あの年増あゝゝ！」

片足で床を踏み鳴らして、沙耶はさらに火勢を強くしていく。

片手にあるのはドッチボール大の火球。大きさ自体に変化はないが、込められている妖力そのものは桁違いだ。その証拠なのか、発せられる熱量はそれだけで火傷をしそうなほどに熱い。

真琴は、マガミが使う防御結界に阻まれてその影響に気づけないでいるが、たまったものではないのが麻生だ。

周囲に風を撒き散らしているが、それは熱せられた大気——空気もかき混ぜているのと同意でもある。そのせいか、彼の周辺は先ほどから少しずつ温度が上がっていつているのだ。

「あの、いい加減にその勢いを弱めてもらえませんか？」

「あつ？」

「ごめんなさいなんでもないですそのままつづけてくださいおねがいします」

言い切ると同時に、麻生は自身が展開している風の術式に違和感を覚える。

——なんだ？ 見られている…いや、手が加えられてるのか。

「えっと——ここが核で、ここが回線、それからこつちが霊力の流れで……大気を動かしてるのはここか」

一つずつ、確認するように真琴は手を動かす。

それらの動きは、マガミが示唆したものではない。真琴が自分で触れ、自分で読み取ったものだ。

「へえ、君の彼氏、補助があるとはいえなかなかの才能じゃないか」

純粹に、麻生は賛辞を口にする。実際、驚いていたのだ。真琴は、教本にもない彼オリジナルの術を解析して見せたのだから。

「でしょでしょ！ いやあ、あんた良い眼をしてるわねえ」

不機嫌そうな顔から一転、満面の笑みで沙耶は麻生の肩を力強く叩く。加減しているとは言え、人間のよりも強いそれは彼に痛みを与えるのには十分なのか顔を歪めている。

それでも火勢は変わらないが。むしろ、意識がそれているためにコントロールがなくなり、沙耶の動きに合わせて右に左に行ったり来たりする分危険かもしれない。

「つと、これで――」

真琴が右手を握る。傍目には何も無いところで握りこぶしを作っているように見えるが、彼に見えているのは違うものだ。

光り輝く緑色は、黒い紋様の描かれた真琴の右腕へと徐々に取り込まれていく。

それは、黒が緑を食らっているようにも見えた。

光が半場まで紋様に飲み込まれると、風の勢いも徐々に弱くなっていく。そして、その全てがなくなった瞬間にピタリと、あれほど荒れ狂っていた猛威は止んでしまった。

「驚いた。こんなにあっさりと消えるのか…上手く使えば、最強の盾にも矛にもなるな」

「お主が術式を変えたり、靈力を注ぎなおせばまた違ったかも知れぬがの――しかし、初めてでこれだけ出来れば上出来だの。どうか

の、その力を使いこなして我にもつと貢献しようと思わぬかの？
無論、ただとは言わぬ——」

そこで一瞬、沙耶へと意味ありげに視線を送る。

瞬間、沙耶は嫌な予感を覚えた。

「我のこの身、好きにしても構わぬぞ？」

「うわっ、ちよっ、耳を噛むな！」

少しだけ着物をはだけ、真琴の耳たぶに舌を這わせてから軽く噛むマガミ。

「ぶっつーん」

わざとらしく沙耶は口でそう言って、右手の火球をマガミへと投げつける。

「うわった！」

「随分とこらえ性のない小娘だの」

頭を伏せて身の安全を確保する真琴。いくら治るとはいえ、痛いのは嫌なのだ。

狙われたマガミは、火球を素手で掴みながら鼻で笑う。

「はんっ！ 人の男に色目を使う年増よりはましでしょ」

「——我よりも数百年若いだけの小娘が調子に乗るなよ」

火球を握りつぶし、マガミは一步前へと歩みを進める。

「あんだこそ、そんな貧相なもので真琴の相手が務まるとでも？
案外、真琴はおっぱい好きなんだから」

言つて、沙耶はマガミのそれよりも豊かな胸を強調するように張る。

「燃え尽きる小娘がッ！」

「こっちの台詞よババア！」

炎の柱が、天高く上る。

「あー、モテモテだな？」

「マガミの場合はからかつてるだけでしょうけどね」

「その程度の威力で、我を仕留められると思うな！」

「今のは私の最下級よ炎術《メ○》よ！　これが私の新・必殺ッ！」

「ああ、最近やたら熱心に漫画見てると思つたら……」

「言ってる場合か？　あれ、こっちも巻き添え食うぞ」

「手遅れですね」

自身の妖怪時の姿を模した炎の鳥が、マガミと真下にいた真琴たちを巻き込んで破裂した。

三十六話 学校風景

真琴と沙耶が学園の昇降口をくぐると、待ち構えるように立っていた矢口秀樹と相對した。

「悪いね、いきなり休んだりして」

「無事なら良いけどさ……ところで、その腕はどうしたんだ？」

秀樹が指差したのは、真琴の両腕の甲にまで及ぶ真白い包帯。冬服の袖に隠れて見えないが、それは真琴の両肩にまで及んでいた。

「ああ、ちよつと刺青をね」

「はあ？ 刺青？」

苦笑する真琴に、秀樹はわけが分からないと問い返す。

「まあ、気にするな。ちよつとした神様対策だから」

「ってことは、協力してくれるのか？」

「うん。こつちにも事情が出来てな」

意味ありげに沙耶へと視線を向けて、真琴は一度だけうなずく。実際のところはマガミの知謀なのだが、彼女の名前を出す気がないので沙耶に関係があるように思わせたただけだ。
あながち間違いでもないのだが。

「さて、そろそろ予鈴も鳴りそうだから教室に行かない？」

「だな。詳しくは、放課後でいいか？」

「いいけど…俺、今月の小遣いはもうないんだよな」

がつくしと秀樹は肩を落として、上履きを履きかえる。

「それは俺もだけどね。と言うわけで、放課後に教室でいいよな？」

確認は秀樹にと言うよりも、沙耶にだ。

「私は別に何処でもいいけどね」

「なら、放課後に教室で。カナミちゃんだっけ？　にも伝えておいてよ」

「分かった。てか、あいつの見た目はあんなんだけど俺たちより年上だぜ？」

「俺は見た目を重視するんだよ」

「ほほう。だとすると、沙耶さんも見た目で？」

「——取っ掛かりは、な」

「おおっ！」

臆面もなく言い放ち、沙耶が喜色をはらんだ声を上げる。あいも変わらず、二人はバカカップルであった。

「ああ、雪村君」

「ん？」

最初の休み時間。臼井恵子は真琴へと声をかけてきた。

「これは、昨日あった委員会の資料。特に決まったことはないけど、一応は眼を通しておいて」

「あつ、そうか。昨日は委員会だったね——うん、ありがとう」

手元に渡されたA4サイズの紙は二枚。書かれているのは、普通に部活に対する注意事項と一昨日に起きた校舎破壊事件の情報提供と注意を呼びかける内容だ。

「また壊れたんだ」

知っていながらも、真琴は校舎の一部が壊れたことをさも今知ったという風を装ってつぶやく。

「そうみたい。前は押しつぶされてたらしいけど、今回は切られてたんだって」

「切られてた？」

沙耶が問い返す。そういえば、ちゃんと瓦礫を見てなかったなと、

真琴も今更ながらに思い返した。

「そうなの。壁の切断面とかすごい綺麗だったらしいよ」

「切断って、そんなことできる？」

「……無理ね。少なくとも、そうとう切れ味の良い刃物と腕がないと」

「そう言うこと。当面は、夜間の外出を控えるのと部活動の自粛だつてさ」

「わかった。気をつけておくよ」

話は終わりだと、恵子は自分の席へと戻っていく。授業が始まるまで二分もないのだから当たり前かもしれない。

「さて、これで水神が犯人の可能性はなくなったかな？」

「そうね。にしても、コンクリートの壁を切れるような刃物と技量——間違いなく、私よりも近接能力は高いわね」

少しだけ悔しそうに沙耶はつぶやいて、席を立ち上がった。

「とりあえず、下準備だけしてくるわ。また学園が壊れるかもしれないけどね」

「分かった。頼むよ」

ひらひらと手を振る沙耶に、真琴は同じように手を振って彼女の

背中を見送った。

昼休み。沙耶は未だに戻っていないので、真琴は秀樹と恵子の三人で学食の机を占領していた。

「にしても、雪村君が沙耶さんと離れてるのってかなり珍しくない？」

「そうかな……いや、確かに珍しいね」

月見うどんをすすり、少しだけ今までの生活を振り返ってから真琴は答える。その顔には苦笑が浮かんでいた。

「確かにね。とはいえ、僕としてはそのほうがやりやすいのだけど」

「んあ？ 柊か。どうしたの？」

「ちよっ！ まっ、何で伊吹先輩がここに？」

「久しぶりに学食に来たら友人の側に、不躰なクラスがいなかったからね。声をかけたしだいさ。隣、いいかな？」

真琴の許可を得てから隣に座り、柊は割り箸を半分に割る。

「構わないよ。初対面だよな？ こっちが矢口秀樹で隣に座ってるのが臼井恵子。クラスの友人だよ」

「よろしく。知っていると思うが、伊吹柊だ」

「よっ、よろしく願いします」

「どもっ」

緊張でガチガチに固まった恵子と秀樹は、軽く頭を下げるのです。気が使っているのが見て取れた。

柊もそうだった反応になれているのか、特に思うところはないのか普通に食事を開始する。

「ねっ、ねえ雪村君。伊吹先輩とは知り合いなの？」

「そうだよ」

大したことではないという風に、真琴はあっさりと恵子の問いに返して視線を一度だけ柊に向ける。

「雪村の周りって、とんでもない人ばかりだな」

「うん。沙耶さんとか、伊吹先輩とか」

呆れているのかそれとも樂觀しているのか、二人は食べる手を休めて淡々と言葉を漏らした。

「あれ、柊ってそんなにすごいのか？」

「さあ——自己評価は苦手だからね。でもまあ、この学園内では五指に入るんじゃないかな」

「ふん」

と、あまり興味のなさそうな真琴。柊の言っていることは決して誇張ではないのだが、彼以上の実力者を見てきたので実感がわかないのだ。

「伊吹先輩とも沙耶さん繋がりで知り合ったのか？」

「いや、彼女とは別口さ」

海老天を口に運ぶ前に答え、その時のことを思い出しているのか柊は口元に微笑を作る。

「僕の命を、真琴君が救ってくれた。ただそれだけだよ」

懐かしむ声。そこに込められた思いは、真琴への感謝の気持ちにあふれていた。

何があつたのか。それを知るのは当人と、関わったものだけだ。ただ、柊の実力を噂程度にでも知っている二人は、たやすく聴くことが出来ない内容だと瞬時に理解する。

「おっと、すまないね。少しばかり空気を重くしてしまったかな」

「いつ、いえ！ そんなことないです」

朗らかに笑う柊に、相変わらず緊張したままの恵子が答えた。
結局、二人は柊が席を立つまで緊張しっぱなしだったとさ。

「あー、緊張した」

教室に戻り、自分の席に着いた秀樹は座った勢いのままに身体を机に預けた。

「ほんとよねー」

沙耶の席に座った恵子も同じようにぐったりとしている。

「そんなに？」

「当たり前でしょ！　だつて伊吹先輩よ、伊吹先輩！　二年の主席にして鬼の一族、さらに生徒会の副会長で学校外での活躍も目覚しいこの学園のスターじゃない！　今年の一年の中にはあの人が目当てで入学したって人もいるぐらいなんだから！」

いきり立ち、両手を机の上について恵子は声高らかにまくし立てる。

「随分詳しいな、おい」

「同じ部活の子がそうなのよ。伊吹先輩は、顔もいいし性格もいいから目立つしね」

「臼井さん部活に入ってるんだ」

「あつ、うん。演劇部なんだ」

真琴の問いかけに答えるも、勢いをそがれる形となった恵子は少しだけ羞恥に顔を染めて席へと座りなおした。

「へえ、何でまた。臼井はどっちかって言うと身体を動かしてるほうが好きだろ？」

「それは偏見だあー！　うう、秀樹が虐めるよう」

弱弱しい雰囲気を身にまとい、恵子は隣に座る真琴へとしなだれかかる。

「ごめん。俺もちよつとそう思った」

「うわっ、裏切ったな！　ふんだ。どうせ私はがさつですよーだ」

恵子はぶっくりと頬を膨らませてそっぽをむく。苦笑する秀樹に、困ったように顔を歪める真琴。

平和な日常がそこにあった。真琴も、秀樹も、恵子も——三人に関わっていない学生たちの誰かが笑っている。

だから、真琴は予想すらしていなかった。いや、考えが及びすらしなかった。

学園に近づく、二柱の神に。

「間に合えば良いけど…」

沙耶のつぶやきは、脇に置かれた妖剣だけが聞いていた。

三十七話 神々の諍い(1) (前書き)

お待たせしました。一週間更新をだいぶオーバーしての更新です。

もう一話出来てはいるので、それも明日にはアップできるように致しますのでお待ちください。

三十七話 神々の諍い（1）

学び舎を後にする生徒たちの波に逆らうように、一人の女性が学園の門を潜った。

たきのしずか
瀧野静香だ。

水色をしたフレアスカートに白いブラウス。蜂蜜色の柔らかそうな髪は、夕暮れの冷たい風に揺らめいている。

おおよそ、学園と言う場にそぐわない彼女の容姿は否が応でも生徒たちの眼を引いた。

多数の視線を浴びながらも、彼女はそれを気にした風もなくまっすぐに校舎へと歩みを進めていく。

「おや、当校に何か御用ですか？」

静香の――水神の進路を阻むように、立ちふさがる少年がいた。背丈は高い。だが、体つきは筋骨隆々と言うわけではなくどちらかと言えば華奢な印象を受ける。

顔には柔和な笑顔が張り付いていて、その表情からは敵意は感じられない。

「ええ。この学園に在籍している、雪村真琴と言う生徒の少々ようがありまして。呼んでいただけますか？ 伊吹柊さん」

「――なぜ、僕の名を？」

「有名ですから――」

柊の作ったような笑みとは対照的な、朗らかな笑顔。余裕を見せる静香に対して、柊はいくらかの猜疑心を抱き始めて

いた。

自分の名を知っているからではない。真琴のことを最初に持ち出したからだ。

伊吹柊の名は、彼の自惚れでもなく知れ渡っている。それゆえに、自身の名を知るものに対して一々警戒はしていないのだ。

「それで、お呼びいただけますか？」

柔らかな笑みはそのままに、静香は無造作に柊へと近づいてそっと、彼の耳元で一言つぶやいた。

「白蛇のことで、お話があるのですが」

「どうしたの、柊？」

いざ会議を始めようとしたタイミングで、真琴の携帯が着信を知らせるメロディを奏でた。

相手は彼が言うとおり、柊だ。

『悪い知らせがあるんだが、良いかな？』

「いいよ。何？」

『実は、君に白蛇のことで話を聞きたいと言ってきている人がいるが、どうする？ 今なら追いつくこともできると思うが』

「——その人って、柔和そうな顔つきの女の人かな。髪の毛とかふわふわした感じの」

スピーカーフォンに切り替えて、沙耶と秀樹にも聞こえるようにしてから真琴はそう聞いた。

『確かに、言われた通りの条件を満たしているよ』

水神の人相を知っている真琴と沙耶の間に緊張が走る。対して、秀樹は頭に疑問符を浮かべた。

「なあ、その人が何なんだ？」

「——少しだけ、待って。柊、詳しい理由は聞けるかな？」

『……直接でないと話せないそうだよ。まさか、会う気かい？』

柊に答える前に、真琴は沙耶へと視線を向ける。彼女は、それに首を縦に振ることで答えた。

「そのまさか、と言うことでよろしく」

『わかった。そういうことなら、案内しよう。今、何処に？』

「俺の教室に。じゃあ、また」

通話を終了させ、真琴は携帯を胸ポケットへとしまふ。そして、秀樹へと身体ごと向き直った。

「時間がないから単刀直入に言うよ。これから、ここに水神が来る」

絶句あるいは驚きか、不信か。とにかく秀樹は表情を崩した。

「マジか？ てか、何でそんなことがわかるんだよ」

「事情があつて、今は詳しいことは話せない。けど、誓つて悪いことではないよ」

「いや、お前を疑う気はないけどさ……後で、話してくれんのか？」

「それは約束する」

即答する真琴を、秀樹は値踏みするようにジッと見つめる。が、時間がないのは事実だと理解したのか仕方なさそうに嘆息して踵を返した。

「仕方ない、信じるよ。で、俺はカナミをつれて来れば良いのか？」

「だね。でも、すぐには戦闘はしないように見張つて。交渉で終わるなら、それが一番いいから」

「確かにな。沙耶さんがいるから大丈夫だろうけど、やばくなったら逃げろよ！」

秀樹はそれだけ言つて、教室から足早に出て行つた。

「何を考えてるのかな？」

「そつだね……マガミに対する義理立てと俺個人の兵力の確保、かな」

椅子に深く腰掛けて、少しだけ体重を後ろへとかける。後ろの二本だけでバランスを取る格好となった。

「矢口君はさ、まともな人、だと思う。善意を持って接する人には、全力でそれを返そうとする感じかな」

「つまり、ここで恩を売ってマガミ側に戦力として紹介するってこと？」

「そつ。ついでに言えば、マガミよりも接しやすい俺のほうが協力関係を維持しやすいでしょ。まっ、今すぐに敵対する気はないけどね」

「——んっ、それなら良いけど」

いずれ敵対する気なのか。その問いを、沙耶は言葉にすることは出来なかった。

——とにかく今は、水神にどう対処するか、ね。

「それよりも、沙耶はと言う準備をしてきたんだ？」

「えっ、ああ——そうね……」

水神が教室にたどり着くまで、後二分。

秀樹がカナミと出会ったのは、学園からそう遠くない場所だった。

「カナミ！」

軽く呼吸を乱しながら、秀樹はカナミの前へと走りよる。

「どうしたの？」

「水神が、学園に来た」

簡潔に用件だけを伝える秀樹。カナミは、眼の色を変えて瞬時に反応した。

「——分かった。すぐに行く」

「とつと！ ちょっと待った！ 今はまだ駄目だ。俺の友達が交渉してるところだからさ、少し様子を見ようぜ」

カナミの左の二の腕を掴み、秀樹はたしなめるような口調で彼女へと伝えた。

「だめ——水神は敵」

「でも、戦わないですむならそれに越したことはないだろ」

「だめ」

首を振り、躊躇うことなく答えた。

「敵は、殺す」

「えっ？」

秀樹の眼——五秒先を見るそれが反応する。

——開いている右手が、腰の辺りに添えられた。

踏み込みはない。けれど、下半身に込められた力は強力無比。
一閃。

秀樹が手を離し、上体を後ろへと反らすのがあと一秒遅ければ、彼の身体はカナミを拘束する腕と共に切り裂かれていただろう。

「秀樹、邪魔」

無理な体勢で斬撃を避けた秀樹は、コンクリートの地面へとどつきりと腰を落とした。数秒遅れて、彼の眼には切り払われたであろう前髪が舞い落ちる。

「なに、すんだよ」

震える声で、辛うじてそれだけを搾り出す秀樹。が、カナミはすでに彼を見ていない。

「なあ！ 敵だからって、殺さなくてすむなら戦わなくて良いだろうが！」

声は怒りかあるいは恐怖に震えている。それでも、秀樹は喉の奥から捻り出した声を高々に叫ぶ。

それを聞いてか、他の思いゆえか。カナミはわずかに頭を動かして背後に座り込む秀樹を見つめ、答えた。

「——私は、かながみ金神だから」

それが答えだと言わんばかりに、カナミ——金神は小さくつぶやいた。

三十八話 神々の諍い(2) (前書き)

まさかの連続更新です。

三十八話 神々の諍い(2)

出会いは偶然だった。

バイト終わりの帰り道。矢口秀樹は、彼女に会おう。
秀樹の持つ眼。

五秒先を予見するその眼は、確かに一つの影を捉えていた。
月を背に、舞い降りる一人の少女。

秀樹は空を——新円の月を見上げた。
そこには確かに、一人の少女がいた。

——視線が、絡んだ。

「俺に、金神を倒すのを手伝って欲しいと？」

「ええ。貴方が殺してしまった夜刀神の代わりに」

ふんわりと微笑んで、けれどあまりその表情に似つかわしくない
台詞を瀧野静香はさらりと言ったのけた。

「そもそも、あれは私が苦勞して封印されていた場所を見つけ出した古い神の石柱。それを金神に邪魔され、契約の合間を縫って逃げられたのは私の失態ですが——よもや人に遅れを取とは思いませんでしたので」

本来であれば、殺される前に再契約するはずだったと付け足して、
反応をうかがうように押し黙った。

「——ッ」

柊は、静香のその態度に腹のそこから殺意が沸いてくるのを自覚する。

——フザケルナ。

夜刀神の被害にあったのは、ほとんどが伊吹の眷属だ。彼らとて任務の上で死ぬのは理解していたはず。

けれど、だからと言って安易に殺していいものではない。

「……………柊」

そつと、柊にだけ聞こえるように沙耶がたしなめる。普段のように小ばかにした物言いではなく、キチンと名前で呼んで、だ。

「真琴の邪魔はさせないわよ」

「——わかってる」

殺意と呼べるそれは未だにくすぶっている。それでも、自身の目的のためだけに真琴の邪魔をするのは論外だと言っるのは理解していた。

真琴の背後。何かあったらすぐに動けるように、沙耶と柊はそこに控えている。

沙耶は予断なく静香の挙動を見つめ、何時でも真琴を庇えるように左手は彼の肩に添えられていた。

柊は先の感情ゆえか、沙耶よりも攻撃的だ。彼の手握られてるのは数枚の符。木符と書かれたそれは、水に対して効果を発揮する攻勢の術が込められていた。

——まるで、従者のようね。

表情には一切出さずに、静香は胸中で微かに笑う。純粹に、感嘆の思いからだ。

「さて、お返事は頂けますか？」

「……………」

腕を組み、教室の天井を見上げて真琴は思案する。すぐに答えは出ない。

「——利点」

「えっ？」

「協力するのは言いとして、俺たちに利点はないのかな？」

「おや、善意の奉仕は出来ない？」

「当然だよ。あんたが完全に被害者で、俺たちでも対処できる相手ならば無償での助力もやぶさかではないけど、ね」

トンと、一度だけ机を叩いてから真琴は三本の指を立てた右手を静香に見せる。

「条件は三つ。俺たちの——んんっ、知り合い？　みたいなのに会うこと。可能な限りの助力を約束すること。後の一つは柊の言うとか、伊吹の裁量に任せるよ」

最後に、どうする？　と真琴は意地悪く笑った。

思ったより、容易くはないか。

私は、目の前に座る少年に対する評価を、上側に修正しなおす。

雪村真琴。カラスの大妖怪、負告鳥または沙耶。

水から得ていた情報では、どう見てもバカップルそのものだったけどなかなかどうして、考えるものだ。

彼が正義感や、私に対する情欲で動くようならば操るのも楽であつたけど、どうやらそのあたりは効果は薄そうね。

そつと、背後に立つ沙耶へと視線を向ける。この学園の制服越しにでもわかるほど、自己主張をする発達したむ、胸がそこにあつたついで、目線は下を向く。

机が見えた。

確かに、あれを知っているのにこの身体に欲情しろつて言うのは無茶な話か。

………悲しいことは、考えないで置こう。今は、どうやって強力を得るか、だ。

条件の三つのうち、一つ。誰に合わせるつもりなのかは、今のところはわからない。これはまあ、調べるしかないけど、少なくとも敵ではないと思う。

二つ目の助力は、どの程度の力が欲しいのかにもよるけど問題はない。手綱を握られないように注意していれば大丈夫。

けど、三つ目は少し不味い。私個人はどうにでもできるけど、あの子達にも被害が行く場合も考慮する必要はある。

——そうだ、私はあの子達のためにも生きなければいけない。

ならば、生きる。何を犠牲にしたって、この身を投げ打ってでも生き延びる。

「そうね——ッ！」

覚悟を決めて、答えようとしたのを邪魔するように廊下側の壁が切り裂かれ、一つの影が躍り出た。

「かなつ、」

言い切る前に、金神は私に肉薄。

——避けられない。

すでに振り上げられた刃は、あとは私の首を切り落とすだけ。

他の神と違い、神子とほぼ一体化している私は死にはしないでも、それだけで動くことは出来なくなるだろう。

音は、不思議と聞こえなかった。

三十九話 神々の諍い（3）

むかし、一人の刀工が狂った。

腕は良かったが、なにぶん人付き合いが悪く、山間の小さな鍛冶場に粗末な小屋を立てて隠れ住むように住んでいた。

けれど彼の打った刀はいわゆる名刀であり、業物。

腕は確かで、けれど人の心をどこかに置き忘れた刀工。それが、この男だ。

とある日。彼の鍛冶場に一人の神子が訪れる。

魑魅魍魎、悪鬼の類を退治することを生業とする彼女は、旅の最中に折れてしまった霊刀の代わりを求めて男のところへとやってきた。

この出会いもまた、偶然。

そして、男にとつては初めての感情を覚えた相手。

むかし、一人の刀工が狂った。

中空にありながらも、金神の振るった兇刃はすさまじい速度と切れ味を誇った。

わずかな血の飛沫。斬られたのは、真琴の右肩。

風を切る音が二つ。

金属が擦れる音は一つ。

罅迫り合い。

強引に身体を捻り、上体に遠心力を与えた金神が振り下ろされるはずであった沙耶の妖剣を弾く。

そこで始めて、右足が教室の床へと降りる。

タイミングを計ったかのように雷撃の符術。柊が放ったものだ。左足が床を踏み鳴らし、弾かれるように金神の身体を一步後ろへと移動させる。

わずかに通り過ぎた雷が窓ガラスを打ち砕き、その刹那の間に金神が動く。

再び左足。次は、回避のためでなく前へと動くために力を込めて、床を蹴る。

刀の構えは上段。右足は前に。

前へと倒れこむように体重を移動させ、振り下ろす。

そのわずかな挙動の間に斜線へと割り込んだのは、妖剣を横に構えた沙耶だ。

二度目の接触は、鏑迫り合いとはならず、ぶつかり合うに留まる。否。金神は、沙耶の行動を予測したかのようにその刀を振りぬいた。

耳に響く金属のこすれ合う音。

わずかに、金神は驚きを覚える。彼女の狙いでは、構えた剣ごと切り裂けるはずだったからだ。

返す刀で切り上げ、沙耶の妖剣を跳ね飛ばそうとする。

振り下ろす剣と、切り上げる刀。

火花が散る。音がする。

二度目の鏑迫り合い。今回に限り、両者の力は完全に拮抗した。

ゆえに、金神は弾かれるように後ろへと跳ぶ。敵が複数いる状態で、硬直する愚を犯す気は毛頭ないと言いたげにだ。

一分にも満たない攻防の末、ようやく訪れた静止の瞬間。

このときになって始めて、真琴はそこに立つ金神を力ナミと同一の人物であると見止めた。

黒のカッターシャツに、赤いチェックのスカート。細いネクタイもまた赤く、腰には鉄鞘を帯びている。

手にするのは反りが一切ない直刀。刃渡りは、妖剣よりもわずかに短い。

「君は、何者だい？」

この中で、カナミとの面識が唯一ない柊が口を開く。気楽なそんな口調だが、その手には何枚かの符が握られている。

「金神」

短く、簡潔ながらもカナミははっきりと答えた。

「ふむ。やはりか……それで、真琴君。どうする？」

「どうしようかな」

少なくとも、反射的に動いた今回はともかく、理由もなしに命を賭す気はない。と言うのが、真琴の考えだ。

チラッと、背後に庇った静香を見る。

顔面蒼白と言っわけではないが、少なくとも真琴には怯えているようには見えた。

——どうしようかな、本当に。

「——邪魔しないなら、私はお前たちを狙わない」

真琴が悩んでいる理由は、自分が敵対しているからだと思ったのかカナミは、言い聞かせるようにそう言葉を発した。

「ふうん」

その言葉を吟味するように、真琴は上を向く。沙耶はこの件は口出しする気はないのか、一言も発しない。

「なら——」

答える前に、真琴の携帯が着信を知らせた。

「雪村ッ！」

『叫ばなくっても聞こえてるよ。何？』

自分と違い、どこか余裕のありそうな声にひとまず秀樹は安堵のため息をもらした。

「その、いまどうなってる？」

『金神と水神のどちらにつくか、板ばさみ中だね』

「……………」

どうするとは、真琴は言葉にできなかったがそう聞かれたように秀樹は思った。

喉をいつの間にかたまった唾液が通り、音を鳴らす。

足は面白いように震え、携帯を持つ手は今にもそれを離してしまいそうに力が入っていない。

怖い、と秀樹は思う。

カナミのあの眼。

無感情で、自分を障害としか見ていなかった氷のようにつめたい

眼。

射抜かれたその瞳は、秀樹の心をたやすく凍てつかせ、恐怖の中に押し込めた。

混乱と、緊張と、恐怖でどうすればいいかの判断すらもつかない。だから、震える口が発したのは問いかけ。誰かに答えを求める、彼の弱音。

「どうすれば、良い……………ッ！」

『どうしたい？ よく、考えてみなよ』

振り絞るように叫んだ思い。それに対する真琴の答えは、問い返しと思考しろと言う助言。
だから、秀樹は考える。

俺はどうしたい？ カナミを助きたい。

なら、何故ここにいる？ 怖いから。

何が？ カナミが？ 戦うことが？ 痛みを負うことが？ それとも、死ぬことが？

「——ああ、そっか」

つぶやく。相変わらず足は震えてて、手に力が入らない。
でも、秀樹はゆっくりと立ち上がる。

「雪村……………怖いよな、戦うのって」

『そうだね』

「痛いのも、痛めつけるのも、怖い」

『うん』

一步。壁に手をついて、恐る恐ると足を踏み出す。

秀樹は、理解した。何故、自分がこんなところで震えていたのか。

「覚悟なんて、してなかった。ただ、一緒にいられれば良かった」

思い出すのは、月夜を背にしたカナミの姿。

秀樹には、あの姿がとても綺麗なものに見えた。

当たり前だと、胸中で秀樹は自嘲する。

カナミには、覚悟があった。いや、使命とすら言ってもいい思いがある。

ただ、一つの目的のためにあるその姿は、秀樹にはとても眩しいものだ。

彼には何もない。

彼女がどうしてそう思ったのかも知らない。なぜ、水神を狙うのかも知らない。何時から戦っているのかも知らない。

何もかも、秀樹は知らない。

ただただ、側にいられることに満足していたから。

もう一步。震えはいくらかマシになったが、それでもなお恐れは彼の胸の内にある。

「怖い。すげえ、怖い——でも、このままじゃ側になんていられないんだろ？」

『だろっね』

返ってくる声は、少しだけ優しげに聞こえた。

——そういえば、こいつはもう乗り越えたんだよな。
同い年だ。同じクラスで、席も近い。

なのに、立っている位置は違いすぎる。

秀樹は外で、無様にも震える足を引きずって。

真琴は中で、金神と水神と二柱の神の真ん中に。

「ちくしょう——。お前、すごいよな。ほんと、むかつく位に」

『褒め言葉っ、てことにしておくよ』

笑いあう。

——大丈夫。俺にだって、できる。

「殺す覚悟も、殺される覚悟も俺にはない。だから、こんなこと言うのはきつと間違ってる」

でも、と胸中で付け足す。

「戦う覚悟は、する。神は愚か妖怪にも届かないけど、でも——戦う」

『死ぬかも知れないよ?』

「わかってる。だけど、俺はカナミの側にいたい。ここで側にいないと、一生会えない気がするんだ。だから、頼む」

電話越しで姿は見えないが、秀樹は構うことなく頭を下げる。

「俺たちの戦いを、見届けてくれ！」

震えを吹き飛ばすように、大声で叫んだ。

四十話 神々の諍い（4）

生まれた初めての想いは、恋と呼ぶには純粹すぎて——愛と呼ぶには狂っていた。

想いを込めて、鉄を打つ。

想いを込めて、鋼を打つ。

——祝いを込めて、刀となす。

始めのうちは、話していらるだけでよかった。

けれど、想いは膨れ上がり、思いが抑えきれなくなつて。

俺は、衝動に突き動かされるままにそのことを打ちあがつた刀と共につたえた。

つたない言葉であつてと思う。でも、想いは確かに本物だ。

彼女は始めに戸惑い、次に笑みを作つて礼を述べてくれた。ありがとう。

そして、でもごめんなさいと続く。

嫌いではない。でも、神子であるから人と結ばれることは出来ない。

そういう風なことを、言っていた。だから、問い返したのだ。

では、神がいなければ想いは届くのか、と。

俺にとって、カナミは何なんだろう？

校舎の中を歩きながら、俺は自問する。

けど、考えても考えても答えは出てこない。

「当たり前だよな……俺、まだカナミのこと何も知らない」

前を向く。教室の前だ。

カチリと、ここに来る前に体育館から持ってきた刀が微かな音を立てた。

このドアを開けば、良くも悪くも決着が来る。
終わるのだ。

戦うことよりも、死ぬことよりも、殺すことよりも——俺は、そのことが怖い。

「……良しッ」

覚悟を決める。答えはまだないけれど、それを考える時間を作るために、前に進もう。

俺は、ドアに手をかけて勢い良く横に動かした。

教室の中にいるのは、真琴と静香、そしてカナミと秀樹だけだ。
沙耶と柊の姿はない。

「それじゃあ、俺は水神側につくから」

秀樹が教室に入るなり、真琴はあっさりとそう告げた。話がついているのか、カナミと静香の表情に変化はない。

「どういうことだよ」

「どうもこうも。一対にじゃあ、不公平だろ。こっちにも助けを求められてるしね」

真琴は、静香を庇うように立つ。

「それに、俺にも俺なりの事情があつてね。悪いけどこの件に対しては譲れないよ」

「……………」

真つ直ぐに見返してくる真琴に、秀樹は言い返すことが出来ない。問いただしたいこと、聞きたいことは、いくらでもでてくるはずなのに、だ。

それは、真琴の持つ、剣呑、あるいはさつきとも取れる雰囲気ゆえにかもしれない。

何か言わなければ、そう思っていた秀樹を庇うように前にでる影があつた。

カナミだ。

「私は、それでいい」

「カナミ？」

「どれだけでも同じ。敵なら、殺すだけ」

平坦な声で、あっさりと告げたカナミに秀樹は一瞬だけ悲しそうな顔を作る。

しかし、それも一瞬。すぐに表情を引き締めた。

「わかった。なら、それで良いけど手加減は出来ないぞ」

「むしろしてあげようか？」

ニヤリと、真琴にしては珍しく嫌味な笑みを見せた。対する秀樹は、言ってると同じように唇の端を持ち上げる。

「では、もう初めても構いませんね？」

痺れを切らしたのか、あるいは策があるのかそう急かしたのは静香だ。

「そうですね——なら、後二十秒したら時計の針が動くのでそのタイミングで」

全員が、肯定の意味を込めて首を縦に振った。
時計の針は進む。

秀樹とカナミは、真っ直ぐに自分が相対するべき相手を。

真琴と静香は互いを見やり、一度だけうなずきあふ。

——二十回目の音になる。

カナミと静香の両名は、ここでは手狭だと判断したのか同時に壁の穴から外へと躍り出た。

動きを見せないのは、真琴と秀樹だ。

「来いよ」

正眼に刀を構え、秀樹は言う。だが、真琴は動かない。
構えはとっている。

右手を前に、左手は胸の辺り。握られた拳には、力が込められて

いるのはたやすく見て取れた。

妙だ、と秀樹は思う。

彼の眼。五秒先を予測するそれにも、真琴の動きは映っていない。つまり、動く気がないということだ。少なくとも、この五秒の間は。

「……………」

「……………」

向かい合う。

外から聞こえる水流の音。剣戟。

室内には時計の針が、コチコチと音を鳴らす。

真琴か秀樹か、あるいは二人のものか。呼吸を繰り返す音がする。人知れず、汗が頬を伝って落ちた。

それを自覚して、秀樹はゆっくりと呼吸を整える。目線は真琴に固定したままだ。

「——ふう——すう——ふう」

吐いて、吸って。また吐く。

真つ直ぐに真琴を向いていた刃先を、ゆらゆらと揺らす。

タイミングを計るかのようなその動作は、秀樹が真琴に対して行った揺さぶりだ。

動きを見せればいい、そう思つての動きだった。

だが、結果は空振り。やはり真琴は動かない。

——動く気が、ないのか。

ならばと、秀樹が動く。

踏み込み、正眼に構えた刀を突き出す。

刺突。狙うは右手に隠された首。

回避か、防御か、はたまたカウンターか。
そのどれも示さない。

「えっ……？」

秀樹の刀は、たやすく真琴の首を貫いた。
不可思議な感触。肉を絶つそれではなく、まるで水の中に手を入れ
たかのように手ごたえのない感覚。
どろりと、真琴の身体が崩れた。

「これ、水？」

水。そう、ただの水道水だ。

ぱしゃんと音を立てて、教室の床に水道水が散らばる。遅れて、
刀身から水滴が垂れて水溜りを打った。

「あのっ、やろうっ！」

叫ぶ。そして、理解した。

真琴は、最初から自分と向かい合っていなかったのだと。
駆ける。向かうは、校庭。

四十一話 神々の諍い(5) (前書き)

やっと、出来ました。最近、霊能科の執筆速度ががた落ちしてま
すね。

すみません、もっと早く書けるように努力します。

四十一話 神々の諍い(5)

作られた物にとって、与えられた役割は至上のものだ。

湯飲みであれば茶を入れて、飲まれること。

花瓶であれば花を飾ること。

洋服であれば、暖を取ったりあるいは着飾ったりと様々だ。

彼ら（と、あえて表記する）にはきつと、もしかしたら欺瞞かもしれないが、誇りがある。

己でしかその役目は果たせない。その誇りが。

ならば、刀は？

それも、ただ復讐をなす為だけに作られた一振りの日本刀は？

金神は、カナミは、自問する。

水神を退治したその時、自分には何が残るのだろうか。

ふと思ひ出すのは、教室にいた秀樹の姿。

関係ない。そう断言することが、カナミにはなぜか出来なかった。

「雪村ーッ！」

昇降口を潜った俺は、雪村の姿を見つけるとなり咆えた。

鞘を投げ捨て、真っ直ぐに雪村のいる場所へと走る。

校庭。雪村は、カナミの攻撃を阻害するように動いていたが、俺に気がついたのか、いったん距離を取った。

「じゃあ、予定通りに」

「……………本当に信用できるんだな？」

「俺よりは、ね」

俺には何を言っているのかは聞き取れない。が、それを気にする余裕は与えられなかった。

予測する。五秒先を見る眼の力によって、先読みされた雪村の攻撃。

校庭の地面を食い破り、黒い帯が俺を襲う。術か、あるいは特殊能力か？

その数は四。左右から、ちょうど俺の心臓を狙っていた。本気で殺しにかかってくるか。

実際の発動まではまだ、二秒ある。

どうする。前か、後ろか。

思考は一瞬。

結果。俺は加速し、雪村が狙っているタイミングを外すことを選択する。

音がしたが、そちらを見る必要はない。軌道は予測済みだ。包囲するように動くその隙間を潜り抜けた。

その瞬間、妙だと胸のうちが警告を鳴らす。何かはわからない。だから今は、気にしない。

「てめえ、良くも騙してくれたなあ！」

「至言だよな。騙される方が悪いって」

うっわ。むかつくなあ、こいつ！

「でもまあ、今の俺は本物だから気にしないでかかっておいで」

言って、雪村の背後から黒い帯が湧き出てくる。気色悪く動くそれは、さっき地面から出てきた奴だ。

視認できる限りで八。地中から出てきたことを考えると、いくつはまだ隠してるかも知れないな。

「何だよそれ。くらげか？」

「答える義理はないね」

攻撃力がどれくらいかはわからない。うかつに飛び込むのは危険かな。とはいえ、一度にあの数を捌ききる自信は全くない。

雪村を警戒しながらも、背後で戦うカナミを見た。

振りぬいた刀はかすりもせず、逆に水の弾に打たれている。

自然と、手に力がこもった。

早く、カナミの隣に立ちたいという思いが強くなる。でも、そのためには――

「無理やりでも、通る」

刀を両手で持ち直す。

予測は常時展開。わずかな挙動だって見逃さないように、視界を広く取る。

「んっ、まあ………できるなら、ね」

挑発するように雪村が笑った。

散弾のように打ち出される水を、カナミは直刀で受け流す。

刀に限らず、手に持つ得物は面の攻撃に弱い。点か線の動きしか出来ないからだ。

ゆえに、カナミは動きながら当たると思っものだけを刀で受け流す。最小限の動きと、力だけで。

「はあ、やっぱりこれじゃあ殺せないか」

嘆息して、静香は水の散弾を止めて自分の両手にばら撒いたものを集めた。

「大体、あんたは何で私のことを狙うのかしら？」

「三百年位前に、言った」

「そうだったかしら」

ふんわりと微笑む静香。殺伐とした空気のこの場でなく、昼間の学園や公園であればとても魅力的に映ったであろう。

カナミは首を縦に小さく振って、律儀に答える。二百年前も、おそらくそういったであろう答えで。

「私が金神で、お前が水神だから」

「ああ、そういえば私の七番目の神子を殺したときに言ってたわね。……そう言えば、私を始めて襲ったのもその時か」

ふむと、腕を組む静香。無造作な姿だが、流石にカナミがつけ入れる隙は見せていない。

「そうか、あれから二度、あんたに神子を殺されてると」

「うん。でも、毎回水神は殺せてない」

「今回は殺せるかもねえ。何せ、今の私は瀧野静香であって水神だから」

無表情だったカナミの顔が、わずかに動く。

それは、喜んでいるようにも見えて——戸惑っている風にも見えた。

でも、それも一瞬。今は、何時ものように無表情で。切れ長の瞳は静香を射抜いている。

「なら、今日で終わらせる」

四十二話 神々の諍い（6）

地獄の業火の如き炎によって溶かされた玉鋼は、その熱が冷める前に刀工が振るう槌によって叩き、伸ばされていく。

薄暗く、熱気のこもった鍛冶場には鉄を打つ音だけが木霊する。いや、違う。もう一つの音があった。

「……………くつ……………ぐすつ」

鼻をすする音。嗚咽交じりの吐息。

刀工が、泣いている。

思いが届かなかったことが悲しくて。

想いを拒絶されたことが悔しくて。

刀工が、泣いていた。

泣いてはいる。だが、彼の手は止まらない。

焼けた鉄を打ち、折り曲げ、また打つ。

刀を打つために必要な工程は、すでに彼の身体に染み付いていた。一心不乱に、やり場のない気持ちをぶつけるために彼は鉄を叩いていく。

「鉄は、裏切らないのに。刀は、思いが簡単に届くのに……………」

語りかけているのか、それとも独白か。造込みを終えた刀身を手に、ポツリとつぶやいた。

阻む鉄の音はない。だが、その声に答える者もまた、いない。

ジッと、涙混じりの瞳で刀工は未だに熱を持つ鉄をみる。彼の期待通りに出来ているのか、わずかに、本当に少しだけ目じりが緩んだ。

だが、この鉄が形を成すのはまだ先だ。この後にも、いくつもの

工程をへて初めて、刀と呼ばれるようになる。

少しの間をおいて、彼は再び鉄を打つ。

想いを、思いを忘れるように、捨てるように。

でも、それは、間違っている。

けれど、彼にそれを指摘できる人はいない。

秀樹の眼は、守る上ではこの上なく頼りになる。五秒前から行動を予測できるので、避けるのも受けるのも情報を得てから決めることが出来るからだ。

反面、攻める場合は少し難しい。

相手がどう防ぐか？ そのことが、五秒前から手に入る場合はほとんどないからだ。

たとえば、上段からの振り下ろし。秀樹の力であれば、振り上げてから振り下ろすまでの時間は二秒に届くかどうか。

対する真琴は、それを受けるか避けるかの選択を――見てからではなく、反射で動く。ほとんどの場合は回避だが、まれにその動きに合わせてカウンターを入れてくる。

その間に起こる攻防は、五秒には満たない。だから、秀樹は攻めるときに限っては真琴の行動を予測することが出来ないでいた。

つと、秀樹の頬を汗が伝う。それは、ゆつくりと重力に引かれるように肌を滑り、地面に一つだけ染みを作った。

荒く、肩で呼吸を繰り返す。

刃先は呼吸に合わせるようにゆれ、刀を持つ手は疲労からか震えている。

「んっ、思ってたよりも体力がないね」

「ぜっ……………はぁ……………う、るっ……………さいっ！」

喋るのもままならない秀樹に対して、真琴はいくらか余裕があるのか言葉にも気力があつた。

「なん、で……………はぁ……………んっ。平然としてんだよ」

無理やりに息を飲み込んで、秀樹は真琴に問いかける。

確かに。いま、この場に立つ真琴は傷だらけだ。にもかかわらず、彼は疲労も痛みも見せていない。

傷は、秀樹の知りえないことだが、真琴の再生能力のおかげですでに治癒している。だが、疲労は単に、運動量の差が出ているだけだ。

刀。日本刀は重い。また、振るうにも技術が必要だ。ただ叩きつけるだけでは、斬ることは出来ない。慣れていればどうということはないが、未だに使いこなせない秀樹はどうしても力任せになってしまう。まず、そのことが第一。

第二に、これは彼自身も気づいていないことだが予測による神経の鋭敏化と脳の情報処理。これらが、体力を必要以上に奪っている。本来、未来を予測するという行為は起こりえない現象だ。経験や知識から割り出すのとはわけが違う。彼のこの眼は、それらを全てすっ飛ばしてただ結果だけを情報として向かい入れる。その間、脳内では視力から得られた二つの異なる時間の情報を並列処理をする。片方は、起こりえること。もう一方は、起こっていること。

この情報の処理というのは、秀樹が思っている以上に負担を強いる。加えて、予測の範囲にある真琴の攻撃に対する対処。ここまで

が、二つ目の理由。

そして最後の三つ目。それは単純に、焦りだ。二人よりも離れたところ。そこでは、二柱の神が死闘を演じている。

散弾——いな、文字通り雨のように降り注ぐ水群を紙一重で避けて、カナミは僅かずつ距離をつめていく。傍目にそれは、遅々として進んでいるようには見えなかった。

カナミを助けたい。その一心が、秀樹を焦らせ、少しでも急ぐと無茶な攻撃に映させる。

だから、疲労は溜まっていく一方だ。

「……さて、いい加減に呼吸も整ったかな？」

「ちっ！ 嫌味な奴だな」

舌打ちをして、秀樹は刀を正眼に構えなおす。

疲労はある。だが、戦意は高い。

場合によれば、疲れを無視できるほどに。

秀樹は真琴を見る。予測のためでなく、攻め込むために。

真琴の戦い方は、相手に飛び込ませてカウンターでダメージを蓄積させていく方法だ。急ぎたい秀樹にとっては、嫌な相手である。

吐息を一つ。秀樹が動く。

踏み込みは三度。右足を前に、刀を突き出す。

刺突。狙いは心臓。

裂帛の気合が大気を揺らし、一直線に真琴の心の臓物をねらう。

その一撃は、隙さえつければ必殺にもなりえるほどに速い。

しかし、真琴は動いていた。まず、後ろに引いていた左足をさらに引く。すると、半身になっていた身体は流されて、秀樹に背中を一瞬だけ向ける形になる。

真琴の動きはこの後、右足を振り子に秀樹への裏拳。狙いは後頭

部だ。

けれど、そうはならない。予定を変えて、右手を背中に戻す。一瞬送れて、握った手に痛みが走った。

「二段構えッ……！」

秀樹がやったことは単純だ。真琴の言うとおり、刺突から、袈裟切りにつなげた。ただそれだけ。

それだけだが、これは意外と難しい。

まず、真琴は二段構えを秀樹が狙っていると読んでいた場合は二手を避けられるように動く。具体的には、後ろに下がるはずだ。

今回の秀樹の動きは、完全に一撃のみを狙っていると真琴は踏んだ。だから、カウンターを動きに入れた。

それは、秀樹の攻撃が一撃だけを狙っているように思えるほどに力が籠っていたからだ。

「へっ。意外と、何とかなるもんだ、なっ！」

「つつ！」

力任せに、秀樹は真琴が掴む刀を引き抜く。そのまま、止まらない。二度目の刺突。狙いは背中位置的には、真ん中から左肩に抜けるようにだ。

避けるのも受けるのも難しい。一瞬で判断を下した真琴は、足に力を込めて無理やりに前へと倒れこむ。

そのまま転がり、少しだけ距離を取った。秀樹は追わず、刀を正眼に構えなおした。

真琴も無言で構えなおす。

「へへん。お前の焦った顔、今日始めてみたぜ」

「まあ、今のはやばかったからね」

ニヤリと笑う秀樹に、真琴は曖昧に微笑む。

「でもまあ、これで決まりじゃないだな。お前の攻撃はほとんど俺に届かない。対して、今みたいに攻め続ければお前も対処しきれない時が出てくるだろ？」

「否定はしないよ。正直、あれは未来を予知できないと避けられる気がしない」

必殺。一撃に重さを乗せた攻撃の軌道を変える。それは、相当の負担を身体に強いる。だが、今の秀樹はその痛みを忘れていた。

一般に、脳内麻薬と呼ばれるそれは興奮状態の今だからこそ発揮されている。

明日には筋肉痛だろうなと、真琴は胸中で思う。教えてはやらないが。

「でもまあ——」

不意に、真琴は構えを解いた。そして、

「今回は俺の勝ちだけだね」

そう言ったのと、それが現れたのは全くの同時だった。

四十三話 神々の諍い(7) (前書き)

先日投稿したと思っていたのですが、失敗していたようです。
お騒がせを致しました。

四十三話 神々の諍い（7）

ふわりと、さながら羽毛が抜け落ちたかのように黒いカラスから同じような色の人影が一つ降り立った。

マガミだ。藍色の着物は着崩れていて、やや扇情的な様相をうかがわせる。

「双方、ここまでにしてもらおうかの」

ちょうどカナミと静香の間に割って入り、穏やかながらも有無を言わせぬ口調で宣言した。

「はっ？ えっ？」

秀樹は突如として現れたマガミに、眼を白黒とさせて状況を整理しようと周囲を見渡す。

「…とりあえず、彼女のところに行ってくれば？」

その様子に苦笑して、真琴はそう助言した。秀樹は少しだけ迷うようなそぶりを見せたが、やがて首を縦に振ってカナミの元へと走っていく。

「ふう、にしても、間に合ってよかったよ。沙耶も、お疲れ様」

「へへん。私がじかに迎えに行ったんだから、間に合わないはずないじゃない」

そういつてはいるものの、人の姿を取る沙耶は上気した頬を赤く

染め、彼女にしては珍しく息を荒げている。

ずい分と急いだんだなと、真琴は腕時計——は壊れていたので校舎の時計を見た。

沙耶にマガミをつれてくるように頼んでから、十五分も過ぎていないことを知り、真琴は少しだけ顔をしかめる。

「急いでは言ったけど、急ぎすぎだよ」

「でも、助かったでしょ？」

ふくれっ面で、沙耶はそっぱを向いてそういった。だから、真琴は、少しだけ厳しい声色で釘をさす。

「それはね。だからって、沙耶に無理して欲しくないよ俺は」

「……」

ジッと、真っ直ぐに沙耶を見て真琴は言う。

その視線が咎めるものに見えたのか、沙耶は真琴と目線をあわせようとしない。ただ、気にはなるのかちらちらと顔色はうかがっているが。

ああ、駄目だと真琴は自覚する。

沙耶のその仕草が、ふてくされた表情が可愛くて、自惚れでもなく自分のために急いでくれたという事実が愛おしくて。

だから、自覚する。

沙耶を本気で怒ることは出来ないなと。

「——でも、その気持ちはほんとにうれしいから。ありがとう」

ちよっただけ照れて、真琴は沙耶の髪を撫でながらそう言った。

「おっ？ おおっ！ ふふん！ だよ、だよ。ほれほれ、もつと撫でれ」

瞬く間に顔を綻ばせ、沙耶は真琴の手を甘受する。

そんな二人のやり取りは、微笑ましいようで正直うっとおしい。だから、マガミは真琴たちを意識から一時的に排除して静香とカナミを見た。

「さて、我個人としては思うところはある。我の大事な手駒を傷つけてくれたりと、のう」

「私じゃないですよ」

真つ先に静香は答え、真琴のほうを見る。その眼は、聞いていないと言いたげに恨みがましそうにしていた。が、すぐに視線を戻した。「私は何も見てない」とつぶやいて。

「ふむ。私事は後日に回すとして、先に用件を片付けるかの。お主等二人、我の配下に付かぬかの？」

「それは、以前に断ったはずだと思いますが？」

「が、その時とは状況が違うの」

「なるほど、もう一人の姿が見えないのは、そういう意図があったことですか」

「さてのう。だが、我の下に付くならばお主の命も保障するがどうするか？」

「拒否は出来ないとかわっているでしょう。わかりました、妥協しましょう」

不承不承と顔にはつきりと出しながら、静香は了解の意を伝えた。

わからない。

あれは誰だ。

神であるというのは、理解していた。けれど、知らない。ここま
で、水神以外の神を見たことがなかったから。

「なあ、このままなら戦わなくても良くなりそうだな」

何時の間にやら隣に来ていた秀樹が、気楽そうに言った。

「――」

戦わなくても済む？

私が、水神と？

私の今までが、生きてきた意味が、なくなる？

「そんなの……」

「えっ？」

「そんなの……嫌だっ！」

叫んだことに、自分でも驚く。私は、こんな声も出せたんだ。
地を蹴って、担ぐように刀を構える。
一閃。空をなく。

「まだ何も言っておらぬのだがの」

言ってから、突然に現れた神は右手を無造作に振るう。

「ッ」

私は痛みを理解できない。だから、わかったのは衝撃が走ったという事実だけ。気がつけば、視界には驚きと不安に染まった秀樹の顔が見えた。

立ち上がる。ダメージは、ない。加減されたのか、それともこちらの防御を突破できなかったのか。

「おっ、おい！ カナミっ！」

秀樹の制止する声は、無視した。

人の身体は不便だ。攻撃の方法が限られる。

とはいえ、この身体を捨てることは出来ない。私には、本体だけで動ける力がないから。

「まったく、我は争う気はないのだがの」

言つとおり、戦意は感じられない。でも、こいつがいたら水神は殺せない。

「うるさい。邪魔をするな」

「カナミッ！」

悲鳴にも似た秀樹の声。気が付けば私は、また空を見上げていた。攻撃されたことにも気がつかなかった。

「どうしたものかの。お主の望みは何だ？ 我ならば、大抵のことは叶えてやれるがの」

「水神を殺したい」

「駄目だの」

「じゃあ、邪魔をするな」

「それも駄目だの」

「……嘘つき」

「大抵のことは、と言ったのでの」

「なら、お前も敵」

言って、っ少しだけ距離を離す。多分、これくらいの距離があいつの攻撃範囲。

あと、刀がこれのままだと勝てない。

違う。攻撃の手段が足りないから、届かない。

だから——私は、私の中の刀を全て抜く。

異様な光景だった。

今、眼前で繰り広げられている光景は秀樹の理解を超えていた。けれど、眼が離せない。

刀があった。

古刀があった。新刀があった。新々刀、近代刀があった。

大刀、直刀、太刀、横刀、刀子、蕨手刀、大太刀、野太刀、小太刀、打刀、脇指、鎧通しがあった。

柄のないものがあった。鐔のないものがあった。刃こぼれのしたものがあった。両刃の刀があった。対となる刀があった。

業物が、鈍が、良業物に、上業物もあった。

百は軽く超える。だが、千には届かない数の刀が、カナミから零れ落ちていく。

その数、実に八百三十と一本。

ここにある全てが、カナミの身体。

戦場に打ち捨てられていた刀。

所持者の命を守った刀。

代々と受け継がれていた刀。

たまたま譲り受けた刀。

使われることなく飾られていた刀。

祭られていた刀。

呪われていた刀。

ありとあらゆる刀が、カナミの——金神の身体を作っていたのだ。気がつけば秀樹は、その場に腰を落としていた。

「はっ、ははっ…なんだよ、これ」

理解の範疇を超えていた。

なのに、秀樹はその姿から眼を放せない。

「これはこれは。思ったよりも、醜悪な出来だの」

マガミは今のカナミを見て、そう感想をもらす。

それを敵意と取ったのか、それとも初めから敵と見定めていたのか。

全ての刀が、咆えるように鯉口を切った。

四十四話 神々の諍い（8）（前書き）

今までにない長さになりました。

神々の諍いは、今回で終わるはずだったのですが…まだまだ、未熟ですね。

四十四話 神々の諍い（８）

とある刀工が、その生涯において作り出した刀の本数は百十二本。これを多いと取るか少ないと取るかは判別はつかないが、少なくともその中に傑作と呼べる物は二振りあった。

銘は対となる二つ。

カミモリとカミキリ。

神守と神斬。

前者には、初恋の人を守るようにと祈りを、祝福を込めて鉄を打った。

後者には、初恋を邪魔する者を、すなわち神を斬るようにと呪いを込めて鉄を打った。

込められた想いは互い違いのようで、その実は根底から変わらぬ一つの心。

芽生えたばかりの、実を結ぶ前に枯れ落ちた恋心。

二刀を構えたツカナミを守るように、あるいは真琴たちを攻め立てるように刀は浮いていた。

校庭は刀で、刃で埋め尽くされている。

構えはそれぞれが違う。刃先を向けているものもあれば、刃を寝かせているものもあった。人の姿があれば、担いでいるように見えるものもあった。

それらは全て、元の持ち主たちの構え。生涯を戦場に生き、刀を振るい続けてきた者たちの経験が生んだ構え。

「あらら、形勢は逆転かしらね」

「どうだろ」

百を超える刀に囲まれても、沙耶は顔色一つ変えずに悠然と立っていた。対して隣の真琴は、やはり緊張ゆえか顔が青い。

「……ッ」

生唾を飲み込んだのは秀樹だ。彼をも、刀は逃すことなく包囲していた。

——クソッ、情けない。

秀樹は胸中で一人、自分を叱咤する。地にしっかりと足を下ろしているが、その両脚は小刻みに震えている。恐怖でだ。

チラと、秀樹は目線を左右させる。

左手側には、だいぶ離れているが真琴と沙耶が。二人の様子は彼からは把握することは出来ない。

正面はマガミと彼女の後ろに庇われる形となって、静香が立っている。二人を取り囲む刀の数は最も多い。いくつもの刃の隙間から、辛うじて着物や肌の色を確認できる程度だ。

最後に右手側。秀樹のすぐ側。

カナミの周囲には刀はない。彼女が手にもつ、二振りのみ。秀樹は名を知らぬそれを、神守と神斬と言う。

カナミの、金神の本体とも言うべき二振りだ。

「動かないで。私の狙いは、水神だけ」

抑揚のない声で、一つ一つを確かめるようにカナミは声を発した。それは、秀樹に言っているようで周りの全てに聞かせるように校庭

に響いた。

「はて、どうしたものかのう」

「のんきに言っていないで、打開策を講じて貰いたいですね」

二柱の神は、無数に近い刀を前にしても表情一つ崩さずに、しかし警戒は緩めずに立っている。

場はカナミが圧倒的優位を維持したまま膠着しているように見えた。だが、事実は逆だ。

この場において、もっとも強大な力を保持しているのはマガミだ。彼女自身が、カナミを戦力として引き入れることを考えずに暴れれば――犠牲を考慮に入れなければ――決着はすでについているはずである。

力の差を正確に理解したカナミは、この校庭にいる全員に牽制をかけながら策を組み立てる。

全ての刀で静香を襲う。

いくつかを牽制に使い、本命のカナミが静香を襲う。

大きく分けて、策はこの二つ。無論、そこから細かい刀の使い方などの差異はある。だが、基本はこの二つ。

それら全て、勝算は低いとカナミは考えていた。刺し違えれば良し。

ただ一念、それだけを思いカナミは時を待つ。

――どのタイミングで動かすかの。

胸中で、ぼやくようにマガミは思う。視線を向けようともしないが、意識はわずかにそちらへと注がれていた。

「さて、どのタイミングで使うか」

校舎の屋上。そこに、校庭を見下ろす人影が一つある。

伊吹柊だ。

彼は、静香が予想したのと同じこの場に、けれど運んできた沙耶や協力を依頼したマガミ以外に知られることなく潜伏していた。

『……もうすぐ、動きがあるだろ』

柊の傍らから声がする。

そこにあつたのは、沙耶が振るう妖剣オボロ。声の主はその剣に宿る意思、朧だ。

「へえ、君の持ち主がかい」

『……いや。その良人がだな』

わずかに柊の頬が引きつる。

彼の位置からもっとも遠いところに立つ真琴は、辛うじて首を振っているのがわかる程度だ。しかし、朧は動くと言った。

「根拠は？ 少なくとも、真琴君は这其中でもっとも非力だったと思うけど」

『特技、知っているだろう』

「眼の良さ、だね」

なるほどと、柊はつぶやく。

「なら、真琴君の動きが止まったら起動させる。準備は――」

『愚問だ。何時でもいける』

妖剣に不可思議な言葉が浮かび浮かび上がり、怪しく輝く。

赤く、煌々と光を灯す。

その光を満足そうに見た柊は、再度真琴を見た。未だに周囲を確認しているが、時おり一点を食い入るように見ている。

柊は、真琴の挙動を見逃さないように真っ直ぐに校庭を見下ろした。

「んっ、やっぱり」

「何かわかった？」

「うん」

小さく肯首して、真琴は自分が今まに見ている物を沙耶へと伝えるべく口を開いた。

「この刀は今、元の所有者の技能をなぞる様に構えてる。見えないけど、使い手がいると思っていいよ。ただ、本当にいるわけじゃないね」

「んと、つまり性能の低いNPCって考えれば良いのかな」

「それでいいと思う。レベルもまちまちだし」

俺より弱いのはそんなにないけどという言葉を、真琴は飲み込んだ。

「次は本体だね。まあ、カナミの持つてる二本の刀がそうみたい」

真琴の眼に見えているもの。中空を静止する刀から伸びる、無数とも言えるほどに存在する空色の線。それら全ては、カナミの持つ二本を基点としていた。

見える色はやはり青。ただし、右は透き通ったスカイブルーなのに対し、左は澱んだミッドナイトブルー！。

昼色と夜色の輝きを発する対の刀。

「あれは、たぶんちよつとやばい」

「あの二本？」

真琴は無言でうなずいて答えた。

「わかった。なら、あの二本へ要注意ね。マガミには…良いか。あいつなら、自分で何とかするわね」

「うん。残りは矢口君だけど…ここからじゃ何も出来ないね」

こちらの意を伝えるには遠いし、大声を出せばカナミはすぐに二人を襲うだろう。

「まあ、今からのこと自体が成り行き任せだからね。祈つとけば良いんじゃない？」

「誰にだよ」

「勿論、私に」

動きが二つあった。それをカナミは察知したが、しかし遅い。

一直線にカナミへと向かってくる真琴と沙耶。刀による攻撃を、そう思った瞬間にもう片方が動く。

「まったく、非常識な女だ。あのカラスは！」

屋上から響く声。手にした妖剣を高く掲げ、柊は祝詞を、すでに組まれたそれを起動させるための言葉を紡ぐ。

「カラスの大妖、沙耶に変わりて召喚——来たれや、磁界の獣！」

妖剣が、朧から発せられた赤い光が暗くなつた校庭を怪しく照らす。

中空には不可思議な紋様が書かれた円。あり得ざる記号で作られた、ヘキサグラム。

その中心に現れたのは、獣と呼ぶにはいささか奇妙な姿をした。人や、妖怪とも違う。

そもそも、生物と呼ぶのもおこがましい。

球体だ。巨大で、黒い鉄の塊だ。

横目に現れた磁界の獣と呼ばれるものを見て、真琴は人知れずに嘆息した。

沙耶が今日の午前中に仕掛けた術。それは、あれを呼ぶためのものだ、と真琴は聞かされていた。

「にしても、磁界の獣ってのは大げさだよな」

「カツコいいからいいの！」

実際、中空に浮かぶあれは工業用の磁石だ。ただ、沙耶がなんとなくカツコいい名前を付けたいからという理由で磁界の獣なんて大層な呼び名があった。

しかし、その精度は間違いなく強力だ。少なくとも、ひとたびスイッチを入れれば付近の鉄を根こそぎに集めてしまうほどに。

駆動音が、響き渡る。

いかに稀代の名刀の数々であれ、その材質は鉄。強力な、それこそ車を持ち上げられるほどの磁力の前にはいかな切れ味でさえ無力。全ての刃が、刀が、空にある鉄球に吸い寄せられていく。

「つつ、くっ……！」

それは、カナミの持つ二本とて例外ではない。今は、磁力に逆らおうと必至に押さえ込んでいるが、ふと力を抜けば瞬く間に持ち去られるのは眼に見えていた。

だから、カナミは跳んだ。他の誰かが動く前に、一刻も早く状況を打開するために。

その意図を理解したのはマガミだ。しかし、彼女は動かない。変わりに、不敵に笑って真琴と沙耶を見た。

——何処までいけるかの。

飛翔は高く、速い。狙うへ空の鉄球——ではない。

狙いは、鉄球を呼んでいるへキサグラム。その一端を、裂く。

「せつ！」

煌くような一閃。しかし、太刀筋は二つ。

方円を描くへキサグラムが、三つへと両断される。

消えていく鉄球。磁力を失い、自由落下に身を任せる刀。意思をつなぎ、操るかとい瞬だけ思うカナミだがそのヒマはないと理解する。

視線の先。翼を広げた沙耶の上から、一人の影が跳ぶ。真琴だ。真琴の右手から伸びる黒い帯。封印術そのものが、面妖な軌道を取ってカナミを襲う。

直感にもいた怖気がカナミに走り、半ば無意識のうちに刀を振るった。

斬った。その自身が、カナミにはあった。

しかし、黒い帯は未だに健在。むしろ、斬られた部位と結びついて右手の刀を絡め取る。

それをみたその一瞬で、カナミは落下する刀を操り自身の足場へと変えて真琴と肉薄。

煌く刃。

赤い飛沫。

斬り飛ばされる右腕。

追撃を、その試みは沙耶によって阻まれる。

炎が。赤銅色の炎が。

柱か、あるいは大蛇か。炎の濁流はカナミを飲み込まんとうねりを上げてカナミを飲み込まんとする。

だから、カナミは下に飛ぶ。足場はある。操った刀を蹴り飛ばし、校庭へと真つ直ぐに。

反転。地に着いた勢いをそのまま遠心力に乗せ、遅い来る炎を斬る。

やや時を置いて、離れたところに真琴と沙耶は降りた。たまたまか狙ったのか、すぐ側には秀樹がへたり込んでいた。

「生きてる？」

「あつ、ああ…何とか…」

ゆっくりと、怠慢な動作で秀樹は立ち上がる。まだ足に力が入らないのか、身体はわずかに揺れていた。だが、命に別状はなさそうだ。

安堵の息を付いて、真琴は切られた右手を切断面にくつつける。本来ならそれだけで癒着することはないのだが、彼の場合はキチンと神経までつながった。

「さてと、どうしようか。攻めるにしても守るにしても相手のが上手みたいだよ」

「殺す気で行く？」

「まつ、待ってくれ！」

本気とも取れる沙耶の言葉をさえぎるように、秀樹が声を大にしてい叫んだ。

「俺が、俺が戦う！ いや、戦わせてくれっ！」

「へっ？」

計らずとも、真琴と沙耶の言葉が重なった。そして、互いに顔を合わせた後にそれぞれで動いた。

沙耶はカナミと向かい合い、真琴は秀樹と向かい合う。

「理由、聞いても良いかな？」

「ただの自己満足だ」

はつきりと、秀樹は自分の思いを言葉にする。

「俺は、カナミに人を殺して欲しくない」

「なぜ？」

勘なんだけどき、そう前置きして秀樹は続ける。

「なんてか、その…そうだな…悩んでそうだったからかな」

思い出す。一瞬前の、戦いが終わると思われたその瞬間のことを。

嫌だ。

その叫びを、秀樹はしかと聞いていた。

「多分、戦いが終わった後のことを知らないんだ。あいつにとって、水神を倒す以外の目的なんて存在してないんだよ、きつと」

だから――

「それ以外の目的を見出せるようにさせる為に、今はあいつの邪魔

をしてやる！」

不思議と、秀樹の震えは止まっていた。

四十五話 神々の諍い（終）（前書き）

今回は、短い上に主人公とヒロインたちは影も形もでてきません。
どうかご了承ください。

四十五話 神々の諍い（終）

秀樹とカナミ。二人の差は、比較するのも馬鹿らしいほどに開いていた。それを最も自覚しているのも、秀樹で間違いはない。

フツと、呼気を払う。

不思議と、気分は落ち着いていた。けれど、熱くくすぶるものが胸のうちにもある。

鞘のない、むき出しの刀。それはカナミに良く似ていると秀樹は思った。

「カナミ」

一定の距離を保ったまま、何気なしに秀樹は口を開く。

返事はない。が、秀樹は初めから期待していなかったのか気にすることなく続けた。

「仮に、水神を殺したとして——その後、どうする気だ？」

「……………」

答えはない。いや、

「何も考えてないんだろ」

初めて。秀樹とカナミが会ってから始めて、今まで代わることのなかった表情が少しだけ歪んだ。

「図星だろ。むしろ、目的以外を知らないもんな、お前は。だからそれが取り上げられそうになったら怒ったんだ」

鼻で笑い、秀樹はカナミに刃先を向ける。

嘲る笑みを顔に貼り付けて、秀樹は声を大にしてカナミに告げた。

「ばっ、かじゃねえの！」

一呼吸のためを置いて、発せられたのは侮蔑の言葉。

「世の中にはいくらでも楽しいことはあるって言うのに、一つの目的を達したら何をして言いかわからない？ 馬鹿だなお前は。ああ、大馬鹿者だ。そんなんだから、水神を何百年も倒せねえんだよ！」

「…うるさい」

「またそれか？ 自分に都合の悪いことはそうやって切り捨ててきたんだろ」

「…黙れ」

「いいや、言わせてもらうね。人の話を聞かない、自分の目的を持つてない。そのことを悩みもしない。そんな奴は、何千年たっても半端物のままだ。金神だから？ 笑わせんな。お前が何も得られないのを自分の役職のせいにしてんじゃねえよ」

「うるさいっ！」

叫んだ。先のように、声を張り上げて、感情をむき出しにしてカナミは叫んだ。

怒りのままに、刀を、神斬りを構えて走る。疾駆は稲妻の如く互いの距離を埋めていく。

予想通りだと、秀樹は内心でほくそ笑む。あくまで、心のうちでだ。全身は全て、カナミの一撃に集中する。

上段からの振り下ろし。

秀樹の眼が見た攻撃は、それだ。ただし、神速と呼ぶに相応しい速度での一閃を避けるのは無理だとそうそうに見きりをつけていた。だから、避けない。迎え撃つ。

構えは先ほどから刃先を地面に向けるように、無防備に持つ。

下から、カナミの斬り下ろしに合わせて斬り上げる。押し負ければそれまで、人間の開きが一つできるだけだと樂觀を持って構えている。

呼吸は整っていた。

高揚した心を律する理性は、波風一つない水面のように落ち着いている。

カナミの間合いに入った。それは同じ得物を持つ秀樹の間合いでもある。

踏み込む。無造作に、一步だけ右足を前に。

体重の移動に乗せて、刀を滑らせる。

カシャンかガシャン。とにかく、そういう音になった。

あつけない幕切れだ。秀樹はそう思った。

秀樹の手には、空をつくように真っ直ぐに伸びた刀が月明かりを受けて雄雄しく光り輝く。

カナミの手に、地へと振り下ろされたはずの刀は柄を残して砕けていた。

「――あつ」

呆然とした声。生気や気迫といったもの全てが、その一言で抜け落ちていくようだ。

「今の剣が、理由なんだろ」

構えを解いて、砕けた鉄を見下ろしながら秀樹は言った。

「今の、神斬って刀を元にして生まれたから水神を付け狙ってたんだよな」

「…うん」

なぜ知っているのか、とはカナミは聞かなかった。聞かずとも、己がもう一つの半身が教えたのだろうと理解したからだ。それは正しい。

「なら、もう理由はなくなっただぜ」

笑う。嘲る笑みでなく、心から秀樹は笑った。そんな秀樹を、カナミは良くわからないと言いたげな表情で見上げる。実感が持てないと言ったほうが正しいのかもしれない。

「でも、私に理由がないのは変わらない」

「そんなことないさ」

言い切る前に、秀樹は否定して見せた。

「まだ一本、残ってるだろ」

逆手に持ち直した刀。神守をカナミの眼前へと差し出す。最初に作られた、守りたいという願いを込めた刀。

「まだ、こいつが残ってる。それに、一緒にここまで来た刀だって

何百本もあるだろ」

あたりに散らばっている刀。破損しているものもあるが、そのどれもがカナミにとっての身体と変わりはない。

「これからは、守ることを理由にすりゃあいいだろ。それなら、対象が生きてる限りは絶対に終わらない」

「……………まだ、良くわからない」

砕け散った刀身を一瞥して、カナミはゆっくりと言葉を捜しながら形にしてい

「でも、探してみたい」

理由を。自分がここにあるという目的を。

金神として意思を持ち、水神を殺すために存在し続けた一振りの刀。それは今、初めて自分の意思を持った。

まだまだ稚拙で、芽生え始めたばかりのそれは実をなすにはほど遠い。それでも、それは形を作ろうという願いに満ち溢れていた。

四十六話 一週間後（前書き）

お待たせしました。ようやく更新です。

一週間更新を守れず、大変申し訳ありません。その上、かなり短い
です。

これからしばらくは、こんな感じのゆるい話が展開していく予定です。
です。では、どうぞ。

四十六話 一週間後

グテツと、真琴は自分の机の上に突っ伏した。

「あゝ、ダル」

全身からお疲れですよとオーラを出して、真琴はごろごろと頭だけを机の上で動かす。

「やっぱ、徹夜はキツイ」

「少し寝てる？」

「んっ……魅力的な提案だけど、止めとくよ。寝たら起きない」

欠伸をかみ殺しながら、真琴はシパシパと眼をまたたかせる。今にも閉じてしまいそうだが、辛うじて意識は保っているようだ。

先の、水神と金神との騒乱からすでに一週間が過ぎていた。

真琴と沙耶の二人は、あの事件——と呼ぶには少々身内内でまともりすぎているが——とにかく、ことが終わつての事後処理に追われていたのだ。

さしあたり、破損した校舎の修繕費用の捻出や近隣の工事現場から沙耶が盗み出して勝手に召喚してしまった重機の返却などなど。

特に問題だったのが、警察組織。真琴の父である克己をごまかすことだ。方法ともかく、まさか神と殺し合いをしていたなど言える訳もなく、真琴は必然として嘘をつかざるおえなくなってしまった。が、父の職業上生半可な嘘は通用せずに、その台本を用意するためにまず三日ほど費やす。それが功を奏したのか、まずまずの結果が得られたと真琴は思っている。

次に問題になったのは、カナミと静香の処遇だ。静香はまだ良い。一応は同意の上で、マガミの元へ下っているから。もっとも、彼女も彼女でまた後で問題となるのだが。

一番の問題だったのはカナミ。マガミとしては、彼女は自分の監督下に置きたかったのだが本人が嫌がったのだ。

いわく「めんどくさそう」とのこと。相変わらずの無表情であったが、秀樹に言わせると面白がっていたらしいのでなかなかどうして、感情がないというわけではないようだ。

一応は管理下にあるということで妥協した。すると、それに習ったかのように静香も普段は自宅兼孤児院にいたいと言い始めた。

流石にマガミもいい顔をしなかったが、真琴たちが定期的に様子を見るならばということで渋々と納得することとなる。機嫌を損ねて、マガミはその時点で話し合いをする気はなくなっていました。が。

そして、カナミの所在だがこれは意外とあっさりというか、やはりというべきかともかく決まった。

「よっ、お疲れみたいだな」

「まあね。てか、大半は君たちのせいなんだけど？」

「わりいな。でもまあ、中間管理職の責務だと思って頑張れや」

「人事だと思つて…ああ、カナミさんもおはよう」

「ん」

大方の予想通り、秀樹のところで居候をしている。現在はここの生徒として、転校してきたばかりだ。

「おっ、制服届いたんだ？　へえ、結構にあうじゃない」

「うん。ありがとう」

こくりと、わずかに首を縦に振って礼を述べるカナミ。その傍らに立つ沙耶は、微笑ましげにその姿を見守る。はたから見れば、姉妹のようにも見えた。

実際、この一週間。沙耶はカナミの世話を甲斐甲斐しく焼いていた。学園への転入手続きに始まり、勉強に必要な筆記用具に最低限の家具。それから普段の私服数点に至るまで、それらの購入資金は全て沙耶のポケットマネーからでている。

なぜそこまでと、真琴は聞かなかった。ただ、沙耶が嬉しそうだからそれでいいかと勝手に納得していた。

もしかすると、沙耶自信もカナミのことを妹のように思っているのかもしれない。

「ところでさ、雪村」

「ん？」

「もうすぐ試験なわけだ」

「だったね。確か、来週だっけ」

霊能科とはいえ教育機関。勿論、定期テストは実施する。ただ、一般のそれと違って中間にあたるこの時期は筆記。期末には実施といった形で試験を行っているのだ。

「そう。その試験なんだが、自信の程は？」

「あるよ」

さらつと答える真琴に、秀樹は眼を丸くする。そして、大げさな動作で両手を取って勢いに任せてまくし立てた。

「勉強、教えてください！」

放課後の図書室。試験前だからか、人の数はまばらで時おり本をめくる音がよく聞こえる。

「はあ、お前もかブルータス」

「てへへ」

教師役に真琴と沙耶。教え子には秀樹、カナミ、そして臼井恵子がそろつ。

「にしてもさ、雪村君って頭良かったんだ」

ちよつと意外かもと、恵子は小首をかしげる。

「意外って、普段はどんな眼で見てるんだよ」

「色ボケ」

「色ボケだな」

「色ボケね」

「マイラバー」

最後のは沙耶だが、他の三人はそろって同じ答えを提示したのだ。
った。

「むう……そんなになな？」

「てか、バカップルそのものだと思うけど？」

「いゃん」

褒めてねえ。照れる沙耶にそう言いたい秀樹だが、聞く耳は持ち
そうにない。

「と、とにかく始めようか」

「良いのか？」

「こうなつてると、すぐに戻らないから——家に帰って、頑張るよ」

何を。というのも、秀樹は聞くことは出来なかった。

勉強会は、開始当初の愚だ愚だとは裏腹になかなかのはかどりを
見せていた。やり方としては、とりあえず問題を解いてつまるところ

ろを真琴と、たまに沙耶が解説するといった具合だ。

しばらくは、カリカリと各々のペンが走る音が木霊する。

「なあ、雪村」

「ん？ ああ、そこはあつてるよ。眼を合わせないで、けれど良く視るつてのは霊との交渉のときに有用な手段だからって書いてあるね。実際は、どうだか知らないけど」

「いや、そうじゃなくてさ。夏休みにどっか泊まりで遊びにいかねえか？」

「ずいぶんと気の早い。まだ中間も終わってないけど？」

「まつまつ、いいじゃねえか。臼井はどうする？ 一緒に行くか？」

「んゝ止めとくわ。てか、嫁入り前の娘を泊まりに誘うなよ」

「沙耶さんは、雪村が行くなら行くだろ？」

「当然ね」

「で、カナミは？」

「海以外なら」

錆びるもんな。と、真琴は胸中で思った。

「よっしゃ！ 決まりだな。場所の手配は任せとけ」

「その前に、試験を終わらせようね」

「うっ、わかってるよ」

勉強会は、下校時刻まで続くのだった。

四十六話 一週間後（後書き）

スランプ、とでも言いましょうか。霊能科の話が、全然思い浮かばなくなってしまうました。ので、最近は短編などを書いていたのです。

しばらくは日常描写が続くので、別枠に作っている短編集を削除し、内容を手直ししてこちらに上げなおそうと思っています。アレはあのままがいいという方がいらっしゃるかもしれません、ご一報ください。

来週には、実行する予定です。

四十七話 ある昼休み。

職員会議は遅々として進んでいない。その原因を取り除くのは、自分では無理だろうなと麻生は諦めと共に頼杖をついた。

「ですから、あのカラスの妖怪を学園から追放するべきです」

強固に、しかし声は荒立てないで三学年主任の原口徹は自身の意見を主張する。それに対して、賛同の声も反対の声もあがらない。関わりたくない。会議室の面々が共通して思うのは、その一言に尽きる。

敗北を、不幸を、呪いを、災いと呼ぶとされる負告鳥。一部の地方でしかその伝承は残されていないが、かの妖怪が関わったと思われる記録は多数見つかった。

いわく、百の軍勢を一息で吹き飛ばした。

いわく、吐く炎の熱さは十年を過ぎてもそのままである。

いわく、妖怪の姫が一目を置いている。

その中でも一番多いのは元寇の乱。日本が始めて外国から攻撃を受けたその時、負告鳥はモンゴル側の船に飛んでいったという。

真偽のほどは定かではないが、後に神風と呼ばれる奇跡が——モンゴルにとっては不幸が起きたのは間違いがない。

負告鳥がそれをなしたのか、負告鳥がいたことで起きたのかはこのさい問題ではない。ただ、伝承を裏付けするような出来事であったということだけが重要なのだ。

それゆえに、誰もが口を開かない。

係わり合いになる。ただそれだけで、かの妖怪は災いをもたらすかもしれないのだから。

と、ここまでが建前の理由。

本当のところは、

「しかし、学園長のご友人ですよ？」

そういうことだ。それがあるから、だれも沙耶に手を出さない。誰だって、雇い主の友人に文句を言って不評を買いたくはない。事なかれ主義万歳だ。

「だからといって、今月に入って二度です。二度も、校舎が破壊されるという事態が起きました。また、教員の中に負傷者まで出えます」

「犯人はすでに捕まっているんでしょう」

「確かに。ですが、かといって事件が起きたという事実を見過ごすわけにはいきません。原因があればその対処を求めるのは、普通のことでしょう」

「その確証もないのに、ですか」

「不吉な伝承。そして、事実として起きている事件。この二つがあれば十分かと思いますが」

「不十分でしょうな」

「…教頭先生？」

何人かで行われていた討論に割り込むように、教頭である伊藤玄輔は口を開いた。

「不十分です。彼女には不吉な伝承がある。それだけで、生徒の使

役妖怪である彼女を追い出すことはできないですな。事件との因果関係——たとえば、主犯であるというならばともかく」

「しかしっ!」

「そもそも、なぜ貴方はそんなに彼女を追い出したいのですか」

グツと、初めて原口は言葉に詰まった。何かあると公言したようなものだが、かといってそれを突っ込む気は誰にもない。そうそうに会議を終わらせたい一心でだ。

「理由もなく、大義名分もないのでは会議の意味はありませんね」

音を立てて伊藤が立ち上がり、周りもそれに同調するかのようにな次々と席を立つ。会議は終わりだ。

麻生も追従し、会議室を出て行く。その時に一度だけ、麻生は原口のほうを振り返り、眼を見開く。ギョツとした、というのがしっくり来るか。

能面のような、感情をうかがわせない顔がそこにあった。

苦笑して、沙耶はヘッドフォンを強引に耳から引き離した。手には無骨な黒い機械。

盗聴器だ。

仕掛けた場所は会議室。霊的な結界で守護されたそこは、しかし科学に対する備えはなんら行われていない。

霊能力を筆頭に、オカルトを学ぶ者たちは科学力を疎んじる。こ

れこそが人の作り出した英知だというのに、彼らは否定する。
ゆえに、気がつかない。

「とりあえずの心配はなさそうね」

嘆息し、ふと目線を自身の膝へとうつす。

あどけなく。年不相応に緩んだ顔をして眠る真琴の顔がある。

沙耶の顔がほころんだ。

大丈夫。まだ、いられる。

再確認し、しかし沙耶は一抹の不安を胸に覚える。

真琴がマガミと契約している限り、事件には何度となく関わることになるはず。そうなったとき、はたして自分の関与が疑われるか否か。

間違いなく疑われる。物証も、証言も必要ない。ただただ、負告鳥であるという理由だけで十分にすぎた。

ここを、学園を追われるのは構わない。

だが、真琴の側を離れるのは嫌だとも思う。

乞えば、願えば真琴は沙耶と共に何処へでも行くだろう。その確信を沙耶は持っている。

だからこそ、その選択は選べない。

沙耶と共に行く。それは同時に、沙耶が背負う罪科も背負うこと。それだけは、させたくない。

ゆえに、沙耶は先手をとるべく情報を集めていた。

今回に限れば――予断はできないが――すぐに動きがあるとは思えず、静観することを沙耶は決めていた。

「――こっちはともかく、禍神か」

生きていると、そう言われただけの神。過去に打倒し、滅ぼしたはずの仇敵の名前。

数少ない友の姿をした、自分から、様々なものを奪った怨敵の姿を思い起こす。

憎悪も、憤怒もある。けれど、それをぶつけるべき相手は何処にいるのかすらわからない。

手を出せない。殺したいほどに憎んでも、その相手の所在がわからなければ意味はない。

「ずい分と怖い顔してるね」

「えっ——あつ、起こしちゃった？」

「まあ、沙耶の気配が変だったからね」

「あちゃー」

失敗したと笑って、どう誤魔化そうかと沙耶は頭を働かせる。が、それは答えを出す前に中断させられた。ほかならぬ真琴の手によって。

「今、俺に話せることかな？」

「んっ……ちょっと、難しいかな」

「わかった。なら、聞かないよ」

いいのと、沙耶は目線で問い返す。

真琴も無言で首を振って、肯定の意を返した。

大事なことなら、言ってくれると信じてる。その言葉は、音にならずとも互いの間でしかと行き交ったように見えた。

目線が重なる。

沙耶は真琴を、真琴は沙耶だけをみて。
そつと、互いの唇を重ね合わせた。

四十七話 ある昼休み。（後書き）

あまり進展はない閑話的な話です。

あ、それとホームページを作ってみました。

殆どコンテンツはないですが、ちまちまと更新していくのでよろしければ来てみてください。

それに伴い、ペンネームも変更します。今日以降は、日中まさひろと名乗らせていただきます。

h r e f = " h t t p : / / m a s a h i r o 2 h o n d a n a .
w e b . f c 2 . c o m / i n d e x . h t m l < 日中まさひろ
の本棚

四十八話 新しい術を覚えたい

弱いなど、真琴は改めて自分の力が劣っていることを自覚する。日課としている沙耶との修練。やはり沙耶には真琴の力は届かなく、今は全身を芝生の上に横たわらせていた。

「封印術も、物理攻撃には効果ないし」

「それはねえ。そもそもあれは、理力で出来たものを封印する術だからね。壁としてくらいなら使えるだろうけど、武器にするのは無理じゃない？」

「むう… 防御力はあるほうだよな」

「んっ？ まあ、再生能力の限界を超えなきゃね」

一瞬なんのことかと思ったが、すぐに真琴自身の技量に対してかと至った沙耶は肯首してから答える。無茶をしないようにと、一応の戒めをしてから。

「とすると、攻撃力だよな」

「武器でも持ってみる？」

「武器、かぁ」

「そつ。此れは私以外に使えないけど、それ以外だったらそこそこの名器は持つてるわよ」

手にした妖剣を掲げながら、沙耶は自分が所有しているいくつかの武器を思い出す。そういえば、何処にしまったかなど。

「武器か……いや、どうだろ。そうすると封印術の使い勝手が悪くならないかな」

「それはあるわね」

封印術はその帯状の黒いものを理力存在にまきつけて使う。縛りつけ、侵食し、真琴の体内へと取り込む。

帯は、真琴の両腕から伸びる。そのため、手が塞がっていると自在に操るのが難しくなるのだ。

「だとすると、やっぱり素手のままかあ」

「というか、私としては前線に出ることを前提に考えないで欲しいんだけど……」

「そこは、まあ……男の子ですので好きな子を守りたいんですよ」

「いやあ、ははっ……………うはっ」

照れる。すごい照れる。面と向かってそういわれると、流石に沙耶も恥ずかしいのか顔を赤くさせていた。

「ととつ。危うく誤魔化されるところだったわ。自重。私自重」

「誤魔化すって、そんな意図はないけど」

「いやいや、私のほうがぜんぜん強いんだからね。強いほうが前。

これRPGの常識!」

「RPGって……んっ?」

「どうかした?」

何かを閃いたのか、真琴は上半身を起こして頭を何度もかしげながら、確認するように沙耶に問うた。

「いや、RPGってよく召喚術士って出てくるよね」

「そうね。最近はいないけど、スーファミなら多いかな」

「精霊とかってさ——理力で構成されてるよな」

「あっ!」

真琴の中で一つ、目標が出来上がった。

精霊——日本という国では八百万の神に数えられる彼らは、人前に姿を見せることはめったにない。

ゆえに、その力を欲しいと思ったところでたやすく手に入れられるわけではないのだ。特に、真琴の考えていることは通常通りに契約を結ぶのとは違うのだからなおさら。

「で、我のところに来たと」

「おう」

「力いっぱい肯定すればいいと思うなよ」

書類を書いていた手を止めて、マガミは思いっきり大きなため息をついた。

マガミの私室。書類を書くための机と、最低限の資料を納める本棚以外は何もない部屋だ。広さも真琴の部屋とそう大差はない。

「あいにくと、我にも精霊や八百万の情報はないの」

「またまた。心当たりくらいはあるんでしょ？」

「…ないわけでは、ないがの」

沙耶の茶化するような物言いに、マガミは歯切れ悪く答える。

「やばい奴なのか？」

「いや……我が知っておるのではない。資料があることを知っておるのだの」

「資料？」

こくりと首を振り、説明するべきかどうかを思案するようにカツと机を指先で叩く。そうやって少しだけ考え込んで、ようやくマガミは閉ざしていた口を開いた。

「我が拠点としているこの村にはの、数年前に神を作り出すという

暴拳にでた」

沙耶の顔色が変わる。真琴からは見えないが、険しい目つきは何を言う気だと訴えている。過保護だのと、内心で苦笑して——笑み自体は顔にも宿して——マガミは続ける。

「その時に使用した儀式場はそのままにしてあつての。上手く使えば、神を新たに作れるかも知れぬぞ」

「新たなつて……そんなことしていいのか？」

たとえ肉体を持たぬ存在であろうと、自分の目的のためだけに新しい命を作り出すこと。それは、使いやすい道具を作るのとはわけが違う。作り出された存在には自我があり、意思がある。

「さての。そもそも、お主の目的に合うように作られたのであれば、疑問を持つことすらしないと思うがの」

「気分のいいものじゃなさそうだね」

「知らぬよ。お主がその責を全て負えるのであれば、問題ないだろうよ」

「……わかった。とりあえず見て来るよ。使い方は？ てか、場所はある？」

「一姫のリハビリも兼ねてなら、あやつに案内させよう」

「ん、もう立ってるんだ」

ほっと息をつく。

「なら、すぐにも行ってくるよ」

「あつ、それなんだけどさ」

マガミに背中を向けて、部屋を出ようとした真琴に沙耶が声をかけた。

「悪いんだけど、私はこいつに話があるから先に行っててくれる」

「えっ？」

当然沙耶もついてくるものだと思っていた真琴は少しだけ面くらい、マガミのほうを見た。

「ふむ…安心せい。少なくとも、こやつが我に何かせん限りは手は出さぬよ」

肩をすくめ、苦笑するマガミ。

「いや、それは疑ってないけどさ——んっ、まあいいや。それじゃあ行ってくる」

ひらひらと手を振って、真琴は退出した。

真琴を見送り、十分に気配が離れたことを確認した沙耶はおもむろに口を開く。

「で、何を考えてるの？」

「なに、とは？」

「呆けたの？ あそこは禍神が生まれたところでしょう。そんなところに真琴が余計な記憶を取り戻すかもしれないじゃない」

「はっ。そんなことが」

あいも変わらず真琴を優先する沙耶を一蹴し、マガミは冷ややかに笑った。

「むしろ、そうなればあやつの望みどおりであろうよ。少なくとも過神と相對したときのあやつは、我に勝らずとも劣らなかったからの」

「親友を殺した記憶なんて、ないほうが言いに決まってるじゃない！」

「それは建前であろう」

「——っ」

言葉に詰り、代わりに拳に力を込める。振り上げようとして、けれどその矛先がいつの間にか立ち位置を移動していることに気がついてやり場のない苛立ちだけが沙耶の中に膨れていく。

「怖いのであろう？ 神殺しであつたところの真琴が」

「うるさいっ！」

激昂し、瞬時にあふれ出した力が室内を蹂躪しつくす。さながら台風を思わせるほどに濃密な力の本流は、留まることなく沙耶を中心に広がっていく。

殺す。

妖怪としての、狩猟生物としての本性が沙耶の意識を貪る。

ギチリと、人の体躯でありながらもありえないほどに筋肉が肥大し、骨格が形を変えた。

マガミの気配を捉え、自身で形成した妖気の炎を爆発させようとして――

「止めぬが、うつけ」

呆れを大いに含んだ声と共に、マガミは沙耶の後頭部を撫でるように叩く。筋力という意味では力のこもっていないそれだが、神力と言う意味では見た目の非ではない。少なくとも、クリスタル製の灰皿で殴られるのと同じかそれ以上には痛い。

「いったゝ！ 何もぶつことないじゃないっ！」

「喧しい。先に殺意をぶつけたのはお主であろ。第一、あれしきのことで意識を飲まれそうになってどうする」

「うつ、そうだけどさ……だつて、真琴が側にいないんだもん」

そつぽを向いて、いじいじと沙耶はつま先で床に落ちた書類をいじくる。

完璧に依存症だの。と、マガミはこめかみの辺りに幻痛を感じた。

「まったく。少しは自分の良人を信用したらどうなの？ どうなるうと、あやつはお主の側を離れぬよ」

「むうくでもでも、不安なんだもん」

「大丈夫だと思うがのう」

——恋は盲目、ということかの。いやはや、我には理解できぬ世界だの。

自虐も含んだ苦笑を内心に浮かべ、未だに不安そうにする沙耶の頭をもう一度叩いてからマガミは床に落ちた書類を集め始めたのだった。

四十八話 新しい術を覚えたい（後書き）

今回は会話文主体にしてみました。

はてさて、いい加減に話が進まない今作。今のところはまだ五月の終わりごろ。ほんと、時間の進みが遅いですね。というか、僕が行き当たりばったり——一応のプロットがあるのですが——書いているせいですね。ごめんなさい。もっと精進します。

物語的には、先の金神と水神の確執に決着がつくまでが第一部。この話からは第二部です。どうでもいいですね。

あつ、それと告知です。以前にこちらで載せていた短編は、ホームページに載せることにしました。今は手直し中で、すぐには乗せられません。楽しみにしていただいている方はごめんなさい。

では、長々と失礼しました。

四十九話 真琴と一姫の道中

気まずい空気というものを、雪村真琴は久しぶりに感じていた。手に感じる感触は、沙耶のそれと似ているようでいくらか違う。柔らかいという一転では同じだが、こちらは部分部分が硬い印象を受ける。

「いや、その…すまないな」

「仕方ないですよ。えっと、ここを右で？」

羞恥半分情けなさ半分といった表情で謝罪を口にする一姫に、真琴は曖昧に笑いながら答えた。

「ああ。十分ほど歩けば……輪郭だけならばもう見えてるだろう」

「んつと、あの白い壁の家ですか？」

塗装が剥げて、ツタが壁面を覆っているが元の色である白は真琴の位置からでも見て取れた。正確な大きさまでは障害物が多すぎて把握することは出来ないが、少なくとも二階建てということはわかる。

距離的には真琴たちの立つ交差点からはそう遠くない。ただ、今回は未だに怪我の後遺症が残る一姫が一緒なのでその歩みはゆっくりとしたものだ。

「そうだ。ここからならば私を置いていつでも構わないが」

「怪我人をほうつては行きませんよ」

「むっ、傷はすでに塞がっているんだ。怪我人扱いは止めてもらおうか」

「一人で歩けないなら十分に怪我人ですよ」

薄く、からかうように真琴は笑う。

——面白くない。

率直に、一姫は内心でそう思う。年齢や人生経験では間違いなく自分のほうが上だというのに、なんだってこの男は落ち着いているのだと。

繋がれた手。

華奢ではないが、十二分に少年らしい容姿をした見た目と同様に柔らかい手だ。

自分とは違い。

フツと、一姫は苦笑した。

自分の此れは幼少のころより積み重ねた努力の跡だ。誇りはすれ、蔑む理由はない。にもかかわらず、一姫は一瞬だけ何の穢れもない手を羨ましいとそう思った。

真琴が沙耶と訓練をしているのは知っているが、彼の手に豆ができたりしていないのは彼自身の再生力に起因する。

怪我に関わらず、破損と認識されたそれはその場ですぐに修復してしまう再生能力。マガミから聞いた話によれば、死の淵からも生還してみせたと言うのだから驚きだ。

反面、自分はどうか。

カナミに斬られ、危うく死ぬところであつた。戦うことは愚か、毛筋程度の傷をつけるのが精一杯だったのに対し、真琴は戦い、勝利するための切っ掛けを作ったというのにだ。

第一にして、一姫が助かったのも真琴が沙耶に協力を頼み、マガミの下まで文字通り速効で連れて行ったから治癒が間に合ったから

であり、彼女が急所を外すなどの行為をしていたからではない。ただの偶然に過ぎないと一姫は思う。

そして今、この状況。

年下で、助けられた恩を返さなければならぬ相手に手を引かれ、自分に負荷がかからないように調整された歩みで目的地へと向かっている。

気を、使われているのだ。

弱者だと、その様に思われているのだ。

ギリツとクチビルを噛む。そして、

「——不味いな、これは」

「何かありました？　傷が痛むとか」

「……いや、なんでもない。大丈夫だからそんな顔をするな」

「そうですか……でも、痛むようならすぐに言ってくださいよ？」

「ああ、そうさせてもらっよ」

本当に心配そうな目を向ける真琴に、一姫は目を伏せて首を縦にふった。それで納得したのか、真琴は再び前を向いて歩き出す。目的地である民家はすぐそこだ。

歩みが再開されて、一姫は安堵の息を気取られないように付く。

——何を考えているんだ私は。あるいは、嫉妬してるといふのか？

冗談交じりに思ったことは、一姫でも驚くほどにしっくりと胸の中に落ち込んだ。

まさかと思うと同時に、そうなのかと思う自分がいる。

今はまだ、直接戦えば自分が勝つ自信はある。だが、今後は？

そう自問すると、答えは決まったわからない。何より、真琴はまだ

若い。体つきとて未だに完成しているとはいえないし、技術だつてこれからどんどん伸びる。

そう遠くない未来に、彼は自分を抜き去るだろう。そう思うだけで、なんともいえないどす黒い感情が一姫の中で渦巻いていく。

——なんだ、やはり嫉妬しているのか。

笑い出したくなるのを抑えるのに、一姫は多大な精神力を必要とした。例えそれが自嘲の笑いでも、突然笑い出せば不信に思っだろうから。

自覚してしまえば後は簡単だった。

一姫は曲がりなりにも教師であるし、立派な社会人だ。学生の時分でないざ知らず、キチンと自制することはできる。ましてや相手は、命を助けてもらった恩のある相手。

——つまり、抜かれない何かを身につければ言いだけの話だ。たやすいことではないだろう。だが、やりがいはある。

まずは傷を完全に癒そう。

一姫は思いを新たに、眼前に近づいている白い家を見るのだった。

立て付けの悪くなっていたドアを動かすと、かび臭い匂いが真琴の鼻をつく。続いて大量の埃がまっつ、長い間放置されていたことを教えてくれる。

「げほっ……うつわ、もう見たまんまの廃墟だなこれ」

外の光が差し込んで伺えた室内にはやはり埃が積もっており、白く汚れている。窓に該当する部分はひび割れて、外気を遮断するという機能を果たしておらずその部分だけが前日に降ったであろう雨

水によってわずかに湿っていた。

「あまり衛生的ではないですね…先生は入らないほうがいいかと思えますが」

たとえば破傷風などの感染症にかかる恐れがあると、真琴はおぼろげな知識を元にして一姫のほうを見ながら言う。

「そうだな………すまないがそうさせてもらおう」

しばらく考えたが、怪我の回復を優先させると先に決めたとおりにここは休むことを取った。

「はい。じゃあ、行つて来ます」

「いや、ちょっと待て」

ドアを潜ろうとした真琴を止めて、一姫はゴソゴソと巫女服の隙間に手を入れて何かを探す。そのさいに見えた白い柔肌を見ないように真琴が思いつき目をそらしたのはご愛嬌。

「念話符だ。額に押し当てれば、数分間だけ会話が出来る。短い距離でしか使えないが、ここで使う分には十分だろう」

言つて、懷から出した一枚の符を真琴に手渡した。どこかで見たことがあると思い、即座にそれが学園で使われているものだと思いつた。というか、大守学園と判子が押してある。

「出所には、突っ込まないほうが？」

「道具は使ってこそだ」

いいのか教師。と真琴は思わないでもないが、そこはそれということでありがたく頂戴しておく。

そして、今度こそ真琴は家の中へと足を踏み入れた。

そう広くない家だ。探索自体はすでに済み、真琴は目的地前のドアへとたどり着いた。

全身から嫌な汗がにじみ出る。

ドアノブを掴む手は汗でぬれ、呼吸も荒くなっていく。

鼓動の音と、息遣いが真琴の耳を打つ。

可笑しいと、言い知れぬ違和感を真琴は確かに感じていた。

怨念とも、執念とも違う何か。例えるならそれは、ネズミを前にした猫に似た感情。狩猟本能とでも言うべきものが、ドア越しからしつかりと真琴を狙っている。

何唾を飲み込んで、真琴は大きく深呼吸する。

入り込んでくる空気は埃まみれでかび臭いが、それでもやらずにはいられない。それほどまでに息苦しい。

数分か——もしかしたら一瞬かもしれないがそうやって真琴は少しの間を過ごし、覚悟を決めたのか右手に、ドアノブを掴んでいた手に力を込める。

ガチャリと、真琴の部屋を開くときにもする音を立てて、ドアノブがゆっくりと回転する。

後は引くだけ。

「——ッ！」

勢い良くドアを開き、真琴は室内へと飛び込んだ。

四十九話 真琴と一姫の道中（後書き）

長らくお待たせしました。霊能科、ようやくの更新です。

本当はもつと速くお伝えするべきだったのですが、このたび無職からアルバイトに転職を致しまして、思うように時間が取れなくなっていました。

幸いにも工場ですので、土日は休みです。ですので、今後は土曜の夜から日曜日の朝にかけて小説を更新したいと思います。

楽しみにしていただいている方には大変申し訳ありませんが、どうぞご協力をよろしくお願いいたします。

追記：実は、今回の更新で霊能科は五十本目になります。思えばずい分と永い間連載してきたものですね。

五十話 少女、拾いました（前書き）

おこがましい台詞かもしれませんが——スランプ中です。

五十話 少女、拾いました

逃げてえ。この一言が、今の真琴の心境を端的に表していると言えた。

ピリピリと肌を刺す殺気。間違いなく、本気のそれだ。

「で、それは何？」

睨み付けているのか値踏みしているのか、半目になっている沙耶は真琴にくつつくようにしてつく彼女いわくそれを指差しながら口を開いた。真琴からすれば、明らかに怒っていると断言できる声音で。

もつとも、怒っているのかと聞けば怒ってないと答えるだろうけれど。

「えっと……その、ねえ？」

落ち着きなく真琴は視線を彷徨わせ、マガミと一姫を見やるが視線をそらされるか、こちらを元々見ていないかで助けは期待できないと理解させられるだけに終わった。

であれば、真琴が自分の口で沙耶を納得させなければならぬ。が、ちらりと見た限りでも彼女はまさに怒り心頭。ちよつとやそつとの説得では納得しないのははっきりと見て取れた。

「ピンチ？　ねえ、ピンチ？」

わくわくと、楽しそうな声が真琴の背中から聞こえてくる。声と共に顔を出したのは、真琴と同じくらいの背丈をした少女だ。セミロングの髪は薄茶色で、今現在は真琴の身体におぶさるよう

にしているから身なりまではわからない。

ただ、その姿は異様の一言につきる。

容姿は間違いなく人のものだが、反対側の壁が透き通って見える半透明の身体。受肉する前の神に見られる特徴の一つだ。

つまり、この年端も行かない少女は神の末席に名を連ねている可能性がある。その可能性を高めているのは、神を作るための儀式場であつたあの部屋にいたということが大きな要因だ。

扉を開き、それと同時に飛び掛ってきた少女。わけもわからず、とつさに避けることも叶わずに受け止めて、その結果――

「なんだって、私の知らないところで知らない女とキッ、キスなんてしてるのかしらねえ」

「避けられなかったんだよーッ！」

半泣きになって、真琴は必至に弁解する。

そもそも、あの場には二人。真琴と背中中の少女しかいなかったはずなのだから黙っていればばれるはずはない。にも関わらず、沙耶に事態が露見したのには理由があつてしかりだ。

端的に言えば、真琴と少女の間には契約が結ばれている。これもまた、少女の存在が神に近いことを証明するものでもある。

契約を結ぶ方法は多々あるが、最終的には理力を互いに譲渡しあうこととなる。今回は、少女が真琴と口を重ね合わせた瞬間に強引に行われた結果として契約は結ばれていた。

そこから辿り、沙耶にばれたのだ。

「――あゝもうっ！ わかった！ そつちは納得してあげる。むかつくし、イライラするけどまあ良いわよ」

宣言して、ビシッと音がでそうな位に強く少女を指差した。

「でも、そいつはまだ認めたわけじゃないわよ。私の男に勝手に契約するなんて、どんな理由があつたって認められないんだからね」

「駄目なの？」

真琴に代わり、声を発したのは少女だ。

少女は、真琴と沙耶の顔を交互に何度も見てから不安そうに揺れるまなざしを沙耶へと向ける。なんと言うか、捨てられた子犬っぽい。

グツと、言葉に詰まる沙耶。

「あゝ沙耶？　とりあえず働きを見てからでも遅くないんじゃないかな」

と、どちらかを見かねたのが真琴が助け舟を出す。数分前ならば此れだけでも沙耶の怒りを買うのに十分だったが、ある程度の落ち着きを見せた今ならば一考の余地を沙耶に与えた。

「……そうね。で、あんたは何が出来るの？」

「んん？　えっと、わかんない！」

少し考えて、力いっぱいそう宣言した。だから、沙耶の額に青筋が出来るのも仕方がないのかもしれない。少々大人気ないのは確かだが。

「使い方を知らぬだけであろうよ」

呆れと怒りを多大にはらんで、今まで口を開かなかったマガミが

ようやく声を発する。書類は書き終えたのか、彼女の手元には今は何もない。

「そういえば、あんたも神の末席だったわね。それで、こいつが何なのかわかってるの？」

「物を尋ねる態度ではないの……まあよい。嬢ちゃん、目を覚ましたときに見えたのは何かの？」

「んんん？ えっと、ねえ……んんん、なんか、ピカツて光って大きな音がするの！」

小首を捻った後に、身振り手振りでそのすごさを説明しようとするかのように少女は真琴の背から降りて両手を大きく天上へと向けて突き出す。

「光って、大きな音がするもの……ああ、雷か」

「ならば、その嬢ちゃんが司る性質は少なくともそれであろうよ。我ら神は、たいていは生まれた瞬間に性質が決定するのでは」

「へえ、雷神ってわけだ——嘘くさあ」

「まだ幼いからの。生まれてから、せいぜい二年かそこいらといった所ではないかの」

「ちょうど良いのかしらね。これからの育て方私大で、矛にも盾にも育つと」

「なら、このまま契約してても問題はないよな」

「——そうね。とりあえず、認めておいてあげる」

「だってさ」

そっぽを向いて、とりあえずを強調する沙耶に苦笑しながら真琴は少女へと向き直ってそう告げた。

「えっと、一緒にいていいの？」

良くわかっていないのか、少女は不安そうに問い直す。

「うん。君がそれでよければ、俺や沙耶とは一緒にいられるよ」

「ホントに？」

「本当に。ねっ、沙耶」

そこで私に振るのかよと、内心で突っ込んだが沙耶は空気を呼んで首を縦に振った。

「あっ——うんっ！　よろしく！」

嬉しそうに、満面の笑みでそういった。

五十一話 名前を決めよう

神霊。そう呼ばれる存在である彼女——真琴と契約した少女——には名というものがない。元来、神という存在は求められて生まれるのだからそれは求められたその時点で名というものを持っているのは当たり前のことだ。

けれど、少女の場合は事情が異なる。自然発生したわけではなく、あくまで偶発的に生れ落ちた一つの神霊であるから、名前という個人を指し示す上でも重要な記号をもっていないくともなんら不思議はない。

よって、今現在の少女には名がないのだ。

ではつけばいいと、簡単に言うものもいるであろうが神霊に名前をつけるということはそうそう簡単に出来ない理由がある。

そも、神の名の由来は不可思議な現象に名前をつけて擬人化することとわからないものを理解しようとしたことで生まれた。

神が先なのではなく、現象ありきなのだ。

例を挙げるのであればヒノカグツチ。かの神が司るのは炎であり、人々に文明という利点をもたらしたこの現象を司る神はいかなる神話においても上位に君臨する。それほどに人々の生活に密着しながらも、同時に脅威として認識されていたゆえに。

そうして名前をつけることで存在を認識しやすくし、同時に物語を構築する。それが神話であり、英雄譚である。

物語には始まりがある以上、終わりもまた存在する。ヒノカグツチの物語は生まれた直後、実の母を傷つけてしまうことで始まり——父親に切り殺されるという悲劇でもって幕を閉じてしまう。

正式にはその直後、ヒノカグツチから流れ出た血から幾柱かの神が生まれているがそれは語る必要は今はないので省略する。

この物語において重要なのは、ヒノカグツチが切り殺されたという事実。

知つての通り炎を切ることは出来ない。だが、神性として擬人化されたヒノカグツチは切ることができた。父親であるイザナギが用いた神剣を使えば、という前提があるが。

その神剣の名は天乃尾羽張。炎の神性にたいする切り札として、耐火の護符を作る際には刻まれることが多い名だ。

かように、物語として役割を与えられた神は同時に弱点を作ってしまう。

同じことはマガミにも言える。彼女の場合、日本書紀に記された神々には劣るがそれでも名の通った神であり、同時に対策もまた残されている。

ゆえに、彼女は自分の本当の名を隠してマガミと名乗る。

以上のことから、神霊である彼女に名前をつける場合は細心の注意が必要となる。たとえ新しく生まれた神であっても、元とする性質がにかよる以上は対策もまた同じものが適用されてしまうからだ。かといって、性質からあまりにかけ離れた名前だと力を出すことが難しくなってしまうので注意が必要であるが。

「んと、本名は雷花でいいとして、普段はなんて予防かな」

「はへ？ 雷花じゃ駄目なの？」

頭を捻る真琴の側にふよふよと浮きながら、雷花と新たに名づけられた少女は小首をかしげた。

——その名前に反応した者が一人いたが、わずかにしか動揺を見せなかったことで誰にも気取られることはなかった。

「あゝ、それじゃあ花とかでいいんじゃない？」

いかにもどうでもいいと言いたげに、沙耶は何処からか出してきた甘味を咥えつつそう言う。何時の間にもやら手には漫画があり、完

全にくつろぎモードだ。

「ここはお主の部屋ではないのだがの」

流石にマガミが咎めるが、沙耶は聞く耳を持つとしない。結局、それ以上強く言うことはせずマガミもまた茶をすすってから真琴のほうを向いた。

「時に真琴、なぜ雷花と言う名なのだ？」

「変かな？　なんかパツと思いついた名前がそれだったんだけど…」

「いい名前だよ」

考え事をしているせいか、やや生返事ぎみに雷花が追従する。どことなくのんきな空気が二人の、むしろ雷花の周囲には漂っていた。

「——いや、以前に聞いたことのある名であった気がしたので。どうやら私の気のせいであったようだよ」

「なにに？　とうとう呆けたの？」

「あいにくと、呆けるほど歳をとった覚えがないの。お主に言わせれば、数百年は寝たきりであったのでの」

「そんな昔のことを覚えてるなんて、此れだから年よりは……」

やれやれと、アメリカンな感じで肩をすくめる沙耶。ピキリと、マガミの額に青筋が立つのが真琴には見えた気がした。

「ふん。せいぜい二、三年のことを覚えていられんとは、お主の栄養は頭ではなくその無駄にでかい脂肪の塊に向かっておるのではないかの？」

「ああ、あんたにはないもんねえ、これ。ほれほれ。羨ましいかなん？」

ブチッと、今度は何かが切れる音が真琴には聞こえた。

「お二人さん？ そんなことよりも雷花の呼び方考えてくんない——ああ、いやなんでもないです。だからそんなに睨まないで。ごめんなさい、続きをどうぞ」

「ねえねえ、あのおば——うひい」

結局、呼び方は花に決まりましたとさ。

五十二話 唐突に始まる新章（前書き）

間を空けて申し訳ありません。

パソコンが絶賛故障中のため、今は弟のを借りて登校しています。

直り次第、今までどおりの更新速度に戻させていただきますのでそれまでしばらくの間ご容赦願います。

五十二話 唐突に始まる新章

マイクロバスに揺られること二十五分。山林の少し離れた駐車場にて下車した真琴たちは、そこから更に歩くこと十五分であろうやくと目的地に到着した。

一行の空気は重苦しい。

バスの中ではこれから起こることに対しての議論なりが交わされていたのだが、いまこの場にたどり着いた瞬間にひそひそとしゃべる声すら途絶えた。

見えたのは大きな建物であつたもの。

郊外にある廃病院。清潔感をかもし出していた外壁は煤と雨風に汚れ、元の純白さのかけから見られない。

見た目それ自体は、どこにでもある廃病院だ。

だが、この場を集つた霊能力者の卵たちはそこにあるだけの建築物に言い知れぬ何かを感じ取っていた。

それは恐怖。そう名づけるのがもっとも適当な感情だろう。

薄暗い天候の中、大守学園の生徒達一行は不安な面持ちでその廃病院を見上げた。

おおくすそくじつじつびょういん
大楠総合病院。またの名を第一学年 一学期期末試験会場という。

「さて、これから試験を始めるわけだが…今の段階で身の危険を相当に感じていると思う」

試験の監督役である相川は、一度だけ全員を見渡してからそう口火を切った。

平時ならばまず初めに言うべきは静かにするよにという注意の言葉だが、今回は全員が緊張に包まれているのか静かそのもの。だからこそ、彼はいきなり本題から切り出した。

「だから試験を受けることを怖いと思ったら止めても良い。中にいるのは本物の悪霊だ。敵意はそれ程ではないとはいえ、今のお前たちには十分に脅威のはずだからな」

三十分間。それが生徒達に与えられた考えるための時間だ。この間に相川へと参加の表明をしない場合、今回の試験は見送りとなる。一応、追試もありそちらは筆記での試験だ。赤点さえ取らなければ進級は可能だが、実践での経験をつむならばやはり現場での試験に臨むのが一番である。

「俺は行くよ」

班単位での試験であるため、まずは班員同士で意思確認を行う。

四人一組を基本とし、真琴のいる班は他に矢口秀樹、臼井恵子、河野美佐の三人だ。

メンバーが集まったと同時に、開口一番で口火を切ったのは真琴だ。

「だよな、お前は」

苦笑して、秀樹も手を上げて参加の意思を示した。

残りのメンバーは二人。恵子と美佐は場の雰囲気飲まれているのか、やや戦々恐々としている。

「そんなにあっさりと決めて良いの？ 雪村は今回、沙耶さんいないでしょ」

そう。真琴は単身でここに来ている。沙耶の力が強力すぎて、この廃病院では悪霊が怯えて出てこなくなってしまうことが懸念されたからだ。

だいぶ渋ってはいたが、真琴が三日三晩かけて説得したおかげかとりあえずは納得して見せた。

もっとも、沙耶の場合は見た目だけ納得して見せただけと言うことも十二分に考えられるが。

同じことは秀樹にも言えたが、カナミは比較的すんなりと納得してくれたのでこれといった問題は起きていない。

「だったら、なお更だね」

もともと真琴は沙耶と並び立つ——ただそれだけを目的として学園に通ってる。

いや、その目的はもはや真琴の生涯にかけて叶えるべき目標でもある。

とすれば、沙耶に頼らずに戦いぬけなければ並び立つなど到底不可能。

なら、真琴がとるべき道は一つだけだ。

「俺は行く」

もう一度だけ、はっきりと真琴は言葉にして宣言した。

「はあ、聞きやあしないわね。了解、あんたらは好きにすればいいわ」

嘆息。いつもと変わらぬ真琴の姿に恵子は普段の調子をいくらか取り戻す。とはいえ、やはりまだ中に踏み込む覚悟をするにはいたらない。

「で、矢口も行くつと。美佐はどうする？」

「んつと——止めとくわ」

少し考えて、美佐は頭を振って一歩だけ下がった。今は自信がないと、そう付け足して。

さて、と恵子は考える。

正直に言えば恵子も自信はない。中に入って、正気を保っているのか？　そもそも、命の保障はできているのか？

さまざまな疑問が、不安が、津波のように押し寄せてくる。

「——もう少しだけ、考えさせて」

結局、恵子ができたのは時間を稼ぐことだけだった。

戻り組みは来た道を引き返していく。その集団を見つめながら、恵子はぼんやりと思考をめぐらせた。

もともと彼女はそこまで霊能力者になることにこだわっているわけではない。ただ、将来的に職に就くのが楽になる、程度の感覚でやっているに過ぎないのだ。

ゆえに、ここで無理をする必要は存在しない。

けれど、けれどだ。

——逃げたみたいで、嫌なのよねえ。

だれもそうは思わない。この恐怖を前にして、それでも立ち向かえるほうが異常だと誰もが口をそろえて言うはずだ。

見上げる先にある廃病院。

外観から感じられるのは古びた、今にも倒壊しそうな建築物だということだけ。

にもかかわらず、近寄りたくないと本能が叫ぶ理由は、だからかまわず飲み込まんと開かれた病院の正面玄関にあった。

明かりはない。暗く、恵子がいる位置からは受付がかるうじて見えるほど。

けれどそこに、誰かがいるのははっきりと見て取れる。

かつての客、患者か。あるいは見舞いに来た者か。それとも看護士や医者ということも考えられた。

その誰かはジッと、外を見る。

視線にこもる感情までは見て取れない。けれど、それが正気を保っているとなぜいえる。

おそらくは、その存在が見えているのは恵子だけではない。ここに来た全員が、見えていたはずだ。

そうして、この病院にはきつとまだ多くの怨念が、怨恨が、怨霊が手をこまねいて待っている。

寒さ以外の何かで恵子の体が震えた。

「……どうしよう」

「そんなの、直感で決めりゃあいだろうが」

「えっ？」

恵子の独り言に答えたのは秀樹だ。彼なりに驚かせないように配慮したのか、わざわざ正面に回りこんでいた。

「怖いって、そう思うなら行かないほうがいいってこった。第六感とかっていうだろ？ 俺や雪村みたいに目的がねえなら、行く意味だってないしな」

「第六感……」

シックスセンスともいわれるこれは、霊を見るために必要な感覚器官とも虫の知らせを起こすための霊的機構ともいわれている。

その実態はあいにくと研究され尽くされていないが、ただいえるのは霊能力者はこの感覚を頼りにするべきだ。

目に見えぬ超常の何かと争う以上は、やはり目に見えぬ超常の何かを持たなければいけないから。

「んっ、そうね。ありがとう」

軽く笑ってから恵子は立ち上がる。

「私もいくわ。きっと、その方がいい」

「——良いのか？」

「平気よ。それに、危なくなったらあんたらが守ってくれるんですよ？」

「そりゃあ、まあ」

ポリポリと、わずかに朱色がさした頬をかく秀樹。

「なら大丈夫よ」

微笑んで、頼りにしてるぞつと恵子は秀樹の肩を力強く叩いた。

五十三話 試験開始（前書き）

ようやくパソコンが直ったので投稿を再開します。
大変お待たせしてしまって申し訳ありませんでした。

五十三話 試験開始

秀樹を先頭にして、三人は病院の入り口をくぐった。

まず三人が感じたのは熱気。まるで炎のそばに立っているかのよう感じられるほどのそれは、まるで当時の火災を再現したかのようだ。

が、それはほんの一瞬。もっとも問題なのは視線だ。

目。目がすぐそばにあるのではないかと錯覚を起こしてしまうほどに濃密な視線の数々。その数は十や二十、などの数えられる範囲にない。

ただただ、視線だけが彼らの動きを追い続ける。

それを意に介さず、というよりはただ見られているだけという状況では手を出すことすらできずに彼らはまっすぐに歩みを進めた。

数歩。わずかに数歩だが、三人の足取りは最初にここへ踏み込む前とは違って明らかに軽い。

それもそうだろう。緊張の原因であった幽霊はただ視線を向けてくるだけ。襲い掛かってくる気配はおるか、敵意すら感じないそれにおびえ続けるのは無理というものだ。

「あつ、これって地図じゃない？」

「うつわ、ほとんど読めないなこれじゃあ」

きよろきよろと視線をさまよわせていた恵子の指差した先にあったのは、半ば焼け焦げた院内の案内図だった。熱気で溶かされたか、じかに炎に炙られたかは不明だが何が書かれていたのかを正確に読み取することはできそうにない。

「どうする？ 一応、目的地は二階の院長室と一階の救急治療室な

わけだけど」

真琴はロビーからすぐそばに見える階段を指差しながら秀樹と恵子に問いかける。

目的地、。つまり、霊の目撃情報の多い二箇所に向かうのが今回の試験内容だ。

一階の手術室は主に救急外来用として使われていた。事故や急病人など、迅速に手術を行う必要のある患者はまずそこに運ばれる。手遅れであろうと、そうでなかつとも、だ。

必然として、死者の数が多くなるのもこの緊急外来用の手術室。次の目的地が院長室だ。

ここは死者の数、という意味で言えばただ一人。その部屋の持ち主でもあり、この病院の院長でもある大楠正敏だけ。

そして、この大楠総合病院が焼け落ちた火事の原因もこの部屋だ。調べた結果わかったことだが、院大楠正敏は自分自身の手で院長室に火を放った。

動機、その他はいまだに不明。ただ、結果としてこの病院が焼け落ちたという事実だけ今まで残されているのだ。

「私は、手術室を先にしたほうがいいと思う」

「そつちのがやばそうじゃね？ だったら、楽そうな院長室が先のがいいと思うぜ」

秀樹と恵子の意見は割れた。詳しく聞けばなぜそちらを選ぶのかと答えてくれるだろうが、真琴は恵子の意見を押す。

「楽そうなほうを先って言うなら、俺は手術室を先にしたほうがいいと思う」

「へっ？ 普通逆だろ、死者の数が多い手術室のほうがやばいんじゃないか？」

「いや、そっちは死んだ原因がはつきりしてるでしょ。怪我か、病気が。どちらにせよなんで死んだかもわかってるのだから、どういいう幽霊が出るのかもある程度は予測できる」

でも、そう前置きして真琴は目線を階段——その奥にあるであろう院長室の方向を見た。

「院長はどうして室内に火を放ったんだ？」

考えもしなかったことだ。

なぜ、自室に火を放ったのか？

「それは、自殺……とか」

自分で言っていて自信がないのか、恵子はやや小声でそういった。

「焼身つてこと？ ゼロではないけど可能性は低いと思う。自殺の方法だけなら苦しまずに死ぬ手段なんていくらでもあるよ。それに、ここは病院だ。それこそ睡眠薬でも毒薬でも簡単に手に入ると思う」

うがった見方だけだね。そういつて欧米人がやるように肩をすくめる真琴。

「確かに、そう言われると気になるな……よし、一階から行こうぜ」

「そうね」

先導して歩く秀樹の後ろを、恵子は小走りについていく。真琴もその後をすぐに追うのだった。

目線は絶えず、彼らを見ている。

緊急手術室は、普通の手術室と違ってまずスペースを広く確保してある。これは複数の患者を相手にする必要性があるからだ。大楠総合病院の場合は、三台のベッドが並んでいた。

仕切りは扉ではなく緑色のカーテン。無菌状態を保つために、抗菌加工は施されているが、ゆらゆらと風もないのに揺れるさまはいっそつの不気味さを漂わせる。

「……雪村、何人いる？」

先頭の秀樹は、刀の柄に手をかけながら一番後ろを歩く真琴に問いかける。この中で、霊視に長けているのは彼なのだから当然の判断だ。

「正直、数えるのが面倒だけど……そうだね、危険そうなのは八人。事故死が四に、病死が三。手術の失敗が一つとところかな」

「失敗って、医療ミスってこと！」

恵子が声を荒らげる。廊下を反響し、ヤマビコのように何度か真琴たちの耳に届いた。

「——それについては、ここで追求してもしょうがないだろ」

「それは、そうだけど……」

秀樹にたしなめられるも、恵子は納得がいかないのかやや渋い顔をしてカーテンの向こうを見る。

ゆらゆらと、カーテンはいまだにゆれている。

誘うように。

惑わすように。

「とにかく、開けるぞ」

背後を振り向き、秀樹は最後の意思確認のために声に出して二人に確認する。答えは無言だが、首を縦に振ることで返ってきた。

秀樹も一度、大きく息を吸う。入ってくる空気は新鮮とは程遠いホコリっぽいものだがそれでも彼の緊張をほぐすには十分だ。

大きな音を立てて、カーテンが開かれる。赤い部屋。否、赤黒い部屋がそこにあった。

充滿した匂いは先に秀樹が空気とともに取り込んだホコリの物ではない。濃密な腐臭、それか鼻先にボールが強く当たったときに感じるあの匂い。

つまり、血の香り。

「——っ」

息を呑み、秀樹は吐きそうになるのをグツとこらえた。

鮮血に染まった部屋。そこには何十人、あるいは何百人もの命がある。あった。

泣き叫ぶ子供がいた。

意識のない家族に声をかける家族がいた。

必死に心臓マッサージを繰り返す医者がいた。

吐血する患者を支える看護師がいた。

痛みを堪え、息子の命を助けてくれと叫ぶ父がいた。

苦しみ、もがく患者がいた。

患者が、医師が、看護師が、多くの人々がそこにいた。

誰もが必死に戦っている。

命を助けようと、助かろうと必死に。

戦場おも髣髴とさせる現場にあつて、異質なのは八人。

取れた腕の代わりにするのか、近くにいた別の患者の腕を引っ張る者。

頭をつぶされ、それでも半端に意識を保った者。

臓腑を撒き散らし、自身を轢いた者への呪詛を撒き散らす者。

自分で転倒しておきながらも、ただただ誰かに、何かに悪態をつき続けるだけの者。

なぜ自分が死ななければならないのかと、延々と問い続ける者。

長い闘病の末に、その精神すらも歪んでしまった者。

たらい回しにされ、結果的に治療行為が遅れたせいで死にいたった者。

そうして、ただ一人の医師が犯した失敗により生を全うできずにいた者。

かの八人は、みなが以上だ。

仕方がないことであるとはいえ、彼らは中途半端に命を絶たれた。その怨恨が、生への執着が彼らを悪霊へと変質させる。

八人は侵入者である秀樹たちを見る。

ギロリと、羨望と嫉妬と怨嗟をこめて。

正常な精神を持つものであれば、その視線に耐えられない。

全身に怖気が走り、本能が逃げ出すことを促すがきつと恐怖にさられた身体は思うように動かない。

逃げる事すら叶わない獲物は、ゆつくりと狩猟者たちに捕食される。それが自然界での掟。

されど、この場においての狩猟者は彼らにあらず。

まず動いたのは秀樹だ。

居合いの要領で刀を抜くと同時に、手近な一人に斬りかかる。護神刀、金神。カナミから譲り受けた彼女の本体ともいえるこの刀は、名のとおり神を守るための刀。

この世に存在する、神に仇なす不浄に負けぬ至上の一振り。

音もなく、斬ったという手ごたえすら残さずに刀は空を風ぐ。

返す刀が動く前に、前に出たのは恵子と真琴だ。

二人の武器は己が体軀。

黒く、長い帯が真琴の両方の拳を包む。

ボクシングのそれとは違うが、一息の間に二度、拳は対面にいた二人の幽霊を穿つ。

恵子の場合には真琴と違い足技を主体とする。

さながらムチのようにしなる足は、的確に相手の急所を捉えてダメージを蓄積させていく。

全員が次の行動に移る前に四人。すでに消滅、にはいたらないだろうが少なくともしばらくは動けない程度に魂魄を散らされた。

魂魄は幽霊の源、といってもいい。それが何なのかはいまだに解明されきっていないが、これにある程度のダメージを受けると幽霊は形を維持できなくなる。

残りは三。だが、勢いにのる彼らにとっては物の数に入らなかった。

——それすらも、視線は見ていた。

五十四話 研究の成果

二階部分は一階部分と違い、いくらか小綺麗な印象がある。

はじめは歩くことすらままならないほどに破損していたがため、大守学園の教員たちが試験用にいくらか改修を行ったからだ。

改修を行ったとはいえ、それはあくまで応急的なもの。往復をする分には問題ないが、仮に戦闘行為を行う必要があるとなれば足元にも注意を払う必要があるだろう。

「ねえ、二人とも」

「どうした、何かあったのか？」

先頭を歩く秀樹が足を止め、真琴の方を向く。恵子も何かあったのかと不安そうな面持ちだ。

「声が聞こえなかった？」

「声？ ……いや、何も聞こえないぞ」

「うん。私も」

「そんなはずは——何か来る！」

なおを言い募ろうとした真琴は、視界の端にこちらへと向かってくる何かを捕らえて即座に意識を切り替える。

振り返っていた二人も前を向き、昼間だというのに薄暗い闇の先を見据える。

接触までは何秒か。

「あれ？」

秀樹の眼が、迫りくるものを五秒早く捕らえる。

それは人だ。二人。三人と同じように大守学園の制服に身を包み、背後を時折振り返りながら走り去る姿。

はたして、五秒後にはそのとおりに二人組みが三人の脇を通り過ぎた。

「雪村君が聞いた声って、あの二人のじゃない？」

「かな？ って、ちょっと待って」

「おいおい、まだあんのか？」

「ここに入るのって、たしか最低でも三人でって言ってたよね？」

「そういえば……おい、まずくねえか？」

「あっ！」

三人で入らなければいけない場所で、逃げるように立ち去った二人。

では、あとの一人は？

「急ぐぞ」

誰ともなくそういつて、三人は逃げる二人組みとは逆。奥へと進んでいった。

三人がたどり着いたのは、やはりというべきか院長室だ。

勢いよく扉を開き、真琴と秀樹がまず中に踏み込む。

中には誰もいない。というよりかは、部屋自体がきちんとした形状を保っていなかった。

火元であるせいか院長室は黒く焼け焦げ、ドアの真正面にあるであろう壁は燃え落ちて外が直に見える有様だ。

「誰もいないな……」

あたりを見渡すも、幽霊はおろか三人組の取り残されたであろう一人も見当たらない。

「先に逃げてたんじゃないか？」

「……………やっぱり、声が……………」

「雪村？」

無言で真琴は床——その機能を果たしていないが——に両手を突いて、耳を当てる。はたから見ればそれは土下座をしているように見えた。

「どうしたんだよ？」

「ちょっと待って、静かにしてて……………」

真琴は神経を耳に集中させる。

確かに、声がするのだ。

二階——複数の足音。こちらへと近づくが、違う。

一階——やはり足音。それに混じって、何かが崩れる音。

さらに下。地下に相当する部分にて、その声はした。

「……………いつ！」

かすかに、ほんのわずかにだが聞こえた声。何を言っているのか、しっかりと聞き取れたわけではない。

それでも、その声は真琴の耳に届いた。

「わかった、地下だ！」

「えっ？」

「二人は外に出て助けを呼んできてっ！俺は先に行ってくる」

「あっ、おいつ！」

制止の声を無視して、真琴は院長室の一角にあいた穴へとその身を躍らせる。

視線は、真琴を追っていく。

坂崎巴は、物陰に隠れて息を潜めた。
油断していたわけではない。

侮っていたわけでもない。

驕っていたわけでもない。

けれど結果として、今ここに彼女自身の命が危機にさらされると
いう状況がしかと出来上がっていた。

きっかけは院長室で、一緒の組になった友人が見つけた一冊のノ
ート。

火災現場の只中であってそれだけが燃え落ちずにいたというのは
考えられないので、ほかの生徒の落し物かと思いい巴も気になかなか
った。

彼女に落ち度を求めるとすればそれ。

そのノートはきっかけに過ぎないが、巴は止めるべきだったのだ。
ノートは院長本人が書いたと思われる手記だった。きちんとした
研究題材でなかったのか、はたまた彼の趣味によるものなのか書き
なぐるようにしてさまざまなことが書き込まれたノートは専門用語
の多さもあって、とてもではないが読めたものではない。

最後の一文。

『失敗した』

と、そう書かれている文字を見つけるまでは。

「なにか…何か弱点は」

巴は自分とともに落ちてきたノートをめくる。

暗闇といってもいいほどに先の見えない場所だが、夜目は種族が
ら効くほうだ。なんの問題もない。

ここの院長は、医者傍らにもう一つの顔を持っていた。

黒魔術師と、そう呼べば理解が早いだろう。

彼の経歴を調べればわかることだが、もともと楠木は医学ではな
く魔道を専攻していた。にもかかわらず医者の、それも院長にまで
上り詰めたのには理由がある。

まず、彼の研究テーマには人体の構造を知ることが必要不可欠だ

ったからだ。長い年月をかけて研究し続けたそれは、いつしか彼に外科手術の腕という思いもよらぬ技量をもたらしした。

彼の研究。それは、ゴーレムの製造だ。

きっかけは、彼が死すその時までついぞ語られることはなかったから知るものは死者意外にない。ただ、ゴーレムの中でも比較的珍しい屍肉を使ったものを作ろうとしていたのは確かである。

そのために、病院という現場はまさにうってつけであった。

這うような音がして、次に液体が地面へと滴り落ちた。バケツの水をぶちまけたのとは違う、もっと生理的な嫌悪感を抱かせる粘着質な音。

ごくりと、巴は生唾を飲み込んで気配を可能な限り薄くする。

何度かの音の後、そいつは巴の視界に入り込んだ。

大きさはせいぜい一メートルと半分ほど。肩が平坦になっていて頭部らしきもの、顔にあたる部位は見当たらない。ただ胴体部分からは何かの骨、それが毛が見え隠れしている。

手は地面に引きずるようにしている反面、足は短い。身体のパランスそのものがきちんと取れていないからか、あるいは前が見えていないからかヨタヨタと身体が向いているほうに徘徊していた。

そして、腐臭がひどい。ドブ川ですらもう少しましな匂いだろうと思いたくなるほどに、異様な匂いを発している。

粘つく液状の音の正体はその身体自体にある。というより、身体の結合が解けて地面に撒き散らされているだけと言うのが正しい。

楠木院長の作品であるゴーレム。分類としては、一般的にフレッシュゴーレムあるいは、デッドゴーレムと呼ばれる種類だ。

「……っ」

鼻を押さえ、巴は少しずつ身体を移動させる。ゴーレムの背後へとだ。

戦うのは無謀だと、数回の攻防で理解した。逃げた二人が助けを

呼んでくること期待しているが、それでも数分でこの場には来ないだろうと言つのは承知の上。

ならば、十分でも二十分でも時間を稼がなければいけない。

そつと、息を潜めて巴はゴーレムの完全に残るを取ることに成功した。

見えているのは無防備な背中。

ズルズルと身体をすり減らしながら徘徊する、屍肉のゴーレム。

わずかに、本当にわずかにだが勝てるのではないかと言う希望が巴の中に芽生えた。

数分の攻防のときでさえ、巴は一切のダメージを受けていない。

ならば、こうやって背後を取りながら攻撃を繰り返せば勝てるのではないかと。

その考えを肯定するように、ゴーレムは巴には気づかずになただ前進行を続ける。

「——大丈夫、上手くいく」

思い定めれば後は早い。

両手に呼ぶのは身の丈を大きく超える二つのクナイ。その形状からクナイと呼んでいるだけで、分類としては立派に大剣だ。

二つを逆手に持って、一つは背中に一つは眼前に。

体制は低く、弾け跳ぶ。

二閃。一息の間に、背後をしかと切りつける。

十分な威力があつた。

間違はなく、手ごたえがあつた。

倒せないまでも、転倒させる位はという思いがあつた。

けれどいまだにゴーレムは健在。反転される前に逃げねばと、足をつけてバックステップ——より早く、ゴーレムの腕が横なぎに振るわれる。

「きゃん！」

無造作なそれを、とっさにクナイを交差させて防ぐも体制が良いとはお世辞にもいえぬ状況下では満足に防ぐことなどできない。文字通りに弾かれて、巴の身体はあっさりと宙を舞う。

否。

滑るようにして壁へと叩きつけられた。

二つ目の失敗だ。背後に気を配らなかった。巴が考えている以上に、壁は近くにあった。

「じほっ……」

息を詰まらせながら、巴は自嘲する。無様だと、図に乗った罰だと。

ずるりと音を立てて、ゴーレムが巴のほうを向いた。進みくるだけでも、わずかに数歩の距離。早く起き上がり、逃げねばならない。

が、強打した位置がまずい。受身も取らずに背中から打ち付けられたのだから、全身がわずかに麻痺している。

ほんの数秒だ。けれど、その数秒でゴーレムは十分に手を伸ばせる範囲までやってくる。

巴は死を覚悟する。

仕方がないことだと割り切って、けれど惜しむらくはまともに死ぬ、あれの一部になることかと泣き笑いのように思う。

油断しても、侮っても、驕ってもいかなかったはず。けれど、嘗めていた。この程度の心霊現場ならば修行のほうがはるかに辛かったと、そう思っていた。

結果がこれだ。未知の相手に対して、無謀にも無策で挑みそして敗れる。

いよいよ、ゴーレムが後一步と言うところまで近づいてくる。

「ははっ……………ここまで——」

「でも、ないみたいだね」

トンと、軽い音を立てて真琴が巴とゴーレムの間割り込んだ。

五十四話 研究の成果（後書き）

なんか、久しぶりに真琴が主人公っぽいことをしている気がします。

五十五話 巴と合流

後わずかに一步を踏み込まればフレッシュゴーレムの腕は巴を捕らえるに至ったであろう。

けれど、その二人の間に立ちはだかるは一人の少年。

矮躯は細い。手足も頑強とはいいがたく、背丈はともすれば巴とさほどの差は見られない。

巴が見ているのはそんな彼の、雪村真琴の背中だ。

「さて、と」

呟きがキチンと音になる前に、フラッシュゴーレムは目の前――すなわち間合いへと入り込んだ獲物へと腕を振るう。

「受けては駄目だ！」

頭上高くに上がった拳が振り下ろされる直前に、巴が痛みを堪えて叫んだ。

けれど、わずかに遅い。避けるには間合いが近すぎる。加えて、フラッシュゴーレムの腕は長く、早い。

とすれば、受ける以外には選択肢は存在しない。なにより――

「避けたら、後ろのあんたに当たるだろうがっ！」

叫び、真琴は左腕を額より上に上げて力をこめる。ただ受けるに非ず。その手には封印術を起動させて、黒い帯が真琴の腕を守る。ズンツと、重い衝撃が真琴へと届く。痛みを感じるよりもまず、その衝撃が真琴を打った。

遅れて、皮膚が焼ける痛み。正確にはそれは、肉が食われている

それだ。

「つうつー！」

このフラッシュゴーレムに与えられた特性の一つが、生きた獲物を全身から捕食できるということ。

通常のフラッシュゴーレムであれば、死肉から欠損を修復することはできる。本来の機能に備わっているからだ。

だが、このゴーレムは違う。

生きた肉をそのまま自分のものにできるのだ。自己を強化するために。

「ライツ！」

「はいはい」

腕を支える左とは逆から、のん気な声とともにライ——雷花のとだ——が姿を現す。服装が大守学園の制服になっているのは、誰に言われたのでもなく彼女自身がそうやって決めたからであるが。

「いなーずーまー」

やはりのん気な声で、けれど帯電する空気は異質そのもの。生まれたての神と言えども、その存在はやはり人知をたやすく凌駕する。作り出したのは雷の矢。鏃がなくとも、打ち出すように使われたのならそれは矢だ。

閃光が光ると同時に、矢はフラッシュゴーレムの胸を貫く。

のけぞり、巨体とはいえないフラッシュゴーレムの体躯が瓦礫の上へと倒れこむ。そのさいに大きな音がしたことから、見た目とは裏腹に相当な質量を誇っているようだ。

「ありがと。とりあえず今は戻ってくれるか？」

「ういつさ！ あとでシュークリームね？」

はいはいと苦笑して、真琴は封印術の黒い帯でライを包み込む。召還ではなく封印であるため、意思の疎通はできないのが難点だが、霊力を消費しないと言う利点はことのほか大きい。すくなくとも、今の真琴ではライを使いこなすことはできないのだから。

「うへえ、やっぱり死んでねえよ……とりあえず距離をとろう。動けるかな？」

「えっ、あつ、はい」

真琴の手をとって、巴は立ち上がる。その時に痛みでか顔が歪んだが、耐えられる程度だと判断したのかなにも言わなかった。

「ところで、ココには君だけ？」

「そのはずですが……」

記憶を手繰るまでもない。ココに落ちたのは自分だけだと、巴は自信を持って断言できる。だが、真琴はおかしいな、と小首を傾げるのだった。

「つまり、ココには我々以外の誰かがいると？」

「確証はないけどね」

大きな瓦礫を盾にして、自己紹介を簡潔に済ませた真琴と巴は情報交換し合っていた。

その中の一つに、真琴が聞いた声が巴のものとは違うと言ったものが含まれていたのだ。

「ふむ……あながち、ないとも言いきれませんか」

学生ではないでしょうが。巴はそう付け足してから、真琴は少しだけ意識をフラッシュゴーストに傾けた。

相変わらずフラッシュゴーストはあたりを自由気ままに徘徊し、その無軌道な動きからは目的を見出すことはできない。

「それで、そのノートにあいつを倒す方法は載ってそう？」

「駄目ですね。と言うより、字が汚すぎてまともに読むこともできません」

真琴の前に広げられたそれは、暗さも手伝ってかまともに文字だと判別することすら難しい状態であった。

「これじゃ仕方ないか」

つぶやいて、真琴は受け取ったノートを捨てるにも捨てられずにとりあえず懐へとしまいこんだ。

「とりあえず傷を癒して。俺は誰かいないか誰かいないか探して

みるから」

「はあ、大丈夫なのですか？ 助けが来るまで待っていてもよいのでは」

「んゝそれが上策なんだろうけどさ……」

でも、と真琴は口の中だけでつぶやく。

「なんか気になるし、見捨てたりしたら気分よくないだろ」

「それは、まあ」

「と言うわけで、行ってくるよ。一応は見える範囲だけにしておくから」

「わかりました。回復が完了し次第、私も合流しますので」

「無理しなくて良いからね？」

そういい残し、真琴は瓦礫の盾からこっそりと抜け出す。まだ見ぬ誰かを助けるために。

実を言うと、本心から人助けをするために真琴は危険を犯すわけではない。こういうと薄情に聞こえるが、目的があるうとなかろうと助けると言う事実に変わりはないだろう。

真琴がココに降りたとき、巴はまだフラッシュゴーレムと対峙していなかった。その間に周辺を霊視で探索し、妖力を発している存在がいることに気が付いたのだ。

相当に消耗しているのか、その位置は完全に把握することはできていない。ただ、おおよその位置はすでにつかんでいる。

「問題は、どうやってあいつをどかさか、か」

フラッシュゴーレムの正面。その近辺は瓦礫が多く、隙間も多いだろうとたやすく予想できる。

妖力の残滓は、そのあたりにもっとも多く滞留している。とすれば、いるのはその辺り。

「ライの力で——駄目か、威力がでかすぎる」

先ほどの雷の矢。その威力は巨体を吹き飛ばすには十分であり、フラッシュゴーレムの肉を焦がした。その傷は未だにいていないということは、胸の辺りが黒ずんでいるのを見れば一目瞭然である。それだけの威力がある術を使えば、ふたたびフラッシュゴーレムは転倒するだろう。そうなった場合、すぐそばに助けを求めるほどに衰弱した妖怪がいれば命の保障はできない。

「さてさて、どうやって動くかねえ。せめて、相手が動いてくれればやりようもあるのだけれど」

ひととき大きく、あたりに反響した声は何もない空間へと解けて消えた。

五十五話 巴と合流（後書き）

長らく更新しないで申し訳ありませんでした。

仕事がそれなりに忙しくてあまり時間が取れなかったのです。

更新頻度は落ちますが、停止はしませんのでもしよろしければお付き合いくださいます。

五十六話 沙耶とマガミ（前書き）

お待たせしました。 霊能科ようやくの更新です。
短い上に会話ばかりですが。

五十六話 沙耶とマガミ

真琴たちがフレッシュゴーレムと相対している最中、暇をもてあました沙耶はマガミの元へとやってきていた。

「帰れ」

「いや」

顔を見るなりに言い放つマガミに対して、沙耶は思いつきりに顔を背けて反論する。反論というよりは、子供じみた反抗のように見えるのは彼女の日頃の行いというものだろう。

「あやつのそばにおらんでも良いのかの？」

「今日はテストだとかで、私は近くに寄れないのよ。強すぎるって言つのも、考え物ね」

「なるほどの……だが、それだけでお主があやつの傍らを離れるとは思えぬがの」

トンツ、と何がしかを記していた書類をひとまとめにしてマガミは沙耶のほうを向き直る。

「そりゃあ、まあね。仕事はしないの？」

「お主が邪魔するのは眼に見えておるからの。ならば、何故にこゝへ来た？」

「暇だから。構え」

「何故、我が、お主の、子守を、しなければならぬ」

一語一語を強調し、しかし最後だけはやたらと大きな声で言い放つマガミ。

「えー、良いじゃんかよー暇なんだよー構えよー」

じたばたと両手を振り回し、沙耶はその場でぶーぶーと口から文句を放ち続ける。その様は、どう見ても成人した女性がやるものではない。

「ええい、止めぬかうつとおしい。それほど暇ならば、無理にでも着いていけば良かったであろう」

「……だって、着いてきちゃダメって真琴が言うんだもん」

ブスツと頬を膨らませた沙耶は、誰がどう見ても不機嫌だということが一目でわかる。

どう見ても成人した女性がそういった子供らしい仕種を見せるのは、人によつては保護欲をそえられるという。

なるほど、確かにその姿は構ってあげたくなる。そんな雰囲気をも出ししていた。

「子供だの」

が、マガミはそれを一蹴する。保護欲、などと言うものを働かせなくともこの女なら何とかするという信頼、に近い確信を抱いているからだ。

「まあ、あんたに比べればねえ」

「お主も対して変わらぬであろうよ」

「私は十八歳だもん」

「はっ？」

何を言っているんだこの馬鹿は。マガミは口にしないで、眼でそれだけの言葉を訴える。

事実として、マガミと沙耶が始めてであったのは数百年も前の話だ。それからむかつく位に乳が増量されている以外に容姿は変化していないのだから見間違うはずもない。

「……まさか、十八世紀くらいを生きているから、かの」

「……まっさかー」

図星か、とマガミはそっぽを向いて下手糞な口笛を吹く沙耶を見て確信する。当たったからなんだというわけでもないのに、それを指摘することはしないが。

「まっ、あんたより若いのは事実だけどね」

「お主はいちいち言葉が多いの」

呆れと、いくばくかの怒りを言葉に乗せてマガミは肩を落とした。

他愛もない会話が、かれこれと十数分は続いただろうか。不意に、マガミが自分の右腕を抑えた。痛みがあるのか、平時からめつたなことでは歪むことのない顔が、わずかに揺らぐ。

「邪気眼？ あんた、邪気眼をもってたの！」

「だまれ……ッ、ふっつ」

着物の袖からのぞく腕は、まるで高熱で炙られたかのように焼け爛れていた。

ありえないことだ。この場には、火はおろか高温のお湯ですらないのだから。

そもそも、マガミの肉体は神力によって守られている。彼女が意図してそれをとかない限りは生半可な害意は届くことはない。

にもかかわらず、焼け爛れた裂傷をその腕におったマガミ。外傷ということとは、先の理由からもありえない。

ならば、その傷はどこから来たのか。

「で、その傷はなに？」

「ふん……大方、我を嫌う連中の嫌がらせではないかの。我は、敵が多いからの」

すでに治癒した腕を見せて、マガミはうつすらと笑う。

「敵、ねえ」

沙耶の声は、明らかに納得が言っていないと雄弁に語る。そもそも、この現代においては神という存在を疎ましく思うものはいても明確に敵対するものは少ない。なぜなら、神そのものがこの地上に少ないからだ。

千年前におきた神々の消失。消えたのか、あるいは何処へと去ったのか。何があつたのかは封印されていたマガミも、諸国を放浪していた沙耶も知らない。

ただ、事実として神話に記されている神々は——封印されているものを除いて——いないのだ。

ゆえに、古参の神であるところのマガミと敵対しているものに沙耶はトンと見当がつかない。

「で、本当のところはどうなの。あんたに攻撃するようなやつがまだこの地上にいると？」

「まず過神だの」

最初に上がったのは、互いに敵として認識しているある神の名だ。しかし、沙耶は即座に棄却する。

「あれはそんな器用なことできないでしょ。つか、今は表立って動いていないんだからあんたを攻撃目標として攻めて来るやつがいるわけがない。それに、そんなちまちました攻撃をしてくるようなやつが神と敵対するとても？」

「……」

黙して語らず。マガミは口を閉ざす。話せないのか、あるいは話したくないのか。

沙耶としては、マガミと自分の間には友情、と言うわけではない

がある程度の信頼関係は築けていると思っている。遠慮をする必要のない気安さ、とでも言えばいいのか。

「話せない理由も話せないの？」

「……迂闊、だったの」

マガミは失笑した。今回に限れば、素直に自分の失敗だろうと彼女は断言できる。

「結魂^{ゆいこん}。そういえば、わかるかの」

「たしか、契約系の術よね。施術者と被術者の魂を繋ぐ術だっけ」

「大筋ではその通りだの。そうすることで、互いを一個の個人として扱うことができる術だの」

「へえ……で、その術で何ができるのよ」

沙耶の最もな疑問に、マガミは少しだけちゅうちょして、けれどやはり口を開いた。

「全ての共有化、だの」

「つまり、さっきのは相手側が怪我をしたからってことか……あれっ？　ちよつと嫌な予感がするのだけれど」

「さて、気のせいではないかの」

「いや……まさかとは思うけど、あんたの傷が癒えると相手側も治る？」

「それは、そうなの。全てを共有しておるのだから」

「で、霊力や神力の譲渡もできると」

「正確には、同じところから引つ張りだすだけなの」

例えるならそれは、蛇口が二つある給水タンクのようなものだ。元が同じであれば、出てくるものも同じになる。

「もつとも、今はあやつが使えないようにしておるがの。せいぜい、死なぬように我と治癒能力を同期させておるだけなの」

「それであの再生力ね……でも、なんだってそんなことしてるのよ」

沙耶の疑問ももつともである。この術は、本来であれば同格程度の二人で行うことが基本だ。両者の間に相当以上の実力差があれば、片方はメリットがあってももう片方にはデメリットしかない。

今回では言うまでもなく、マガミが損をしている。

「ふむ……あやつに、真琴には言わぬか？」

「内容次第——と言いたいけど、まあいいわ。特別に黙っててあげる」

「言い方が癪にさわるが、まあよい。お主にもそろそろ私の計画を話しても良いころかも知れぬしの」

嘆息して、マガミは沙耶に座るよう手で促す。ちよつと対面になる位置だ。

「さて、なにか話したものかの」

五十六話 沙耶とマガミ（後書き）

かなり中途半端なですが、もう少しだけマガミの目的は伏せておきたいのでご容赦を願います。

次は、もう少し速く更新できるようにさせていただきます。

五十七話 逃げる子狐、向かう教師（前書き）

あまりに久しぶりすぎて、もはや誰もおぼえていないと思いますが、日中まさひろです。

隔週で更新してまいりますので、再びよろしくお願いします。

五十七話 逃げる子狐、向かう教師

真琴の声を聞いてか、フレッシュゴーレムのすぐ傍の瓦礫がわずかに動いた。

姿を見せたのは、白色の毛並みを持つ子狐である。

しかし、その体毛は自身の血で赤く染め上げられていた。

「それ以上は動くな。今、あいつの気をそらすから」

音に反応して動いているわけではないだろうが、フレッシュゴーレムは身体の向きを白い狐のほうへと向けている。

真琴は駆け、一足でまず子狐とフレッシュゴーレムの間に入り込む。

距離はもはや眼前と呼べるほど。

間はなく、動くことすらままならない。

けれども一呼吸ぶんの時間さえあれば、真琴には十分だ。

「ライ、もう一度頼む」

「何度でもおまかせっ！」

封印術から雷花を開放する。ただそれだけの行為に、時間はかかるはずがない。

閃光が走り、

轟音が走る。

腐肉を焦がし、嫌なにおいが暗い地下に充満していく。

フラッシュゴーレムの全身を焼き尽くした雷は、天上から雷花が落としたものだ。

「ありがとう。これで倒しきれればいいのだけど」

「うっチョット自信ないです」

雷のダメージは、まず全身を高電圧が流れることにある。そうすることで、内臓器官に重度の火傷などを負わせるのだ。

だが、フラッシュゴーレムは内臓にダメージを与えたところで死には至らない。

その証拠に、フラッシュゴーレムは炭化した肉を振るい落としながら真琴のほうへと歩いてくる。

「とりあえず撤退」

「あいさー」

動けない子狐を抱え、真琴は巴の元へと走る。距離は数メートルもないが、それだけでフラッシュゴーレムは獲物を見失う。

「無事ですか」

「まあね。で、あいつはどうしようか」

「戦うのは無謀だと思います。逃げるか、助けを待つのが最善かと」
「逃げるのは難しいかな。あの天井まではいくらなんでも届かない」

見上げた先は、この地下唯一とっていい光源。通常の建物の一階そうとうだが、飛び上がるには高すぎた。

「なら、助けを待ちましょう」

「そうだね」

幸いなのは、フラッシュゴーレムが確実に真琴たちを捕捉できないことだ。

「君も、待てるかな」

白い子狐は、こくりと首を縦に振った。

「言葉が分かるってことは、妖狐なのかな」

治癒符を傷口に張りながら、真琴は問う。やはり、子狐は首を振って答えた。

「そっか。まあ、今は寝てると良いよ。無理に体力を消耗することはないから」

今度の変じは、しばらくたってから聞こえ始めた小さな寝息だった。

地上では、連絡を受けた教師が動き始めていた。

まず、引率の教師数名で戻ってきていた生徒達を安全な場所へと誘導する。

そして、残った教師は真琴たちの救助へと向かう。

「矢口、場所は院長室だったな」

口火を切ったのは、真琴の担任である相川修二だ。彼は、何時になく真剣な表情で秀樹に尋ねた。

「はい」

「よし、お前はバスまで戻っている」

「……わかりました」

不満そうに、秀樹は声を絞り出す。本音を言えば、彼も助けに行きたいのだ。

真琴との交友があったから、秀樹はカナミを助けることができた。それが全てとは言わないが、大きな要因であることに変わりはない。それを差し置いても、親友と呼べる相手を自分の手で助けたいと思うのは当然だ。

「今は耐えておけ。無力だと思っ悔しさは、お前のバネになる」

「……はい」

納得がいかない。そう雄弁に語る顔をしながらも、それを堪えて秀樹はうなづいた。

修二は秀樹を見送ると、改めて廃病院を見上げる。

今までは事故らしいことなど起きたことがない、どこにでもありそうな廃病院。霊能科の実習には最適な、ただ幽霊がいるだけの場所。

「あいつは、トラブルでも引き寄せる体質なんかね」

修二は真琴の過去を知らない。

いかなる理由があり、学園の総勢を持ってしても対処しきれないであろう大妖を従えているかを知らない。

不死身に近き再生能力を持つのかを知らない。

けれども、雪村真琴は学園の生徒である。

ならば、教師である相川修二には教える義務が有り、守る理由がある。

廃病院に、大守学園の教師陣が乗り込んでいく。

五十七話 逃げる子狐、向かう教師（後書き）

気が向いたら、感想でもください。

五十八話 対フレッシュユゴーレム

何度目かの移動を終えて、真琴は汗ばむ額を制服の袖で拭いた。

「ハンカチを用意していないのですか？」

「男つてのは、わりと適当なもので」

嘆息を一つ。いかに不死身に近い身体であろうとも、体力は人並みだ。

怪我人と重症の子狐を庇いながら、音を立てないように移動するのは神経を使う。

「助けは……まだ来そうにないか」

霊視をこらせば、ここへと向かってくる複数の人影。辿りつくまでは二分といったところか。

肉眼をこらせば、向きを変えているフレッシュユゴーレムの姿。

偶然か必然か、まっすぐに真琴たちの方へと向かってくる。

「んー石程度だと動かないしな」

どのように判別しているかは真琴には理解出来ないが、フレッシュユゴーレムは明確に足音だけを聞き分ける。

いかに鈍重な歩みをみせるフレッシュユゴーレムであっても、二分と待たずに真琴たちのもとへ辿りつくのは自明。

逃げるには少々と体力がキツイ。

ならば、真琴がなすことはただ一つである。

「雪村さん……？」

突然に立ち上がった真琴を、巴は訝しげに見上げる。

自分たちを置いて逃げる、などとは思えない。そうするのなら、はじめからここに来なければいいのだ。

真琴は危険があると知りながらも、自らこの場に足を踏み入れた。なら、動きを見せる以上は何かの手があつてのことだと巴は思う。事実、真琴は動く。

「とりあえず、二分。それだけは稼いでみるよ」

「はっ？」

疑問符を浮かべる巴に答えず、真琴は物陰から飛び出した。

フレッシュゴーレムは飛び出してきた真琴の足音を聞き、向きをそちらへと変える。

巨軀であった。

「にしても、どうしようかね」

『ボクが出て戦うのは？』

「ありだけど、今回はお休み。倒しきる必要はないからね」

それでなくとも、頼り切りになってしまつのはどうかと真琴は思うがゆえにだ。

雷花の不満げな声を聞き流し、真琴は構えを取る。

半身。

左手は前に、右手は腰に。

「ふう」

呼吸を吐いて、目線を鋭くする。

——倒す必要はない。

改めて、意識に定める。

いよいよ彼我の距離は目と鼻の先。

腐臭が真琴の鼻を突き刺す。

眉をひそめながらも、真琴は見逃さなかった。

振るわれたのは右の腕。上段から、叩きつけるようにだ。

「——っ」

踏み込み、真琴は腕と懐の間に潜り込む。

腐肉がばらまかれ、散る。

本来ならば、真琴の攻撃だけが届く間合い。しかし、それはできない。

思い出すのは、先立ってフレッシュゴーレムの腕を受け止めた瞬間

間。

焼けつく痛みは、肉を食い破られたものだ。

真琴は痛みに対する抵抗力は、人よりも強い。

全身を砕かれたこともある。

全身を走る封印術の帯は、皮膚と癒着するまでに熱された。

だが、生きたままに食われた経験はない。

あろうはずがない。

フレッシュゴーレムの攻撃。それは、痛みよりも、なによりも、

まず嫌悪感が先立つ。

身震いし、真琴は踏みしめた右足を軸に回し蹴りを放つ。

靴裏。

直接の打撃ではなく、わずかとはいえ異物をはさんでのそれは、はたして効果はあった。

フレッシュゴーレムがよろめく。

ダメージと呼べるほどのものではないだろうが、ここに来て初めて攻撃が通ったことに真琴は少し気分を高揚とさせた。

「とと、調子に乗らない」

追い打ちを考えた頭を振って、真琴は少しだけ距離を開ける。

フレッシュゴーレムに知能はない。反射にて行動を起こすだけだ。単調に繰り返される攻撃を、真琴は十分に距離をとって回避する。

攻撃のたびに、腐肉が撒かれて散乱していく。

「ひどい匂いだ」

腰を曲げ、前かがみに姿勢を落として、真琴はフレッシュゴーレムの挙動を見やる。

再び振り上げられた腕は、今度は二対。

両の腕が一斉に振り抜かれた。

今度は前でなく、後ろに足を一歩ひく。

鼻先をかすめる風が起こった。

コンクリートの地面に叩きつけられた肉腕は、ひしゃげて崩れ落ちる。

『んー……このまま逃げれば、削れて行く気が』

「どうも、そう上手くは行かないみたいだよ」

削り落ちた肉のうち、巨大なものは蠢いてフレッシュゴーレムへと舞い戻る。

再生とは違う。復元と言う言葉が、的確か。

「それに」

言葉を区切り、真琴は大きく後ろに飛び退く。

背後は壁。逃げるには不適切な場だ。

「俺が戦う必要は、これで終わりだ」

フレッシュゴーレムと真琴の間に、相川が降り立った。

「で、あれが諸悪の根源か」

「はい。それと、坂崎さんとここにいた子狐の妖怪が怪我してます」

相川は背中越しに真琴と会話する。まるで、数分前の俺みたいだと真琴はうつすらと笑った。

「ひどい匂いだな。腐肉の集まり……フレッシュゴーレムというやつか」

「さっすが先生、知ってるんですか」

「名前だけな」

相川とフレッシュゴーレムの距離は三メートルと少し。

間合いとしては、フレッシュゴーレムのものだ。

「救助は……まあ、これを倒してからでいいな」

「でも先生、こいつは雷を落としても平然としてるようなやつです
が」

「おいおい雪村。お前は俺を誰だと思ってる」

肩をすくめて、相川は苦笑を伴なう声音で言う。

「大守学園霊能科の教師だぜ」

言って、相川は両の手に炎を走らせた。

おおよそ、戦闘と呼べる行為は発生しなかった。

真琴の目にはただ、サンドバックを殴るボクサーのようにしか映らなかったのだ。

「すごい」

真琴は、相川の戦い方に見入る。

炎を纏う拳。

純粋な熱量と言う意味で言えば、それは沙耶のほうで遥かに上回る。

しかし、

「ふんっ！」

踏み込みの体重移動とともに放たれる拳は、肉を焼きながら決る。

一打、一打が必殺だ。

肉がこげ、腐臭の充満していた地下に別の匂いが発生する。

焼ける匂い。

けして食欲をそそる物ではない。

拳の乱打は続く。

肉を焼き、

肉を穿ち、

肉を燃し、

肉を削り、

——フレッシュゴーレムを滅ぼす。

「術と、拳」

相川の戦い方に身入りながらも、真琴は自身の手を見た。封印術を纏う手。

理力、霊力の少ない真琴には同じことはできない。

「……っ」
我知らずと、真琴は唇をかみしめた。
無力だと。

五十九話 真琴の苦悩、沙耶の提案、マガミの提案（前書き）

いちゃいちゃは、俺には無理だ。

五十九話 真琴の苦悩、沙耶の提案、マガミの提案

あてがわれた病室で、真琴は一息をついた。

死者が出かねなかった今回の騒動も、結果的には重症者二名（内、学園生は一人）と言う結果に落ち着いたおかげか、大きな問題とはなっていない。

けが人にしても、夏休み中は安静にしていれば治る程度のものだが結果だけ見れば、間違いなく最良の今回の解決。しかし、真琴の心は晴れやかとは言えなかった。

「……ふう」

真琴は、封印術を描いた腕を見る。

術自体は強力であるが、今回のようにただ物理攻撃だけをしかけてくる相手にはとことん無力であった。

「強く、なりたくない」

今回はまだいい。沙耶を危険に晒すことはなかった。

だが、もしも相手が沙耶を狙ってきたとしたら、どうだったかなにもできない。

いかに封印術と言う魔技を手に入れたとて、それを扱う雪村真琴はいぜんとして弱いままだから。

ただ純粹に弱い。

筋力や体力などは、これからの鍛錬次第でどうにでもなるだろうだが、理力——霊力の総量だけはそうやすやすと増やすことはできない。

思いはあり、想いもある。

けれど、方法がわからない。だから、真琴は陰鬱な気分を抱えたまま病室でため息をつく。

「ちよりゃー！」

と、何度目かになるかわからないため息は沙耶の掛け声とともに繰り出されたヤクザキックによって、真琴ごと吹き飛ばされた。

壁に頭から激突し、しかし、神の持つ再生力によってか瞬く間に傷が癒えていく。

同時刻、マガミが鼻血を出していたのは言うまでもない。

「いっつ、何すんのさ」

「とりあえず、ここに座りなさい」

講義の声を無視し、沙耶は備え付けのベッドに腰掛けて自分の隣をポンポンと叩く。

ああ、聞く気ないなこれと判断した真琴は、おとなしく沙耶の指示にしたがことにした。

「それで、なんだって突然——わぶ」

沙耶は突然、真琴の頭を抱え込み自身の豊満な胸部へとうずめた。そして、そっと右手で後頭部をなでつける。

「んー最近はどうやっていちゃついてなかったからね。それに、眉間にシワ寄せて考え込んでると、小鬼みたいに老けこむわよ」

「いや、柊は別に拭けてないと思うけど……んっ、そういえば最近はあまりくっついてなかったっけ」

「そうそう。大方今だって、満足に戦えなかったーとか考えてたんでしょ」

「うっ、それは……」

沙耶の胸の中で、真琴は言葉につまる。

そんな真琴に対して、沙耶はやさしく微笑む。

「いいのよ。真琴は、戦うことなんて考えないで。お金だっていくらでもあるし、寿命のことだって、心当たりがないわけでもないの。」

——ただ、私のそばにずっと、いてくれればそれでいいの」

「沙耶……」

その提案は、けして悪いものではない。

ただ沙耶の庇護のもと、ただ、彼女を慈しみ続けられたいと、そう言われているのだ。

でも、

「ごめん。俺、わがままなんだよ」

「えっ？ 条件が足りなかったかな。三食昼寝エッチ付きとか」

「そうじゃなくてさ」

真琴は、沙耶の両肩に手を添えて身体を起こす。

まっすぐに沙耶を見つめ、宣言する。

「俺は、さ。沙耶に並び立ちたいんだ。ただ沙耶に守られている。

それはきつと、とても楽で、なんの苦労もない世界だと思う」

「じゃあ、それでいいじゃない。真琴の望む立ち位置は、人間では
けして辿り着けないのよ。努力は報われず、苦労に意味はない。な
のに、真琴はそこを目指すの」

射ぬくような真琴の目線からわずかに目をそらし、沙耶はまくし
立てる。

妖怪である沙耶と、人間の真琴。

有数の実力者である沙耶と、最弱とも言える真琴。

両者の間にある差は遠く、翼を持たない真琴には決して埋めるこ
とはできない。

けれども、真琴の決意は硬い。

「目指す。守られているだけだと、きつといつかは俺が重荷になる
日が来る。

俺が記憶をなくした理由は、詳しく知らない。教えてくれないっ
てことは、知らなくていいことなんだとも思う。けれど」

何も知らず、でも、何かをなくしたことだけは覚えていて。

その痛みが辛くって、暗い夜は一人で眠ることすらできなくなっ
て。

「沙耶がいたから、俺は頑張れた」

すぐそばに、いつだって沙耶がいた。

恐怖に震え、孤独に怯え、痛みに泣いていた真琴を救ったのは沙
耶だ。

真琴は今でも正確に思い出せる。

薄暗い病室で、目覚めた真琴の視界いっぱいに広がった沙耶の泣
き顔。

「支えてくれた。」

想ってくれた。

恋してくれた。

愛してくれた。

だから、俺は沙耶に同じだけ支えて、想って、恋して、愛さないといけないんだ」

だって――

「俺は沙耶が好きだから」

今度は、真琴が沙耶の身体を抱きとめる。

固いとは言えない、けれども発展途上にある胸板で。

「恋人とか夫婦って、きつとどちらか一人に依存してればいいもんじゃないんだ。お互いを思うから、助け合って、一緒に飛べばいい」
それは、比翼の翼。

ただ一人で飛び立てる沙耶にとって、今の真琴は檻か、足かせか。

「それが、力を欲しがる理由？」

「うん。まだまだ未熟で、どうにも思いばかり先行してるけどさ」

「……そっか」

沙耶は体重をそのまま真琴の方へと傾ける。わずかに揺らめいただけで、彼はしっかりと支えた。

無言の時間が流れる。気まずいものでなく、ただそうあるだけで充実を得られる一時だ。

やがて、沙耶の方から沈黙を破る音がする。

「少し、大きくなったね」

「ん？」

「身体。うん、男の子から男になりつつあるのかな」

「成長してるってことかな。だとしたら、嬉しいけど」

「そうだね。真琴は、成長するんだもんね」

少しだけ、沙耶は寂しそうな声でつぶやく。けれどもその顔に笑みが浮かんでいるのは、真琴の成長を喜んでいるのか寂しがっているのか。

「ねえ、真琴」

沙耶は、上目遣いに真琴を見上げて目を閉じる。

真琴もそれに答えようと顔を近づけて、

「あー、こほんこほん」

不意に聞こえたわざとらしい咳に、真琴は意識をそちらへと向ける。

立っていたのは、和服姿の美女マガミだ。

マガミは苛立を含んだ目線で真琴と沙耶を睨みつける。

「チッ、少しは空気を読んで部屋の隅っこでゴキみたいに気配を消してなさいよね」

「それでも空気は読んだのだがの。このまま乳繰りあわれたのでは、私の要件が後回しにされそうだからの。——真琴、先の強くなりた」と言う言葉に偽りはないな

「ない」

「どんなことをしても、か」

「それが沙耶に害をなすことでない限り」

真琴の答えに、帰ってきた反応は二つ。

鼻で笑う声と、強く抱きついてくる感触。

「まあよい。強くなりたいというのであれば、我が方法を提示してやらんこともない」

「ホントかつ！」

「無論。私の求めるものにも必要でな。だが、ひとつだけ覚悟をしてもらっぞ」

沙耶の腕に力がこもる。

「何をすればいいんだ」

「そう難しいことではない。一柱、神を殺すだけだの」
「こともなげに、マガミは言った。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8713e/>

大守学園・霊能科

2010年10月11日14時55分発行